Ellen G. White Estate

患難から栄光へ

ELLEN G. WHITE

患難から栄光へ

Ellen G. White

Copyright © 2021
Ellen G. White Estate, Inc.

Information about this Book

Overview

This eBook is provided by the Ellen G. White Estate. It is included in the larger free Online Books collection on the Ellen G. White Estate Web site.

About the Author

Ellen G. White (1827-1915) is considered the most widely translated American author, her works having been published in more than 160 languages. She wrote more than 100,000 pages on a wide variety of spiritual and practical topics. Guided by the Holy Spirit, she exalted Jesus and pointed to the Scriptures as the basis of one's faith.

Further Links

A Brief Biography of Ellen G. White
About the Ellen G. White Estate

End User License Agreement

The viewing, printing or downloading of this book grants you only a limited, nonexclusive and nontransferable license for use solely by you for your own personal use. This license does not permit republication, distribution, assignment, sublicense, sale, preparation of derivative works, or other use. Any unauthorized use of this book terminates the license granted hereby. (See EGW Writings End User License Agreement.)

Further Information

For more information about the author, publishers, or how you can support this service, please contact the Ellen G. White Estate

at mail@whiteestate.org. We are thankful for your interest and feedback and wish you God's blessing as you read.

Contents

Information about this Book i
第1章　人類救済への神の計画 6
第2章　12弟子の訓練 12
第3章　大いなる任命 19
第4章　聖なる霊下る 27
第5章　聖霊の働き 36
第6章　美しの門での奇跡 43
第7章　偽善が招いた死 53
第8章　ユダヤ議会での証言 58
第9章　組織と指導者 65
第10章　ステパノの弁明 72
第11章　へだての壁を越えて 76
第12章　迫害者から弟子へ 83
第13章　砂漠での内省の日々 91
第14章　神は人をかたより見ない 97
第15章　牢獄から救われたペテロ 106
第16章　彼らは「クリスチャン」と呼ばれた 115
第17章　パウロの第一次伝道旅行 123
第18章　豹変した群衆 131
第19章　エルサレム会議 139
第20章　パウロの第二次伝道旅行 149
第21章　エーゲ海を渡る 157
第22章　テサロニケでの働き 164
第23章　文化の中心アテネにて 172
第24章　退廃の都コリントにて 181
第25章　テサロニケ教会への手紙 190
第26章　植える者と水をそそぐ者 201
第27章　エペソでのめざましい働き 210
第28章　銀細工人たちの騒動 218
第29章　共に悩み、共に喜ぶ 223
第30章　競走に勝ち抜くために 231
第31章　患難と栄光 242
第32章　豊かにまく者は豊かに刈り取る 251
第33章　労働の祝福 260

第34章　使命を持つ者の働き 269
第35章　ユダヤ人への福音 279
第36章　福音から離れた人々 287
第37章　パウロの最後のエルサレム旅行 292
第38章　投獄されたパウロ 300
第39章　カイザリヤにおける裁判 314
第40章　パウロ、カイザルに上訴する 321
第41章　アグリッパ王大いに感銘す 325
第42章　航海と難破 330
第43章　ローマにて 336
第44章　ネロの宮廷 347
第45章　ローマからの手紙 353
第46章　自由の身になって 366
第47章　最後の逮捕 369
第48章　皇帝ネロの前に立つパウロ 371
第49章　パウロの最後の手紙 376
第50章　義の冠が待つ 385
第51章　忠実な羊飼い 389
第52章　最後まで忠実に 401
第53章　愛された弟子 409
第54章　忠実な証人 415
第55章　恵みによって変えられた人 423
第56章　パトモス島に流される 431
第57章　ヨハネ、黙示録を書く 438
第58章　真理は勝利する 449

第1章　人類救済への神の計画

教会は人類救済のために神がお定めになった機関である。教会は奉仕するために組織された。その使命は世界に福音を伝えることである。教会を通して神の満ちあふれる豊かさを世界に反映させることが、神のはじめからのご計画であった。暗やみから驚くべき光に招き入れられた教会員たちは、神の栄光をあらわさなければならない。教会はキリストの恵みに富んだ宝庫であり、教会を通して神の愛がついには「天上にあるもろもろの支配や権威」に対してさえも十分明らかに示されるのである（エペソ3：10）。

教会に関して多くのすばらしい約束が聖書に記されている。「わが家はすべての民の祈の家ととなえられるからである」（イザヤ56：7）。「わたしは彼らおよびわが山の周囲の所々を祝福し、季節にしたがって雨を降らす。これは祝福の雨となる」。「わたしは彼らのために、良い栽培所を与える。彼らは重ねて、国のききんに滅びることなく、重ねて諸国民のはずかしめを受けることはない。彼らはその神、主なるわたしが彼らと共におり、彼らイスラエルの家が、わが民であることを悟ると、主なる神は言われる。あなたがたはわが羊、わが牧場の羊である。わたしはあなたがたの神であると、主なる神は言われる」（エゼキエル34：26、2931）。

「主は言われる、『あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである。それゆえ、あなたがたは知って、わたしを信じ、わたしが主であることを悟ることができる。わたしより前に造られた神はなく、わたしより後にもない。ただわたしのみ主である。わたしのほかに救う者はいない。わたしはさきに告げ、かつ救い、かつ聞かせた。あなたがたのうちには、ほかの神はなかった。あなたがたはわが証人である』」。「主なるわたしは正義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手をとり、あなたを守った。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの光として与え、盲人の目を開き、囚人を地下の獄

屋から出し、暗きに座する者を獄屋から出させる」（イザヤ43：1012、42：6、7）。

「わたしは恵みの時に、あなたに答え、救の日にあなたを助けた。わたしはあなたを守り、あなたを与えて民の契約とし、国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。わたしは捕らえられた人に『出よ』と言い、暗きにおる者に『あらわれよ』と言う。彼らは道すがら食べることができ、すべての裸の山にも牧草を得る。彼らは飢えることがなく、かわくこともない。また熱い風も、太陽も彼らを撃つことはない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、泉のほとりに彼らを導かれるからだ。わたしは、わがもろもろの山を道とし、わが大路を高くする」。

「天よ、歌え、地よ、喜べ。もろもろの山よ、声を放って歌え。主はその民を慰め、その苦しむ者をあわれまれるからだ。しかしシオンは言った、『主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた』と。『女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。あなたの石がきは常にわが前にある』」（イザヤ49：811、1316）。

教会は神が反逆した世に持っておられる神のとりでであり、神ののがれの町である。教会への裏切り行為は、ひとり子の血によって人類をあがなってくださった神に対する反逆である。世のはじめから忠実な人々がこの地上に教会を構成してきた。いつの時代にも主は見張りびとをお持ちになっていた。彼らは、彼らが生きた世代に忠実なあかしを立ててきたのである。これらの見張りびとたちは警告の使命を伝えた。そして、彼らが自分のよろいをぬぐように命じられたとき、他の人々がその仕事を受け継いだ。神はこうしたあかしびとを神との契約関係に置かれて、地上の教会を天の教会と結ばれたのである。神はご自分の教会に仕えさせるために、天使たちをおつかわしになった。そして、黄泉の力は神の民に打ち勝つことができなかった。 [1360]

幾世紀にもわたる迫害、闘争、暗黒の中にあって、神は教会を支えてこられた。神は教会に落ちかかってくるどんな暗雲に対しても備えをし、みわざを妨害するために起こるどんな反対勢力も予見された。すべての事は神の予告

通りに起こった。神は教会を見捨てておかれず、起こるべきことを預言のことばで明らかにされた。そして預言者がみ霊に感じて預言した事は、成就した。神のすべての目的は達成される。神の律法はみ座につながっていて、どんな悪の力も、それを滅ぼすことはできない。真理は神の霊感を受け、神に守られている。それはすべての反対に勝利する。

霊的暗黒の時代に神の教会は、山の上にある町のようなものであった。各時代にわたり、各世代を通じて天の高潔な教えは教会の中で明らかになってきた。教会はどんなに弱く欠陥だらけのように見えても、神が特別な意味で最高の関心を払われる対象である。教会は神の恵みの舞台であり、そこで神は人々の心を変える力をあらわすことを、お喜びになるのである。

「神の国を何に比べようか。また、どんな譬で言いあらわそうか」とキリストは言われた（マルコ4：30）。キリストはこの世の国を用いて神の国をあらわすことはできなかった。神の国に匹敵するものを、社会の中に見つけることはできなかった。地上の王国は、優勢な権力によって治めるが、キリストの国では、武器や抑圧の道具がことごとく消し去られている。神の国は人間を高め、高貴にする。神の教会はさまざまな賜物に満ち、聖霊を受けてきよい生涯を送るものの宮廷である。教会員たちは、自分たちが助け祝福するものの幸福の中に、自分たちの幸福を見つけるのである。

神のみ名があがめられるようにと、教会を通して完成するように主が計画された、おどろくべきみわざがある。このみわざは、エゼキエルが見たいやしの川の幻の中に描かれている。「この水は東の境に流れて行き、アラバに落ち下り、その水が、よどんだ海にはいると、それは清くなる。おおよそこの川の流れる所では、もろもろの動く生き物が皆生き、……川のかたわら、その岸のこなたかなたに、食物となる各種の木が育つ。その葉は枯れず、その実は絶えず、月ごとに新しい実がなる。これはその水が聖所から流れ出るからである。その実は食用に供せられ、その葉は薬となる」（エゼキエル47：812）。

世の初めから神はこの世界に祝福を与えるために、神の民を通して働いてこられた。古代エジプトの国に対して、

神はヨセフをいのちの泉となさった。ヨセフの誠実さが、エジプトのすべての民の命を守った。神はダニエルを通してバビロンのすべての知者の命を救われた。これらの救いは、実物教訓としてある。それは、ヨセフやダニエルが礼拝していた神とのつながりを通して、世に与えられる霊的祝福を例証するものである。キリストを心にやどしている者、キリストの愛をこの世に示す者はみな、人類の祝福のために神と共に働く者である。他の人々に分け与えるために救い主から恵みを受けるとき、霊的いのちの潮が彼の全身からあふれ出るのである。

神はご自身の品性を人々に現すために、イスラエルの民をお選びになった。神はその民がこの世の救いの井戸となるようにお望みになった。彼らには天来のことば、神のみこころの啓示がゆだねられた。イスラエルの初期の時代に、この世の国々は堕落した習慣によって、神についての知識を失った。彼らは、以前に神を知っていた。しかし、「神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなった」のである（ローマ1：21）。それでも神は、憐れみから彼らの存在を抹殺されなかった。神は選ばれた人々を通して彼らが再び神を知るようになる機会を与えようとなさった。犠牲の儀式に関するさまざまな教えによって、キリストはすべての国家の前にあがめられなければならなかった。そして、キリストをあがめる人々はみな生きるはずであった。キリストはユダヤの諸制度の基礎であった。型や象徴の全体系は、福音がぎっしりと詰まった預 言であり、救済のさまざまな約束 [1361]
を包含して人々に示していた。

しかし、イスラエルの人々は神の代表者としての尊い特権を見失っていた。彼らは神を忘れ、聖なる使命を果たさなかった。彼らが受けた祝福は世の祝福とならなかった。彼らは、自分たちが持つすべての有利な状態を、自己を高めるために用いた。彼らは誘惑を免れるために、世から自分たちをしめ出した。偶像崇拝者との交わりの中で異教徒の習慣に従わないための予防手段として神がお定めになった制限を、彼らは自分たちと他のすべての国々とを隔てる壁を築くために用いた。彼らは神が彼らに要求された奉仕をささげようとせず、人々を信仰に導くことも、聖なる模範を示すこともしなかった。

祭司や役人たちは、儀式尊重主義の型にはまっていった。彼らは律法的宗教に満足していて、他の人々に天の生きた真理を与えることができなくなっていた。彼らは自分の義を十分満足のいくものだと思い、自分たちの宗教に新しい要素がはいることを願わなかった。人間に対する神の好意を、彼らは自分たちに関係づけて受けとり、彼らの善行を理由にして神の好意と、自分たちの功績を結びつけた。愛によって働き、魂をきよめる信仰は、儀式と人間の命令から成り立つパリサイ人の宗教と、一致する場所を見いだすことはできなかった。

神はイスラエルについてこう言われた、「わたしはあなたを、まったく良い種のすぐれたぶどうの木として植えたのに、どうしてあなたは変って、悪い野ぶどうの木となったのか」（エレミヤ2：21）。「イスラエルは実を結ぶ茂ったぶどうの木である」（ホセア10：1）。「それで、エルサレムに住む者とユダの人々よ、どうか、わたしとぶどう畑との間をさばけ。わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか。わたしは良いぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、どうして野ぶどうを結んだのか。

それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、あなたがたに告げる。わたしはそのまがきを取り去って、食い荒されるにまかせ、そのかきをとりこわして、踏み荒されるにまかせる。わたしはこれを荒して、刈り込むことも、耕すこともせず、おどろと、いばらとを生えさせ、また雲に命じて、その上に雨を降らさない。万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、主が喜んでそこに植えられた物は、ユダの人々である。主はこれに公平を望まれたのに、見よ、流血。正義を望まれたのに、見よ、叫び」（イザヤ5：37）。「あなたがたは弱った者を強くせず、病んでいる者をいやさず、傷ついた者をつつまず、迷い出た者を引き返らせず、うせた者を尋ねず、彼らを手荒く、きびしく治めている」（エゼキエル34：4）。

ユダヤの指導者たちは、教えを必要としないほど賢く、救いを必要としないほど正しく、キリストから来る名誉を必要としないほど高くあがめられていると思っていた。救い主は、彼らが誤用していた特権と、彼らが軽視していた仕事を他の人々にゆだねるために、彼らに背を向けられた。神の栄光が現され、神のみことばは確立されなければ

ならない。キリストの国はこの世界に建設されなければならない。神の救いは、荒野にある町々に知らされなければならない。こうして弟子たちは、ユダヤの指導者がなしとげることのできなかった仕事をなしとげるために召されたのである。

第2章　12弟子の訓練

キリストはみわざをお進めになるにあたって、ユダヤ議会の学識と雄弁、あるいはローマの権力を選ばれなかった。すぐれた働き人である主は、この世を動かすはずの真理を宣べ伝えるにあたって、ひとりよがりのユダヤの教師たちには目をお向けにならず、謙遜で無学な人々をお選びになった。これらの人々を主はご自身の教会の指導者として訓練し、教育しようとお考えになった。彼らが次に他の人々を教育し、福音の使命を携えて行かせるのである。彼らがその働きを成功させるために、彼らには聖霊の力が与
[1362] えられるのであった。福音は人間の力や知恵によらず、神の力によって宣べ伝えられるはずであった。

3年半のあいだ、弟子たちはこの世に知られた最も偉大な教師、キリストの指導を受けた。キリストは個人的な接触や交わりによって、ご自身の働きのために彼らを訓練された。毎日彼らは、疲れている者や重荷を負っている者に語りかけておられるキリストの励ましのことばを聞き、また、病人や苦しみ悩む者にみ力を現されるのを見ながら、キリストと共に歩き、そして語った。時には、主は弟子たちと共に山腹に腰をおろして彼らに教えられた。またある時には海辺で、あるいは道を歩きながら神の国の奥義をお示しになった。人々の心が開かれて、神の使命が受け入れられるところではどこででも、主は救いの道についての真理を明らかにされた。主は弟子たちにこれをせよ、あれをせよとお命じにならず、ただ「わたしについて来なさい」と言われた。キリストは人々に教えるご自身の方法を弟子たちに見学させようと、田舎や都市への旅に彼らを伴って行かれた。彼らは主と共に、旅先を次々に訪ねた。彼らは主と共に質素な食物をとり、主と同じように時々飢え、疲れることもたびたびであった。彼らは雑踏した町中や湖畔や、寂しい荒野の中を主と共に歩いた。弟子たちは主の全生活を見たのである。

12弟子の任命によって、キリストが去ってのち地上でみわざを続ける教会を組織するための第一歩が踏み出された。この任命に関しては、「イエスは山に登り、みこころにかなった者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとにきた。そこで12人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわ」すためであると記されている（マルコ3：13、14）。

その感動的な場面を見よ。天の主権者がみずからお選びになった12人の弟子たちに取り巻かれているさまを見よ。キリストは今、弟子たちをそれぞれの仕事に聖別なさろうとしている。これらの弱い代理者たちをお用いになり、ご自身のことばとみ霊によってキリストはすべての者に、もれなく救いを得させようと計画しておられるのである。

神と天使たちは、歓喜してこの光景を見守った。み父は、天の光がこの人々から輝き出ることをごぞんじであり、彼らがみ子のために証言をした時、彼らが語ったことばは、時の終わりにいたるまで代々にわたって響きわたることを知っておられた。

弟子たちはキリストの証人として出て行き、彼らが主について見たり、聞いたりしたことを世に伝えなければならなかった。彼らの任務は、これまで人間が召された職務の中で最も重要なものであって、キリストご自身のみ働きに次ぐものであった。彼らは人々を救うために神と共に働く者とならねばならなかった。旧約聖書の中で12人の族長がイスラエルの代表者として立ったように、12人の使徒たちは福音教会の代表者として立つのである。

公生涯のあいだ、キリストは、ユダヤ人と異邦人との間の隔ての壁を打ち破り、人類すべてに救いを宣べ伝えられた。キリストはユダヤ人ではあったが、サマリヤ人と自由に交わり、この軽蔑された民族について、ユダヤ人が持っていたパリサイ的慣習を無視された。キリストは彼らの屋根の下に眠り、彼らの食卓で食べ、彼らの町の通りで教えられた。

救い主はイスラエルと他の国々との「隔ての中垣」を取り除くことについての真理を、すなわち、「異邦人が」ユダヤ人と共に「神の国をつぐ者となり」、「福音によりキリスト・イエスにあって……共に約束にあずかる者となる」という真理を弟子たちに明らかにしたいと切望された

（エペソ2：14、3：6）。主がカペナウムの百卒長の信仰に報いられた時と、スカルの町の人々に福音をお伝えになった時に、この真理の1部が現された。キリストがフェニキヤを訪問されて、カナンの女の娘をいやされた時に、この真理はさらに明らかに現された。こうした経験は、救いを受ける価値がないと思っていた多くの人々の中にも、真理の光を渇望している者たちがいることを、弟子たちに理解させるのに役立った。

[1363] こうしてキリストは、神の国では領土の境界線がなく、世襲的階級制もなく、貴族もいないという事実を、また、救い主の愛の使命を携えて、あらゆる国々に出て行かなければならないということを、弟子たちに教えようとされた。しかし彼らは後になるまで、神が「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれ一人一人から遠く離れておいでになるのではない」ということを十分に認識しなかった（使徒行伝17：26、27）。

これら最初の弟子たちには著しい相違点があった。彼らはこの世の教師とならなければならなかったが、性格的にはなはだしく異なるさまざまな型を代表していた。この人たちはゆだねられている仕事を立派に進展させるためには、素質も生活習慣も違うので、感覚、思想、行動において一致する必要があった。この一致こそ、キリストが確かなものにしたいと目指されたものであった。キリストは最後まで、ご自身と1つになるよう弟子たちを導かれた。キリストが弟子たちに対して抱いておられた重荷は、み父にささげられた祈りの中に表されている。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が1つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり」、「あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」（ヨハネ17：21、23）。キリストは、弟子たちが真理によって聖別されるようにと不断の祈りをささげておられた。そして、全能者のみこころは、この世が造られる以前から与えられていたものであるということを知っておら

れて、確信をもって祈られた。主は、神の国についての福音が、あかしとしてすべての国々に宣べ伝えられることをごぞんじであった。また、聖霊の無限の力で武装した真理が、悪との戦いに勝利し、血に染まった旗が主に従う者たちの頭上に高らかにひるがえる日の来ることをごぞんじであった。

キリストは、地上の働きが終わりに近づき、弟子たちがご自分の直接の指導を離れて働きを受け継いでいかねばならないことを実感されると、弟子たちを力づけ、彼らを将来のために準備させようとなさった。キリストはまちがった希望を与えて、弟子たちを欺くことはなさらなかった。開かれた本を読むように、主は起こるべきことを読みとられた。主はご自身がまもなく弟子たちから引き離され、彼らがおおかみの中の羊のようにとり残されることをごぞんじであった。彼らが迫害を受けることや、ユダヤの会堂から追い出されること、そして、牢に投げ込まれることを知っておられた。また、メシヤとしてのキリストをあかししたために、ある者はいのちを落とすであろうということもごぞんじであった。それで主は、弟子たちの将来に関する大切なことを彼らにお語りになった。やがて来る試練の時に、彼らが主のことばを思い出して、主を救い主としてますます強く信じることができるように、主は弟子たちの将来について、明確にお語りになった。

キリストはまた、弟子たちに希望と勇気に満ちたことばをお語りになった。「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている」（ヨハネ14：14）。あなたがたのためにわたしはこの世界に来た。あなたがたのためにわたしは働いてきた。わたしは、去っても、なお熱心にあなたがたのために働くであろう。わたしは、わたし自身をあなたがたに現すためにこの世界に来た。あなたがたが信じるようになるためである。わたしは、わたしの父であり、またあなた

がたの父でもあられる方のもとに行き、あなたがたのためにみ父に協力するのである。

「よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。それればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである」（ヨハネ14：12）。このように言われたのは、弟子たちがキリストがなされた以上に立派な仕事をするというのではなく、弟子たちの働きがより大きくひろがっていくであろうという意味であった。主は奇跡を行うことばかりでなく、聖霊の働きのもとに行われるすべてのわざに注意をひかれたのである。「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるから、あかしをするのである」と主は言われた（ヨハネ15：26、27）。 [1364]

このみことばはすばらしく成就した。聖霊が降下したのち、弟子たちは主と、主が身代わりとなって死なれた人々に対する深い愛に満たされたので、弟子たちの語ることばやささげる祈りによって、人々の心は溶かされたのである。弟子たちは聖霊の力によって語り、その力の感化によって幾千もの人々が改心した。

キリストの代表者として、使徒たちはこの世に決定的な印象を与えなければならなかった。彼らが身分の低い人々であったということは、彼らの感化力を減少させず、かえってそれを増した。聞く人々の心は弟子たちから救い主へと導かれた。たとえ目には見えなくとも、主は今もなお、弟子たちと共に働いておられたからである。使徒たちのすばらしい教えや、勇気と信頼に満ちたことばは、彼らの働きが自分たちの力でなされているのではなく、キリストの力でなされているのだということをすべての人々に確信させるのである。彼らは、謙遜に、ユダヤ人が十字架につけたお方こそいのちの君、生ける神のみ子であることを言明する。そのお方の名によって、主が行われたみわざを受け継いで行っているのであると、弟子たちは公言するのである。

救い主は十字架におつきになる前夜、弟子たちに別れのことばを述べられたが、その中でご自分が耐えてこられ

た苦難と、またこれから耐えねばならない苦難については一言も触れられなかった。主はご自分の前にある屈辱についてお語りにならずに、弟子たちの信仰を強めるものを彼らの心に与え、勝利者のために備えられている喜びを待ち望むようにし向けられた。これまで約束されたことよりももっと多くのことを、弟子たちのためになさることができるということ、また、主から愛とあわれみが流れ出て魂の宮をきよめ、人々を主に似た品性の者とするということ、また、み霊の力によって武装された主の真理が、勝利の上にもなお勝利を得ようとして出て行くのだということを知って、主は喜ばれた。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」とキリストは言われた（ヨハネ16：33）。キリストは失敗をなさらなかったし、失望もされなかった。だから弟子たちも同じように忍耐強い信仰を示さなければならなかった。彼らは主から力をいただき、主が働かれたように働かなければならなかった。たとえ、明らかに不可能なことによって道をふさがれようとも、なお、彼らは主の恵みにより、失望することなく、すべてに望みを抱いて、ひたすら前進しなければならなかった。

キリストはご自身にゆだねられた仕事をなし遂げられた。そして、そのみわざが人々の間で続けられるように、弟子たちを召集されたのである。主は言われた、「わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが1つであるように、彼らも1つになるためであります」。「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。……それは……みんなの者が1つとなるためであります。……わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に1つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らを

お愛しになったことを、世が知るためであります」（ヨハネ17：10、11、2023）。

第3章　大いなる任命

[1365]

キリストが亡くなられてのち、弟子たちはほとんど失望に打ちひしがれていた。彼らの主は拒絶され、有罪とされ、十字架につけられた。祭司や役人たちは嘲弄して言った、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」（マタイ27：42）。弟子たちの希望の太陽は沈んだ。そして夜が彼らの心にたれこめた。彼らは幾度もつぶやいた、「わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました」（ルカ24：21）。弟子たちは寂しく煩悶しながら主のみことばを思い出していた、「もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」（ルカ23：31）。

イエスは弟子たちに何度も、これから起こることを明らかにしようとされたが、彼らは主が言われたことを考えようとしなかった。このために主の死は、彼らにとって思いがけないこととしてやってきたのである。のちに彼らが過ぎこしかたを振り返って、自分たちの不信の結末を見たときに、悲しみで胸がいっぱいになった。キリストが十字架にかけられた時、彼らは主がよみがえられるとは信じていなかった。主は、3日目によみがえるとはっきりお語りになっていたが、彼らは主の言われたことに当惑していた。この理解不足のために、彼らはキリストがなくなられた時、全く絶望状態になったのである。彼らはひどく失望していた。彼らの信仰は、彼らの視界をさえぎるようにサタンが投げかけた影のかなたを見透さなかった。彼らにはすべてがばく然としていて、不可解であった。もし弟子たちが救い主のみことばを信じていたならば、どんなにか悲しみも少なかったことであろう。

落胆と悲嘆と失望に打ちのめされた弟子たちは二階座敷に集まり、自分たちも愛する恩師と同じ運命をたどるのではないかと恐れて、戸口を全部かたく閉ざしていた。とこ

ろがこの場所に、救い主はよみがえられて姿を現されたのである。

40日間、キリストは地上にとどまられて、弟子たちにゆだねられた仕事の準備をさせ、彼らがこれまで理解できていなかったことを説明された。主はご自身の来臨のことや、ユダヤ人に拒まれたこと、またご自身の死についての預言のことを語り、これらの預言がことごとく成就してきたことを指摘された。キリストはこの預言の成就こそ、取りも直さず弟子たちのこれからの仕事に、力がさずけられることを確証するものだと理解しなければならないと、彼らに語られた。聖書にこう書かれている、「聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、言われた、『こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、3日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる』」。そして「『あなたがたは、これらの事の証人である』」とイエスはつけ加えられた（ルカ24：4548）。

キリストが弟子たちと共に過ごされたこの40日間に、彼らは新しい経験を得た。敬愛する恩師が、既に起こったことに照らして聖書を説明されるのを聞きながら、彼らは主を信ずる信仰を十分に確立した。彼らは、「わたしは自分の信じてきたかたを知って」いると、言えるところにまで到達した（Ⅱテモテ1：12）。彼らは自分たちの仕事の性質と、その範囲を認識し、彼らにゆだねられている真理を世に宣べ伝えなければならないことを知りはじめた。キリストのご生涯のさまざまな事件、キリストの死とよみがえり、こうした事件を指し示す預言、救いの計画の奥義、罪をゆるすイエスの力、彼らはこうしたすべてのことの証人となって、それを世界に伝えなければならなかった。彼らは悔い改めと救い主の力によって、平和と救いの福音を宣べ伝えなければならなかった。

昇天される前に、キリストは弟子たちに任務をお与えになった。彼らは永遠のいのちの宝を世に伝えるという、主のご遺言の執行者にならねばならないと、主はお命じになったのである。あなたがたは、この世のためにしたわ
[1366] たしの犠牲の生涯の証人となったのだと、主は彼らに言われた。あなたがたは、わたしがイスラエルのためになし

たわざを見てきた。そして、たとえわたしの民がいのちを得るためにわたしのもとに来なくとも、たとえ祭司や役人が記録にあるとおりのことをわたしに向かって行ったとしても、たとえ彼らがわたしを拒んだとしても、彼らには神のみ子を受けいれるまた別の機会が与えられているのである。自分の罪を告白して、わたしのもとに来る者を、わたしがみな快く受け入れるのをあなたがたは見てきた。わたしのもとに来る者をわたしは決して追い出しはしない。わが弟子たちよ、わたしはあなたがたにこの恵みの使命をゆだねる。それは、ユダヤ人にも異邦人にも、最初にイスラエル人に、それからすべての民族、国語、国民らに与えられなければならない。信じる者がすべて、1つの教会に集められなければならない。

福音の任命は、キリストの国の宣教大憲章である。弟子たちは人々のために熱心に働き、すべての人々に恵みの招待状を渡さなければならなかった。彼らは人々がやってくるまで待つのではなく、使命を携えて人々のところに行かなければならなかった。

弟子たちはキリストのみ名によって、働きを進めて行かなければならない。彼らの言葉や行動はみ名にしっかり結びつけられていて、生き生きした力を持ち、それによって罪人たちが救われるのでなければならない。彼らの信仰は、憐れみと力の源であられる方に集中する。そのみ名によって彼らはみ父に嘆願し、答えをいただくのであった。弟子たちは、父、み子、聖霊の名によってバプテスマを施さなければならない。キリストのみ名は彼らの合言葉、彼らを区別するバッジ、一致のきずな、彼らの行動方針を支持する権威、成功の源となるはずであった。キリストの名が書かれていないものは、神の国では認められるはずはないのである。

キリストは、わたしの名によって出て行き、信じる者をすべて教会に集めよと弟子たちに言われたとき、単純さを保つことの必要を彼らに明らかにお示しになった。見栄や見せびらかしが少なければ、それだけ彼らの感化は大きいのである。弟子たちはキリストがお語りになったような単純さで語らなければならなかった。彼らはキリストから教えられた教訓を、聞く者たちの心にしっかり刻みつけなければならなかった。

キリストは弟子たちに、彼らの働きが容易であるとは言われなかった。主は彼らにこぞって対抗する、膨大な悪の連合体を示された。彼らは「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対」して戦わなければならないであろう（エペソ6：12）。しかし彼らは、自分たちだけで戦わなければならないのではなかった。主は彼らと共にいること、そして彼らが信じて進むならば、彼らは全能者の盾のもとに行動することを約束なさった。キリストは彼らに、雄々しく強くなるようにとお命じになった。み使いよりも強い、天の軍勢の将が彼らの隊列の中におられるからである。キリストは彼らの任務遂行のために万全を期し、その成果の責任をみずからお取りになった。主のことばに従い、主と連携して働く限り、彼らに失敗はなかった。キリストは、すべての国民のもとへ行けと弟子たちにお命じになった。地球上の人の住むところにはどこへでも行き、そこにもわたしがあなたと共にいることを確信しなさい。信じて、自信をもって働きなさい。わたしがあなたを見捨てるような時は決して来ないからである。わたしはいつもあなたがたと共にいて任務を果たすのを助け、あなたがたを導き、慰め、きよめ、支え、人々の注意を天に向けさせる言葉を上手に語らせてあげよう。

キリストは人類のために、十分に完全な犠牲をお払いになった。あがないの条件は満たされていた。キリストがこの世に来られた目的のわざは完了していた。キリストはすでに王国を勝ちとられた。主はサタンからそれを勝ちとり、万物の継承者となられたのである。キリストは神のみ座に向かう途上におられて、やがて天の軍勢にあがめられるはずであった。主は限りない権威の衣をまとって、弟子たちにお命じになった、「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ28：19、20）。[1367]

キリストは弟子たちとお別れになる直前に、もう1度神の国の本質を明らかにご説明になった。主は、これまで神の国について弟子たちにお語りになったことを思い出さ

せて、この地上に一時的な王国を築くことが主の目的なのではないとご説明になった。主はダビデの王位について地上の君主として治めるように任命されたのではない。「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」と弟子たちが質問したとき、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない」と主はお答えになった（使徒行伝1：6、7）。主が未来について弟子たちにわからせようとしてお与えになった啓示以上のことを、彼らがわかろうとする必要はなかった。彼らの仕事は、福音の使命を伝えることであった。

キリストの目に見える姿は弟子たちから消え去ろうとしていたが、新しい力が彼らにさずけられるはずであった。聖霊が十分に彼らにさずけられて、彼らの任務が保証されなければならなかった。「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」と救い主は言われた（ルカ24：49）。「すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」（使徒行伝1：58）。

救い主は、たとえどんなに筋が通っていても、議論をもってしては固い心を溶かしたり、世俗と私欲のからを破ることはできないことを知っておられた。また、弟子たちが天来の賜物を受けなければならないことを知っておられた。また、道であり、真理であり、いのちである方をほんとうに知ることによって温められた心と、雄弁にされた唇から伝える時に、福音は、はじめて効果をあらわすこともごぞんじであった。悪の潮流は弟子たちに対抗して激しく深く流れていたので、彼らにゆだねられた働きは強力に進められる必要があった。固い決意で警戒を怠らない首領が暗黒の勢力を指揮していたので、キリストに従う者たちは、神が聖霊によって賜わる助けによらないで、正義のための戦いをたたかうことができなかった。

キリストは弟子たちに、彼らの働きをエルサレムで始めるようにと言われた。この町は、キリストが人類のために

ささげられた驚くべき犠牲の舞台であった。そこでキリストは人性の衣をまとい、人々と共に歩き、語られたが、天国がどれほどこの世に近づいていたかを見きわめた者はほとんどいなかった。その場所で主は罪を宣告され、十字架にかけられたのである。エルサレムにはナザレのイエスがメシヤだと、ひそかに信じていた人々が大勢いたし、祭司や役人にだまされていた人々も大勢いた。こうした人々に福音は宣べ伝えられなければならない。彼らは悔い改めるように招かれなければならなかった。キリストを通してはじめて、罪の赦免がなされるという驚くべき真理が明らかにされなければならなかった。また、過去数週間の感動的な事件に、エルサレム全体がわき立っていたあいだこそ、弟子たちの説教は最も深く影響を及ぼすことであろう。

イエスは、公生涯のあいだ、この世を罪の奴隷の身から自由にさせるには、主の働きにおいて弟子たちが主と1つになることだと、絶えず彼らに教えておられた。主が神の国を宣べ伝えさせるために12人を送り出し、後に70人を送り出されたのは、主が弟子たちにお教えになったことを、他の人々に伝える義務があるのだということをお教えになるためであった。主はご自身のすべてのみわざの中で、個々の働きから彼らの仲間が増えるにしたがって働きをひろげ、最後には地上の隅々にまで達するように、弟子たちを訓練しておられたのである。主に従った者たちに主がお与えになった最後の教訓は、彼らがこの世のために救いのよきおとずれを委託されているのだということであった。

[1368] キリストは、み父のもとに昇天なさる時が来たとき、弟子たちをできるだけ遠く離れたベタニヤまでお導きになった。そこで、主は立ち止まり、弟子たちは主のまわりに集まった。主は、あたかも主の守りを保証なさるかのように両手を広げて祝福なさり、ゆっくりと弟子たちのあいだからのぼって行かれた。「祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた〕」（ルカ24：51）。

弟子たちが昇天して行かれた主の、最後のみ姿を捉えようと上の方を見上げていると、主は天使たちの喜びの群れに迎えられた。これらの天使たちは天の宮廷へとキリストを護衛して行き、勝利の歌をうたった、「地のもろもろの国よ、神にむかって歌え、主をほめうたえ。いにしえからの天の天に乗られる主にむかってほめうたえ。……力を神

に帰せよ。その威光はイスラエルの上にあり、その力は雲の中にある」（詩篇68：3234）。

弟子たちがなおも熱心に天を見ていると、「見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、『ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう』」（使徒行伝1：10、11）。

キリストの再臨のみ約束は、弟子たちの心にいつも鮮明に刻まれていなければならなかった。彼らが昇天されるのを見ていたそのイエスは、この地上で主の働きに献身する人々をみもとに連れて行くために再び来られるのである。「見よ、わたしは終りまで、いつもあなたがたと共にいる」と彼らに言われた同じ声が、彼らを天のみ国で、み前に迎えてくださるのである。

贖罪の象徴的な儀式のときには、祭司長は祭司の服を脱ぎ、一般の祭司の白いリンネルの服を着て務めを行った。そこでキリストも王の衣をお脱ぎになり、人間性をまとわれて、祭司としてのご自身を、いけにえとしてささげられた。大祭司が至聖所の儀式をとり行ったあと、待っている会衆の前に祭司服を着て現れたように、キリストは、「どんな布さらしでも、それほどに白くすることはできないくらいに」真白く輝く衣を着て、再び来られるのである（マルコ9：3）。主はご自分の栄光と父の栄光に包まれておいでになり、すべての天使たちの群れが主のあとにつき従うのである。

こうしてキリストの「またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」という、弟子たちへの約束は果たされるのである（ヨハネ14：3）。主を愛して待っている人々には、主は栄光と名誉と不死のいのちで報いてくださるであろう。死んでいる義人は墓から出て来るであろう。また生きている義人は空中でとらえられて主にお会いするであろう。人間がこれまで耳にしたどんな音楽よりもすばらしいキリストのみ声が、あなたの戦いは終わったとお告げになるのを彼らは聞くであろう。「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」（マタイ25：34）。

弟子たちは、主がもどって来られる希望を抱いて、大いに喜んだにちがいない。

第4章　聖なる霊下る

本章は使徒行伝2：139に基づく

弟子たちがオリブ山からエルサレムにもどってきたとき、人々は彼らが悲しみ、取り乱し、挫折感に打ちのめされて帰ってくるだろうと思いながら彼らを迎えた。しかし人々はそこに喜びと勝利を見た。弟子たちは希望が失望に終わったことを嘆いてはいなかった。彼らはよみがえられた救い主を見てきたのである。そして別れのとき主が約束されたことばが、彼らの耳の中に絶えず響きわたっていた。

弟子たちはキリストのご命令に従って、エルサレムで天父のお約束の聖霊の降下を待った。彼らは何もせずぼ [1369]
んやりと待っていたのではない。記録によると、「絶えず宮にいて、神をほめたたえていた」としるされている（ルカ24：53）。彼らはまた、イエスの名によってみ父に願いを申し出ようと集まっていた。天には彼らの代表者であられるお方、神のみ座でとりなしをされるお方がおられるのだということを知っていた。彼らは厳粛な畏敬の念に打たれ、「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」という確証をくり返しながら、こうべをたれて祈った（ヨハネ16：23、24）。「キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」という、ゆるぎない論証をもち、彼らは信仰の手をますます高く差しのべた（ローマ8：34）。

弟子たちは約束が成就されるのを待っていたあいだ、謙遜な心でほんとうに悔い改め、また自分たちの不信心を告白した。彼らは、キリストがなくなられる前にお語りになったことばを思い出しながら、それらの意味を一層深

く理解した。既に記憶から消えてしまっていた真理が再び心によみがえってきて、彼らはこれを互いに繰り返し合った。そして、救い主について誤解していたことを思い、自責の念にかられた。主のすばらしいご生涯の場面が行列のように1つ1つ彼らの前を通り過ぎた。主の純粋できよらかなご生涯を瞑想しながら、もし、キリストの美しいご品性をあかしする生活をすることができさえすれば、どんな仕事でもむずかしすぎることはなく、どんな犠牲でも大きすぎることはないと思った。もし、過去の3年間をもう1度やりなおすことができるとすれば、弟子たちはどんなにか違った行動をとることだろう。もし、主に再び会うことができさえすれば、どんなにか熱心に、自分たちが主を深く愛していたかを示そうと懸命に努めることであろう。また、不信の言葉や行動で主を嘆かせたことに、どんなにか真心からのおわびを申しあげることであろう。しかし、彼らは、自分たちはゆるされていると考えたとき慰められた。そして、主に対する信仰をできるかぎり勇敢に世の人々の前で告白し、自分たちの不信心の償いをしようと決心した。

弟子たちは人々と接するのにふさわしくなるように、また、日常の交わりの中で罪人をキリストに導くような言葉を語るのにふさわしくなるように、とりわけ熱心に祈った。意見の不一致や優位を望む心をすべて捨て、クリスチャンの交わりの中で互いに親密になった。彼らは神に近づくにしたがい、ますます、キリストとの密接な交わりを許されたことに、すばらしい特権があるということを悟った。理解力がにぶいために、主が彼らに教えようとされた教訓を悟ることができずに、主を何度も悲しませたことを思い出して、彼らの心も悲しみでいっぱいになった。

こうした準備の日々は、深く心をさぐる日々であった。弟子たちは霊的な不足を感じ、救霊の働きをするのにふさわしい者となることができるように、聖油が注がれることを祈り求めた。彼らは自分たちのために祝福を求めたのではない。彼らは魂の救いという重荷を負っていた。弟子たちは、福音が世に宣べ伝えられなければならないことを悟って、キリストが約束された力を求めたのである。

父祖の時代には聖霊の感化はしばしば著しく現されたが、決して満ちあふれるほどではなかった。今、救い主の

み言葉に従って、弟子たちはこの賜物を懇願し、天においてはキリストがそのとりなしをしておられた。主はその民にみ霊を注ぐことができるように、み霊の賜物をお求めになったのである。

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった」。

み霊は、祈りながら待っていた弟子たちに臨み、一人一人の心を十分に満たされた。無限なる神が、力をもって教会にご自身を現されたのである。この力の現れはもう何年ものあいだ、差しとどめられていたかのようであったが、今こそ、天は、み霊の恵みの富を教会に注ぐことができることを喜んだ。そして、み霊の感化のもとに、悔い改めや [1370]
告白のことばが、罪をゆるされたさんびの歌と交替した。感謝の声があがり、預言のことばがきこえた。全天は崇敬の思いでこの比類のない、無限の愛に輝く知恵を見守り、あがめた。使徒たちはわれを忘れて「ここに愛がある」と叫んだ。彼らは与えられた賜物をしっかりと握りしめた。それから何が起こったであろうか。み霊の剣は、新たに力でとぎすまされ、天来の電光に輝いて、不信仰な者へと突き進み、1日に幾千もの人々が改心した。

「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」とキリストは弟子たちに言っておられた。「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」（ヨハネ16：7、13）。

キリストの昇天は、主に従う者たちが約束の祝福を受けることのしるしであった。彼らは、仕事にとりかかる前にこれを待たなければならなかった。キリストは天の門の中に入って行かれて、天使たちのさんびのうちに王座につかれた。この儀式が終わるとすぐ、聖霊は豊かな流れとなって弟子たちの上にくだり、キリストは永遠の昔から父と共に持っておられた栄光をお受けになった。ペンテコステの聖霊降下は、あがない主の就任式が完了したことを知らせる天からの通報であった。主は、その約束に従って、ご自

分が祭司、また王として、天と地のすべての権威を引き継ぎ、神の民の上に立つ油そそがれた者となられたしるしとして、弟子たちに天から聖霊を送られたのであった。

「また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した」。聖霊は炎の舌の形をとって、集まっていた人々の上にくだった。これは、そのとき弟子たちにさずけられた賜物の象徴であった。そして彼らは、それまで知らなかった他国の言葉で流暢に話すことができた。その炎は、使徒たちが働くときの燃えるような熱意と、その働きに伴う力を現した。

「エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいた」。ユダヤ人たちは離散された期間に、人が住むほとんどすべての場所へ散らされ、異境の生活の中でさまざまの違った国語を話すことを学んでいた。この時、これらのユダヤ人の多くがエルサレムに来て、その時行われていた宗教の祭りに出ていた。そこにはあらゆる国語を話す人々が集まっていた。このように言葉がいろいろ異なっていたことは、福音宣伝のためには非常な妨げとなったはずであった。そこで神は、不思議な方法で弟子たちの不足を補われたのである。聖霊は彼らが一生かかってもなし遂げられないことを彼らのためになさった。弟子たちは今、自分たちの働きかけている人々の言語を正確に話して、福音の真理を広く宣伝することができた。この奇跡的な賜物は、彼らの任務が天の認印を押されたものであることを世に示す確かな証拠であった。この時から弟子たちの言葉は、母国語で語ろうと、外国語で語ろうと、純粋で単純で正確であった。

「この物音に大ぜいの人が集まってきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあっけに取られた。そして驚き怪しんで言った、『見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。それだのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか』」。

祭司や役人たちはこの驚くべき現象にひどく立腹したが、人々の暴力に自分たちの身をさらすことになるのでは

ないかと恐れて自分たちの敵意をぐっとこらえていた。彼らはあのナザレ人を殺したが、今ここに、彼のしもべであるガリラヤの無学な人々が、当時語られていたあらゆる国語で、その人の生涯とその働きのことを話しているではないか。祭司たちは弟子たちの奇跡的な力を常識的に説明しようと決めて、これ は祭りのために用意されていた新酒を [1371]
飲み過ぎて酔ったためだとふれ込んだ。中でもとりわけ無知な者たちはこの主張を真に受けたが、知的な者たちはそうではないことを知っていた。そしてそのような違った国語を知っていた人々は、弟子たちの使っている言葉が正確であることを証言した。

祭司たちの非難に答えて、ペテロは、このような事が起こったのは、ヨエルの預言がまさしく成就したのであると言った。このような力はある特別の仕事に適合させるために人々に臨むものだとヨエルが預言したのだと説明した。「ユダヤの人たち、ならびにエルサレムに住むすべてのかたがた、どうか、この事を知っていただきたい。わたしの言うことに耳を傾けていただきたい。今は朝の九時であるから、この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではない。そうではなく、これは預言者ヨエルが預言していたことに外ならないのである。すなわち、『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう』」と、ペテロは言った。

ペテロは、明瞭に力強くキリストの死とよみがえりをあかしした。「イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きなさい。あなたがたがよく知っているとおり、ナザレ人イエスは、神が彼をとおして、あなたがたの中で行われた数々の力あるわざと奇跡としるしとにより、神からつかわされた者であることを、あなたがたに示されたかたであった。……あなたがたは彼を不法の人々の手で十字架につけて殺した。神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせたのである。イエスが死に支配されているはずはなかったからである」。

ペテロは自分の立場を立証するのに、キリストの教えを引用しなかった。それは聴衆の偏見が非常に大きいので、それについて語っても効果がないことを知っていたからである。むしろ彼はダビデのことを語った。ダビデは彼らの国の族長の1人であると、ユダヤ人からみなされていたからである。「ダビデはイエスについてこう言っている、『わたしは常に目の前に主を見た。主は、わたしが動かされないため、わたしの右にいて下さるからである。それゆえ、わたしの心は楽しみ、わたしの舌はよろこび歌った。わたしの肉体もまた、望みに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を黄泉に捨ておくことをせず、あなたの聖者が朽ち果てるのを、お許しにならないであろう……』」。

「兄弟たちよ、族長ダビデについては、わたしはあなたがたにむかって大胆に言うことができる。彼は死んで葬られ、現にその墓が今日に至るまで、わたしたちの間に残っている。」「キリストの復活を……『彼は黄泉に捨ておかれることがなく、またその肉体が朽ち果てることもない』と語ったのである。このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである」。

この光景はまことに興味深い。見よ、人々は弟子たちが、イエスにある真理をそのままあかしするのを聞こうと、四方から集まってくる。彼らは会堂いっぱいに押しかけてくる。祭司や役人たちもまだ、敵意のある暗い顔をしかめてそこにいるが、彼らの心はなおもキリストに対する憎しみに満ち、その手は、この世のあがない主を十字架につけた時の、殺害行為からきよめられていなかった。彼らは使徒たちが強力な迫害や虐殺の手を恐れて、おびえているだろうと思っていた。ところが、彼らは、使徒たちがすべての恐れを乗り越えて、み霊に満たされ、力強くナザレのイエスの神性を宣べ伝えているさまを見るのである。彼らは使徒たちが、ごく最近、屈辱を受け、嘲笑され、残酷な手で打たれ、十字架につけられた方が、いのちの君であって、今や神の右にまで高められていることを、勇敢に宣べ伝えているのを聞く。

使徒たちに耳を傾けていた人々の中には、キリストを罪と死に陥れることに一役買った者もいた。彼らの声は、主を十字架につけよと叫ぶ群衆の声に混じっていた。イエスとバラバが法廷で彼らの前に立ち、ピラトが「おまえ

たちは、だれをゆるしてほしいのか」とたずねたとき、[1372]
「その人ではなく、バラバを」と彼らは叫んでいた（マタイ27：17、ヨハネ18：40）。ピラトがキリストを彼らの前に連れてきて、「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」。「この人の血について、わたしには責任がない」と言うと、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と彼らは叫んだのであった（ヨハネ19：6、マタイ27：24、25）。

いま、彼らは、十字架につけられたのは神のみ子であったという弟子たちの言葉を聞いている。祭司や役人たちは震えおののいた。人々は罪の自覚と苦悩におそわれた。「人々はこれを聞いて、強く心を刺され、ペテロやほかの使徒たちに、『兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか』と言った」。弟子たちの言葉を聞いていた人々の中に信心深いユダヤ人もいた。彼らは真心から信じていた。語る者の言葉に力が伴い、イエスこそ本当にメシヤであるということを彼らは得心した。

「すると、ペテロが答えた、『悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわち、あなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである』」。

ペテロはその罪意識に苦しんでいる人々に、彼らは祭司や役人たちにだまされてキリストを拒んだのである。だから、もし彼らがなおもこれらの人々の勧告をあてにして、祭司や役人たちがキリストを認めないうちは、自分たちも認めようとしないということであれば、彼らは決してキリストを受け入れるようにはならないであろうと熱心に訴えた。これらの有力者たちは、聖職についていても、世的な富や栄誉にあこがれていた。彼らは進んでキリストのところに来て、光を受けようとしなかった。

この天の光に照らされて、キリストが弟子たちに説明しておられた聖書は、完全な真理として彼らの前に燦然と輝いた。ベールが取り除かれて、既に廃止されたことが1つ残らず弟子たちの前に明らかになった。弟子たちはキリス

トの使命の目的と神の王国の性質を全く明解に理解した。彼らは救い主の力をもって語ることができた。そして、彼らが聞く者たちに救いの計画を説くと、多くの人々が罪を悟り、納得した。祭司たちに教え込まれていた伝統や迷信は、人々の心から取り除かれて、救い主の教えが受け入れられた。

「そこで、彼の勧めの言葉を受けいれた者たちは、バプテスマを受けたが、その日、仲間に加わったものが3000人ほどあった」。

ユダヤの指導者たちは、キリストのみわざはキリストの死とともに終わるのだと思っていた。ところが、それどころか、彼らはペンテコステ（五旬節）の日のすばらしい光景を目撃したのである。彼らは、弟子たちがこれまで知らなかった権威と力をさずけられ、また、語る言葉もさまざまなしるしや不思議によって強められて、キリストについて説くのを聞いた。ユダヤ教の根拠地エルサレムでは、幾千もの人々が公然と、ナザレのイエスをメシヤとして信じる信仰をあかしした。

弟子たちは魂の大きな収穫に驚き、おどりあがってよろこんだ。彼らはこのすばらしい収穫を、自分たちの努力の賜物とは考えなかった。彼らは、自分たちは他の人々の働きに参加しつつあるのだと悟った。アダムの堕落以来、キリストは、選ばれたしもべたちにみことばの種をゆだね、人々の心にそれを植えつけさせられた。この地上での生涯をかけて、キリストは真理の種をまき、ご自身の血でそれを潤された。ペンテコステ（五旬節）の日に起こった人々の改心は、この種まきの結果であり、キリストの教えの力を現すキリストの働きの収穫であった。

使徒たちの論証がたとえ、明瞭で信服させるものであったとしても、それだけでは、あれほどはっきりと反抗していた偏見を取り除くことはできなかったであろう。聖霊は聖なる力で、人々の心にその論証をはっきり悟らせた。使
[1373] 徒たちの言葉は、全能者のとぎすまされた矢のように、栄光の主を拒み、十字架につけるほどの恐ろしい罪を犯した人々の罪を悟らせた。

キリストの訓練のもとに、弟子たちは聖霊を必要と感じるように導かれていた。聖霊の教えにより、彼らは最終的な資格を受けて、彼らの生涯をかけた仕事に出て

行った。もはや彼らは無学ではなく、無教養でもなかった。もはや彼らはてんでんばらばらな一団ではなく、また、不調和で矛盾した分子の寄り集まりでもなかった。もはや彼らの望みは、世的な成功を目指すものではなかった。彼らは「心を1つにし思いを1つにして」いた（使徒行伝2：46、4：32）。キリストが彼らの思想となり、キリストの国の前進が彼らの目標であった。彼らは心も品性も主に似たものとなっていた。そして人々は「彼らがイエスと共にいた者であることを認め」た（使徒行伝4：13）。

ペンテコステは彼らに天の啓示をさずけた。キリストと共にいた時には理解できなかった真理が、いま明らかにされた。彼らはこれまで知らなかった信仰と確信を与えられて、聖なるみことばについての教えを受け入れた。キリストが神のみ子であるということは、もはや彼らにとって信仰の問題ではなかった。主が、たとえ人間性を身につけておられても、本当に、メシヤであられることを彼らは知っていた。そして、神が彼らと共におられるのだという確信をもって、世に自分たちの経験を堂々と語った。

弟子たちはイエスのみ名を、確信をもって語ることができた。それは、イエスが彼らの友であり、兄であられたからではなかっただろうか。キリストとの親しい交わりに導かれて、彼らは主と共に天に備えられた場所に座った。キリストをあかしするとき、弟子たちの思想を包んだのは、すさまじく燃えることばであった。弟子たちの心には豊かな深い愛、どこまでも広い慈愛が積みすぎるほど積みこまれていたため、キリストのみ力をあかしに、地の果てまでも行かずにはおられなかった。弟子たちは、キリストが始められたみ働きを進展させたいという、切なる願いでいっぱいであった。彼らはまた、神の恩義の大きさと、彼らの仕事の責任の大きさを悟った。聖霊の賜物に力づけられて、彼らは、十字架の勝利を更にひろげたいという熱意に燃えて出て行った。聖霊は彼らを活気づけ、彼らを通して語った。キリストの平和が彼らの顔から輝き出た。彼らの生涯を奉仕のために主にささげていたので、その顔には神にゆだねきった表情があらわれていた。

第5章　聖霊の働き

弟子たちにみ霊を約束されたとき、キリストはこの地上でのみわざの終わりに近づいておられた。罪を負う者としてご自身にのしかかる罪の重荷を十分に認識されて、十字架の影にお立ちになっていた。キリストは、犠牲としてご自身をおささげになる前に、弟子たちに与えようとしておられた絶対に必要で完全な賜物、限りない主の恵みの富を、彼らのもとに届けてくれる賜物についてお教えになった。「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである」（ヨハネ14：16、17）。救い主は聖霊が主の代表者として、やがて大きな働きをする時があることをご指摘になった。聖霊の神聖な力は、幾世紀ものあいだ積み上げられてきた悪と戦わなければならなかった。

ペンテコステの当日、聖霊が注がれたその結果はどうであったろうか。復活された救い主についての喜ばしい知らせは、人の住むところにはどこにでも伝えられた。弟子たちがあがないの恵みについての使命を伝えると、人々の心はこの使命の力に従った。教会は四方から集まってくる改心者を見守った。信仰を棄てた人々ももう1度悔い改めた。
[1374] 罪人たちは、高価な真珠を求めて信者たちに加わった。福音に最も激しく反対していた人々もその擁護者になった。「彼らの中の弱い者も……ダビデのようになる。またダビデの家は……主の使のようになる」という預言が成就した（ゼカリヤ12：8）。どのクリスチャンもみな、お互いのうちに神の愛と慈善心があらわれているのを見た。ただ1つの関心が支配し、1つの対象を求める熱意が他のすべてをのみこんだ。信徒の望みはキリストのご品性に似たものとな

ることであり、神の国を発展させるために働くことであった。

「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた」（使徒行伝4：33）。彼らの働きによってすぐれた人々が教会に加えられた。これらの人々は真理のことばを受け入れて、自分たちの心に喜びと平安を満たしてくれた望みを、他人に分け与える働きに生涯をささげた。彼らはどんな脅迫によっても、拘束されたり脅かされたりすることはなかった。主は彼らによってお語りになり、彼らの行く先々で、貧しい者たちは福音が自分たちに語られるのを聞いた。そして、神の恵みの奇跡が起こった。

人が聖霊の支配に身をゆだねるとき、神はこのように大いなる働きをなさることができるのである。

聖霊の約束は一時代や一民族に限られたものではない。キリストは、み霊の聖なる感化は世の終わりにいたるまで、キリストに従う者の上にあると宣言なさった。ペンテコステの日から現代にいたるまで主とそのみわざに自分のすべてをささげてきた人々に、助け主が送られてきた。キリストを個人的な救い主として受け入れたすべての者に、聖霊は助言者、聖別する者、導き手、証人としてのぞんだ。信ずる者たちは、神に密接につながって生活すればするほど、あがない主の愛と救いの恵みについて一層はっきりと力強くあかしした。幾世紀にもわたる長い迫害と試練の時代に生きて、生涯、聖霊が豊かにとどまった人々は、この世におけるしるしとなり、不思議となった。彼らは天使や人々の前で、人の心を変えるあがないの愛の力をあらわしてきた。

ペンテコステに天から力をさずけられた人々でも、それ以後、もはや誘惑や試みを受けなかったわけではない。彼らは真理や義のためにあかしをしているとき、すべての真理の敵に繰り返しおそわれた。敵は彼らのクリスチャン経験を堕落させようとしたのである。彼らは神から与えられた力の限りをつくして、キリスト・イエスにある男女の水準に到達しなければならなかった。また、完全を目指してより高い高みへ達するために、日ごとに新たな恵みを求めて祈った。どんなに弱い者でさえも、聖霊の働きにより、神を信じる信仰をあらわすことによってきよめられ、洗練

され、高尚にされるように、各自に与えられた力を磨くことを学んだ。彼らは謙遜に、聖霊のつくり変える感化力に自分をゆだねたとき、神の徳を豊かに受けて、神に似たものにつくり変えられた。

キリストがご自分の代表者として聖霊を送るという別れの約束は、時がたっても変わりはない。み霊の恵みが豊かに地上の民に注がれないのは、神が制限しておられるからではない。もし約束の実現がみられないとすれば、それは約束が理解されていないからである。もし誰でも求めるならば、すべてのものはみ霊に満たされるのである。聖霊の必要性を重大に考えていないところには必ず、霊的なかわき、霊的な暗黒、霊的な堕落と死がある。小さなことに気を奪われているときにはいつでも、教会の成長と繁栄に必要な、しかもその後にさまざまな祝福をもたらす神の力が、たとえ限りなく豊富に提供されていても、なお欠けているのである。

これこそ、われわれが力を受ける手段なのだから、み霊の賜物を飢えかわくように求めようではないか。それについて語り、そのために祈り、そのことについて説教しようではないか。両親がその子供たちによい贈り物を与えるときよりももっと気持ちよく、主は人々に聖霊を与えてくださる。み霊のバプテスマを日ごとに受けるためには、働き人がめいめい神に願いをささげなければならない。クリスチャンの働き人は仲間どうし集まって、いかに計画し、賢く実行するかということを知ることができるように、特別な助けと天来の知恵を求めなければならない。彼らは特に神がみずからお選びになった大使たちに、任地でみ霊を豊かに注いでくださるように祈らなければならない。み霊が神の働き人と共にいるとき、真理の宣伝には、この世の名誉や栄光のすべてをもってしても与えることのできない力が加えられるのである。 [1375]

神のために献身した働き人がどんな場所にいようと、み霊は共に住んでくださる。弟子たちに語られたことばは、同時にわれわれにも語られている。助け主は彼らのものであるばかりでなく、われわれのものである。どんな緊急の際でも、この世の憎しみのまっただ中にあっても、み霊は、もがき、格闘している魂をささえる力をさずけられる。また彼らの失敗や誤りに気づかせてくださる。悲しみ

や苦しみの中で、見通しは暗く、未来は難問題ばかりのように見える時、また、どうしようもない孤独感におそわれている時、こうした時こそ、聖霊は信仰の祈りに答えて、心を慰めてくださるのである。

異常な環境の中で霊的な恍惚状態をあらわしたからといって、その人がクリスチャンであるなどという確証にはならない。聖潔は忘我の境地ではない。それは意志を全く神に従わせることである。それは神のみ口から出る1つ1つのことばで生きることであり、天の父なる神のみこころをなすことである。光のうちにいる時と同様に、試練の時にも暗黒の時にも神により頼むことである。また、目で見て歩くのでなく、信仰によって歩むことである。それは少しも疑わずに確信をもって神に頼み、神の愛に安らぐことである。

聖霊とは何であるか、その正確な定義づけをする必要はない。み霊は助け主「父のみもとから来る真理の御霊」であるとキリストは言っておられる。聖霊については、人々をあらゆる真理に導く働きにおいて「それは自分から語るのではな」いとはっきり述べられている（ヨハネ15：26、16：13）。

聖霊の性質は神秘である。人間はそれについて説明することができない。なぜなら、主がそれを彼らに明らかにされていないからである。空想的な考えを持った人々は聖霊について書かれた聖句を集めて、人間的な解釈をつくり上げるかもしれないが、そのような見解を受け入れたところで教会を強化することにはならない。あまりに深いので人間には理解できないこのような神秘については、沈黙が金である。

聖霊の働きはキリストのみことばに明細に記されている。「それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう」（ヨハネ16：8）。罪を自覚させるものは聖霊である。もし罪人がみ霊の生きかえらせる感化力に反応するならば、彼は改心へと導かれて、神の要求に従うことの重大さに目覚めるであろう。

義に飢えかわく、悔い改めた罪人に、聖霊はこの世の罪を取り除く神の小羊を示す。「わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである」とキリストは言われた。「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また

わたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」（ヨハネ16：14、14：26）。

聖霊はあがない主の死によって可能となった救いを与えるために、霊的な生まれかわりの力として賜るものである。み霊は、カルバリーの十字架上でささげられた大きな犠牲に人々の注意を向けさせ、この世に神の愛を示し、改心した人々に聖書の大切な事柄を提示しようと絶えず努めている。

聖霊は人々に罪を認めさせ、義の標準を心に示してから、この世のものに対する愛着を取り除き、魂を聖なる事物への願望で満たす。「あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」と、救い主は言われた。もし人々が作りかえられることを望むならば、全人格のきよめがなし遂げられるであろう。み霊は神に関する事柄を取り、それを魂に刻みつける。み霊の力によっていのちの道は明らかにされ、そこではだれも過ちをおかす必要がない。

はじめから、神は堕落した人類を救うご計画を完成するために人々を用い、聖霊によって働いてこられた。これは父祖たちの生活にはっきりあらわされていた。モーセの時代の荒野の教会に対しても、神は「良きみたまを賜わって彼らを教え」られた（ネヘ ミヤ9：20）。使徒の時代にも、神は聖霊の力により教会のために偉大な働きをなさった。父祖たちをささえ、カレブやヨシュアに信仰と勇気を与え、使徒の教会の働きを効果的なものにした同じ力が、後に続くすべての時代に神の忠実な子らをささえてきた。ワルドー派のキリスト教徒が、暗黒の時代に改革の道を備える助けをしたのも、聖霊の力によるものであった。現代の伝道事業を確立するために道を開拓したり、聖書をあらゆる国家、民族の言葉や方言に翻訳したすぐれた人々の立派な努力も、同じ聖霊の力によるものであった。 [1376]

そして今日もなお、神はご自身の目的をこの地上に知らせるために教会を用いておられる。今日、十字架の使者たちは町から町へ、ある地方から他の地方へとキリスト再臨の道を備えに出ていく。神の律法の標準は高められつつある。全能の神のみ霊は人々の心に働きかけて、その感化を受ける者たちは、神と神の真理のために証人となるのである。献身した人々が、キリストによる救いの道を明らかにしてくれた光を、他の人々に伝えている姿をあちこちに見

かけるであろう。そして、彼らが、ペンテコステの日にみ霊を受けた人々と同じように、その光を輝かし続けるならば、み霊の力をさらに多く受け、こうして地は神の栄光に輝くのである。

一方、現在の機会を賢明に生かそうともせず、他の人々を啓蒙する能力が一段と増し加えられる時、すなわち、霊による特別の刷新の時期を、何もしないで待っている人々がいる。彼らは、現在の義務と特権を怠り、彼らの光をほの暗いままにさせておき、それでいて、特別の祝福にあずかる者となる時を待っている。その時がくれば、何の努力もせずに、奉仕をするのにふさわしく変えられると思っているのである。

地上における神のみわざが閉ざされる終末の時には、聖霊の導きにより、献身した信徒たちのささげる熱心な努力に、神の恵みの特別なしるしが伴うのは事実である。種まき時と、収穫のころに東方の国々に降る前の雨、後の雨という比喩を用いて、ヘブルの預言者たちは、神の教会に異常なほど豊かに霊的恵みがさずけられることを預言した。使徒の時代の聖霊の降下は前の雨、または先の雨の始まりであった。そして、その結果はすばらしかった。終わりの時まで聖霊はまことの教会に臨在するのである。

地上の収穫が終わりに近くなると、教会を人の子イエスの来臨に備えるために、霊的な恵みが特別に与えられると約束されている。この聖霊の降下は後の雨にたとえられている。クリスチャンは「春の雨の時」にこの特別の力を収穫の主に求めなければならない。これに応えて「主はいなずまを造り、大雨を人々に賜い」、「豊かに雨を降らせ、……秋の雨と春の雨とを降らせられる」（ゼカリヤ10：1、ヨエル2：23）。

しかし、今日、神の教会の信徒たちは、すべての霊的成長の源であられる神との強いつながりを持っていなければ、刈り入れの時に備えていることにならないであろう。彼らは絶えずランプの芯を切りそろえて、燃やしていなければ、いざという時に特別の恵みにあずかることができない。

恵みを絶えず新たに受けている者たちだけが、日常の必要に応じて、また力を用いる彼らの能力に応じて、力を受けるであろう。霊的な力が特別に賦与されて、やがて救霊

のために驚異的な装備を受ける時が来るのを待ち望むのではなく、彼らは、神のご用にふさわしい器としていただくために、日ごとに神に従っている。彼らは手の届く範囲にある奉仕の機会を毎日利用している。家庭の地味な仕事をしていても、あるいは、有用な社会の職場にいても、どこででも彼らは主のためにあかしを立てている。

キリストでさえこの地上でのご生涯に、毎日必要な恵みを神に求められたということは、献身的な働き人にとって、すばらしい慰めである。神とのこの交わりから、イエスは力を受けて、人々を力づけ、祝福するために出て行かれた。神のみ子が父の前にこうべをたれて祈っておられる姿を見よ。イエスは、神のみ子であったが、祈りを通してご自分の信仰を強め、天との交わりによって、悪に抵抗し、人類の必要に奉仕する力をお受けになった。人類の長兄としてキリストは、弱さに取りまかれ、罪と誘惑の世に
[1377] 住みながらなお、主に仕えたいと望む者たちの必要をごぞんじである。また、主がつかわすにふさわしいと思っておられる使者たちが、弱く過ちをおかしやすい人間であることもごぞんじである。しかし主の働きに全く献身するすべての人に、主は神からの援助を約束しておられる。神に頼りきって、みわざに惜しみなく献身する信仰、この信仰をもって神に熱心に、忍耐強く懇願すれば、罪との戦いにおいて聖霊の助けを必ず受けることができる。このことを主ご自身の模範は保証している。

キリストの模範に従う働き人はみな、地上の収穫物を実らせるために神が教会に約束された力を受け、これを用いるために備えをする。朝ごとに福音の使者が主の前にひざまずいて、献身の誓いを新たにする時、神は信仰を覚醒させ、きよめる力をもった聖霊の臨在をお与えになる。日々の勤めに出かける時、彼らは見えない聖霊の力によって「神と共に働く者たち」となることができるという保証を受けるのである。

第6章　美しの門での奇跡

本章は使徒行伝3章、4：131に基づく

キリストの弟子たちは自分たちの無能力を深く自覚し、謙遜に、祈りながら、彼らの弱さをキリストの強さに、彼らの無知をキリストの知恵に、彼らの無価値さをキリストの義に、彼らの貧しさをキリストの尽きることのない富に結びつけた。こうして強められ、必要な能力を身につけて、彼らは主への奉仕に臆することなく前進した。

聖霊降下ののち間もなく、熱心な祈りの時間の直後に、ペテロとヨハネは宮に礼拝に出かけたが、美しの門のそばに足のきかない男がいるのを見た。彼は生まれた時から40才の今まで、苦痛と病気の生活を送っていたのである。この不幸な男は、イエスに会って、いやしていただきたいと長いあいだ願い続けていた。だが、彼はほとんど体の自由がきかず、偉大な医師、イエスのご活躍の場から遠くへ移されていた。彼の嘆願はやっと聞かれて、何人かの友達が彼を宮の門まで運んで行った。しかし、彼は宮に着いてすぐ、あれほど望みをかけていたお方がすでに残酷な死を遂げたことを知った。

彼の失望は、彼がイエスにいやされることをどれほど前から熱心に望み続けていたかを知っていた人々の同情を買った。そして彼らは、通行人が彼を憐れんで、その困窮を和らげるためにわずかな物でも彼に恵んでやる気持ちになるようにと、毎日彼を宮に運んできた。ペテロとヨハネが通りかかると、彼は2人に施しをこうた。弟子たちは気の毒そうに彼を見た。ペテロが言った、「わたしたちを見なさい」。「彼は何かもらえるのだろうと期待して、2人に注目していると、ペテロが言った、『金銀はわたしには無い』」。ペテロが自分の貧しさを説明すると、足のきかない男の表情は沈んだ。しかし、ペテロが続けて、「しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリ

ストの名によって歩きなさい」と言うと、男の顔は希望に輝いた。

「彼の右手を取って起してやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、踊りあがって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいって行った。民衆はみな、彼が歩き回り、また神をさんびしているのを見、これが宮の『美しの門』のそばにすわって、施しをこうていた者であると知り、彼の身に起ったことについて、驚き怪しんだ。

彼がなおもペテロとヨハネとにつきまとっているとき、人々は皆ひどく驚いて『ソロモンの廊』と呼ばれる柱廊にいた彼らのところに駆け集まってきた」。人々は、イエスが奇跡を行ったように、この弟子たちも奇跡を行うことに驚いた。しかもここに、40年間、無力で歩けなかったこの男が、今や苦痛から解放され、手足を自由に動かして喜び、またイエスを信じてしあわせそうにしているのだ。

[1378] 弟子たちが人々の驚きを見た時、ペテロが尋ねた。「なぜこの事を不思議に思うのか。また、わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜわたしたちを見つめているのか」。ペテロは、そのいやしがナザレのイエスの名により、主の力によってなされたもので、そのイエスを神は死からよみがえらせられたのだと、彼らに説明した。「イエスの名が、それを信じる信仰のゆえに、あなたがたのいま見て知っているこの人を、強くしたのであり、イエスによる信仰が、彼をあなたがた一同の前で、このとおり完全にいやしたのである」と、使徒ペテロは強調した。

使徒たちは、いのちの君イエスを拒んで死なせたユダヤ人たちの罪が大きいことをはっきり語った。しかし彼らは、人々を絶望に陥れないように気遣った。「あなたがたは、この聖なる正しいかたを拒んで、人殺しの男をゆるすように要求し、いのちの君を殺してしまった。しかし、神はこのイエスを死人の中から、よみがえらせた。わたしたちは、その事の証人である」とペテロは言った。「さて、兄弟たちよ、あなたがたは知らずにあのような事をしたのであり、あなたがたの指導者たちとても同様であったことは、わたしにわかっている。神はあらゆる預言者の口をとおして、キリストの受難を予告しておられたが、それをこ

のように成就なさったのである」。ペテロは、聖霊が彼らの悔い改めと改心を求めていると強調し、彼らが十字架にかけた方の憐れみがなくては、絶対に救いの望みがないと言った。キリストを信じる信仰によってのみ、彼らの罪はゆるされることができた。

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」とペテロは叫んだ。

「あなたがたは預言者の子であり、神があなたがたの先祖たちと結ばれた契約の子である。神はアブラハムに対して、『地上の諸民族は、あなたの子孫によって祝福を受けるであろう』と仰せられた。神がまずあなたがたのために、その僕を立てて、おつかわしになったのは、あなたがたひとりびとりを、悪から立ちかえらせて、祝福にあずからせるためなのである」。

こうして弟子たちは、キリストの復活を説いた。聞いていた者たちの多くは、このあかしを待っていた。だから、それを聞いた時、彼らは信じたのである。それは、キリストが語っておられたみことばを彼らに思い出させた。彼らは福音を受け入れた人々の列に加わった。救い主がおまきになった種は、芽を出し実を結んだ。

弟子たちが人々と話をしているあいだに「祭司たち、宮守がしら、サドカイ人たちが近寄ってきて、彼らが人々に教えを説き、イエス自身に起った死人の復活を宣伝しているのに気をいら立て」た。

キリストの復活後、祭司たちは、キリストの遺体がローマの見張り人の眠っているあいだに、弟子たちに盗まれたという偽りの報告を遠くまでひろめていた。だから、彼らはペテロとヨハネが、彼らが殺したキリストが復活したと説いているのを聞いて、不愉快に思ったのは当然のことであった。特にサドカイ人たちは大いに刺激された。彼らは自分たちが最も大事にしていた教理が危うくなり、自分たちの名声にかかわると感じた。

新しい信仰に改心する者たちが激増してきたので、パリサイ人やサドカイ人たちは、これらの新しい教師たちを阻止せず宣伝を続けさせるならば、キリストが地上におられた時以上に、自分たちの信望が危うくなるだろうと話し合った。それで、宮守がしらは何人かのサドカイ人たちの

手を借りて、ペテロとヨハネを逮捕し、その日2人の取り調べをするには遅かったので、そのまま獄に入れた。

弟子たちの敵は、キリストが死からよみがえられたことを認めざるを得なかった。証拠があまりにも明白で疑えなかった。それにもかかわらず、彼らの心はかたくなになり、イエスを死に陥れたその恐ろしい行為を悔いようとしなかった。弟子たちが神の霊感を受けて語ったり行動しているのだという証拠は十分に、ユダヤの役人たちに示されていたにもかかわらず、彼らは真理の使命に固く抵抗していた。キリストが彼らの期待していたような方法では来られなかったので、彼らは、キリストが神のみ子であると悟ったこ とも時々あったが、なお、その確信をもみ消して、主を十字架につけたのである。神はなお、憐れみをもって彼らにさらに証拠をお与えになり、主に立ち帰るもう1つの機会を今、さずけられた。神は弟子たちをつかわして、彼らがいのちの君を殺したことを告げ、この恐ろしい罪の告発を受けて悔い改めるように、もう1度彼らに呼びかけられた。しかし、ユダヤの教師たちは、おのれの義に安んじて、キリストを十字架にかけた責任を迫る人々が、聖霊の導きによって語っているのを認めなかった。 [1379]

キリストに反対し続けた結果、祭司たちにとって、反抗のあらゆる行為は、同じ反対を次々に誘発する刺激となった。彼らの強情はますますその度を増した。彼らは服従することができないというのではなく、服従できたのに、そうしようとしなかったのである。彼らが救いから断ち切られたのは、ただ単に、罪を犯して、死に値するからというばかりではなかった。それは、彼らがみずから武装して神に反抗したからであった。彼らは頑固に光を拒み、み霊の、罪を認めさせる働きを押し戻した。不従順な子らを支配する影響力が彼らの中で働き、神に用いられて働いている人々を口ぎたなくののしった。彼らの悪意に満ちた反逆は、神と、神がそのしもべたちに伝えさせようとお与えになった使命とに敵対して抵抗する行為のたびごとに、激しさを増していった。ユダヤの指導者たちは、毎日悔い改めを拒むごとに、反抗を新たにして、すでにみずからまいたものを刈り取る準備をしていた。

神の怒りは、単に罪人の犯した罪のために彼らの上に下るのではなく、罪を悔い改めるよう求められた時に、彼ら

がその呼びかけに抵抗し続け、彼らに与えられた光を無視して、過去の罪を繰り返すことを選んだために下るのである。もしユダヤの指導者たちが聖霊の説得力に服従していたならば、彼らはゆるされていたはずである。だが、彼らは従うまいと決意していた。同様に、罪人は拒み続けることによって、聖霊がもはや感化できないところにわが身を置くのである。

歩けない人をいやした翌日、アンナスとカヤパは、そのほかの宮の高位聖職者たちと共に、裁判のために集まった。2人の囚人たちが彼らの前に連れてこられた。その同じ部屋で、何人か同じ顔ぶれの人たちの前で、ペテロは以前に、恥知らずにも自分の主を拒んだのであった。ペテロは、今、自分が裁かれるために出頭して、このことをはっきりと思い出した。ペテロにとっては今こそ、自分の臆病を償う時であった。

そこに連なっていた人々は、キリストが裁かれた時にペテロが取った行為を覚えていて、ペテロは今、投獄と死の恐怖におじけづいているであろうと、高をくくっていた。しかし、キリストが最も苦しんでおられた時に主を拒んだペテロは、衝動的で自信家であったが、取り調べを受けるためにサンヒドリンに連れて来られたペテロは、以前のペテロとは違っていた。彼は、つまずいて以来、改心していた。彼はもはや誇らず、高慢にならず、謙遜で、自己に頼らない者になっていた。ペテロは聖霊に満たされ、聖霊の力によって、1度捨てたみ名をあがめ、自分の背信の汚点を取り除く決意であった。

これまで祭司たちはイエスの十字架の刑や復活について語ることを避けていた。しかし、今、彼らは目的を達成するにあたって、足のきかない男のいやしがどのようにしてなされたのか、調査せざるを得なかった。「あなたがたは、いったい、なんの権威、また、だれの名によって、このことをしたのか」と、彼らは尋ねた。

ペテロは敬虔な勇気と、聖霊の力によって、恐れることなく言明した、「あなたがたご一同も、またイスラエルの人々全体も、知っていてもらいたい。この人が元気になってみんなの前に立っているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。

このイエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となった石』なのである。この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」。

この勇敢な抗弁にユダヤの指導者らは肝をつぶした。[1380] サンヒドリンの前に引き出されたら、弟子たちはきっと恐れ、とまどうにちがいないと、彼らは想像していたのである。ところがそれどころか、この証人たちはキリストがお語りになったように、敵を黙らせてしまうような説得力で語った。キリストこそは「あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となった石」であると断言したペテロの声に、恐怖の色はみじんもなかった。

ペテロはここで、祭司たちがよく知っている比喩を用いた。昔から預言者たちは捨てられた石について語っていた。キリストご自身も、ある時、祭司や長老たちにお語りになって、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう」（マタイ21：4244）と言われた。

使徒たちの大胆な言葉を聞いていた祭司たちは、「彼らがイエスと共にいた者であることを認め」た。

弟子たちがキリストの変貌を目撃した時、その驚くべき光景の最後に「彼らが目をあげると、イエスのほかには、だれも見えなかった」と書かれている（マタイ17：8）。「イエスのほかには」という言葉には、初代教会の歴史を特徴づけたいのちと力の秘訣が包含されている。弟子たちは最初、キリストのみことばを聞いた時、自分たちには主が必要だと思った。彼らは主を求めて、見いだし、そして、主に従った。彼らは、宮で、食卓で、山腹で、また野で、主と共にいた。彼らは1人の師を持つ弟子たちとして、毎日主から永遠の真理について教えを受けた。

救い主の昇天後も、なお、弟子たちには愛と光に満ちた神の臨在感があった。それは人格を備えたお方の存在

であった。彼らと共に歩き、語り、祈られた救い主イエス、また、彼らの心に希望と慰めをお語りになったイエスは、平和の福音を語っておられるあいだに、彼らから天へと上げられたのであった。天使たちの馬車が主を迎え入れた時、主のみことばが下ってきた、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ28：20）。キリストは人の姿で天に昇られた。弟子たちは、キリストが神のみ座の前におられても、なお、彼らの友であり、救い主であられること、主の思いやりは変わらないこと、主は苦しむ人類といつまでも一体になられるということを知っていた。主があがなわれた人々のために支払われた値を思い出させる、傷ついた手と足を神にお示しになって、ご自身の血の功績を神に献呈しておられることを、弟子たちは知っていた。そして、そのことがわかった時、弟子たちには、主のために受ける非難に耐える力がわいた。彼らとキリストとの結合は、今や、主が人間の姿をとられて彼らと共におられた時よりも、もっと強かった。内住するキリストの光と愛と力は、弟子たちから輝き出て、それを見る人々の目を見張らせた。

キリストは、ペテロが主を弁護して語ることばにご自身の印を押された。この弟子のすぐわきに、説得力のある証人として、奇跡的にいやされた男が立った。数時間前まで無力で歩けない者であったが、今、健全な体にかえったこの男の容貌は、ペテロの言葉に対する重要な証拠となった。祭司や役人たちは沈黙した。彼らはペテロの供述に論駁できなかったが、それでもなお、弟子たちの教えを中止させようと決めた。

キリストの最高の奇跡――ラザロのよみがえり――は、世界からイエスとその驚くべきみわざを除こうとする祭司たちの決定を、すでに変更できないものにした。それが民衆に対する祭司たちの影響を、速やかに打ちこわしつつあったからである。こうして、彼らはイエスを十字架にかけてしまった。しかし、今やここに、主のみ名によって奇跡を行い、イエスが教えられた真理を宣伝するのを、祭司たちが中止させることができなかったという、確かな証拠があった。歩けない人のいやしと使徒たちの説教は、すでに、エルサレムを興奮の渦中に巻き込んでいた。

祭司や役人たちは当惑をかくすために、使徒たちを連れ [1381]

去らせるように命じた。自分たちだけで協議しようと思ったからである。その男がいやされたことを否定するのは無益だということに、彼らは全員同意した。彼らは、できればその奇跡を偽りで包みかくしてしまいたいと思った。しかし、これは不可能であった。その奇跡は白昼、群衆の前で行われて、すでに何千人もの人々がそれを知っていたからである。祭司や役人たちは、弟子たちの働きをやめさせなければならないと思った。そうしなければ、イエスが多くの信者を獲得してしまうであろう。そうなると、自分たちが神のみ子の殺害者という罪を着せられることになり、自分たちの恥辱になるであろう。

しかし、祭司たちは、弟子たちを抹殺したいと願ったにもかかわらず、もし弟子たちが依然としてイエスの名によって語ったり、伝道を続けるならば、最も過酷な罰を与えるとおどす以外どうしようもなかった。彼らはサンヒドリンの議会にもういちど弟子たちを呼び出して、イエスの名によって語ったり、教えたりしないように命じた。しかし、ペテロとヨハネはこれに対して言った、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」。

祭司たちはこの2人が神の召しに確固たる忠誠を示しているという理由で、思うままに2人を罰したいと思った。しかし、彼らは民衆を恐れた。「みんなの者が、この出来事のために、神をあがめていた」からである。そこで、弟子たちは何度もおどされ、きびしくいましめられて、釈放された。

ペテロとヨハネが捕らわれていた時、他の弟子たちはユダヤ人たちの悪意を知っていたので、キリストに示した残酷なことをまた繰り返すのではないかと恐れて、この兄弟たちのためにひたすら祈っていた。2人の使徒たちはゆるされるとすぐ、あとの弟子たちを探し、彼らに尋問の結果を報告した。信徒たちは非常に喜んだ。一同は、「口をそろえて、神にむかい声をあげて言った、『天と地と海と、その中のすべてのものとの造りぬしなる主よ。あなたは、わたしたちの先祖、あなたの僕ダビデの口をとおして、聖霊によって、こう仰せになりました、「なぜ、異邦人らは、騒ぎ立ち、もろもろの民は、むなしいことを図り、地上の

王たちは、立ちかまえ、支配者たちは、党を組んで、主とそのキリストとに逆らったのか」。まことに、ヘロデとポンテオ・ピラトとは、異邦人らやイスラエルの民と一緒になって、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、み手とみ旨とによって、あらかじめ定められていたことを、なし遂げたのです。主よ、いま、彼らの脅迫に目をとめ、僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい。そしてみ手を伸ばしていやしをなし、聖なる僕イエスの名によって、しるしと奇跡とを行わせて下さい』」。

弟子たちは、キリストが地上におられた時に遭遇された、断固たる反対に自分たちも遭うことを知ったので、彼らの任命された働きの上に大きな力がさずけられるように祈った。心を合わせてささげられた信仰の祈りは天にのぼり、その答えがかえってきた。彼らの集まっていた場所が揺れ動き、彼らは新たに聖霊をさずけられた。彼らの心に勇気がみなぎり、再びエルサレムへ神のみことばを伝えに出て行った。「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをし」、神は彼らの努力に、信じられないほどの祝福をお与えになった。

イエスの名をこれ以上語ってはならないという命令に対して、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい」と答えて、弟子たちは恐れなくその主義に立った。これは宗教改革の時代に、福音を信じる者たちが戦い抜いて守ったものと同じである。1529年にドイツの諸侯がシュパイエル会議に召集された時、宗教の自由を抑圧し、それ以後、改革派の教理の宣伝を厳禁する皇帝の勅令が出された。この世界の希望はまさに抹殺されようとしていた。諸侯はその勅令を受け入れるだろうか。福音の光は、今もなお暗黒の中にいる多くの人々から閉ざされてよいだろうか。世界の大問題が危機にひんしていた。そ こで改革派の信仰を [1382]
受け入れていた人々が集まり、「この勅令を拒否しよう。良心の問題について多数決ということは言えないはずだ」と満場一致で可決した（ドービニエー著「宗教改革史」第13巻・5章）。

今日、われわれはこの原則を確固として支持しなければならない。その時以来、幾世紀にわたり、福音教会の創設

者や神の証人たちが高くかかげてきた真理と宗教の自由の旗は、この最後の争闘においてわれわれの手にゆだねられている。この大いなる賜物の責任は、聖書の知識をさずけられた人々の上にかかっている。われわれは、聖書のことばを最高の権威として受け入れる。われわれは人間の政府を神が定められたものとして認め、合法的な範囲内でそれに従うことを、聖なる義務として教えなければならない。しかし、その要求が神のご要求と矛盾する時は、人間よりむしろ神に従わねばならない。神のみことばをすべての人間の法律にまさるものとして認めねばならない。「教会がこう言う」、あるいは「国がこう言う」ということのために、「主がこう言われる」ということを放棄してはならない。キリストの王冠は、この世の主権者の王冠より高くかかげられねばならない。

われわれは、権威を無視するようには求められていない。法と秩序に反対する者と思われるようなことをしゃべったとして証録されることがないように、話す言葉でも、書く言葉でも、注意深く気をつけなければならない。われわれの道を不必要に閉ざすようなことを、言ったりしたりしてはならない。われわれはキリストのみ名によって前進し、ゆだねられた真理を擁護しなければならない。もしこの働きを人々から禁じられるような場合には、使徒たちと同じように、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」と答えることができる。

第7章　偽善が招いた死

本章は使徒行伝4：325：11に基づく

弟子たちがエルサレムで福音の真理を宣べ伝えた時、神は彼らのことばに有利な証拠を与えられ、民衆はそれを信じた。こうした初期の信者たちの多くは、ユダヤ人の激しい頑迷さのために、たちどころに家族や友人の縁を切られてしまったので、彼らのために食物や宿を心配する必要があった。

記録によると「彼らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった」と書かれており、彼らの必要がいかに満たされたかを伝えている。金銭や持ちものに恵まれた信者たちは、危急の場合に喜んでこれを提供した。彼らは自分たちの家屋や地所を売り、その代金を持ってきて、使徒たちの足もとに置いた。「そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた」。

信者たちのこのような寛容さは、聖霊が注がれた結果であった。福音を受け入れた人々はみな、「心を1つにし思いを1つにし」た。彼らの心はただ1つの共通な関心事に支配されていた。それは彼らに委託された伝道事業を成功させることであった。彼らの生活に、貪欲がはいり込む余地はなかった。兄弟たちへの愛や自分たちが引き受けた働きに対する愛は、金銭や所有物に対する愛よりも強かった。彼らは地上の富よりも人の魂を高く証価していることを、実際の働きで証拠だてた。

神のみ霊が生活を支配する時には、常にこのようなことが起こるのである。心がキリストの愛で満たされている人々は、ご自身の貧しさによってわれわれが富むものとなるように、われわれのために貧しくなられたキリストの模範に従う。金銭、時間、感化力など、神のみ手からさずけられた賜物すべてを、彼らはただ福音のわざを進展させる手段として重んじるのである。初代教会ではそうであった。そして、今日も、教会の中で、教会員たちが聖霊の力

に導かれて、世俗的な事柄への愛着を捨て、自分たちの同胞に福音を伝えるために、喜んで犠牲を払うことが見られ
[1383] るならば、宣べ伝えられる真理は、聞くものの心を力強く動かすであろう。

信者たちが示した博愛の模範とひどく違った対照をなして、アナニヤとサッピラの行為があった。霊感を受けてしるされた記録を見ると、この2人の経験は初代教会史上に汚点を残したことがわかる。みずから弟子だと名乗っていたこの2人は、他の者たちと共に、使徒たちの説く福音を聞く特権にあずかっていた。彼らは使徒たちが祈り終えたとき「その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ」たその場所に他の信者たちと共にいたのである（使徒行伝4：31）。深い確信がその場にいたすべての者にやどり、直接に神のみ霊の感化を受けたアナニヤとサッピラは、ある資産を売った収益を神にささげる誓いを立てていた。

後になってアナニヤとサッピラは欲深い気持ちに負けて、聖霊を嘆かせた。2人は約束を後悔しはじめた。そしてキリストのみわざのために立派なことをしたいという願いで心を燃やしてくれた、新鮮な尊い感動を失った。彼らは早まったことをしたと思った。だから自分たちの決心を考え直さなければならない。2人はそのことを話し合い、自分たちの誓約を果たさないことに決めた。しかし彼らは、自分たちよりも貧しい兄弟たちの必要を満たすために、自己の資産を手放した人々が信者のあいだで高く評価されているのを見て、厳粛に神にささげていたものを惜しむ自分たちの利己的な心を、人々に見すかされることを恥じ、考え抜いた末、自分たちの資産を売ることに決めた。そして彼らはその収益を全部共同資金にささげたふりをして、その実、売り上げの大部分を手放さなかった。このようにして2人は、共同の蓄えから生活を保証され、同時に兄弟たちからも高く証価されると思っていた。

神は偽善と虚偽を憎まれる。アナニヤとサッピラは神との取引で詐欺行為を行った。彼らは聖霊を欺いたために、その罪はたちどころに厳しく罰せられた。アナニヤが献金を携えてきたとき、ペテロが言った。「『アナニヤよ、どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を欺き、地所の代金をごまかしたのか。売らずに残しておけ

ば、あなたのものであり、売ってしまっても、あなたの自由になったはずではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人を欺いたのではなくて、神を欺いたのだ』。アナニヤはこの言葉を聞いているうちに、倒れて息が絶えた。このことを伝え聞いた人々は、みな非常なおそれを感じた」。

「売らずに残しておけば、あなたのもの……になったはずではないか」とペテロは言った。アナニヤは、不当な力が加えられたために、強制されて自分の財産をみんなの益となるようにささげたのではない。彼は自分で選択し、行動したのである。しかし弟子たちを欺こうとして、神を欺いていた。

「3時間ばかりたってから、たまたま彼の妻が、この出来事を知らずに、はいってきた。そこで、ペテロが彼女にむかって言った、『あの地所は、これこれの値段で売ったのか。そのとおりか』。彼女は『そうです、その値段です』と答えた。ペテロは言った、『あなたがたふたりが、心を合わせて主の御霊を試みるとは、何事であるか。見よ、あなたの夫を葬った人たちの足が、そこの門口にきている。あなたも運び出されるであろう』。すると女は、たちまち彼の足もとに倒れて、息が絶えた。そこに若者たちがはいってきて、女が死んでしまっているのを見、それを運び出してその夫のそばに葬った。教会全体ならびにこれを伝え聞いた人たちは、みな非常なおそれを感じた」。

神の無限の英知は、この注目すべき神の怒りの顕示が、若い教会を道徳的な堕落から守るために必要であったことを見通しておられた。信徒たちは急速に増えていった。この信徒数の急増するなかで、神に仕えることを表明しながら、富を礼賛している男女が加えられていたとすれば、教会は危機に陥ったであろう。この刑罰は、人は神を欺くことができない、また、神は心にかくされている罪を見通しになられて、欺かれることがないことを立証した。この刑罰は教会員を虚偽や偽善に陥らぬよう導き、神のものを盗まぬよう用心させるために、教会に与えた警告としてもくろまれたのである。 [1384]

神が貪欲や詐欺や偽善を憎むことを示されたこの実例は、初代の教会ばかりでなく、後に続くすべての時代に対して与えられた危険信号であった。アナニヤとサッピラが

最初にいだいたのは貪欲であった。彼らは神に約束したものの一部をとっておきたいと望んだために、詐欺と偽善に陥ったのである。

神はご自分の民の働きとささげものによって、福音を宣伝してこられた。任意のささげものと什一が主のみ事業の財源である。神は人におゆだねになった資源から特定の部分、すなわち什一を要求なさっている。神は人がこれ以上ささげるかささげないかということを、人の自由にまかせておられる。しかし聖霊の感化を受けて、ある金額をささげる誓いを立てたら、誓った者はもはやささげた部分に対する権利を持たない。人に対するこのような種類の約束は、義務と見なされるであろう。ましてや神に対する約束は義務以上のものとならないだろうか。良心の法廷において結ばれた約束は、人々との契約書より拘束力が弱いものだろうか。

神の光がひときわ明るく、力強く人の心を照らしている時、いつもの利己心は手をゆるめて、神のためにささげる気持ちになる。しかしその時に結ばれた約束が、サタンの側の反対を受けずに果たされると思ってはならない。サタンは救い主の王国がこの地上に築き上げられることを喜ばない。彼は誓われた誓約が多すぎるのではないか、財産を得ようとする努力や、家族の希望を満足させようとする努力に支障をきたすのではないかとほのめかす。

人間に財産をお恵みになるのは神であって、これをなさるのは、彼らがみ事業進展のためにつくすことができるためである。神は日光や雨を送ってくださる。また、植物を豊かに生長させてくださる。神は健康を与えてくださり、目的を果たす能力を与えてくださる。祝福はすべて神の恵み深いみ手から与えられる。その代わりに神は、男にも女にも財産の一部を什一及びその他の献金、すなわち感謝のささげ物、任意のささげ物、また罪のためのささげ物として神に返し、感謝の気持ちを表すよう求められる。神の定めたこの計画にしたがって、あらゆる所得の十分の一や惜しみないささげ物など、資産が倉に蓄えられるならば、主のみわざは豊かに進展するのである。

しかし人間の心はわがままからかたくなになり、アナニヤやサッピラのように神からの要求を満たしているふりをしながら、財産の一部を隠したい誘惑にかられる。多くの

人々は自分を満足させるためには惜しみなく金銭を使う。男も女も自分の都合を考えて、自分たちの好みを満たしているが、神へのささげ物は、しぶしぶと、切りつめて持ってくる。彼らは神の財産が使用された明細書を神がいずれ要求されることや、神がアナニヤやサッピラのささげ物をお受けにならなかったように、彼らが倉に携えてきたわずかなものをお受けにならないことを忘れている。

これらの偽証者に課した厳しい罰から、神はあらゆる偽善や詐欺をどれほど深く憎み、軽蔑しておられるかをわれわれに学ばせようとされたのである。アナニヤとサッピラはすべてをささげたふりをして聖霊を欺いた。その結果彼らはこの世のいのちと、来るべき世におけるいのちを失った。彼らを罰せられた同じ神が、今日、すべての虚偽をとがめられる。偽ることは神にとって忌まわしい行為である。「汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は」聖なる都に「決してはいれない」と神は言われる（黙示録21：27）。真実を語るのにいいかげんであったり、あいまいであってはいけない。真実を語ることが生活の一部となるようにしよう。真実をもてあそび、自分の都合のよいように当てはめて偽ることは、信仰の破滅である。「立って真理の帯を腰にしめ」なさい（エペソ6：14）。事実でないことを語る人は、自分の魂を安売りするのである。彼のうそは、とっさの場合の役に立つように見えるかもしれない。こうして、彼は正当なやり方では望めないような商売の発展を期待するかもしれない。しかし最後には、だれも信頼できなくなる。自分がうそつきであるために、ほかの人の言葉を信用できないのである。

アナニヤとサッピラの場合、神に対する欺瞞の罪 は速やかに罰せられた。同様の罪は教会の後の歴史の中でもしばしば繰り返された。今日でも多くの人々により同じ罪が犯されている。しかし、たとえそれに対する神のご立腹が目に見えるようにあらわされなくとも、使徒の時代と同じように今日も神の御目にそれは憎むべきものである。警告は与えられてきた。神は明らかにこの罪を忌みきらわれた。偽善と強欲に身をやつす者は、みずから自分の魂を破壊していることを知るようになるであろう。 [1385]

第8章　ユダヤ議会での証言

本章は使徒行伝5：1242に基づく

世界に望みと救いをもたらしたのは、あの恥辱と拷問の道具、十字架であった。弟子たちは富もなく、地位の低い人たちにすぎなかった。また、神のみことばのほかに武器もなかった。それでも彼らはキリストの力に満たされて、馬槽と十字架の驚くべき物語を語り、すべての反対に勝利するために出て行った。この世の名誉や承認がなくとも、彼らは信仰の英雄であった。彼らの唇から世界を揺さぶる生き生きとした聖なることばがほとばしり出た。

エルサレムは最も偏見の根深いところで、また、悪人として十字架にかけられたキリストについて、最も混乱した考えがひろまっていたところであったが、弟子たちはその町で、キリストのみわざと使命、十字架、復活、また昇天をユダヤ人の前に示し、命のことばを大胆に語り続けた。祭司や役人たちは使徒たちの明瞭で大胆なあかしを聞いて驚いた。実に、よみがえられた救い主の力が弟子たちの上にくだっていて、彼らの働きにしるしや奇跡が伴い、信者の数は日増しに増えていった。弟子たちが通る町では人々が病人を大通りに運び出し、「寝台や寝床の上に置いて、ペテロが通るとき、彼の影なりと、そのうちのだれかにかかるようにしたほどであった」。ここにはまた、汚れた霊に苦しめられている人たちも連れてこられた。群衆はその人々のまわりに集まり、いやされた人々は高らかに神をさんびして、救い主のみ名をあがめた。

祭司や役人たちは、キリストが自分たち以上に賞揚されていることを知った。復活を信じないサドカイ派の人たちは、使徒たちがキリストのよみがえられたことを断言するのを聞いて腹を立て、もし使徒たちがそのまま、よみがえられた救い主のことを宣べ伝え、その名によって奇跡を行うとすれば、復活はないと説く教理を誰も信じなくなり、自分たち一派はすぐに絶滅してしまうだろうと考えた。ま

たパリサイ人は使徒の教えがユダヤの儀式を傷つけ、犠牲のささげ物を無効とする傾向にあると言って怒った。

この新しい教えを抑えようとしたこれまでの努力は、すべてむだであった。こうなると、サドカイ人やパリサイ人は、弟子たちの働きがイエスの死に関しては、自分たちに罪があることを証明することになるので、その働きをやめさせようと決めた。祭司たちはひどく憤慨し、ペテロとヨハネに暴行を加えて、留置場にほうり込んだ。

ユダヤの国の指導者たちは、選ばれた民に対する神の御目的の成就にはなはだしく失敗した。主から真理の受託者とされていた人々は、その義務に不忠実だったことを証明した。そこで神は、みわざを行うために他の人々をお選びになった。これらの指導者たちは、彼らが大切にいだいていた教えを放棄していく者たちに向かって、何もわからずに、居丈高になって、義憤だとして、怒りをぶちまけた。彼らは自分たちがみことばを正しく理解しないで、聖書を誤解したり、誤用していた可能性のあることすら認めようとしなかった。彼らはまるで理性を失った人々のように行動した。中には、たかが漁師にしかすぎない者もいるというのに、これらの教師どもが、われわれが民衆に教えていた教義と矛盾する意見を公開する何の権利を持つというのかと、彼らは言った。彼らは、こんな意見を教えることをやめさせなければならない と決意して、教えを説く者たち [1386]
を投獄したのである。

弟子たちはこのような扱いを受けても動じることなく、落胆もしなかった。聖霊は彼らにキリストの語られたことばを思い出させた、「僕はその主人にまさるものではない。……もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう。彼らはわたしの名のゆえに、あなたがたに対してすべてそれらのことをするであろう。それは、わたしをつかわされたかたを彼らが知らないからである」。「人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分たちは神に仕えているのだと思う時が来るであろう」。「わたしがあなたがたにこれらのことを言ったのは、彼らの時がきた場合、わたしが彼ら

について言ったことを、思い起させるためである」（ヨハネ15：20、21、16：2、4）。

宇宙の偉大な支配者、天の神は、弟子たちの投獄の問題をご自身の手の中に引き受けておられた。というのは、人々がみわざに反対して立ち向かってきたからである。夜になって主のみ使いが獄の戸を開き、そして弟子たちに言った、「さあ行きなさい。そして、宮の庭に立ち、この命の言葉を漏れなく、人々に語りなさい」。この命令はユダヤの役人たちが与えた命令に真っ向から反対するものであった。しかし弟子たちは、行政官たちに相談して、許可を受けないうちは、そうするわけにいかないと言ったであろうか。そうではない。「行きなさい」と神が言われた時、彼らはそれに従った。「彼らは……夜明けごろ宮にはいって教えはじめた」。

ペテロとヨハネが信者たちの前にあらわれて、天使が獄の番人たちの見張りをくぐって自分たちを助け出し、中断している働きに再び取りかかるように命じたいきさつを語ると、兄弟たちは大いに驚き、また、喜んだ。

とかくするうちに、大祭司やその仲間の者たちが「議会とイスラエル人の長老一同とを召集し」た。祭司や役人たちは弟子たちを暴動罪で告発し、アナニヤとサッピラを殺し、共謀して祭司たちの権利を剥奪したかどで告訴することに決めた。彼らは暴徒を扇動して事態を解決させ、暴徒がイエスにしたように弟子たちにもしてくれることを望んだ。彼らは、キリストの教えを受け入れなかった多くの人々が、ユダヤ当局の専横な支配をきらって、なんらかの変化を切望しているのに気づいていた。祭司たちは、もしこれらの不満をいだいている者たちが使徒たちの教える真理を受け入れ、イエスをメシヤとして認めることになれば、全民衆の怒りは、宗教の指導者らに向けられ、キリストを殺害した責任をとらされるのではないかと恐れた。そこで彼らは、これを防止するために強硬な手段を講じることにした。

祭司たちが囚人を引き出してくるよう使いを差し向けると、獄の戸は固く錠がかけられ、番人も部署についていながら、囚人が中にいないという報告が来て、彼らは非常に驚いた。

やがて、驚くべき報告が入ってきた、「『行ってごらんなさい。あなたがたが獄に入れたあの人たちが、宮の庭に立って、民衆を教えています』。そこで宮守がしらが、下役どもと一緒に出かけて行って、使徒たちを連れてきた。しかし、人々に石で打ち殺されるのを恐れて、手荒なことは」しなかった。

使徒たちは獄屋から奇跡的に救出されたとはいえ、取り調べと刑罰から免れたわけではなかった。キリストは、弟子たちと共におられたとき、「あなたがたは自分で気をつけていなさい。あなたがたは、わたしのために、衆議所に引きわたされ」るであろう、と言われた（マルコ13：9）。神は天使を送って彼らを救出することにより、ご自分の愛のしるしと、ご臨在の確証をお与えになった。こんどは彼らが、信べ伝える福音をさずけてくださった神のために苦しむ番であった。

預言者や使徒たちの歴史には、神に忠誠をつくした立派な模範がたくさんある。キリストの証人たちは、神のご命令にそむくより投獄や拷問や死に耐えてきた。ペテロとヨハネが残した記録は、福音の摂理の賜物の中で、他に劣らず英雄的である。この2人を 滅ぼそうと躍起になっていた人々の前に、2度目に立った時も、2人の言葉や態度には何の恐れもためらいも認めることができなかった。そして、大祭司が、「あの名を使って教えてはならないと、きびしく命じておいたではないか。それだのに、なんという事だ。エルサレム中にあなたがたの教えを、はんらんさせている。あなたがたは確かに、あの人の血の責任をわたしたちに負わせようと、たくらんでいるのだ」と言った時、ペテロは、「人間に従うよりは、神に従うべきである」と答えた。獄から彼らを救い出して、宮で教えるようにと命じたのは、天からのみ使いであった。彼らは天使の指示に従って、神のご命令に従っていたのである。これこそ、彼らがどんな値を払ってでも、やり通さなければならないことである。 [1387]

それから霊感を与えるみ霊が弟子たちの上にくだった。訴えられた者が訴える者となり、議会を召集した人々をキリストの殺害者として告訴した。「わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせ、そして、イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆる

しを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自身の右に上げられたのである。わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまた、その証人である」とペテロは強調した。

これを聞いたユダヤ人たちは、激しい怒りのあまり、自分たちで勝手に制裁を加えて、これ以上の裁判を行わず、ローマの役人たちの許可も得ずに、彼らを殺してしまおうと思った。すでにキリストの血を流す罪を犯していた彼らは、今度は主の弟子たちの血で彼らの手を汚すことに躍起になった。

議会において、弟子たちの語る言葉の中に神のみ声を認めた者が1人いた。それは評判のよいパリサイ人ガマリエルで、学識があり、高い地位についていた。彼の明晰な知性は、祭司たちのもくろんでいる乱暴な手段が恐ろしい結果を招くことを見抜いた出席している人々に語る前に、彼は囚人たちを外に連れ出すように頼んだ。彼は処理しなければならない問題のかなめをよく知っていた。また、キリストを死につけた人々が、目的遂行のためには手段を選ばないことも知っていた。

それから彼は、非常に慎重に、落ち着いて言った、「イスラエルの諸君、あの人たちをどう扱うか、よく気をつけるがよい。先ごろ、チゥダが起って、自分を何か偉い者のように言いふらしたため、彼に従った男の数が、400人ほどもあったが、結局、彼は殺されてしまい、従った者もみな四散して、全く跡方もなくなっている。そののち、人口調査の時に、ガラリヤ人ユダが民衆を率いて反乱を起したが、この人も滅び、従った者もみな散らされてしまった。そこで、この際、諸君に申し上げる。あの人たちから手を引いて、そのなすままにしておきなさい。その企てや、しわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできまい。まかり違えば、諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない」。

祭司たちはガマリエルの考えが正当なことを知って、しかたなく彼に同意した。しかし偏見や憎悪をおさえることができず、弟子たちをむち打ち、今後イエスの名によって語るなら2度と命はないと言いわたして、しぶしぶ釈放した。「使徒たちは、御名のために恥を加えられるに足る者

とされたことを喜びながら、議会から出てきた。そして、毎日、宮や家で、イエスがキリストであることを、引きつづき教えたり宣べ伝えたりした」。

キリストは十字架にかかる少し前に、平安の遺産を弟子たちに残された。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」と主は言われた（ヨハネ14：27）。この平安は世と一致することによってくる平安ではない。キリストは悪と妥協することによって平安を買いとられたことはない。キリストが弟子たちに残されたのは、うわべの平安ではなく、心の平安であり、反目や争いの中にも絶えずキリストの証人と共にとどまるものであった。

キリストはご自身についてこう言われた、「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和 ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである」（マタイ10：34）。平和の君、主は、なお、分裂を引き起こす者であられた。喜ばしい知らせを伝えて、人の子らの心に希望と喜びを起こさせるために来られた主は、人々の心の内奥を燃やし、激しい情熱を起こす戦いを開始された。そして主は従う者たちに警告しておられる、「あなたがたは、この世ではなやみがある」。「人々はあなたがたに手をかけて迫害をし、会堂や獄に引き渡し、わたしの名のゆえに王や総督の前にひっぱって行くであろう」。「しかし、あなたがたは両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られるであろう。また、あなたがたの中で殺されるものもあろう」（ヨハネ16：33、ルカ21：12、16）。 [1388]

この預言は著しく成就した。サタンは人々の心をそそのかし、イエスに従う者たちを思いつくかぎりの侮辱、非難、残酷行為に陥れた。これは再び、著しく繰り返されるであろう。この世的な心は、いまだに神の律法に敵対し、その命令に従わないからである。今日の世界は使徒の時代と同様、キリストの原則に少しも調和していない。「彼を十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と囃し立てた同じ憎しみや、弟子たちを迫害に陥れた同じ憎しみは、今もなお、不従順な子らの心に働いている。暗黒時代に人々を牢獄や流刑や死に渡し、宗教裁判のひどい拷問を思いつき、

聖バーソロミューの大虐殺を計画して執行し、またスミスフィールドの火責めをあおったその同じ精神が、改心されていない人々の心の中で、今も悪意をいだいて活発に働いている。真理の歴史は常に善悪間の闘争の記録であった。福音の宣伝は、この世で反対と危険と損失と受難に直面しながらも常に先へと伝えられてきた。

過去において、キリストのために迫害を受けてきた人々が持っていた力は何であったのか。それは、神との一致、聖霊との一致、キリストとの一致であった。多くの者は、そしりと迫害によって、地上の友から引き離されたが、キリストの愛からは引き離されていなかった。魂が、あらしに悩まされ、真理のためにそしりを受ける時ほど、救い主の愛を深く受ける時はない。「わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」とキリストは言われた（ヨハネ14：21）。信者が真理のためにこの地上の法廷に立つ時、キリストは彼のそばにお立ちになる。彼が牢獄の中に閉じこめられる時、キリストは彼にあらわれてその愛によって彼の心を励まされる。彼がキリストのために死刑を受ける時、救い主は、人々は肉体を殺すことができても、魂を損なうことはできないのだと、彼に言われる。「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」（ヨハネ16：33、イザヤ41：10）。

「主に信頼する者は、動かされることなくて、とこしえにあるシオンの山のようである。山々がエルサレムを囲んでいるように、主は今からとこしえにその民を囲まれる。」「彼らのいのちを、しえたげと暴力とからあがなう。彼らの血は彼の目に尊い」（詩篇125：1、2、72：14）。

「万軍の主は彼らを守られる……その日、彼らの神、主は、彼らを救い、その民を羊のように養われる。彼らは冠の玉のように、その地に輝く」（ゼカリヤ9：15、16）。

第9章　組織と指導者

本章は使徒行伝6：17に基づく

「そのころ、弟子の数がふえてくるにつれて、ギリシャ語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、自分たちのやもめらが、日々の配給で、おろそかにされがちだと、苦情を申し立てた」。

初代教会は、多くの階級や、さまざまの異なる国籍の人々で構成されていた。ペンテコステ（五旬節）の聖霊降下の時にエルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいた」（使徒行伝2：5）。エルサレムに集まってきたヘブル人の信仰をいだく者たちの中に、ふつうギリシャ人として知られている人々がいた。彼らとパレスチナのユダヤ人の間には長い間、不信があり、敵意さえ生じていた。 [1389]

使徒たちの働きの結果改宗した人々の心は、クリスチャンの愛によって和らげられ、1つになった。以前には偏見をいだいていたにもかかわらず、誰もが互いに仲よくなった。サタンはこの一致が継続するかぎり、福音真理の進展を阻むことができないことを知っていたので、人々の以前の考えかたを利用して、それによって教会に不和の分子をもたらそうとした。

こうして、弟子たちの数が増していくにつれて、敵は、以前からしばしば信仰を持つ兄弟たちをねたましい思いで見つめ、霊的指導者たちのあらさがしをしていたことのある者たちの心に、疑いの気持ちをかき起こすことに成功した。そして「ギリシャ語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して……苦情を申し立てた」。つぶやきの原因は、ギリシャ語を使うやもめたちが日々の配給でおろそかにされがちだと、苦情を申し立てたことにあった。どんな不平等でも福音の精神に反するのは確かなのだが、その主張のかげですでにサタンは疑いの気持ちをかきたてることに成功していた。いまや、不満を引き起こ

すすべてのきっかけを除くために、速やかな処置を講じなければならない。さもないと敵の努力が実って、信者たちの間に分裂を招くことになる。

イエスの弟子たちはすでに、彼らの信仰経験における1つの危機に直面していた。聖霊の力により、固く一致して働いていた使徒たちの賢明な指導のもとに、福音の使命者にゆだねられた事業は速やかに進展していた。教会は絶えず拡張していた。信者の数が増えるにつれて、責任のある人々の重荷は重くなる一方だった。人が1人で、いや、仲間が数人集まっても、彼らだけでこれらの重荷を担っていこうとすれば、教会の将来の繁栄は危うくなるであろう。そこで教会の初期のころ、わずかな人々が忠実に負ってきた責任の分担が、これからは必要となった。今や使徒たちはそれまで自分たちだけでささえてきた責任の一部を、他の人たちに任せることによって、教会内の組織を完全にする大切な手段を講じなければならなかった。

聖霊に導かれた使徒たちは、信者を集めて、教会のあらゆる活動力をさらに組織だてる計画のあらましを話した。教会を監督している霊的指導者らは、貧しい人々に配給するというような仕事をのがれて、福音宣伝事業の前進に専念すべき時がきたのだと、彼らは説明した。「そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち7人を捜し出してほしい。その人たちにこの仕事をまかせ、わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることにしよう」と彼らは言った。この提案がきかれ、選出された7人の上に手が置かれて、祈りがささげられ、彼らは厳粛に執事としての務めに任命された。

この特別な仕事を監督するために7人が任命されたことは、教会に大きな祝福となった。この役員たちは教会の全般的な財政面だけでなく、個人の必要を慎重に考慮した。そしてその賢明な管理と敬虔な模範によって、教会の各方面の利害関係を統一して全体にまとめる上に、共労者たちの大切な助けとなった。

この方法が神のみむねにかなっていたことは、すぐによい結果があらわれたことでわかる。「神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった」。この魂の収穫は、使徒たちがいっそう自由に活動で

きたことと、7人の執事が熱意と力を示したおかげであった。これらの兄弟たちは、貧しい人々の必要をかえりみるという特殊な務めをゆだねられたといっても、信仰の教えを説かないでよいわけではなかった。それどころか、彼らは他の人々に真理を教える十分な資格があり、実際熱心にこの働きに携わって成功をおさめたのである。

初代教会には、みわざを絶えず拡張する仕事がゆだねられていた。それは、キリストへの奉仕に進んで献身する正直な人々のいるところには、どこにでも光と祝福の中心を設けることであった。福音宣伝の範囲は世界的なものでなければならなかった。十字架の使命者たちはクリスチャンの一致のきずなで結ばれ、こうして彼らが、神にあってキリストと1つであるということを世に示さないかぎり、彼らの大切な使命を達成することは望めなかった。彼らの指導者である主は、み父に、「わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが1つであるように、彼らも1つになるためであります」とお祈りにならなかっただろうか。また、弟子たちについて「世は彼らを憎みました……彼らも世のものではないからです」と言われなかっただろうか。「彼らが完全に1つとなるため」に、「あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるため」にみ父に熱心に求められなかっただろうか（ヨハネ17：11、14、23、21）。彼らの霊的生活と力は、福音を伝える使命をゆだねて下さったお方と、いかに親しくつながっているかにかかっているのである。 [1390]

弟子たちは、キリストにつながっていた時にのみ、聖霊の力を受けて、天使たちの協力を期待することができた。このような天来の力の助けを受けて、彼らは世に対して共同戦線をはることができ、また彼らが暗黒の力にたえまなく立ち向かうことを強いられている戦いにおいて、勝利することができた。弟子たちがたえず結束して働いているかぎり、天使たちは彼らを先導し、道を開くのである。そして人々の心は真理を受け入れる準備をし、多くの者がキリストへと導かれる。彼らが結束しているかぎり、教会は「月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のよう」に前進したのである（雅歌6：10）。何ものも教会の前進に逆らうことはできなかった。教会は

この世に福音を宣伝する天来の使命を立派に果たし、勝利から勝利へ進むのである。

エルサレムの教会の組織は、真理の使者が改宗者を福音に導くところではどこででも、教会組織の型となるべきであった。教会全体の監督の責任をゆだねられたものは、神の教会の上に立って尊大にふるまってはならない。かえって、賢明な羊飼いとして「神の羊の群れを牧し……群れの模範となるべきであ」った（ペテロ5：2、3）。また執事は「みたまと知恵とに満ちた、評判のよい人」でなければならなかった。これらの人々は一致してその地位を正しく保ち、かたい決意のもとに任務を遂行しなければならなかった。こうして彼らの感化のもとに教会全体は一致した。

初代教会の歴史において、のちに、世界の各地で信者たちの多くのグループによって教会がつくられたとき、秩序と一致した行動とが保たれるように、教会の組織がいっそう完成された。教会員はみな自分の立場を尽くすようにすすめられた。誰でもみな、自分にゆだねられているタラントを賢明に用いなければならなかった。中には聖霊によって特別な賜物をさずけられている者もあった。「第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者」である（コリント12：28）。しかしこれらすべての種類の働き人は、一致して働かなければならなかった。

「霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。務は種々あるが、主は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れを賜わっているのは全体の益になるためである。すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、1つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。すべてこれらのものは、1つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。からだが1つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体

が多くあっても、からだは1つであるように、キリストの場合も同様である」（コリント12：412）。 [1391]

地上の神の教会において、指導者として行動するように召されている人々に負わされている責任は、厳粛である。神権政治の時代に、モーセは重い責任を1人で負っていて、まもなくその重荷に疲れ果ててしまうだろうと思われた時、エテロから、その責任を賢く分担するようにと教えられた。「あなたは民のために神の前にいて、事件を神に述べなさい。あなたは彼らに定めと判決を教え、彼らの歩むべき道と、なすべき事を彼らに知らせなさい」とエテロは助言した。エテロはさらに、人を選び「1000人の長、100人の長、50人の長、10人の長としなさい」と勧めた。この人たちは「有能な人で、神を恐れ、誠実で不義の利を憎む人」でなければならなかった。彼らは「平素は.....民をさば」き、こうしてモーセの重荷を解き、気疲れとなる多くの小事件を神に献身している助力者たちが賢くさばいた。

教会で、神の摂理のもとに、重責を負う地位にいる人々の時間と力は、特別な知恵と幅の広い心を必要とする重大な問題を処理するために、費やされなければならない。ほかの人たちでも十分に処理できる取るに足りない問題の調停を、そのような人々が依頼されることは神のみむねではない。「大事件はすべてあなたの所に持ってこさせ、小事件はすべて彼らにさばかせなさい。こうしてあなたを身軽にし、あなたと共に彼らに、荷を負わせなさい。あなたが、もしこの事を行い、神もまたあなたに命じられるならば、あなたは耐えることができ、この民もまた、みな安んじてその所に帰ることができよう」とエテロはモーセに提案した。

この提案に従い、「モーセはすべてのイスラエルのうちから有能な人を選んで、民の上に長として立て、1000人の長、100人の長、50人の長、10人の長とした。平素は彼らが民をさばき、むずかしい事件はモーセに持ってきたが、小さい事件はすべて彼らみずからさばいた」（出エジプト18：1926）。

のちにモーセは、指導者としての責任を分担してもらうために70人の長老を選出したとき、彼の助力者として品位があり、正しい判断力を持ち、経験のある人を慎重に選んだ。これらの長老たちに按手礼をさずけるにあたり、モー

セは教会における賢明な指導者になるのにふさわしい資格を述べた。「兄弟たちの間の訴えを聞き、人とその兄弟、または寄留の他国人との間を、正しくさばかなければならない。あなたがたは、さばきをする時、人を片寄り見てはならない。小さい者にも大いなる者にも聞かなければならない。人の顔を恐れてはならない。さばきは神の事だからである」とモーセは言った（申命記1：16、17）。

ダビデ王はその治世の終わりにあたり、彼の時代に神のみわざに携わっていた人々に、厳粛な命令を下した。「イスラエルのすべての長官、すなわち部族の長、王に仕えた組の長、1000人の長、100人の長、王とその子たちのすべての財産および家畜のつかさ、宦官、有力者、勇士などをことごとくエルサレムに召し集め」て、「主の会衆なる全イスラエルの目の前およびわれわれの神の聞かれる所で」年老いた王は厳かに彼らに命じた。「あなたがたはその神、主のすべての戒めを守り、これを求めなさい」（歴代志上28：1、8）。

統率の責任ある地位につく者としてのソロモンに、ダビデは特別に命じた。「わが子ソロモンよ、あなたの父の神を知り、全き心をもって喜び勇んで彼に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いを悟られるからである。あなたがもし彼を求めるならば会うことができる。しかしあなたがもしかれを捨てるならば彼は長くあなたを捨てられるであろう。それであなたは慎みなさい。主はあなたを選ん」だ、「心を強くして」いなさい（歴代志上28：9、10）。

モーセやダビデの時代に、神の民の中で指導者を導いた同じ敬虔な正義の原則は、福音による律法の時代に、新たに組織された神の教会を監督する人々によっても、受け継がれなければならなかった。すべての教会において物事をきちんと整え、役員として働くにふさわしい人々を任命するにあたって、使徒たちは旧約聖書に述べられている、指導者の高い標準を固く守った。彼らは、教会で指導的な責
[1392] 任のある地位につく者は「神に仕える者として、責められる点がなく、わがままでなく、軽々しく怒らず、酒を好まず、乱暴でなく、利をむさぼらず、かえって、旅人をもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、信仰深く、自制する者であり、教にかなった信頼すべき言葉を守る人でなけれ

ばならない。それは、彼が健全な教によって人をさとし、また、反対者の誤りを指摘することができるためである」と主張した（テトス1：79）。

初代キリスト教会で維持されていた秩序によって、彼らはよく訓練され、神の武具を身につけた軍隊として、団結して前進することができた。信者の群れはひろく散らばっていたとはいえ、みな1つ体の部分であった。すべての者がお互いに一致協力して行動した。のちにアンテオケやその他のところで不和が起こったように、地方教会で不和が起こり、信者たちが自分たちで解決できなくなった時、そうした問題のために教会に分裂を生じないように、各地方教会から選ばれた代議員及び重責の地位にある使徒や長老たちから成る、信徒全体の総会に問題がもち出された。こうして遠く離れた場所の教会を攻撃しようとするサタンの努力に、全部の人たちが行動を1つにして対抗したので、教会を分裂させ、破壊しようとする敵の計画は妨げられた。

「神は無秩序の神ではなく、平和の神である。聖徒たちのすべての教会で行われているように.....」（コリント14：33）。神は昔と同じように今日も、教会の事柄を行うのに秩序と組織とを要求される。神はみわざに承認の印をおすことができるように、それが完璧に正確に進められることを望んでおられる。クリスチャンはクリスチャンと、教会は教会と一致し、人間の力が神の力と協力し、すべての働きが聖霊に従属し、神の恵みのよいおとずれを世に知らせるために、すべてのものが結合しなければならない。

第10章　ステパノの弁明

本章は使徒行伝6：515、7章に基づく

ステパノは7人の執事のうち第一のものであって、信心深く、幅の広い信仰を持った人であった。彼はユダヤ人であったが、ギリシャ語を話し、ギリシャ人の習慣や風習をよく知っていた。そこで彼は、ギリシャ系ユダヤ人の会堂で福音を宣べ伝える機会を見いだした。ステパノは実に活発にキリストのみわざのために働いて、大胆に信仰を表明した。博学なラビや律法学者たちは容易に勝利できるとうぬぼれて、人々の前で彼と議論した。しかし「彼は知恵と御霊とで語っていたので、それに対抗できなかった」。ステパノはみ霊の力で語っていただけでなく、預言の研究者でもあり、律法の内容を残らず学んでいたことが明らかであった。彼は自分の擁護する真理が正当であることを立派に論じて、反対者たちを完全に敗北させた。彼にこのみ約束が成就したのである、「だから、どう答弁しようかと、前もって考えておかないことに心を決めなさい。あなたの反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、わたしが授けるから」（ルカ21：14、15）。

ステパノの説教に伴う力を見た祭司や役人たちは、激しい憎悪の念でいっぱいになった。彼らはステパノが示した証拠に屈服するかわりに、彼を処刑して沈黙させることにした。彼らはローマ当局を買収して、事実の説明もなく事件を自分たちの手で処理するのを黙認してもらい、ユダヤのならわしどおりに囚人を審問し、刑を申し渡し、処刑したことが幾度かあった。ステパノの敵は、もう1度同じ方法をとっても自分たちの身の危険はないものと判断した。彼らは結果がどうであろうと、ともかくやってみることに決めたので、ステパノを捕らえてサンヒドリンの前に引き出し審問にかけた。

近隣の国々からきた博学なユダヤ人たちが、この囚人の議論を論駁するために召集された。タルソのサウロもその

場にいて、先頭に立ってステパノに反対した。彼はその事 [1393]
件を扱うのに、力強い雄弁とラビの論理を用い、ステパノは人心を惑わす危険千万な教えを説いていると民衆に思わせた。しかしサウロは、他の国々に福音をひろめるという神の目的を、十分に理解している人という以外に、ステパノの中に何も見いださなかった。

祭司や役人たちは、ステパノのけがれない穏やかな賢明さに打ち勝てなかったので、彼をみせしめのために懲らしめてやることにした。彼らはこうして自分たちの執念深い憎悪の念を満足させる一方、他のものが恐れてステパノの信仰を受け入れなくなるようにしようと思った。偽証を立てるためにやとわれた証人たちは、彼が聖所と律法とに逆らう冒瀆的な言葉を吐いたと語った。「『あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこわし、モーセがわたしたちに伝えた慣例を変えてしまうだろう』などと、彼が言うのを、わたしたちは聞きました」と証人たちは言った。

ステパノが冒瀆のかどで訴えられて、答弁するために裁判官と顔と顔を合わせて立ったとき、その顔からきよい光が輝き出た。そして、「議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた」。この光を見た人たちの多くはふるえおののいて思わず顔をおおったが、祭司たちのかたくなな不信と偏見はいっこうにゆるがなかった。

ステパノは訴因にまちがいがないかどうかをただされると、はっきりした感動的な声で抗弁しはじめ、その声は議場いっぱいに響きわたった。彼は会衆一同をうっとりさせるような言葉で、神の選民の歴史をつまびらかに語りはじめた。彼はユダヤの制度に通暁していることを示し、今やキリストを通して明らかにされたその制度の霊的な解釈を論述した。彼はメシヤについて預言したモーセの言葉を繰り返した。「神はわたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟たちの中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう」と。ステパノは神とユダヤ人の信仰に対する彼自身の忠誠を明らかにして、ユダヤ人たちが救いのために信頼していた律法が、イスラエル人を偶像崇拝から救うことができなかったことを教えた。彼はイエス・キリストをユダヤの歴史全体に結びつけた。彼はソロモンによって造られた神殿の建物について語り、ソロモンやイザヤのこと

ばを引用した。「しかし、いと高き者は、手で造った家の内にはお住みにならない。預言者が言っているとおりである、『主が仰せられる、どんな家をわたしのために建てるのか。わたしのいこいの場所は、どれか。天はわたしの王座、地はわたしの足台である。これは皆わたしの手が造ったものではないか』」。

ステパノがここまで語ってきたとき、人々は騒然となった。彼が預言にキリストを結びつけ、また、神殿について自分の意見を語ると、祭司は恐怖にとりつかれたふりをして、衣を裂いた。この行為はステパノにとって死が間近いことを意味する合図であった。彼は自分のことばが受け入れられないのを見て、最後のあかしをしていることを知った。彼は説教の途中であったが、突然、それをやめた。

ステパノはそれまでたどってきた歴史の説明を突然中断して、激怒した裁判官らに向かい、「ああ、強情で、心にも耳にも割礼のない人たちよ。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっている。それは、あなたがたの先祖たちと同じである。いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、ひとりでもいたか。彼らは正しいかたの来ることを予告した人たちを殺し、今やあなたがたは、その正しいかたを裏切る者、また殺す者となった。あなたがたは、御使たちによって伝えられた律法を受けたのに、それを守ることをしなかった」と叫んだ。

これを聞いた祭司や役人たちは怒りで逆上し、人間とは思えぬさまであたかも猛獣のように歯ぎしりしながらステパノに突進した。ステパノは彼らの残忍な顔を見て、自分の運命を悟ったが、少しもたじろがなかった。死の恐怖は彼から去っていた。彼は怒り狂った祭司も気の立った暴徒も恐ろしくなかった。目の前の光景は見えなくなり、そのかわりに天の門が開かれていて、神の宮廷の栄光と、み座から立ち上がって、ご自分のしもべをささえようとしておられる キリストが見えた。彼は勝利の喜びをこめて、「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と叫んだ。 [1394]

ステパノが自分の目に映る輝かしい光景を描写しはじめると、迫害者たちはもうがまんできなかった。彼らはその言葉が聞こえないように耳をふさぎ、猛烈な勢いでいっせいにとびかかってきて、「彼を市外に引き出し」た。「こ

うして、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、『主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい。』そして、ひざまずいて、大声で叫んだ、『主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい』。こう言って、彼は眠りについた」。

ステパノに法律上の刑の宣告は申し渡されていなかったが、ローマ当局は多額の金で買取されていたために、この事件について調査しなかった。

ステパノの殉教を目撃した人たちはみな深い感動をおぼえた。彼の顔に押された神の印の記憶と、聞いた人々の心を動かした彼のことばは、目撃者の心にいつまでも残って、彼が宣べ伝えていた真理のあかしとなった。彼の死は教会にとって苦しい試練であったが、サウロが導かれたのはこのおかげであった。サウロは殉教者ステパノの信仰と忠誠、その顔にやどった栄光をどうしても記憶から消すことができなかった。

ステパノの裁判と死の光景を見て、サウロはあらあらしい熱意を吹きこまれたように見えた。そののちサウロは、ステパノが人々から屈辱を受けていた、まさにその同じ時に、神からは名誉を与えられていたことを、ひそかに認めている自分に腹を立てた。サウロは神の教会を迫害し続け、信者の家々に押し入って、彼らを捕らえ、投獄し殺すために祭司や役人のもとへ引っ立てて行った。この迫害を推進させるサウロの熱狂ぶりは、エルサレムのクリスチャンを恐怖のどん底に陥れた。ローマの官憲はこの残酷な事態を食い止める努力をいっこうにせず、ユダヤ人たちと和解し、彼らから好意を得るためにひそかに彼らを助けた。

ステパノの死後、サウロはその迫害でたてた功績のおかげで、サンヒドリンの一員に選ばれた。一時、彼は神のみ子への反逆をなし遂げようとするサタンの手中で力強い器となって働いたが、それからまもなく、この情け容赦ない迫害者は、そのとき彼が荒らしていた教会の発展のために用いられることになった。サタンよりも力強い神がサウロを選んで、殉教したステパノのあとに立て、宣教させ、主のみ名のために苦しませ、主の血による救いのおとずれを広く伝えさせられたのである。

第11章　へだての壁を越えて

本章は使徒行伝8章に基づく

ステパノの死後、エルサレムにいる信者たちに対して残忍な迫害が起こり、「使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った」。サウロは「家々に押し入って、男や女を引きずり出し、次々に獄に渡して、教会を荒し回った」のちに彼は、この無慈悲な行為に熱狂的であったことを、「わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、思っていました。そしてわたしは、それをエルサレムで敢行し、……多くの聖徒たちを獄に閉じ込め、……それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手をのばすに至りました」と語った。死の苦しみを受けた者がステパノだけでなかったことは、「彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました」という、サウロ自身の言葉からわかる（使徒行伝26：911）。

この危機の時に、ニコデモは恐れず進み出て、十字架にかけられた救い主に対する信仰を明らかにした。ニコデモ
[1395] はサンヒドリンの議員であったが、他の人々と共にイエスの教えに感動していた。キリストのすばらしいみわざを目撃したとき彼は、この方こそ神からつかわされたかたであるという確信を固めていたのである。彼は誇りのために、このガリラヤの大教師に共鳴していることを公に認めることができず、ひそかに主に会いに行っていた。この会見のとき、イエスはニコデモに救いの計画や、この世に対するご自身の使命を打ち明けられた。しかし、ニコデモはなおも躊躇していた。彼は真理を心にかくしていて、3年間は成果を見ることがなかった。しかしニコデモは、公に認めていなかったあいだも、サンヒドリンの協議会において、主を殺そうとしている祭司たちの陰謀には繰り返し反対して

いた。ついにキリストが十字架上にあげられたとき、ニコデモは、夜オリブ山に主をたずねたときに主が「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない」と彼に語られたみことばを思い出して、イエスの中にこの世のあがない主を見たのである（ヨハネ3：14）。

ニコデモは、アリマタヤのヨセフと共に、イエスの埋葬の費用を分担した。弟子たちは自分たちがキリストの弟子であると公に示すことを恐れていたが、ニコデモとヨセフは勇敢に援助の手を差しのべた。これらの金持ちで尊敬されている人々の助けは、その暗黒の時にはことさら必要であった。彼らは亡くなられた主のために、貧しい弟子たちができなかったことをすることができた。彼らの富と感化力が、祭司や役人たちの敵意から大いに彼らを守ったのである。

いまやユダヤ人たちが生まれたばかりの教会を破壊しようとしていたとき、ニコデモはそれを防ぐために進み出た。もはや警戒も疑問もなく、ニコデモは弟子たちの信仰を励まし、エルサレムの教会を支え、福音事業を進めるために、自分の富を用いた。以前に彼を尊敬していた人々は、いまは彼を嘲弄し、迫害した。そして彼はこの世の富には貧しくなったが、信仰を守ることにはひるまなかった。

エルサレムの教会をおそった迫害は、福音の働きに強い刺激を与える結果になった。エルサレムでのみことばの宣教は成功していたので、弟子たちには、全世界に出て行けとの救い主のご命令をなおざりにして、いつまでもそこにとどまる危険があった。悪に抵抗する力は、活動的な奉仕によって最も多く得られるということを忘れて、彼らは敵の攻撃からエルサレムの教会をかばうほど重要な仕事はないと思いはじめていた。彼らは新しく改心した人たちに福音を宣べさせる教育をするどころか、すでになし遂げられたことに、みんなで満足しているだけで終わってしまうような危険に陥っていた。神はご自分の代表者たちを広く散らして、その行く先々で他人のために働くことができるように、彼らの上に迫害の手がのびるままにしておかれた。信者たちはエルサレムを追われて、「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」。

救い主が「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民……に教えよ」と、任命された人々の中には、主を愛することを学んでいた人々や、主の無我の奉仕の模範に従う決心をしていた人々など、より謙遜な生活をしている者が大勢いた（マタイ28：19）。これらの謙遜な人々には、救い主がこの世で公生涯を過ごされたころ共にいた弟子たちと同様に、尊い責任が与えられていた。彼らはキリストによる救いのよろこばしいおとずれを、世に宣べ伝えなければならなかった。

彼らは迫害のために散らされたとき、宣教の熱意に燃えて出て行った。彼らは自分たちに負わされた使命の責任を感じた。また、飢えている世の人々に与えるいのちのパンを持っていることを自覚していたので、キリストの愛に迫られて、このパンを求めているすべての者に分け与えた。主は彼らを通して働かれた。彼らが行く先々で、病人はいやされ、貧しい者に福音が宣べ伝えられた。

7人の執事の1人ピリポも、エルサレムから追われた者の中に入っていた。ピリポは「サマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べはじめた。群衆はピリポの話を聞き、その行っていたしるしを見て、こぞって彼の語ることに耳を傾けた。汚れた霊につかれた多くの人々からは、その霊が……出て行くし、また、 多くの中風をわずらっている者や、足のきかない者がいやされたからである。それで、この町では人々が、大変なよろこびかたであった」。 [1396]

ヤコブの井戸のほとりで、キリストがサマリヤの女にお語りになった使命はすでに実を結んでいた。女は主のみことばを聞くと、町の人々のところへ行って、「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんなさい。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」と言った。人々は彼女について行き、イエスのみことばを聞いて、主を信じた。彼らはもっと聞きたいと願い、主に滞在していただきたいと願った。主は彼らと共に2日間過ごされて、「なお多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた」（ヨハネ4：29、41）。

エルサレムから追われた弟子たちの中には、サマリヤに安全な避難所を見いだした者もいた。これらの福音の使者たちをサマリヤ人は喜んで迎え、ユダヤの改宗者たちは、かつては大敵であった人々の中から尊い収穫を集めた。

サマリヤにおけるピリポの働きは非常な成功をおさめ、これに励まされた彼はエルサレムに援助を求めた。使徒たちは「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」と言われたキリストのみことばの意味が、いまこそ十分にわかるようになった（使徒行伝1：8）。

ピリポがまだサマリヤにいたとき、「南方に行き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい」と天の使いに命じられた。「そこで、彼は立って出かけた」。彼は神のみ旨に応じる教訓を学んでいたから、その召しを疑ったり、従うのを躊躇したりしなかった。

「すると、ちょうど、エチオピヤ人の女王カンダケの高官で、女王の財宝全部を管理していた宦官であるエチオピヤ人が、礼拝のためエルサレムに上り、その帰途についていたところであった。彼は自分の馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた」。このエチオピヤ人は名声の高い、有力な人であった。神は、彼が改心したら、自分の受けた光を人に分かち、福音のために大きな感化を及ぼすことをごぞんじであった。神の天使たちが、光を求めるこの求道者に付き添っていたので、彼は救い主へ引きよせられていった。聖霊の働きにより、神はこのエチオピヤ人を、光へ導くことのできる人と接するよう導かれた。

ピリポはエチオピヤ人のところに行って、彼が読んでいる預言を説明してやるように命じられた。「進み寄って、あの馬車に並んで行きなさい」とみ霊が言った。ピリポは宦官に近づいて「『あなたは、読んでいることが、おわかりですか』と尋ねた。彼は『だれかが、手びきをしてくれなければ、どうしてわかりましょう』と答えた。そして、馬車に乗って一緒にすわるようにと、ピリポにすすめた」。彼が読んでいた聖書の箇所は、キリストに関するイザヤの預言であった。「彼は、ほふり場に引かれて行く羊のように、また、黙々として、毛を刈る者の前に立つ小羊のように、口を開かない。彼は、いやしめられて、そのさばきも行われなかった。だれが、彼の子孫のことを語ることができようか、彼の命が地上から取り去られているからには」。

「お尋ねしますが、ここで預言者はだれのことを言っているのですか。自分のことですか、それとも、だれかほか

の人のことですか」と宦官が尋ねた。そこでピリポは救いの偉大なる真理を彼に示し、同じ聖句から説き起こして、「イエスのことを宣べ伝えた」。

聖書の説明が進むにつれて、宦官の心にますます興味がわいてきて、ピリポが話し終わったときには、宦官は与えられた真理を受け入れる気持ちになっていた。彼は自分の社会的な高い地位を理由に、福音を拒むようなことはしなかった。「道を進んで行くうちに、水のある所にきたので、宦官が言った、『ここに水があります。わたしがバプテスマを受けるのに、なんのさしつかえがありますか』。これに対して、ピリポは、『あなたがまごころから信じるなら、受けてさしつかえはありません』と言った。すると、彼は『わたしは、イエス・キリストを神の子と信じます』と答えた。そこで車をとめさせ、ピリポと宦官と、ふたりとも、水の中に降りて行き、ピリポが宦官にバプテスマを授けた。

[1397] ふたりが水から上がると、主の霊がピリポをさらって行ったので、宦官はもう彼を見ることができなかった。宦官はよろこびながら旅をつづけた。その後、ピリポはアゾトに姿をあらわして、町々をめぐり歩き、いたるところで福音を宣べ伝えて、ついにカイザリヤに着いた」。

このエチオピヤ人は、ピリポのような伝道者たち、すなわち神のみ声を聞いて、神からつかわされるところに行く人たちから、教えを受ける必要のある部類の人々を代表している。聖書を読んでも、その真の意味をわからないでいる者が多い。世界中の男女は何かを求めて天を仰いでいる。光と恵みと聖霊を求める魂から、祈りと涙とねぎごとが天にのぼっていく。多くのものは、み国の入口に立って、刈り集められるのを待つばかりになっているのである。

光を求め、福音を受け入れる準備のできた人のところに、1人の天使がピリポを導いた。今日も天使たちは、聖霊に舌をきよめていただき、心を純化し高めていただく働き人の歩みを導くのである。ピリポに送られた天使は、自分自身でエチオピヤ人に働きかけることもできたが、それは神の働かれる方法ではない。神は人が同胞のために働くように計画しておられる。

最初の弟子たちに与えられた責務は、どの時代の信徒にも分担されてきた。福音を受けた者はみな、世に伝える尊い真理をさずけられた。神の忠実な民は常に、彼らの財源を神のみ名をあがめるために用い、彼らの才能を神への奉仕に賢く用いた積極的な伝道者であった。

過去におけるクリスチャンの無我の働きは、われわれにとって実物教訓となり、励ましとならなければならない。神の教会の会員はよきわざに熱心で、世俗的な野心を離れ、善をなして巡られたキリストのみ足跡を歩まなければならない。また、同情と憐れみに満ちた心をもって、助けの必要な人々のために働き、罪人に救い主の愛を教えなければならない。そうした働きには骨の折れる努力がいるが、その報いは大きい。まじめな決心をしてこのわざに携わる者は、救い主に魂が導かれるのを見ることができる。神の任命を実践するときに伴う感化力は、人を信服させずにはおかないからである。

出て行ってこの任命を果たす責任は、按手礼を受けた牧師にだけ負わされているのではない。キリストを受け入れた者はみな、同胞を救う仕事に召されているのである。「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また、聞く者も『きたりませ』と言いなさい」（黙示黙22：17）。この招待をせよとの命令は、すべての教会に出されたものである。この招待を聞く者はみな「きたりませ」と言って、この招きを丘から谷へこだまさせなければならない。

救霊の働きが牧師にのみかかっていると考えるのは、重大な誤りである。ぶどう園の主から魂への重荷をゆだねられ、へりくだって献身した信徒には、いっそう大きな責任を神からさずかっている人々からの励ましがなければならない。神の教会における指導者として立つ人々は、救い主の任命が、み名を信じるすべての者に与えられていることを知らなければならない。神はまだ按手により牧師職に聖別されていない多くの人々を、ぶどう園に送りこまれるであろう。

すでに救いのおとずれを聞いた幾百、いや、幾千もの人々は、活動的な奉仕に携わることができるはずなのに今もなお、市場で何もせずぶらぶらしている。そのような人々にキリストは「なぜ、何もしないで、1日中ここに立っていたのか」と言われ、さらに「あなたがたも、ぶどう園

に行きなさい」と言っておられる（マタイ20：6、7）。この招きになぜもっと多くの人々が応じないのか。彼らは聖職に立たないのだから、義務を免じられているとでも思っているのだろうか。幾千もの献身した信徒たちのしなければならない大きな仕事が、聖職以外にあることを彼らは知らなければならない。

奉仕の精神が教会全体にゆきわたって、教会員が残らず各々の才能に応じて主のために働くのを、神は長いあいだ待っておられる。福音事業の任命を完成するために、神の教会の会員が、光の必要な自国や外国の伝道地で、それぞれ定められた働きをするならば、[1398] まもなく全世界に警告がゆきわたり、主イエスは力と大いなる栄光をもってこの世にもどってこられるのである。「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」（マタイ24：14）。

第12章　迫害者から弟子へ

本章は使徒行伝9：118に基づく

福音の宣教に伴う成功によって徹底的に覚醒させられたユダヤの指導者たちの中で、タルソ人サウロは際立っていた。サウロはローマ市民として生まれたが、ユダヤ人の家系から出ていて、エルサレムで最も著名なラビたちから教育を受けていた。サウロは「イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者で」あった（ピリピ3：5、6）。彼はラビたちから非常に将来性のある若者と期待され、古来の信仰を熱心に擁護することができる者として、高い望みがかけられていた。サンヒドリン議会の議員に推されたために、彼は有力な地位を占めることになった。

サウロはステパノの審問と有罪の判決にあたって顕著な役割を演じたが、殉教していくステパノと共に神が臨在されたという驚くべき証拠を見て、イエスの弟子たちに反対して支持してきた主張が、果たして正しいかどうかを疑うようになった。彼の心は全く動揺していた。当惑のあまり彼は、知恵と判断において全幅の信頼を寄せていた人々に訴えてみた。ところが祭司や役人たちは議論づくで、ステパノは神を冒瀆する者であり、この殉教した弟子が宣べ伝えていたキリストは詐欺師である、聖職につく者は正しくなければならないのだと、ついに彼を信じ込ませてしまった。

サウロはきびしい吟味もせずにこの結論に達したわけではなかった。しかしついに、彼の受けた教育と偏見、以前の教師に対する尊敬、人望を得ようとする誇りのために、良心の声と神の恵みに逆らってしまったのである。そしてサウロは祭司や学者たちが正しいとすっかり決めこみ、イエスの弟子たちが教える教理にますます激しく反対するよ

うになった。罪のない男女を法廷に引っ立ててきて、イエスを信じているという理由だけで投獄したり、死刑を言いわたすようなサウロの仕打ちに、新しく組織されたばかりの教会は悲歎にくれ、意気消沈し、多くの信者が身の安全を求めて逃げ出した。

この迫害でエルサレムから追い出された人々は「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」（使徒行伝8：4）。彼らがめぐって行った町々の1つはダマスコであったが、この新しい信仰はそこでも多くの改宗者を得た。

祭司や役人たちは油断のない努力と激しい迫害を続けて、この異端をおさえてしまいたいと思っていた。今や彼らは、エルサレムでその新しい教えに対してとった決定的な方法を、今度はほかの場所でもとらなければならないと考えた。サウロは彼らがダマスコでやりたいと思っていた特別な働きを引き受けようと申し出た。サウロは「主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら、大祭司のところに行って、ダマスコの諸会堂あての添書を求めた。それは、この道の者を見つけ次第、男女の別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためであった」。こうして、タルソ人サウロは「祭司長たちから権限と委任とを受けて」、力と活力をみなぎらせ、誤った熱情に燃えて、あの記念すべき、彼の人生を完全に転向させる不思議な事件に遭遇する旅へと出発した（使徒行伝26：12）。

旅の最後の日の「真昼に」、疲れきった旅人らは、ダマスコに近づいたとき、広々とした肥沃な土地や美しい園
[1399] や、周囲の山々からそそぐ冷たい流れに潤された実りのよい果樹園を一望のもとに見渡した。荒野の長旅のあとに、そのような光景は実にすがすがしいものであった。サウロも同行者たちと、その実り多い平原や美しい町を見おろして感嘆していると、「突然」――彼は後になってそのありさまを説明したが――「光が天からさして……わたしと同行者たちとをめぐり照し」た。それは人間の目では耐えられないほどの輝きで、「太陽よりも、もっと光り輝いて」いた（使徒行伝26：13）。サウロは目が見えなくなり、途方にくれて地に伏してしまった。

光がなおも彼らをめぐり照らしていたとき、サウロは「ヘブル語で……こう呼びかける声を」聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」（使徒行

伝26：14）。「そこで彼は『主よ、あなたは、どなたですか』と尋ねた。すると答があった、『わたしは、あなたが迫害しているイエスである』」。「とげのあるむちをければ、傷を負うだけである」（使徒行伝9：5、26：14）。

サウロの同行者たちは恐ろしさでいっぱいになり、また強烈な光のためにほとんど目が見えなくなり、声は聞いたが、人の姿が見えなかった。しかしサウロには語られたことばがわかった。そればかりか、語られたかたが神のみ子であると、彼にはっきり示された。彼の前に輝かしい姿で立っておられるかたが、十字架にかけられた方だと彼にはわかった。打ちのめされたこのユダヤ人の魂に、救い主のみ顔が永久に焼きつけられた。語られたみことばは驚くばかりの力で彼の心を打った。心の暗室の中にあふれるばかりの光が注がれて、以前の無知と誤りや、現在の彼に聖霊による啓発の必要なことが示された。

いまこそサウロは、イエスの信徒を迫害することによって、実際にはサタンの仕事をしていたのだと知った。正義と彼自身の義務に対する確信が、主として祭司や役人への絶対的な信頼に基づいていたことを知った。サウロはよみがえりの話が、弟子たちの巧みな作りごとだと祭司や役人たちから聞かされたとき、それを信じてしまったが、いまこそイエスご自身が姿を現して立っておられたのであるがら、弟子たちの主張が真実であったことを確信した。

天からの光に照らされたとき、サウロの頭は驚くべき早さで働いた。聖書の預言の記録が彼の知力の前に開かれた。彼は、イエスがユダヤ人から退けられ、十字架にかかり、よみがえって昇天されたことが、預言者たちによってすでに予告されていたこと、そして、それらのことによってイエスが約束のメシヤであることが証明されたことを知った。ステパノの殉教のときの説教が力強くサウロの頭によみがえり、この殉教者が「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と言ったとき、ステパノは実際に「神の栄光」を見たのだということに気がついた（使徒行伝7：55、56）。祭司たちはこのことばを神をけがすことばだと宣言していたが、サウロは、いまそのことばが事実であることを知った。

何とすばらしい啓示がこの迫害者に与えられたことであろう。サウロは今、メシヤがナザレのイエスとしてこ

の世に来ていたことや、イエスが救おうとした人々に拒まれて、十字架にかけられたことをはっきり知った。また彼は救い主が墓から意気揚々とよみがえられて、天にのぼられたことを知った。その尊い啓示の瞬間にサウロは、救い主の十字架と、そのよみがえりをあかししていたステパノが、サウロの同意により犠牲となり、後には、その他のイエスの尊い信徒が大勢、彼の力を借りた残酷な迫害により殺されたことをぞっとする気持ちで思い出した。

救い主がステパノを用いてサウロに語っておられた。ステパノのはっきりした論証は反駁の余地のないものであった。このユダヤ人の学者は、キリストの栄光の光を反映している殉教者の顔を見た。それはちょうど「天使の顔のように」見えたのである（使徒行伝6：15）。彼は敵に対するステパノの忍耐強さとゆるしを目撃した。サウロはまた、自分が責め苦しめた多くのものが示した不屈の精神と、喜んで耐え忍ぶ姿を見た。彼はあるものたちが信仰のために、いのちさえ喜んで捨てるのを見たのである。

これらすべてのことが声を大にしてサウロの心を動かし、時には、イエスこそ約束のメシヤだという、抗しがたい確信が彼の心を突き通した。そのようなとき、彼は幾夜もこの確信に抵抗してもがき、いつでも、イエスはメシヤではなく、彼の信者たちも惑わされた狂信者だという自己の信念を公言することによって内心の葛藤をしずめていた。 [1400]

いまキリストはサウロにみずから声をかけ、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と言われた。そして「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねると、同じ声が「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と答えられた。ここでキリストは、ご自身をその民と同一視しておられる。キリストに従う者たちを迫害したとき、サウロは直接、天の神にたてついていたのである。キリストの弟子たちを告発し、彼らに敵して偽証を言いたてたとき、サウロは世の救い主に対して同じことをしていたのである。

サウロは自分に語ったお方こそ、ナザレのイエスであり、長く待望してきたメシヤ、イスラエルの慰め、贖い主であることを少しの疑いもなく受け入れた。おののき驚きながら彼が、「主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか」と尋ねると、イエスは「さあ立って、町にはいって行

きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう」と言われた。

栄光が去ったとき、サウロは地面から立ち上がった。彼は自分の視力が全く失われたことを知った。キリストの栄光の輝きは人間の目にはあまりに強すぎた。そしてその光がなくなっても彼にとってあたりは真の闇であった。彼は自分がイエスに従う人々を残酷に迫害したために、神罰がくだって盲目になったのだと思った。全くの闇の中をサウロは手探りし、同行者たちは恐れと驚きを抱きながら「彼の手を引いてダマスコへ連れて行った」。

その事件のあった朝、サウロは祭司長たちから信任を与えられていたので、満足感をいだいてダマスコに近づいていた。彼には重大な責任が負わされていた。彼は、できればダマスコにおいて新しい信仰の広まるのをくい止めることによって、ユダヤの宗教の勢力を増強するよう命じられていた。彼は自分の使命を成功させなければならないと決意し、期待していた経験が目前にあることをしきりに予想し、待ちうけていた。

しかしダマスコに着いてみると、彼の予想はなんと違っていたことであろう。盲目になって、自分1人ではどうすることもできず、悔恨にさいなまれ、罰はこれだけではすまないのではないかと恐れた彼は、弟子のユダの家をさがし求め、そこでただ1人反省と祈りにひたすら時を費やした。

サウロは3日間「目が見えず、また食べることも飲むこともしなかった」。この魂の苦悩の日々は彼にとっては長い年月のようであった。ステパノが殉教したときに自分が受け持った役割を、彼は苦悶しながら何度も思い出した。ステパノの顔が天の光に照らされていたときでさえ、祭司や役人の悪意や偏見に彼自身ふりまわされてしまった罪を、ぞっとする思いで思い出した。最も印象的な出来事に目や耳をふさいでいたこと、ナザレのイエスを信じる人々への迫害を冷酷にせき立てたことが幾たびあったか、サウロは悲しみに打ちひしがれながら繰り返し数え上げた。

その間、サウロはただ1人引きこもって、深く心を探りへりくだった。サウロがダマスコにきた目的を警告されていた信者たちは、彼が自分たちをだますために芝居をしているのではないかと恐れたので、遠ざかっていて、彼をあわれもうともしなかった。サウロは、自分が力を合わせ

て信者の迫害に当たるつもりであった、改宗していないユダヤ人に、助けを求めたいとは思わなかった。彼らはサウロの話に耳を傾けようとさえしないことが、わかりきっていたからである。こうして彼は人の同情からすっかり遮断されてしまったようであった。助けを求める彼の唯一の望みは憐れみ深い神にあったので、彼は心くだけて神に祈った。

1人引きこもって神とすごした長い時間、サウロは聖書のキリストの初臨についてのべられた箇所を幾つも思い出した。すでに彼の心を占めていた確信にとぎすまされた記憶をたどり、預言を注意深くたどった。これらの預言の意味を吟味してみて、彼は以前の自分に識別力のなかったことや、約束のメシヤとしてのイエスを拒むようになったユ
[1401] ダヤ人一般の無知に驚いた。サウロの知性は明るくされ、すべてのことが明らかになった。以前の偏見や不信が彼の霊的知覚を曇らせ、ナザレのイエスの中に、預言されていたメシヤを認めることができなくなっていたことを知った。

サウロは聖霊の罪を認めさせる力に全く屈服したとき、自分の人生の過ちを知り、神の律法の広範囲に及ぶ要求を認めた。自分の良い働きによって義とされると確信していた高慢なパリサイ人であった彼は、いま謙遜に幼な子のように単純な気持ちで神のみ前にぬかずき、自己の無価値さを告白し、十字架にかけられ、よみがえられた救い主の功績を、自分のために懇願した。サウロはみ父やみ子との完全な一致と霊的な交わりに入りたいと思い、自分がゆるされて、受け入れられるようにと切に願って、恵みの座に熱心な祈りをささげた。

このパリサイ人の後悔の祈りはむだにはならなかった。彼の心に奥深くあった思想と感情は、神の恵みによって変えられた。彼のより高貴な才能は神の永遠の目的に調和していった。キリストとその義は、サウロにとって全世界よりも価値のあるものとなった。

サウロの改宗は、罪人たちに罪を悟らせる、聖霊の不思議な力を示す著しい証拠である。彼はナザレのイエスが神の律法を軽視し、律法はもはや無効であると弟子たちに教えていたと思っていた。しかし改宗してのち、サウロは、イエスこそ天父の律法を擁護するために、この世に来られ

た方であると知った。彼はイエスこそユダヤの完全な犠牲制度の創設者であられたことに気がつき、十字架において予型は本体と一致したことや、イエスがイスラエルのあがない主に関する旧約の預言を、成就されたことを知った。

サウロの改宗の記録の中に、われわれが常に心に留めておかなければならない重要な原則が与えられている。サウロはキリストのみ前に直接に導かれた。彼こそキリストが最も大事な仕事をゆだねようとされた人、主のために「選ばれた器」となる人であった。しかし神はゆだねようとしておられる仕事を、すぐには彼にお告げにならなかった。神はサウロを道の途中で捕らえて、罪を認めさせられた。しかしサウロが「なすべき事」を尋ねた時救い主はこの探求心の強いユダヤ人をご自分の教会に引き合わされ、そこで彼に対する神のみこころをお知らせになった。

サウロの心のやみを驚くべき光で照らしたのは、主のお働きであった。しかし弟子たちにも、サウロのためにしなければならない働きがあった。キリストは啓示し罪を悟らせる働きをなさった。今この悔い改めたサウロは、神の真理を教えるよう任命された人々から、教えを聞く用意ができていた。

サウロがユダの家に1人こもって祈り、懇願し続けているあいだに、神はダマスコにいる「アナニヤというひとりの弟子」に幻の中に現れて、サウロというタルソ人が助けを求めて祈っていることを告げられた。「立って、『真すぐ』という名の路地に行き、ユダの家でサウロというタルソ人を尋ねなさい。彼はいま祈っている。彼はアナニヤという人がはいってきて、手を自分の上において再び見えるようにしてくれるのを、幻で見たのである」と天からの使者が言った。

アナニヤは天使の言葉をとても信用することができなかった。エルサレムの聖徒たちに対するサウロのひどい迫害の知らせがすでに遠くまで広く伝わっていたからである。アナニヤは主に諫言するつもりで「主よ、あの人がエルサレムで、どんなにひどい事をあなたの聖徒たちにしたかについては、多くの人たちから聞いています。そして彼はここでも、御名をとなえる者たちをみな捕縛する権を、祭司長たちから得てきているのです」と答えた。しかし命令は厳かであった「さあ、行きなさい。あの人は、異邦人

たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である」。

アナニヤは天使の指示に従い、最近まで、イエスの名を信じるすべての者に対して脅迫の息をはずませていたその男を探し出した。そしてアナニヤは、後悔し苦しんでいるその人の頭に手を置いて言った、「『兄弟サウロよ、あなたが来る途中で現れた主イエスは、あなたが再び見えるようになるため、そして聖霊に満たされるために、わたしを
[1402] ここにおつかわしになったのです』。

するとたちどころに、サウロの目から、うろこのようなものが落ちて、元どおり見えるようになった。そこで彼は立ってバプテスマを受け」た。

こうしてイエスは組織されたキリスト教会の権威を承認し、サウロを地上でご自身が任命された機関である教会に引き合わされた。いまやキリストは地上でのご自身の代表者として、1つの教会を持っておられ、その教会が、人生の途上で過ちを犯して悔い改めた、この罪人を導く仕事にかかわることになった。

多くの人々は、自分たちの光と経験はキリストに対してだけ責任を負うものであり、キリストが信徒と認めた人々とは関係がないという考えを持っている。イエスは罪人の友であり、その心は彼らの悲哀に動かされる。彼は天においても地においてもいっさいの権威を持っておられるが、人々の教化と救いのためにご自身がお定めになった方法を尊ばれる。イエスは、ご自身が世に対する光の通路と定められた教会に、罪人を導かれるのである。

サウロは盲目的な誤りと偏見のさ中に、彼が迫害していたキリストの啓示を与えられたとき、世の光である教会と直接交わることができるように導かれた。この出来事においては、アナニヤはキリストを代表し、また、地上において主の代わりに行動するよう任命されている、キリストの使者たちを代表する。キリストの代わりにアナニヤは、サウロの目が見えるようになるために、彼の目に触れる。彼がキリストの代わりにサウロの上に手を置き、キリストのみ名により祈ると、サウロは聖霊を受ける。すべてのことはキリストのみ名と権威においてなされるのである。キリストは源泉であり、教会はその伝達経路である。

第13章　砂漠での内省の日々

本章は使徒行伝9：1930に基づく

バプテスマを受けたのち、パウロは断食を終えて「ダマスコにいる弟子たちと共に数日間を過ごしてから、ただちに諸会堂でイエスのことを宣べ伝え、このイエスこそ神の子であると説きはじめた」。彼はナザレのイエスが、長いあいだ待ちのぞんでいたメシヤであると、大胆に宣べ伝えた。そして「キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、……3日目によみがえったこと」、12人やその他の人々に現れ、「最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである」とパウロはつけ加えた（1コリント15：3、4、8）。預言から説く彼の論法は非常に断固たるもので、彼の努力には明らかに神の力が伴っていたので、ユダヤ人たちは面くらい、彼に太刀打ちできなかった。

パウロの改心の知らせにユダヤ人たちは非常に驚いた。「祭司長たちから権限と委任とを受けて」信者たちを捕らえ、求刑するためにダマスコに行った彼は今、十字架にかけられて、よみがえられた救い主の福音を宣べ伝え、すでに福音の弟子となった者たちの力を強め、彼が今まで激しく反対していた信仰へと絶えず新しい改心者を導いていたのである。

パウロは以前はユダヤ教の熱烈な擁護者として、またイエスの弟子たちを疲れを知らずに迫害する者として知られていた。勇気があり、自主的で辛抱強いパウロは、その才能と教育とをもって、どんな資格においてでも奉仕することができた。彼は驚くべき明確さで弁明し、どぎまぎさせるような皮肉で反対者を勝ち目のない状態におくことができた。こうして今ユダヤ人たちは、この並々ならぬ有望な青年が、以前自分が迫害していた人たちと一緒になり、恐れることなくイエスの名によって説教しているのを見た。

軍司令官が戦場で戦死すると、その軍隊にとって損失になるが、その死は敵の力を増大させることはない。しかし卓越した人物が敵方に加わると、彼の働きが失われるばかりか、彼が加わった側は決定的な利益を得る。タルソ人
[1403] サウロはダマスコへの途上で、神によって簡単に打ち殺されていてもよかった。そうすれば迫害する力を大いに減退させたであろう。しかし神はみ摂理によってサウロの命を助けたばかりか、彼を改心させて、敵側の戦士からキリストの側の戦士になさった。雄弁な演説家であり、辛辣な批評家であるパウロは、断固たる志と豪胆な勇気を備えていて、初代教会にちょうど必要な資質を持っていたのである。

パウロがダマスコでキリストを宣べ伝えたとき、その言葉を聞いた者はみな驚いて言った、「あれは、エルサレムでこの名をとなえる者たちを苦しめた男ではないか。その上ここにやってきたのも、彼らを縛りあげて、祭司長たちのところへひっぱって行くためではなかったか」。パウロは自分の信仰の変化は、衝動や熱狂にかりたてられたものではなく、抵抗できない力によってなし遂げられたものであると述べた。彼は福音を提示するにあたって、キリストの初臨に関する預言を明白に教えようと努めた。そして彼は結論として、これらの預言が文字通りにナザレのイエスに成就したことを告げた。彼の信仰の基礎はゆるぎない預言のことばであった。

パウロは驚いている人々に「悔い改めて神に立ち帰り、悔改めにふさわしいわざを行うようにと」説き続けて（使徒行伝26：20）、「ますます力が加わり、このイエスがキリストであることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人たちを言い伏せた」。しかし多くの人々は彼の説教に応じることを拒み、心をかたくなにした。やがて、パウロの改心に対する彼らの驚きは、イエスに示したような憎しみに変わった。

反対がますます激しくなったので、パウロはダマスコで働きを続けることができなくなった。天よりの使者がしばらくそこを去るようにと彼に命じたので、彼は「アラビヤに出て行っ」て、そこで安全なかくれ家を見つけた（ガラテヤ1：17）。

パウロは砂漠のさびしい所で、静かな研究と瞑想の時を十分に得た。彼は静かに自分の過去をふりかえり、悔い改めの確かなわざをなした。彼は真心から神を求めて、彼の悔い改めが受け入れられ、罪がゆるされたことを確かめるまで気を安めなかった。彼はこれから伝道するにあたって、イエスが彼と共にいてくださるという確証を得たいと切望した。彼はこれまで彼の生活を形造っていた偏見や言い伝えを一切捨てて、真理の源なる神の教えを受けた。イエスはパウロと交わり、彼の信仰を固め、知恵と恵みを豊かにお与えになった。

人の心が神の心と交わり、限りあるものが無限の創造主と交わるとき、身体や精神や魂に及ぼすその影響は計り知れない。そのような交わりの中に最高の教育がある。それが神ご自身の教育方法である。「あなたは神と和ら……ぐがよい」、これは神が人類にお与えになった教えである（ヨブ22：21）。

アナニヤに会ったときにパウロが受けたおごそかな命令は、パウロの心にますます重くとどまった。「兄弟サウロよ、見えるようになれ」ということばに答えてパウロがはじめてこの信仰深い人の顔を見たとき、アナニヤは聖霊の霊感を受けて彼に告げた。「わたしたちの先祖の神が、あなたを選んでみ旨を知らせ、かの義人を見させ、その口から声をお聞かせになった。それはあなたが、その見聞きした事につき、すべての人に対して、彼の証人になるためである。そこで今、なんのためらうことがあろうか。すぐ立って、み名をとなえてバプテスマを受け、あなたの罪を洗い落しなさい」（使徒行伝22：1416）。

これらのことばはイエスご自身が、ダマスコへの旅の途上にいたサウロを捕らえてお語りになったことばと一致するものであった。「わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしに会った事と、あなたに現れて示そうとしている事とをあかしし、これを伝える務に、あなたを任じるためである。わたしは、この国民と異邦人との中から、あなたを救い出し、あらためてあなたを彼らにつかわすが、それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に

加わるためである」とイエスは言われたのである（使徒行伝26：1618）。

パウロはこれらの事を心の中でじっくり考えながら、
[1404] 「神の御旨により召されてキリスト・イエスの使徒となった」意味をますますはっきり理解するようになった（コリント1：1）。その召しは「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神」から来たものであった（ガラテヤ1：1）。自分の前にある働きの重大さを思って、パウロは聖書をよく研究するようになった。それは彼が福音を、「知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであった。それは、キリストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである」。また「霊と力との証明に」より、聞いた者の信仰が「人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」（コリント1：17、2：4、5）。

パウロは聖書を探りながら、各時代を通じて「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない。それだのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれた」ことを知った。「それは、どんな人間でも、神のみまえに誇ることがないためである」（コリント1：2629）。このようにこの世の知恵を十字架の光に照らしてみて、パウロは「イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは.....何も知るまいと、決心した」（コリント2：2）。

その後、伝道の働きを通して、パウロは知恵と力の源であられるかたを見失うことがなかった。何年かたってのちもなお「わたしにとっては、生きることはキリストであ」ると彼が言うのを聞くことができる（ピリピ1：21）。また「わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失った.....それは、わたしがキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受け

て、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである。すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずか」るためであるとパウロは述べている（ピリピ3：810）。

パウロはアラビヤから「再びダマスコに帰っ」て（ガラテヤ1：17）、「イエスの名で大胆に宣べ伝えた」。彼の説得の知恵に逆らうことができなかった「ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をした」。彼がのがれる道を遮断するために、町の門は夜昼休みなく見張りがつけられた。この危機のために弟子たちは熱心に神を求めて、ついに彼らは「夜の間に彼をかごに乗せて、町の城壁づたいにつりおろした」（使徒行伝9：25）。

ダマスコからのがれ出てのち、パウロはエルサレムに行った。改心以来、約3年たっていた。ここを訪問した主な目的は、彼がのちに述べているように「ケパ（ペテロ）をたずね」るためであった（ガラテヤ1：18）。以前に「迫害者サウロ」としてよく知られていた所に着いてすぐパウロは、「弟子たちの仲間に加わろうと努めたが、みんなの者は彼を弟子だとは信じないで、恐れていた」。以前にあれほど頑迷なパリサイ人で、教会をひどく破壊した人がイエスの誠実なしもべになることができたとは、弟子たちにはなかなか信じられなかった。「ところが、バルナバは彼の世話をして使徒たちのところへ連れて行き、途中で主が彼に現れて語りかけたことや、彼がダマスコでイエスの名で大胆に宣べ伝えた次第を、彼らに説明して聞かせた」。

これを聞いて弟子たちは、パウロを自分たちの仲間の1人として受け入れた。まもなく彼らは、パウロのクリスチャン経験が正真正銘のものだという十分な証拠を得た。異邦人に対する将来の使徒は、以前に彼が交わっていた人々の大勢いるこの町に、今、来ているのであった。そして、これらのユダヤ人の指導者たちに、すでに救い主の来臨によって成就されていた、メシヤに関する預言を明らかにしたいと彼は思った。パウロは、これまで非常によく知っていたこれらのイスラエルの教師たちが、以前の彼と同様に誠実で正直だということを確信していた。しかし彼は、ユダヤ人の兄弟たちの精神を見込み違いしていたために、彼らを性急に改心させようとして、みじめな失望に陥るはめになった。彼は「主の名によって大胆に語り、 [1405]

ギリシャ語を使うユダヤ人たちとしばしば語り合い、また論じ合った」が、ユダヤ教の主立った人々は信じることを拒み、「彼を殺そうとねらっていた」。パウロの心は悲しみに満たされた。彼は、そうすることでだれかに真理を理解させることができれば、自分の命を喜んで捨てたであろう。パウロはステパノの殉教に自分が積極的な行動に出たことを恥ずかしく思い返し、不実に訴えられた者の上につけられた汚点を今拭い去りたいと願って、ステパノが命をかけて守り通した真理を彼も擁護しようとした。

信じることを拒んだ人々のために重荷を感じて、パウロは宮で祈っていた。後になって彼はこのことをあかししているが、そのとき、彼は夢心地になった。そこに天使が現れて彼に言った、「急いで、すぐにエルサレムを出て行きなさい。わたしについてのあなたのあかしを、人々が受けいれないから」（使徒行伝22：18）。

パウロは、反対者に立ち向かうことのできるエルサレムに留まっていたい気持ちであった。彼にとって、逃げることは臆病な行為に思えた。たとえ留まることが命をかけることであっても、もし留まれば頑固なユダヤ人たちのだれかに、福音使命の真理を確信させることができるかもしれないからであった。そこで彼は「主よ、彼らは、わたしがいたるところの会堂で、あなたを信じる人々を獄に投じたり、むち打ったりしていたことを、知っています。また、あなたの証人ステパノの血が流された時も、わたしは立ち合っていてそれに賛成し、また彼を殺した人たちの上着の番をしていたのです」と答えた。しかし、神のしもべが不必要に命を危険にさらすことは、神の目的に添うものではなかった。「行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と天使が答えた（使徒行伝22：1921）。

この幻について聞かされた兄弟たちは、パウロが暗殺されることを恐れて、急いで彼をエルサレムからひそかに逃れさせた。兄弟たちは「彼をカイザリヤに連れてくだり、タルソへ送り出した」。パウロが去ったことで、ユダヤ人たちの激しい反対が一時停止し、教会は平安を保ち、多くの人々が信者の中に加えられた。

第14章　神は人をかたより見ない

本章は使徒行伝9：3211：18に基づく

使徒ペテロは伝道の旅行中に、ルダに住む信徒たちを訪問した。そこで彼は、中風のために8年間も床についていたアイネヤをいやした。「アイネヤよ、イエス・キリストがあなたをいやして下さるのだ。起きなさい。そして床を取りあげなさい」とペテロが言った。「すると、彼はただちに起きあがった。ルダとサロンに住む人たちは、みなそれを見て、主に帰依した」。

ルダの近くのヨッパにドルカスという名前の婦人が住んでいた。彼女はよい働きをして、人々から非常に愛されていた。彼女はイエスのりっぱな弟子で、数々の親切なことを行いながら暮らしていた。また、だれに心地よい衣服が必要であるか、だれに同情が必要であるかを知っていて、貧しい者や悲しむ者のために惜しみなく尽くしていた。彼女の器用な手先はその舌よりも活発に働いた。

「ところが、そのころ病気になって死んだ」ヨッパの教会は彼らの損失を知った。ペテロがルダにいることを聞いた信者たちは彼に使いをやり、「『どうぞ、早くこちらにおいで下さい』と頼んだ。そこでペテロは立って、ふたりの者に連れられてきた。彼が着くとすぐ、屋上の間に案内された。すると、やもめたちがみんな彼のそばに寄ってきて、ドルカスが生前つくった下着や上着の数々を、泣きながら見せるのであった」。ドルカスが送った奉仕の一生を [1406]
考えると、彼らが嘆き悲しんだこと、熱い涙のしずくが生命のない土くれの上に落とされたことに不思議はない。

使徒ペテロは彼らの悲しみを見て同情し、心を動かされた。それから彼は嘆き悲しんでいる友人たちを部屋から出させるように命じ、ひざまずいてドルカスの命と健康が取りもどされるように、神に熱心に祈った。それから死体に向かい、彼は言った「タビタよ、起きなさい」。「すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起きなおった」。ドルカス

は教会にとって有益な奉仕をしていたので、神は彼女を敵の地から導きかえすことが必要だと思われた。その器用な手先と精力をなお他人を恵むために用いさせ、またこの神のみ力の現れによって、キリストのみわざが強められるようになるためであった。

ペテロはまだヨッパにいたときに、カイザリヤにいるコルネリオに福音を伝えるようにという神の召しを受けた。

コルネリオはローマの百卒長であった。彼は金持ちで高貴の生まれであったし、責任と名誉のある地位についていた。彼は異教徒の生まれで異教の訓練と教育を受けていたが、ユダヤ人との接触によって神のことを学び、心から神を拝して、貧しい人々をあわれむ行為によって、その信仰の偽りないことをあらわしていた。彼の慈善行為は遠くまで知れわたり、その正しい生活によってユダヤ人の間にも異邦人の間にも評判がよかった。彼は接触するすべての者によい感化を及ぼした。彼については、「信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈をしていた」と、霊感の書に記されている。

彼は神を天地の創造主として信じていたので、神を敬いその権威を認め、生活のどんなことにも神のみこころを求めた。彼は家庭生活にも職務の上でも主に忠実であった。彼は家庭に神の祭壇を築いた。というのは、彼は神の助けを受けずに自分の計画を実行したり、責任を負うことができなかったからである。

コルネリオは預言を信じ、メシヤの来臨を待ち望んでいたが、キリストの命と死にあらわされた福音についての知識を持っていなかった。彼はユダヤ教の信徒ではなかったので、ラビたちから異教徒で汚れている者とみなされていたかもしれない。しかしアブラハムについて、「わたしは彼を知っている」と仰せになった聖なる警護者は、コルネリオをも知っておられて、天から直接、彼にメッセージをお送りになった。

コルネリオが祈っていると天使が現れた。百卒長は自分の名が呼ばれたので恐れたが、神の使者が来たことを悟って「主よ、なんでございますか」と言った。すると天使が答えて「あなたの祈や施しは神のみ前にとどいて、おぼえられている。ついては今、ヨッパに人をやって、ペテロと呼ばれるシモンという人を招きなさい。この人は、海辺

に家をもつ皮なめしシモンという者の客となっている」と言った。

これらの命令の明白なこと、また、ペテロが宿っている家の人の職業まであげられていることを見ると、どんな身分の人々の一生も仕事も天には知られていることがわかる。神は王の経験や働きを知っておられるだけでなく、身分の低い労働者のこともごぞんじなのである。

「ヨッパに人をやって……シモンという人を招きなさい」。こうして神は福音事業と、ご自分の組織された教会に関心を持っておられることをあらわされた。天使はコルネリオに、十字架の話をするためにつかわされたのではない。神は百卒長と同じように弱い、誘惑にも陥りやすい1人の人間を選んで、十字架につけられ、よみがえられた救い主のことを彼に伝えさせられたのである。

人々の中での神の代表者として、神は誤りを犯したことのない天使をお選びになるのではなく、救いの対象とされている人々と同じ感情を持った人間をお選びになる。キリストは人類に近づくために人間性をとられた。この世に救いをもたらすためには、神性と人性をとられた救い主が必要であった。そして男にも女にも「キリストの無尽蔵の富」を宣べ伝える仕事が、神からゆだねられているのである（エペソ3：8）。

神はその英知で、真理を求めている人々を、真理を知っている仲間たちと交わるように導かれる。光を受けた者たちが、それを暗黒の中にいる者たちに分け与えることは、天の計画である。人間性は、知恵の偉大な源から能力をひき出し、福音がそれを通して、心と思いを変える力を働かせる媒介、すなわち実際的な仲立ちとなるのである。 [1407]

コルネリオは幻に喜んで従った、天使が行ってしまってから百卒長は、「僕ふたりと、部下の中で信心深い兵卒ひとりとを呼び、いっさいの事を説明して聞かせ、ヨッパへ送り出した」。

天使はコルネリオにあらわれてから、ヨッパにいるペテロのもとに行った。そのときペテロは、泊まっている家の屋上で祈っていた。記録には、「彼は空腹をおぼえて、何か食べたいと思った。そして、人々が食事の用意をしている間に、夢心地になった」とある。ペテロがほしかったのは肉体的な食物ばかりではなかった。ヨッパの町とその郊

外を屋上から見おろした彼は、その地方の人々の救いを求めたのである。彼はキリストの苦悩と死に関する預言を、聖書から彼らに示したいとひたすら願っていた。

幻のうちにペテロは「天が開け、大きな布のような入れ物が、4すみをつるされて、地上に降りて来るのを見た。その中には、地上の四つ足や這うもの、また空の鳥など、各種の生きものがはいっていた。そして声が彼に聞えてきた、『ペテロよ、立って、それらをほふって食べなさい』。ペテロは言った、『主よ、それはできません。わたしは今までに、清くないもの、汚れたものは、何1つ食べたことがありません』。すると、声が2度目にかかってきた、『神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない』。こんなことが3度もあってから、その入れ物はすぐ天に引き上げられた」。

この幻はペテロにとって譴責ともなり、教えともなった。それは神の目的、すなわちキリストの死によって異邦人もユダヤ人とひとしく、救いの恩恵にあずかることを示していた。当時まだ弟子たちはだれも、異邦人に福音を伝えていなかった。彼らの心の中には、キリストの死によって取り除かれたはずの隔ての中垣が、今もなお存在していて、彼らの働きはユダヤ人たちにだけしか向けられていなかった。彼らは、異邦人は福音の祝福にあずかることはないと思っていたからである。神は今、ご自分の計画を世界的にひろめるように、ペテロに教えておられた。

異邦人たちの中には、ペテロやその他の使徒たちの説教に興味深く耳を傾ける者が大勢いた。そして多くのギリシャ語を話すユダヤ人がキリストの信徒になったが、コルネリオの改心は、異邦人たちの中でも最初の重要な事件であった。

キリストの教会が、全く新しい方面の働きを開始すべき時がきていた。ユダヤの改宗者たちの多くが異邦人に対して閉ざしていた戸を、今こそ広く開かなければならなかった。そして福音を受け入れた異邦人は、ユダヤ人の弟子とひとしくみなされ、割礼の儀式を守る必要はなかった。

ユダヤ人の教育を受けたために、ペテロの心にしっかり固着していた異邦人に対する偏見を取り去るために、主はいかに慎重に働きかけられたことであろう。布とその中身の幻によって、神は使徒の心にあるこの偏見を脱ぎすてさ

せ、天国では人を差別待遇することはなく、ユダヤ人も異邦人も神の御目にはひとしく尊いものであり、キリストを通して、異教徒も福音の祝福と特権にあずかることができるということを教えようとされた。

ペテロが幻の意味をいろいろ考えているとき、コルネリオの使いの者がヨッパに着いて、ペテロが泊まっていた家の門口に立った。するとみ霊は「ごらんなさい、3人の人たちが、あなたを尋ねてきている。さあ、立って下に降り、ためらわないで、彼らと一緒に出かけるがよい。わたしが彼らをよこしたのである」と言った。

ペテロにとってこれは苦しい命令だったので、その役目を引き受けるには1足ごとに足が重くなるばかりであったが、彼は拒もうとしなかった。「そこでペテロは、その人たちのところに降りて行って言った、『わたしがお尋ねのペテロです。どんなご用でおいでになったのですか』」。彼らはその不思議な用向きを 説明して言った、「正しい [1408]
人で、神を敬い、ユダヤの全国民に好感を持たれている百卒長コルネリオが、あなたを家に招いてお話を伺うようにとのお告げを、聖なる御使から受けましたので、参りました」。

神から受けたばかりの命令に従い、使徒は彼らと共に行く約束をした。あくる朝、彼は兄弟たち6人を連れてカイザリヤに向かった。この人々は異邦人をおとずれているとき、彼の言行すべての証人どなるはずであった。彼はユダヤの教えを真っ向からおかすことに、申し開きするよう求められることを知っていたからである。

ペテロがその異邦人の家に入るとコルネリオは、普通の訪問者を迎えるようなあいさつではなく、神からつかわされた尊い客として彼を迎えた。王子や高貴な人の前にぬかずいたり、子供が両親の前に頭をさげてあいさつすることは東方の習慣である。しかし、コルネリオは教えをさずけるために神からつかわされた人を尊敬するあまり、感極まって使徒の足もとにひれ伏して、拝した。ペテロは恐怖におそわれ、百卒長を引き起こして言った、「お立ちなさい。わたしも同じ人間です」。

コルネリオの使いの者たちが使いに出ていたあいだに百卒長は、福音の説教を自分1人でなくみんなで聞こうと「親族や親しい友人たちを呼び集めて」いた。ペテロが到

着すると、大勢の人々が彼の言葉を聞こうと熱心に待っていた。

こうして集まった人々に、ペテロはまずユダヤ人の習慣について話し、ユダヤ人にとって異邦人と交際することは違法と考えられていて、宗教的な汚れを受けることになると説教した。「あなたがたが知っているとおり、ユダヤ人が他国の人と交際したり、出入りしたりすることは、禁じられています。ところが、神は、どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならないと、わたしにお示しになりました。お招きにあずかった時、少しもためらわずに参ったのは、そのためなのです。そこで伺いますが、どういうわけで、わたしを招いてくださったのですか」とペテロが言った。

そこでコルネリオは彼の経験と天使の言葉について話し、「それで、早速あなたをお呼びしたのです。ようこそおいで下さいました。今わたしたちは、主があなたにお告げになったことを残らず伺おうとして、みな神のみ前にまかり出ているのです」と言葉を結んだ。

ペテロは、「神は人をかたよりみないかたで、神を敬い義を行う者はどの国民でも受けいれて下さることが、ほんとうによくわかってきました」と言った。

それから、その熱心な聴衆に使徒はキリストの生涯と奇跡、彼に対する裏切りと十字架、よみがえりと昇天、人類のための代表者であり、弁護者としての天におけるキリストの働きについて説いた。ペテロは集まっている人々に、イエスが罪人の唯一の望みであると語っているあいだに、彼の見た幻の意味が自分自身でさらによくわかるようになった。そして彼が紹介している真理への熱情で心が燃えた。

突然聖霊がくだって、説教が中断された。「ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである。

そこで、ペテロが言い出した、『この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこばみ得ようか』。こう言っ

て、ペテロはその人々に命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた」。

こうして福音は異邦人や外国の人々に伝えられ、彼らは聖徒と同じ市民になり、神の家族の中に加えられた。コルネリオとその家族の者たちの改宗は、これから集められる収穫の初穂にほかならなかった。これがきっかけとなり、神の恵みの働きは異教の町に広くひろめられた。

今日、神は身分の低い者だけでなく、身分の高い者の中からも魂を求めておられる。コルネリオのように、主がみわざに携わらせたいと思っておられる人々がこの世に大勢 [1409]
いる。彼らの心は神の民と共感しながら、なお、彼らが世と結ばれているきずなも固いのである。彼らがキリストの側に立つためには道徳的な勇気が必要である。これらの魂にとっては、特別な努力が払われなければならない。彼らは責任や交際のために大きな危険にさらされているからである。

神は身分の高い人々に福音を伝える、熱心で謙遜な働き人を求めておられる。今ははっきり見ることはできないが、純粋な改心をもたらすように働く奇跡がある。この地上でどんなに偉い人々でも、不思議を行う神の力の及ばないところにいるのではない。もし、神と共に働く者が機会をとらえて、勇敢に、忠実に働くならば、神は責任のある地位にいる人々や、知的で感化力のある人々を改心させるのである。聖霊の力によって多くの人々が神の原則を受け入れるようになる。真理に改宗した人々は、神に協力する働き人となって光を伝えるであろう。彼らは、おろそかにされていたこの階級の他の人々に、特別の重荷を感じるであろう。時間と金銭が神の働きのためにささげられ、新しい能力と力が教会に加えられるであろう。

コルネリオは受けた教えをそのまま生活に実践していたので、神は彼がもっと多くの真理を受けるように事をお運びになった。天の宮廷から使者が送られて、このローマの軍人とペテロに現れた。それはコルネリオがさらに大いなる光に導いてくれる者と接触するためであった。

この世にはわれわれが考えているよりも、神のみ国に近づいている者がたくさんいる。神はこの暗い罪の世にも多くの貴重な宝石のような人々を知っておられ、彼らにご自分の使者をお送りになる。キリストの側に立とうとする者

はどこにでもいる。地上のどんな特権よりも神の知恵を尊んで、忠実に光をかかげる者となる人が大勢いる。キリストの愛に迫られた彼らは、キリストのみもとに行くように他の人々に迫るのである。

ユダヤにいる兄弟たちは、ペテロが異邦人の家に行って、集まった人々に福音を宣べ伝えたことを聞くと驚き、また憤った。そして僭越としか思われないそうしたやり方は、かえって彼自身の教えを妨げる結果になるのではないかと彼らは恐れた。彼らはその後ペテロに会ったとき、「あなたは、割礼のない人たちのところに行って、食事を共にしたということだが」と言って、彼を厳しく非難した。

ペテロは事の次第を残らず彼らに明かして、幻に関する経験を語り、その幻によって自分は、割礼を受ける受けないという宗教上の差別をつけたり、異邦人をけがれた者とみなしたりしてはならないことを教えられたと言って説得した。また異邦人の家に行くように命じられたこと、み使いたちがやってきたこと、カイザリヤへの旅のこと、コルネリオと会ったことを彼らに聞かせた。ペテロは百卒長との会見の内容をくわしく話し、百卒長がまず幻を受けて自分に使いを送ったという事情を説明した。

「わたしが語り出したところ、聖霊が、ちょうど最初わたしたちの上にくだったと同じように、彼らの上にくだった。その時わたしは、主が『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によってバプテスマを受けるであろう』と仰せになったことばを思い出した。このように、わたしたちが主イエス・キリストを信じた時に下さったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったとすれば、わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか」と、ペテロは経験したことを話した。

この説明を聞くと兄弟たちはだまってしまった。ペテロのとった方法は、神のご計画をそのまま実行したものであり、自分たちの偏見や排他的な気持ちは福音の精神に全く反するものであることをさとって、彼らは神をさんびし、「それでは神は、異邦人にも命にいたる悔改めをお与えになったのだ」と言った。

こうして、争いもなく偏見は打ち破られ、長年の習慣によって築かれていた排他的な気持ちは捨てられ、異邦人にも福音を宣べ伝える道が開かれた。

[1410]

第15章　牢獄から救われたペテロ

本章は使徒行伝12：123に基づく

「そのころ、ヘロデ王は教会のある者たちに圧迫の手をのばし」た。

当時、ユダヤの政府はローマの中帝クラウディウスの支配下にあったが、ヘロデ・アグリッパ王が実権を握っていた。ヘロデ王はまたガリラヤの領主でもあった。彼はユダヤ教への改宗者であると公然と名のり、うわべだけはユダヤのおきての祭儀を熱心に守った。ヘロデはユダヤ人の支持を受けて、自分の地位と栄誉を確保したいと思い、ユダヤ人の望みどおりにキリスト教会を迫害し、信者の家や所有物を破損し、教会の指導者らを投獄した。彼はヨハネの兄弟ヤコブを獄に投げ込んで、もう1人のヘロデ王が預言者ヨハネを打ち首にしたように、剣で彼を殺すために死刑執行人を送った。このような行為が、ユダヤ人を喜ばせたことを知って、彼はペテロをも投獄した。

これらの残虐行為がなされたのは過越の祭の時であった。ユダヤ人はエジプトからの救済を祝い、神のおきてに対する熱誠を装っていながら、一方ではキリストの信者を迫害し殺すことによって、そのおきてのすべての原則を犯していた。

ヤコブの死は信者たちの間に、大きな悲しみと驚きをひきおこした。ペテロまでも投獄されたので、教会はこぞって断食し、祈った。

ヤコブを死刑にしたヘロデの行為はユダヤ人の称賛を受けたが、一部の人々はそのやり方があまり非公式なのを不平に思って、公然と処刑が行われれば信者や彼らに同情する人々を、もっとおびやかすことができたにちがいないと主張した。そこでヘロデはペテロを監禁しておいて、彼の死刑を見せ物にし、ユダヤ人たちをもっと満足させてやろうと思った。しかしその時エルサレムに集まっていた大勢の人々の前で、大使徒ペテロを引き出して処刑するのは危

険ではないかというものがあった。死刑にされる彼の姿を見たら、群衆の同情心を買うかもしれないと思われたのである。

祭司や長老たちはまた、ペテロが人々に、イエスの一生とご品性を研究させずにはおかないようなあの力強い訴えを、またしかねないかもしれないと恐れた。それは祭司たちがどんなに議論をつくしても、論駁することができなかった訴えである。キリストの主義を唱道するペテロの熱意に動かされて、多くの者が福音のために献身したので、役人たちは、祭のために町にやってきた群衆の前で、信仰を擁護する機会がペテロに与えられれば、王の権限により彼を釈放せざるを得なくなるのではないかと恐れた。

いろいろな口実にかこつけて、ペテロの死刑は過越の祭の後まで延期されていたが、そのあいだ、教会員は心を深くさぐり祈る時が与えられた。訴因からみてもペテロが助命されることはできないと彼らは感じていたからである。彼らは神の特別の助けがないかぎり、キリストの教会は破壊されるというところまできていることを知っていた。

そうしているあいだも各国からやってきた参拝者たちは、神を礼拝するために献堂された宮をたずねていた。黄金や宝石に輝く宮は美と壮麗そのものであった。しかし主はもはやその美しい宮殿におられなかったのである。一民族としてのイスラエルはすでに神から離れていた。キリストはこの地上でのみわざの終わりごろ、宮の内部を最後に御覧になった時、「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」と言われた（マタイ23：38）。これまでキリストは宮をみ父の家と呼んでおられたが、神のみ子がその宮から出て行かれた時、神の栄光のために建てられた宮には永久に神の臨在はなくなった。

ついにペテロの処刑の日が決まったが、信者たちの祈りはなお天にのぼっていた。彼らが精力と同情の気持ちを注ぎつくして熱心に助けを祈り求めている時、神のみ使いたちは投獄されている使徒を見守っていた。

ヘロデは以前に、使徒たちが獄から逃げたことがあるのをおぼえていたので、今度は用心に用心をした。どうみても救われる可能性がないように、ペテロは16人の兵卒に夜昼寝ずの番で監視された。また獄房では2本の鎖につながれて2人の兵卒の間におかれ、その鎖はそれぞれ兵卒の手首に [1411]

結びつけてあった。ペテロが少しでも動けば必ず彼らに気づかれた。獄の戸口の錠は厳重におろされ、屈強な番兵が見張りをしているために、人間がどう手をくだしても全然助けるすべも、逃げるすべもなかった。しかし人間の窮地は神の好機である。

ペテロはこうして岩を切り抜いて造った獄房に監禁され、その戸口には厳重なかぎとかんぬきがかかっていた。番兵たちは囚人の保護の責任をもたされた。しかし人間の救助手段を全然断ち切ってしまったような錠前もかんぬきもローマの番兵も、ペテロを救われる神の勝利をいっそう輝かしいものとする手段としかならなかった。ヘロデは全能の神に逆らって手をあげていたが、全く敗北する。神はその偉大な力を発揮されて、ユダヤ人が滅ぼそうとたくらんでいた尊い命を、まさに救おうとしておられた。

処刑が予定されていた前夜のことである。ペテロを助けるために力強い天使が1人送られる。神の聖徒ペテロを閉じ込めていた頑丈な門は人手によらずに開く。至高の神のみ使いがそこを通り抜けると、門は音もなく閉まる。天使が獄房に入っていくと、ペテロは神を信頼しきって安らかに眠っている。

天使をとりまいていた光が獄房いっぱいにひろがるが、ペテロは目をさまさない。天使の手が触れるのを感じ、「早く起きあがりなさい」という声を聞いてはじめて目をさました彼は、天の光が獄房に輝き、大いなる栄光の天使が前に立っているのを見る。彼は語りかける言葉に機械的に従い、立ち上がりながら両手をもちあげた時、鎖が手首から落ちているのにぼんやり気がつく。

再び天使の声が「帯をしめ、くつをはきなさい」と命じると、ペテロは天使を不思議そうに見つめながら、機械的にその命令に従い、夢か幻を見ているにちがいないと思う。またもや天使が「上着を着て、ついてきなさい」と命じる。天使が戸口のほうへ歩き出すと、日ごろおしゃべりなペテロも、この時ばかりは驚いて物も言えずにだまってついていく。彼らが番人をまたいで通り過ぎ、錠前の頑丈な門のところに来ると、門はひとりでに開いて、すぐまた閉じる。その間、内側と外側の番人は動かずにその部署についている。

次にまた内外とも見張りのついている2番目の門に来る。それははじめの門と同じように開き、蝶つがいのきしる音も鉄のかんぬきのガチャガチャいう音もしない。2人はそこを通り抜ける。門はまた音もなく閉じる。第三の門も同じようにして通り過ぎ、表通りに出る。1言も声はなく、足音もしない。まばゆい光につつまれた天使は音もなく前を歩いていくので、ペテロはとまどい、夢ではないかと思いながら、そのあとからついて行く。こうして2人が1つの通りを過ぎると、自分の任務を果たした天使は突然姿を消す。

天来の光が消えると、ペテロは真のやみの中に取り残されたように感じた。しかし暗やみに目がなれて来ると、その暗さも次第にうすらいできた。彼はただ1人静かな通りに立って、冷たい夜風にさらされていた。ようやく彼は自分が自由の身となって、なじみの深い町の一角にいることを悟った。彼は自分のいる場所がわかった。そこは彼がたびたび来たところで、翌朝はそこを通って刑場に向かうはずであった。

ペテロは過ぎ去った数分間の出来事を思い起こそうとした。彼はくつも上衣も取り去られて2人の兵卒の間につながれ、眠ったことを思い出した。今自分の身のまわりをよく調べてみると、ちゃんと上衣を着て、くつもはいていた。残酷な鉄かせをはめられてはれあがっていた手首は自由になっていた。彼は自分の救われたのが気の迷いでも夢でも幻でもなく、喜ばしい現実であることをさとった。あすは死刑に処せられるはずであったのだが、見よ、天使が彼を獄屋と死から救い出したのである。「ペテロはわれにかえって言った、『今はじめて、ほんとうのことがわかった。主が御使をつかわして、ヘロデの手から、またユダヤ人たちの待ちもうけていたあらゆる災から、わたしを救い出して下さったのだ』」。 [1412]

使徒は、兄弟たちが集まって、彼のためにその瞬間も熱心に祈っている家へとすぐさま向かった。「彼が門の戸をたたいたところ、ロダという女中が取次ぎに出てきたが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり、門をあけもしないで家に駆け込み、ペテロが門口に立っていると報告した。人々は『あなたは気が狂っている』と言ったが、彼女

は自分の言うことに間違いはないと、言い張った。そこで彼らは『それでは、ペテロの御使だろう』と言った。

しかし、ペテロが門をたたきつづけるので、彼らがあけると、そこにペテロがいたのを見て驚いた。ペテロは手を振って彼らを静め、主が獄から彼を連れ出して下さった次第を説明し」、それから彼は、「どこかほかの所へ出て行った」。神が彼らの祈りを聞き、それに答え、ペテロをヘロデの手から救い出されたので、信者たちの胸は喜びとさんびでいっぱいになった。

翌朝、大群衆が使徒の死刑を見るために集まった。ヘロデはペテロを迎えに役人たちを獄につかわした。仰々しい武装と監視つきで彼を連れ出すことになっていた。それは彼が逃亡できぬようにし、また、すべての同情者をおどし、王の威力を示すためであった。

戸口にいた番人はペテロが逃げたことを発見して恐怖にとりつかれた。彼らは命をかけて責任を負うようにと特別に言いわたされていたので、特に寝ずの番をしていたのである。役人たちがペテロを迎えにやってきた時、番兵たちはまだ獄の戸口にいて、錠前もかんぬきもしっかりかけられ、鎖は2人の兵卒の手首にがっちりとついていた。しかし囚人がいなくなっていたのである。

ペテロが逃げたという知らせがヘロデに届いた時、彼は激怒した。彼は番兵たちの不忠実をとがめて、死刑を言いわたした。人間の力によってペテロが救い出されたのではないことをヘロデは知っていたが、神の力が彼の計画を失敗させたとは断固として認めず、大胆に神に挑戦する態度を固めた。

ペテロが獄から救い出されて間もなく、ヘロデはカイザリヤに行った。彼はそこで大きな祭りをもよおし、人々の称賛をかりたてて拍手かっさいを得ようとした。この祭りには諸国から道楽者が集まり、宴会や酒盛りでにぎわった。ヘロデは華麗に仰々しく人々の前に姿を見せ、雄弁な演説を行った。金銀に輝く衣をまとった彼は絢爛たる姿であった。衣のひだは太陽の光を受けてきらびやかに輝き、見上げる人々の目はくらんだ。彼の堂々とした容姿とよく選択された言葉の威力は列席する人々を強い力でゆさぶった。彼らの感覚はすでに美食と酒のために異常になり、ヘロデの着飾った装いに目がくらんで、彼の振る舞いや雄弁

に魅了されていた。そして、これほど立派な押し出しと雄弁をそなえた人間はめずらしいと言って、熱狂的なお世辞を彼にあびせた。さらに彼らは、これまでヘロデを統治者として尊敬していたが、今後は神として拝まねばならないと言った。

こうして1人の卑劣な罪人を称賛している人々の中には、数年前に逆上した叫びをあげて、イエスを殺せ！彼を十字架につけよ、十字架につけよ！とどなった者もいた。ユダヤ人たちはしばしば、旅によごれた粗末な衣の下に神の愛を包んでおられたキリストを受け入れず拒んだ。キリストの力は、単なる人間にはできないみわざをとおして、彼らの前にあらわされたが、彼らはその粗末なみなりからいのちと栄光の主を見きわめることができなかった。だが彼らは、金銀をあしらった立派な衣の下に、堕落した残酷な心を秘めている堂々たる王を、神として拝もうとしていた。

ヘロデは自分が賛辞も尊敬も受けるに値しない者であることを知っていたが、人々の崇拝をまるで当然のことのように受けていた。「これは神の声だ、人間の声ではない」という叫びがわき上がるのを聞いて、彼の心は勝利におどり、傲慢な満足感が顔面にみなぎった。

しかし突然、恐ろしい変化が彼を襲った。彼は死人のように青ざめ、苦しみに顔がゆがんだ。大粒の汗が毛穴から流れ出て、彼は一瞬、苦痛と恐怖にすくみあがったように [1413]
立っていた。それから、恐怖におびえている友人のほうへまっさおな顔を向け、うつろな絶望的な調子で叫んだ。おまえたちが神としてあがめた者が打たれて死ぬぞと。

彼は耐えがたいほどの苦しみにさいなまれながら、酒宴をもうけ自分を誇示した場所から運び去られた。たった今まで、その大群衆の賛辞と崇拝を得々として受けていた彼は今、自分よりも強い統治者の手中にあることを悟った。彼は自責の念におそわれた。彼はキリストの弟子たちを容赦なく迫害したこと、罪もないヤコブを死刑にせよと残酷な命令を出したこと、使徒ペテロを殺そうとはかったことを思い出した。

また悔しさと失望の怒りにまかせて、獄の看守たちにわけのわからない恨みを晴らしたことを思い出した。彼は今、神が冷酷な迫害者なる自分をさばいておられるのを感

じた。そして肉体の苦痛と心の苦しみからのがれるすべもなく、絶望に陥った。

ヘロデは「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」という神の律法を知っていた（出エジプト20：3）。彼は人々の崇拝を受け、おのれの不法の秤を満たし、みずから主の正当な怒りを招いたことを知った。

ペテロを救い出すために天の宮廷からきたこの同じ天使が、ヘロデに怒りとさばきをもたらす使者となった。天使はペテロの肩をたたいてその眠りをさましたが、今度はこれとちがった一撃をこの邪悪な王に加えて、その高ぶりをくじき、大能の神の刑罰をくだした。ヘロデは神の報復の刑罰を受けて、心も体も苦しみもだえながら死んでいった。

この神の正義のあらわれは、人々の心を強く動かした。キリストの使徒は獄と死から奇跡的に救われたが、彼の迫害者は神ののろいを受けて打たれたという知らせが国々に伝わり、多くの人々をキリストの信仰に導く手段となった。

天使に命じられたところに行って、真理を求めている1人の人に会ったピリポの経験、神からの使命をもった天使の訪問を受けたコルネリオの経験、投獄され死刑の宣告を受けながらも無事に天使に助けられたペテロの経験、どの経験もみな、天地間のつながりの密接なことを物語っている。

こうした天使のおとずれの記録は、神の働き人に力と励ましを与えるにちがいない。今日、使徒時代と全く同じように、天の使者たちは地上をくまなくおとずれて、悲しむ者を慰め、罪びとを守り、人々の心をキリストに導いている。われわれは天使たちを見ることはできないが、彼らはわれわれと共にいて導き、守り、行く手を示しているのである。

天はその神秘的なはしごにより、地へと近づけられている。その土台は地に固くすえられ、その頂点は神のみ座にまで達している。

天使たちはその明るく輝くはしごを絶えず上ったり下りたりして、求める者、苦しみ悩む者の祈りを神のみもとに携え行き、祝福と希望、勇気と助けを人の子らに運んでくる。これら光の天使たちは人の周囲に天の雰囲気をつく

り、われわれを目には見えないもの、永遠のものへと向けさせる。われわれは生まれながらの視力でその姿を見ることはできないが、霊的な幻によって天の事を認識できる。霊的な耳だけが天の調和ある声を聞くことができるのである。

「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」（詩篇34：7）。神は選ばれた者たちを惨禍から救い、「暗やみに歩きまわる疫病」や「真昼に荒す滅び」から彼らを守るよう天使たちを任命されている（詩篇91：6）。天使たちは、人が友と語り合うように繰り返し人々と語り合い、彼らを安全な場所へ導いてきた。天使たちの励ましの言葉は、幾たびとなく信仰者の打ちしおれた精神を生きかえらせ、彼らの心を高く、地よりも上にあるものへと向けさせ、勝利者が偉大な白い御座を囲むときに受ける白い衣、冠、勝利のしゅろの枝を信仰によって見上げさせてきた。

試練にあっている者、苦しんでいる者、誘惑に陥っている者の近くに来るのが天使の働きである。彼らはキリストが身代わりにいのちをささげられた人々のために、たゆみなく働いている。罪びとが悔い改めて救い主のみもとに [1414]
行くと、天使たちはそのおとずれを天に携えて行く。すると天使たちのあいだに大きな喜びが起こる。「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない99人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう」（ルカ15：7）。暗黒を追いやって、キリストについての知識をひろめるわれわれの努力が成功するたびに、天にそのことが知らされる。父なる神のみ前にその行為が取り上げられると、全天軍は喜びにわくのである。

天の支配者や権威者たちは、神のしもべたちが、見たところ思わしくない状況のもとで続けている戦いを見守っている。クリスチャンが救い主のみ旗のもとにはせ参じ、信仰の戦いを立派に戦いぬくとき、新しい勝利が遂げられ、新しい名誉が勝ちとられているのである。天使たちはみな神のつつましい信徒たちに仕えている。この地上で神の働き人の軍がさんびの歌をうたうと、天の聖歌隊も彼らに合わせて神とそのみ子にさんびをささげる。

われわれは天使の働きについて、現在以上によく理解する必要がある。真実の神の子らはみな、天使たちの協

力を受けていることを忘れずにいるがよい。目には見えないが、光と力の軍隊は、神を信じ、神の約束を求める柔和で謙遜な者たちにつきそっているのである。ケルビムやセラピムや力にぬきんでた天使たちが神の右手に立っているが、「すべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたもの」たちである（ヘブル1：14）。

第16章　彼らは「クリスチャン」と呼ばれた

本章は使徒行伝11：1926、13：13に基づく

迫害によって弟子たちがエルサレムから散らされたあとに、福音の使命は、パレスチナの境界線を越えた地方にまで急速に宣べ伝えられ、信徒の小さな集団は多数の重要な伝道の中心を形成した。弟子たちのある者は「ピニケ、クプロ、アンテオケまでも進んで……御言を語っ」た。彼らの伝道はいつも、ヘブル語とギリシャ語を話すユダヤ人たちに限られていた。ユダヤ人の大居留地は当時、世界のほとんどすべての都市の中に見ることができた。

福音を喜んで受け入れたと言われている場所の1つに、当時シリヤの首都であったアンテオケがある。その人口が密集した中心地から、広範囲にわたる商取引が行われていたので、そこには各国の人が大勢集まっていた。そのうえ、アンテオケは健康的な場所にあり、環境は美しく、富と教養と優雅さが見いだされたので、快楽を愛する者たちが好んで行く場所として知られていた。使徒たちの時代には、それはぜいたくと罪悪の町となっていた。

何人かの弟子たちがクプロ人とクレネ人の中から「主イエスを宣べ伝え」にやってきて、アンテオケで福音を公に説いた。「主のみ手が彼らと共にあったため」、また彼らが熱心に働いたために成果があがり、「信じて主に帰依するものの数が多かった」。

「このうわさがエルサレムにある教会に伝わってきたので、教会はバルナバをアンテオケにつかわした」。新しい伝道地に着いたバルナバは、みわざがすでに神の恵みによって果たされているのを見て、「よろこび、主に対する信仰を揺るがない心で持ちつづけるよりにと、みんなの者を励ました」。

アンテオケでのバルナバの働きは豊かに恵まれて、信者の数が増えていった。働きが拡張するにつれて、バルナバは神の摂理による好機を発展させるために、だれか適当な

助手がほしいと思った。そこでバルナバは、パウロを捜しにタルソへ出かけて行った。パウロはしばらく前にエルサレムを去って、「シリヤとキリキヤとの地方」で、「以前には撲滅しようとしていたその信仰を」宣べ伝えながら働いていたのである（ガラテヤ1：21、23）。バルナバは無事にパウロを見つけ出し、アンテオケに行って一緒に伝道してくれるように、うまく頼みこんだ。

[1415] 人口が多いアンテオケの町は、パウロにとってすばらしい伝道地であった。彼の学識、知恵、熱意は、その文化都市の住民や、そこをたびたびおとずれる者たちに、力強い感化を及ぼした。彼は、バルナバが必要としていたとおりの助けとなった。1年間、この2人の弟子は力を合わせて忠実に伝道し、多くの人々に世のあがない主、ナザレのイエスのことを伝え、救いの知識をもたらした。

弟子たちがはじめてクリスチャンと呼ばれたのは、アンテオケにおいてであった。彼らの説教や教えや話題の中心がキリストであったので、この名がつけられたのである。彼らは、キリストが公生涯を送っておられたころ、キリストと個人的に交わる恵みを受けた日々の出来事を、繰り返し詳しく語った。彼らは疲れを知らずに、キリストの教えやいやしの奇跡について語った。また、ゲッセマネの園でのキリストの苦悩や、裏切り、裁判や処刑、敵たちから負わされた侮辱や責め苦に耐えられたキリストの忍耐と謙遜、また、彼を迫害した人々のために祈られた神々しいまでの憐れみについて、弟子たちは唇をふるわせ、目にいっぱい涙をためて語った。キリストの復活、昇天、また堕落した人類の仲保者としての天における働きなどは、弟子たちが喜んで力説する話題であった。彼らはキリストを説き、キリストを通して神に祈りをささげていたのだから、異教徒が彼らをクリスチャンと呼んだのも当然であろう。

弟子たちにクリスチャンという名前をお与えになったのは神であった。これはキリストにつながるすべての者に与えられる、栄誉ある名前である。後にヤコブが「あなたがたをしいたげ、裁判所に引きずり込むのは、富んでいる者たちではないか。あなたがたに対して唱えられた尊い御名を汚すのは、実に彼らではないか」と書いたのは、この名前のことであった（ヤコブ2：6、7）。またペテロは「クリスチャンとして苦しみを受けるのであれば、

恥じることはない。かえって、この名によって神をあがめなさい」。「キリストの名のためにそしられるなら、あなたがたはさいわいである。その時には、栄光の霊、神の霊が、あなたがたに宿るからである」と述べている（ペテロ4：16、14）。

アンテオケの信者たちは、神が自分たちの生活の中に働き、「その願いを起させ、かつ実現に至らせる」ことを認めた（ピリピ2：13）。彼らは、永遠の価値には全くむとんちゃくに見える人々の中に生活していたが、心の正直な人々の関心を引いて、自分たちの愛し仕えている主について、積極的なあかしをたてようと努力した。彼らは、そのささやかな働きをとおして、いのちのことばを効果的なものとする、聖霊の力によりたのむことを学んだ。こうして彼らは、生活のさまざまな歩みをとおして、日ごとにキリストに対する信仰をあかししていった。

アンテオケにいたキリストの信徒たちの模範は、今日世界の大都市に住むすべての信徒に、霊感を与えるものでなければならない。才能があり献身した働き人たちが、公衆伝道の働きを導くために、人口が集中している重要な地方に配置されるのは神の命令による。一方、これらの都市に住む教会員たちが、神から与えられた才能を救霊事業に用いるのも、神が意図されたことである。神の召しに心から従う人々のために、豊かな祝福が準備されている。そのような働き人が、イエスのもとに魂を導く努力をする時、彼らは、他のどのような方法でも接することのできない多くの人々が、賢明な個人的働きかけにいつでも応じる用意ができていることを発見するのである。

今日、地上における神のみわざは、聖書の真理の生きた代表者を必要としている。按手礼を受けた牧師だけが、大都市に警告を与えるにふさわしいのではない。神は、まだ警告されていない都市の必要を考慮するようにと、牧師ばかりでなく、医者、看護婦、文書伝道者、婦人伝道者など、さまざまな才能を持つ献身的な信者で、神のみことばについての知識を持ち、神の恵みの力を知っている人々を求めておられる。時は速やかに過ぎて行くが、まだしなければならないことがたくさんある。現在ある機会がうまく用いられるように、すべての活動を進めていかなければならない。

[1416] パウロは、バルナバと力を合わせてアンテオケで伝道したおかげで、自分は異邦人のための特別な働きに当たるよう神に召されている、との確信を強めた。パウロが改心した時、主は彼を異邦人につかわすと仰せになった。「それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである」（使徒行伝26：18）。アナニヤにあらわれた天使は、パウロについてこう言った、「あの人は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である」（使徒行伝9：15）。のちにパウロ自身にも、エルサレムの宮で祈っている時に天使があらわれて、「行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と命じた（使徒行伝22：21）。

こうして神はパウロを、異邦の広い伝道地に入るよう任命された。そして、この広汎で困難な働きに携わらせるために、神は彼をご自身としっかり結びつけ、恍惚として刃にとらえられた彼の眼に、麗しく栄光に輝く天の光景をお示しになった。彼には「長き世々にわたって、隠されていた……奥義」を知らせる働きが与えられていた（ローマ16：25）。「御旨の奥義」は（エペソ1：9）、「いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には、人の子らに対して、そのように知らされてはいなかったのである。それは、異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に1つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである。わたしは……福音の僕とされたのである。すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである。それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって、わたしたちの主キリスト・イエスにあって実現された神の永遠の目的にそうものである」とパウロは述べている（エペソ3：511）。

神は、パウロとバルナバが、アンテオケの信者たちといっしょにいたその年のあいだ中、彼らの働きを豊かに祝福された。しかし2人とも、まだ正式には福音の働きに任命されていなかった。彼らはいまや、そのクリスチャン経験において、困難な伝道事業をおし進める責任を、神から負わされる段階に達していた。そこでこの責任を遂行するには、教会の機関をとおして得られる、あらゆる便宜が必要であった。

「アンテオケにある教会には、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、……マナエン、およびサウロなどの預言者や教師がいた。一同が主に礼拝をささげ、断食をしていると、聖霊が、『さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい』と告げた」。これら2人の使徒たちは、異教徒の地域に宣教師としてつかわされる前に、断食して祈り、按手によって厳粛に神にささげられた。こうして彼らは、教会の完全な権威をさずけられ、真理を教えるばかりでなく、バプテスマの式をあげたり、教会を組織したりする資格を教会から与えられた。

キリスト教会はこの時、重要な時代に入りつつあった。福音使命を異邦人に伝える働きは、いまや力強く遂行されねばならなかった。そしてその結果、教会は魂の大収穫によって強められるのであった。この働きを指導する任務を受けた使徒たちは、疑いと偏見とねたみとにさらされるであろう。長年のあいだユダヤ人の世界と異邦人の世界とを隔ててきた「隔ての中垣」を打破することについて教えるならば、当然異端のそしりを招くであろう（エペソ2：14）。そして福音の教役者としての彼らの権限が、多くのしっと深いユダヤ人の信者によって、問題とされうであろう。神はご自分のしもべたちが出会わねばならない困難を予見され、彼らが挑戦をものともせずに働くよう、伝道の働きのために彼らを公的に聖別するようにと、啓示を通して教会にお命じになった。彼らの按手礼は、彼らが、 [1417]
福音の喜びのおとずれを異邦人に伝える働きに立つよう、天から任命を受けたことを、公認するものであった。

パウロとバルナバの2人は、すでに神ご自身から任命を受けていたので、手を置く儀式は、新しい恩恵や実際の資格を付け加えるものではなかった。それは任命された職務

を認定することであり、その職務における権威を認知するものであった。按手によって、神の働きの上に教会の印が押されたのである。

ユダヤ人にとってこの形式は意味深いものであった。ユダヤ人の父は、子供たちを祝福する時、敬虔に、子供たちの頭の上に手を置いた。動物が犠牲としてささげられる時、祭司の職権をさずけられている者が、犠牲のささげ物の頭の上に手を置いた。アンテオケの教会の指導者たちが、パウロとバルナバの上に手を置いた時、彼らはその行為によって、この選ばれた使徒たちがすでに任命されていた特別の仕事に献身するにあたり、祝福が彼らにさずけられるよう神に求めたのである。

のちに、手を置く按手の儀式は非常に誤用された。まるで按手礼を受けた者の上に直ちに力が加わり、そのことによって、どんな奉仕の働きにもたちどころに資格ができたかのように、この按手の式に不当な重要性が加えられた。しかしこれら2人の使徒が聖別されるにあたって、単に頭に手を置く行為によって徳がさずけられたというような記録はない。ただ彼らの按手礼の記録と、その式が彼らの将来の働きに関係したという記録があるだけである。

聖霊の導きにより、パウロとバルナバを特定の奉仕に聖別したことの次第は、神の組織された教会において、神が任命された器を通して働かれることを明らかに示している。何年か前に、パウロに関する神の目的が、まず救い主ご自身によりパウロにあらわされたとき、そのすぐあとにパウロは、ダマスコの新しく組織された教会の信者たちに接触するよう導かれた。さらにその教会は、この改宗したパリサイ人の個人的な経験にいつまでも無知のままではいなかった。そして今、その時与えられた神の任命が豊かに遂行されようとしているとき、聖霊は、パウロが異邦人に福音を伝えるための選ばれた器であるというあかしを再び携え、彼と彼の共労者に按手礼をほどこす仕事を、教会に与えたのである。アンテオケの教会指導者たちが「主に礼拝をささげ、断食をしていると、聖霊が『さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい』と仏げた」。

神は地上の教会を光の通路とし、これを通して神の目的や意図をお伝えになる。神は、教会自体の経験と無関係な

経験や、あるいはこれに反するような経験を、しもべの1人にお与えになるようなことはない。また、キリストの体である教会が暗黒の中にあるのに、教会全体に対する神のみこころについての知識を、1人の人間だけにお与えになることもない。み摂理のうちに神は、ご自分のしもべたちを、教会との密接なつながりのうちに置かれ、彼らが自己を信頼せずに、神がみわざを進めるために導いておられる他の人々に、より大きな信頼を持つようにさせられる。

教会の中には、絶えず、個人的な独立に走ろうとする傾向の人々がいる。彼らは、独立心というものが、人を自己過信に陥らせ、兄弟たち、特に、神がその民たちの指導のために任命された職務にある人々の勧告を尊重せず、また彼らの判断を高く評価しないで、自己の判断に頼らせてしまう、ということに気づかないようである。神は教会に、特別な権威と力とをおさずけになった。誰もそれを無視したり軽んじたりする資格はない。そうする者は神のみ声をあなどることになるからである。

自己の判断が最上だと思いがちな人々は、重大な危険にさらされている。光の通路となり、神がこの地上におけるみわざを築き上げ、進展させるために働きかけてこられた人々から、そのような人々を引き離すことが、サタンの巧妙な手口である。真理を前進させるために責任のある指導的立場を神からゆだねられた人々を、無視したり、軽んじたりすることは、神がその民を助け、励まし、力づけるために定められた手段を、拒むことになる。誰でも神の御目的の中で働く者にとって、この手段を見落として、自分の [1418]
光が他の通路を通らず、神から直接に来たものだと思うことは、敵に欺かれ打ち負かされやすい立場に、自分を置いているのである。賢明な主は、すべての信徒が守らなければならない、密接なつながりという手段によって、クリスチャン同志、教会同志が1つに結ばれるよう計画なさった。こうして人間の器は神と協力できるのである。すべての働きが聖霊に従属し、すべての信徒が組織的に、よい指揮のもとに一致し、神の恵みの喜ばしいおとずれを世に伝えるようになるのである。

パウロはこの正式の按手の式を、彼の生涯の働きにおける、新しい重要な時期の始まりを示すものと見なした。彼

はのちにこの時を、キリスト教会における使徒としての、自分の任務の始まりの日と定めている。

福音の光がアンテオケであかあかと輝いていたとき、エルサレムにとどまっていた使徒たちによって、重要な働きが続けられていた。毎年、祭りの時期には、各国から多くのユダヤ人がエルサレムへやってきて、神殿で礼拝をささげた。これらの巡礼者たちの中には、熱烈な信仰者や熱心な預言の研究者たちがいた。彼らはイスラエルの望みである、約束されたメシヤの来臨を待ち望んでいた。エルサレムがこうした来訪者たちでいっぱいになると、使徒たちは、たえず生命の危険にさらされていることを承知の上で、ひるむことなく勇気をもってキリストを宣べ伝えた。神のみ霊は彼らの働きを承認され、多くの者が信仰に導かれた。そうしてこれらの人たちは、世界の各地にあるそれぞれの故郷に戻ると、すべての国民、社会のあらゆる階級に、真理の種子をまきちらした。

この働きに携わっていた使徒たちの中で傑出していたのは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネであり、彼らは、自分たちの故郷にいる人々にキリストを宣べ伝えるよう、神から任命されているという確信を持っていた。彼らは忠実に賢く働き、彼らが見たり聞いたりしたことをあかしして、「預言の言葉」を「いっそう確実」に訴えて（Ⅱペテロ1：19）、「イスラエルの全家」に、ユダヤ人が「十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである」と説いた（使徒行伝2：36）。

第17章　パウロの第一次伝道旅行

本章は使徒行伝13：452に基づく

パウロとバルナバは、アンテオケの兄弟たちにより按手礼を受けてから「聖霊に送り出されて、セルキヤにくだり、そこから舟でクプロ（注・キプロス島）に渡った」。こうして使徒たちは最初の伝道旅行を始めた。

クプロは、ステパノの死後に起こった迫害のために、エルサレムから信者たちがのがれていった場所の1つであった。このクプロから何人かの人々が、アンテオケへと「主イエスを宣べ伝え」に出て行ったのである（使徒行伝11：20）。バルナバ自身も「クプロ生れ」で、彼は自分の親戚にあたるヨハネ・マルコを連れて、パウロと共に、伝道地であるこの島をたずねた（使徒行伝4：36）。

マルコの母はキリスト教に改宗していて、エルサレムにある彼女の家は、弟子たちのための隠れ場であった。そこに行けば、彼らはいつでも必ず歓迎され、しばらくの休息が与えられた。マルコが伝道旅行に加わりたいとパウロとバルナバに申し出たのも、使徒たちが母の家をたずねたときのことであった。彼は心に神の恩寵を感じて、福音伝道の働きに自分のすべてをささげたいと望んだ。

使徒たちはサラミスに着くと、「ユダヤ人の諸会堂で神の言を宣べはじめた。……島全体を巡回して、パボスまで行ったところ、そこでユダヤ人の魔術師、バルイエスというにせ預言者に出会った。彼は地方総督セルギオ・パウロのところに出入りをしていた。この総督は賢明な人であって、バルナバとサウロとを招いて、神の言を聞こうとした。ところが魔術師エルマ（彼の名は『魔術師』との意）は、総督を信仰からそらそうとして、しきりにふたりの邪魔をした」。 [1419]

1つの戦いもなしに、地上に神の国が建設されるのをサタンは許さない。悪の勢力は、福音宣伝のために定められた機関に絶えず戦いをいどみ、暗黒の力は、名声のある、

真に高潔な人々に真理が宣べ伝えられるとき、特に活発に働く。

クプロの総督セルギオ・パウロが福音使命を聞いた時も同様であった。総督は、使徒たちが携えてきた使命を学ぶために彼らを迎えにやった。すると、悪の勢力が魔術師エルマを通じて働き、彼らの悪意をこめた暗示によって彼を信仰からそらし、神の目的をくじこうとした。

このように、堕落した敵は、改宗すれば神のために有能な奉仕をするかもしれない影響力のある人々を、悪の列に加えようと、たえず働くのである。しかし、忠実な福音宣伝者は、敵の手にかかって敗北するなどと恐れる必要はない。すべてのサタン的な感化に抵抗するよう、天来の力で耐え忍ぶことが彼の特権だからである。

パウロは、サタンに激しく悩まされたけれども、敵の手先となっている者を譴責する勇気を持っていた。パウロは「聖霊に満たされ、彼をにらみつけて言った、『ああ、あらゆる偽りと邪悪とでかたまっている悪魔の子よ、すべて正しいものの敵よ。主のまっすぐな道を曲げることを止めないのか。見よ、主のみ手がおまえの上に及んでいる。おまえは盲になって、当分、日の光が見えなくなるのだ』。たちまち、かすみとやみとが彼にかかったため、彼は手さぐりしながら、手を引いてくれる人を捜しまわった。総督はこの出来事を見て、主の教にすっかり驚き、そして信じた」。

魔術師はこれまで、福音の真理の数々の証拠に目をつむっていた。そこで神は正義の怒りから、彼の肉眼を閉じさせて日の光を見えなくさせられたのである。この盲目は永久的なものではなく、一時的なものであった。それは彼に悔い改めをうながし、彼がはなはだしく背いた神に、ゆるしを求めさせるためであった。彼は狼狽した。そしてキリストの教えに逆らう彼の陰険な術は、役に立たなくなった。彼が盲目となり、手探りして歩かなければならなくなったという事実は、使徒たちの行った奇跡、しかもエルマが奇術だとして公然と非難していた奇跡が、神の力によって行われたものだということをみんなに証明した。総督は、使徒たちが語った教えが真理であることを確信して、福音を受け入れた。

エルマは教育を受けた者ではなかったが、サタンの仕事をするのに特に適していた。神の真理を説く人たちは、さまざまな違った形でずるい敵に会うのである。時にはそれは学識のある人たちの中にもいるが、無学なものの場合のほうが多い。サタンは彼らを仕込んで、巧妙に人々をだます道具とするのである。神を恐れ、その偉大な力によって忠実に自分の持ち場に立つことが、クリスチャンの義務である。こうして彼はサタンの軍勢を混乱させ、主のみ名によって勝利することができる。

パウロとその一行は旅を続けて、パンフリヤのペルガに渡った。それは骨の折れる道であった。彼らは困難や不自由な目にあい、四方から危険に襲われた。彼らが通った町や都市や、物寂しい街道で、目に見える危険にも見えない危険にもとり囲まれた。しかし、パウロとバルナバは、神の救いの力に頼ることをすでに学んでおり、2人の心は滅びゆく魂への熱烈な愛に満たされていた。いなくなった羊を捜している忠実な羊飼いのように、彼らは自分たち自身の安楽や都合などは少しも念頭に置かなかった。自己を忘れ、疲れや飢えや寒さにもひるまなかった。彼らは、おりから遠くへさまよい出た人々の救いという、たった1つの目的しか心に留めていなかった。

マルコはここで、不安と落胆にくじけてしまって、主の働きに全心全霊を打ちこんで献身するという彼の目的が、一時ぐらついた。彼は困難に慣れていなかったので、道中の危険と窮乏に気力を失ってしまったのである。彼はこれまで順調な境遇のもとに働いて成功してきたが、いま開拓伝道者たちにしばしばつきまとう反対と危険のさなかにあっては、十字架のよき兵士として困難に耐えることができなかった。 彼は、勇敢な心で危険と迫害と逆境に立ち向 [1420]
かうことを、これから学ぶはずであった。しかし、使徒たちが前進するにつれて、さらに大きな困難が危惧されたとき、マルコは恐れてすっかり勇気を失い、先へ進むことを拒み、エルサレムへ引き返したのである。

パウロは働きを放棄したマルコを非難し、一時は厳しいほどの批判を下していた。一方、バルナバは、経験のないマルコには無理もないことと思っていた。そして彼は、キリストのために役立つ働き人になるにふさわしい資質をマルコが備えていることを見て、マルコにこのまま伝道

を放棄させてはならないと考えていた。このマルコへの配慮は、何年かのちに豊かに報われた。この若者は主のために、また困難な伝道地で福音使命を宣べ伝える働きに、惜しみなく献身したからである。神の祝福とバルナバの賢明な指導のもとに、マルコは貴重な働き人に成長した。

パウロは後にマルコと和解して、共労者として彼を迎えた。パウロはまたマルコを、「神の国のために働く同労者」、「わたしの慰めとなった者」として、コロサイ人たちに推薦した（コロサイ4：11）。さらにパウロは、死ぬ少し前に、マルコのことを「務のために役に立つ」者と言った（Ⅱテモテ4：11）。

マルコが去ってから、パウロとバルナバはピシデヤのアンテオケを訪問し、安息日にユダヤの会堂に行って、席に着いた。「律法と預言書の朗読があったのち、会堂司たちが彼らのところに人をつかわして、『兄弟たちよ、もしあなたがたのうち、どなたか、この人々に何か奨励の言葉がありましたら、どうぞお話し下さい』と言わせた」。このようにして話を勧められたので「パウロが立ちあがり、手を振りながら言った。『イスラエルの人たち、ならびに神を敬うかたがたよ、お聞き下さい』」。それからすばらしい説教が続いた。彼は神がユダヤ人を、エジプトの奴隷の身から救い出された時から導いてこられたその方法の歴史を語り、また、ダビデのすえとして救い主がどのように約束されたかを語った。そして彼は、「神は約束にしたがって、このダビデの子孫の中から救い主イエスをイスラエルに送られたが、そのこられる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に悔改めのバプテスマを、あらかじめ宣べ伝えていた。ヨハネはその一生の行程を終ろうとするに当って言った、『わたしは、あなたがたが考えているような者ではない。しかし、わたしのあとから来るかたがいる。わたしはそのくつを脱がせてあげる値うちもない』」と大胆に述べた。こうして彼は、人間の救い主、預言されたメシヤとしてのイエスを力強く説いた。

この宣言をしてからパウロは言った。「兄弟たち、アブラハムの子孫のかたがた、ならびに皆さんの中の神を敬う人たちよ。この救の言葉はわたしたちに送られたのである。エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを

認めずに刑に処し、それによって、安息日ごとに読む預言者の言葉が成就した」。

パウロは、救い主がユダヤの指導者たちに拒まれた明白な事実を、ためらわずに話した。「なんら死に当る理由が見いだせなかったのに、ピラトに強要してイエスを殺してしまった。そして、イエスについて書いてあることを、皆なし遂げてから、人々はイエスを木から取りおろして墓に葬った。しかし、神はイエスを死人の中から、よみがえらせたのである。イエスは、ガリラヤからエルサレムへ一緒に上った人たちに、幾日ものあいだ現れ、そして、彼らは今や、人々に対してイエスの証人となっている」と使徒は述べた。

使徒はまた続けた、「わたしたちは、神が先祖たちに対してなされた約束を、ここに宣べ伝えているのである。神は、イエスをよみがえらせて、わたしたち子孫にこの約束を、お果しになった。それは詩篇の第2篇にも、『あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ』と書いてあるとおりである。また、神がイエスを死人の中からよみがえらせて、いつまても朽ち果てることのないものとされたことについては、『わたしは、ダビデに約束した確かな聖なろ祝福を、あなたがたに授けよう』と言われた、だから、ほかの箇所でもこう言っておられる、『あなたの聖者が朽ち果てるようなことは、お許しにならないであろう』。事実、ダビデは、その時代の人々に神のみ旨にしたがって仕えたが、やがて眠りにつき、先祖たちの中に加えられて、ついに朽ち果ててしまった。しかし、神がよみがえらせたかたは、朽ち果てることがなかったのである」。 [1421]

そして今、パウロは、メシヤに関するよく知られた預言の成就についてはっきりと述べ、悔い改めと、救い主イエスのいさおしを通して罪のゆるしが与えられることとを、彼らに説いた。「この事を承知しておくがよい。すなわち、このイエスによる罪のゆうしの福音が、今やあなたがたに宣べ伝えられている。そして、モーセの律法では義とされることができなかったすべての事についても、信じる者はもれなく、イエスによって義とされるのである」。

パウロの語る言葉に神のみ霊が伴い、人々を感動させた。旧約の預言に関する彼の訴えと、これらの預言がナザ

レのイエスの働きの中で成就されたと述べる言葉には、約束のメシヤの再臨を待ち望んでいる多くの人々を説得する力があった。そして救いの「よきおとずれ」が、ユダヤ人と同様に異邦人のためでもあるという説教者の確証の言葉は、血縁から言えばアブラハムの子孫の中に数えられていなかった人々に、希望と喜びを与えた。

「ふたりが会堂を出る時、人々は次の安息日にも、これと同じ話をしてくれるようにと、しきりに願った。そして集会が終ってからも、大ぜいのユダヤ人や信心深い改宗者たちが」、その日に与えられた喜びのおとずれを受け入れて、「パウロとバルナバとについてきたので、ふたりは、彼らが引きつづき神のめぐみにとどまっているようにと、説きすすめた」。

ピシデヤのアンテオケでは、パウロの説教により関心が高まり、次の安息日には「ほとんど全市をあげて、神の言を聞きに集まってきた。するとユダヤ人たちは、その群衆を見てねたましく思い、パウロの語ることに口ぎたなく反対した。

パウロとバルナバとは大胆に語った、『神の言は、まず、あなたがたに語り伝えられなければならなかった。しかし、あなたがたはそれを退け、自分自身を永遠の命にふさわしからぬ者にしてしまったから、さあ、わたしたちはこれから方向をかえて、異邦人たちの方に行くのだ。主はわたしたちに、こう命じておられる、「わたしは、あなたを立てて異邦人の光とした。あなたが地の果までも救いをもたらすためである」』。

異邦人たちはこれを聞いてよろこび、主の御言をほめたたえてやまなかった。そして、永遠の命にあずかるように定められていた者は、みな信じた」。彼らはキリストが彼らを、神の子らと認めてくださることをこの上もなく喜び、感謝の気持ちで語られる言葉に耳を傾けた。信じた人々は福音使命を熱心に他の人々に伝えた。こうして、「主の御言はこの地方全体にひろまって行った」。

幾世紀も前に、霊感による筆はこの異邦人の収穫について述べていたのであるが、その預言的なことばはぼんやりと理解されたにすぎなかった。ホセアは次のように言っていた、「イスラエルの人々の数は海の砂のように量ることも、数えることもできないほどになって、さき

に彼らが『あなたがたは、わたしの民ではない』と言われたその所で、『あなたがたは生ける神の子である』と言われるようになる」。そしてさらに、「わたしはわたしのために彼を地にまき、あわれまれぬ者をあわれみ、わたしの民でない者に向かって、『あなたはわたしの民である』と言い、彼は『あなたはわたしの神である』と言う」（ホセア1：10、2：23）。

救い主ご自身も、地上で働いておられたとき、福音が異邦人に宣べ伝えられることを預言された。ぶどう園の譬の中で、イエスは頑固なユダヤ人たちに、「神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう」と言われた（マタイ21：43）。また復活後にイエスは弟子たちに「行って、すべての国民を弟子と」するようお命じになった。警告を受けない者が1人もいないように、弟子たちは「すべての造られたものに福音を宣べ伝え」なければならなかった（マタイ28：19、マルコ16：15）。

パウロとバルナバは、ピシデヤのアンテオケにいる異邦人たちに伝道しているあいだも、みことばを聞き入れる可能性のありそうなところではどこででも、ユダヤ人のために働きかけることをやめなかった。のちにはテサロニケやコリント、エベソ、その他重要な中心地において、パウロの一行はユダヤ人と異邦人に福音宣伝を続けていった。しかし彼らはそののち、真の神とみ子についての知識をほとんど持たない、あるいは全く持たない人々のいろ異教の地に、神の国を築き上げることに主力を注いだ。 [1422]

パウロとその共労者たちの心は「キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない」人々に引きつけられていった。異邦人に対する使徒たちのたゆまぬ伝道により、「以前は遠く離れて」いた「異国人」や「宿り人」たちは、自分たちが「キリストの血によって近いものとなった」こと、また、キリストのあがないの犠牲を信じる信仰により、自分たちも「聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族」になることができることを知った（エペソ2：12、13、19）。

パウロは、信仰が深まるにつれ、一層熱心に、イスラエルの教師たちがかえりみなかった人々の中に、神の国を

打ち建てる仕事に励んだ。彼はたえずイエス・キリストを「もろもろの王の王、もろもろの主の主」とあがめて（テモテ6：15）、信者たちに「彼に根ざし、彼にあって建てられ……信仰が確立され」るようにと説き勧めた（コロサイ2：7）。

信じる者たちにとって、キリストは確かな土台である。この生きた石の上に、ユダヤ人も異邦人も建てることができるのである。それはすべての者を受け入れるのに十分広く、全世界の重みと重荷を十分に支えるほど強い。これはパウロ自身がはっきり認めた事実である。パウロは伝道の最後の時期に、福音の真理をしっかり愛し続けていた異邦人の信者たちにあてて「あなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である」と書いた（エペソ2：20）。

ピシデヤに福音使命が伝わると、アンテオケの不信仰なユダヤ人たちが、盲目的な偏見から「信心深い貴婦人たちや町の有力者たちを煽動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出させた」。

使徒たちはこうした取り扱いにも失望しなかった。彼らは主のみことばを思い出した。「わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである」（マタイ5：11、12）。

福音使命は進展してゆき、使徒たちもそれに励まされた。彼らの働きは、アンテオケのピシデヤ人たちの中で豊かに祝福され、しばらくのあいだみわざの進展をゆだねられた信者たちは、「ますます喜びと聖霊とに満たされていた」。

第18章　豹変した群衆

本章は使徒行伝14：126に基づく

ピシデヤのアンテオケをあとに、パウロとバルナバはイコニオムへ行った。ここでもアンテオケの場合と同じように、ユダヤ人の会堂に入って伝道を始めた。そして、めざましく成功し、「ユダヤ人やギリシヤ人が大ぜい信じた」。しかしイコニオムでも、使徒たちが伝道した他の場所の場合と同じように、「信じなかったユダヤ人たちは異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対して悪意をいだかせた」。

しかし使徒たちは、彼らの使命から身をはずさなかった。多くの人々がキリストの福音を受け入れていたからである。反対やねたみ、偏見に直面しながらも、「大胆に主のことを語」り、働きを続けたので、神は「彼らの手によってしるしと奇跡とを行わせ、そのめぐみの言葉をあかしされた」。神の承認を受けたこのような証拠は、説得を [1423]
受け入れる者たちに力強い感化を与え、福音への改宗者が増えていった。

使徒たちの伝える福音使命の人気が高まるにつれて、信じようとしないユダヤ人たちのあいだにねたみと憎しみがわきあがり、彼らはすぐさまパウロとバルナバの仕事をやめさせようとした。虚偽や誇張のある報告を流して、彼らは町全体が暴動にまで扇動されるおそれがあると、官憲の心配を引き起こした。そして、大勢の人々が使徒たちにひきつけられているが、それは秘密の危険な企てがあるためだなどと言い出した。

このような訴えのために、弟子たちは繰り返し官憲の前に引き出された。しかし弟子たちの答弁は明瞭で、常識的であり、また、彼らが教えていることに関する供述は非常に穏やかでわかりやすかったので、彼らの利益になるような強い感化を及ぼした。長官たちは、自分たちが聞いていた偽りの供述のために、使徒たちに偏見を持ってはいた

ものの、使徒たちを有罪にしようとは思わなかった。彼らは、パウロとバルナバの教えが、人々を高潔にし、法律をよく守る市民にする助けになっていることや、もし使徒たちの教えが受け入れられれば、町の道徳と秩序がさらによく保たれることを、認めるほかなかった。

弟子たちが直面した妨害を通して、真理の使命は多くの人々にひろまった。新しい教師たちの仕事の邪魔をしようとするユダヤ人たちの努力が、結果的にはただ新しい信者の数を加えるばかりになったことを、ユダヤ人たちは知った。「そこで町の人々が二派に分れ、ある人たちはユダヤ人の側につき、ある人たちは使徒の側についた」。

ユダヤ人の指導者たちは、このように事態が一変したことに激怒して、暴力を用いてでも自分たちの目的を達成しようとした。彼らは無知で騒々しい暴徒の悪感情をかきたてて、うまく騒動を起こさせ、それを弟子たちの教えのせいにした。彼らは、この偽りの訴えによって、長官たちも自分たちの目的を遂げるのを助けてくれるだろうと思った。彼らは、使徒たちに弁明の機会を持たせないようにし、群衆にはパウロとバルナバに石を投げて邪魔をさせ、使徒たちの働きを挫折させようと決心した。

使徒たちの友人たちは、信者ではなかったが、ユダヤ人たちの悪意ある計画を彼らに警告し、激情的な群衆の前に不必要に姿を現さず、生命を守ってのがれるようにと勧めた。そこでパウロとバルナバはしばらくのあいだ、信徒たちだけで働きを続けるように依頼して、ひそかにイコニオムを去った。しかし、彼らはそのまま戻ってこないつもりではなかった。人々の興奮がさめたら戻ってきて、自分たちの始めた仕事を完成させようと思っていた。

どの時代でも、どの国でも、神の使命者たちは、天の光を故意に拒もうとする人々からの激しい反対にあうよう定められてきた。しばしば誤報や虚偽のために、神の使命者が人々に接近できるはずの戸が閉ざされ、福音の敵のほうが勝利したかのように見えることがある。しかし、これらの戸が永久に閉ざされていることはできない。しばしば、神のしもべたちがしばらくしてのち、戻ってきて再び働きを始めるとき、彼らがみ名をあがめる記念物を建てることができるように、神は彼らのために力強く働いてこられた。

使徒たちは迫害に追われて、イコニオムからルカオニヤのルステラとデルベへ行った。これらの町の住民は大部分が迷信深い異教徒であったが、その中には、喜んで福音の使命を聞いて受け入れる者たちもいた。使徒たちは、ユダヤ人の偏見や迫害を避けたいと思って、これらの場所とその周囲の地方で働くことにきめた。

ルステラの町には少数のユダヤ人が住んでいたが、ユダヤ人の会堂はなかった。ルステラの住民の多くは、ジュピターにささげられた神殿で礼拝していた。パウロとバルナバがこの町に現れ、ルステラの人たちをまわりに集めて福音の単純な真理を説明すると、多くの者はその教えを、ジュピターの礼拝における彼ら自身の迷信的な信仰と関連させようとした。

使徒たちはこれらの偶像礼拝者に、創造主である神について、また、人類の救い主である神のみ子についての知識を与えようとした。彼らはまず、神のすばらしいみわざ [1424]
に注意をひいた。太陽や月、星、四季の美しい秩序、雪をいただく雄大な山々、そそり立つ木々、その他、自然のさまざまな驚異など、人間の理解をこえたすばらしいわざに人々の目を向けさせた。こうした全能者である神のみわざを通して、宇宙の偉大な支配者を思うように、異教徒たちの心を導いた。

創造主に関するこうした基本的な真理を明らかにして、使徒たちはルステラの人々に、人の子らを愛するがゆえに天からくだって来られた、神のみ子について教えた。彼らは、キリストのご生涯とその働き、キリストが、救うためにこられたその人々から拒まれたこと、裁判と十字架、復活、昇天、天における人類の仲保者としての働きについて話した。こうして聖霊と神のみ力により、パウロとバルナバはルステラの町で福音を説いた。

ある時パウロが、病気で苦しんでいる者をいやしてくださる方としてのキリストの働きについて、人々に語っていると、彼は聴衆の中に足の不自由な人がいるのを見た。その男はパウロにじっと目を注いでいたが、彼の言葉を受け入れ信じた。パウロはこの苦しんでいる男に心から同情した。そしてこの男に「いやされるほどの信仰が」あるのを認め、偶像礼拝者たちが集まっている目の前で、パウロは足の不自由な男にまっすぐに立ちなさいと命令した。これ

までこの病人は座る姿勢しかとることができなかったが、即座にパウロの命令に従い、生まれて初めて自分の足で立ちあがった。この信仰の努力とともに力がわきあがり、足が不自由だった男は「踊り上がって歩き出した。

群衆はパウロのしたことを見て、声を張りあげ、ルカオニヤの地方語で、『神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお下りになったのだ』と叫んだ」。この言葉は、神々が時々地上をおとずれるという彼らの伝説に一致するものであった。彼らはバルナバを、神々の父であるゼウスと呼んだ。彼が徳の高い容貌に威厳のあるあごひげを蓄え、穏やかな慈悲深い表情をしていたからである。パウロは熱心で行動的であり、警告や訓戒の言葉を雄弁に用いて「おもに語る人なので」、彼らはパウロをヘルメスだと信じた。

ルステラの人々は、感謝の気持ちを示したいと熱望し、使徒たちに敬意を表すようにゼウスの祭司を説き伏せた。そこで祭司は「群衆と共に、ふたりに犠牲をささげようと思って、雄牛数頭と花輪とを門前に持ってきた」。パウロとバルナバは、人々の前から退いて休息しようとしていたので、そんな準備には気づかなかった。しかしまもなく、彼らは音楽の音と群衆の熱狂した叫びに気がついた。群衆が彼らの滞在している家の前に来ていたのである。

使徒たちは群衆のやってきた目的と興奮した様子を知って、それ以上の行為をやめさせたいと思い、「上着を引き裂き、群衆の中に飛び込んで行」った。パウロは鳴り響くような大声で彼らの注意をひいた。するとその声が人々の叫びよりも大きかったので、群衆の騒ぎが突然静まった。そこでパウロは言った、「皆さん、なぜこんな事をするのか。わたしたちとても、あなたがたと同じような人間である。そして、あなたがたがこのような愚にもつかぬものを捨てて、天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった生ける神に立ち帰るようにと、福音を説いているものである。神は過ぎ去った時代には、すべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれたが、それでも、ご自分のことをあかししないでおられたわけではない。すなわち、あなたがたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満

たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである」。

自分たちは神ではないと使徒たちが極力否定したにもかかわらず、また、礼拝すべき唯一のお方である真の神へ、人々の心を向けようとパウロが努力したにもかかわらず、犠牲をささげようとする異教徒たちの気持ちを変えることは不可能に近かった。2人が本当の神だという彼らの信念は固く、またその熱狂は大変なもので、自分たちの誤りを認めようとしなかった。記録には「やっとのことで……思い止まらせた」と記されている。

ルステラの人たちは、使徒たちが奇跡的な力を発揮するのを自分たちの目で見たのだと言い合った。彼らは、これまで絶対に歩けなかった男が完全な健康と力を与えられて喜んだのを見たのである。パウロがよくよく言いきかせ、自分とバルナバは天の神と、偉大な医者である神のみ子とを代表する使命を持っている者だと懸命に説明すると、ようやく人々は自分たちの計画をとりやめる気になった。 [1425]

ルステラでのパウロとバルナバの働きは、「アンテオケやイコニオムから押しかけて」きた「あるユダヤ人たち」のために、突然妨害された。この人たちは、使徒たちがルカオニヤ人のあいだで働いて成功していることを知り、使徒たちのあとをつけて、迫害しようとして来たのだった。ルステラに着くと、このユダヤ人たちは自分たちの心の動機となっているのと同じ冷酷な精神を、たちまち人々に吹き込んだ。今までパウロとバルナバを神様のように思っていた人たちが、うそと中傷の言葉によって、実際は使徒たちは人殺しより悪い人間で、死に値する者だと信じ込まされてしまった。

ルステラの人たちは、使徒たちに犠牲をささげる特権を拒絶されて失望したことから、2人を神として歓呼しようとしたときと同じ熱狂ぶりで、今度はパウロとバルナバに反対しようとした。ユダヤ人に扇動されて、彼らは暴力をもって使徒たちを襲撃しようと計画した。ユダヤ人たちは、パウロに話す機会を与えないようにと彼らに命じ、もし彼らがパウロにこの特権を与えるなら、パウロは人々に魔法をかけるだろうと断言した。

まもなく、福音の敵どもの殺人計画は実行された。ルステラの人々は悪の力に屈服していたので、サタンの怒り

に満たされ、パウロをつかまえて情け容赦なく石を投げつけた。使徒は自分の生命もこれで終わりだと思った。ステパノの殉教と、その時パウロ自身がとった残酷な行為が、彼の心にはっきりとよみがえってきた。体中傷だらけになり、痛みに気を失って、パウロが地面に倒れたので、怒り狂った群衆は、「死んでしまったと思って、彼を町の外に引きずり出した」。

パウロとバルナバの伝道によって、イエスの信仰に導かれたルステラの信者の群れは、この暗黒の試練の時にも忠実で真実だった。彼らの敵の理由のない反対と残酷な迫害は、このような敬虔な兄弟たちの信仰をますます固くさせるのに役立っただけだった。そしていまや、危険と嘲笑に直面しながら、彼らは、パウロが死んだものと信じて、悲しみながら彼の体のまわりに集まることによって、彼らの忠誠心を表した。

ところが驚いたことに、彼らが嘆き悲しんでいる最中に、パウロは突然頭を持ちあげ、神を賛美しながら立ちあがった。神のしもべが思いがけなく生き返ったことは、信者たちには天来の力の奇跡と考えられ、自分たちの改宗に天の神が認証の印を押されたように思えた。彼らは言い表しようのない喜びにあふれ、新たな信仰をもって神をほめたたえた。

ルステラで悔い改めて、パウロの苦難を目撃した人々の中に、1人、のちにキリストのためにすぐれた働き人となった者がいた。それはテモテという名の青年だった。パウロが町からひきずり出されたとき、この年若い弟子は、見たところ生命のとだえたようなパウロの体のそばに立って、傷ついて血まみれのパウロが、キリストのために苦難を受けることを許されたといって、賛美を口にしながら起き上がるのを見た人々の1人だった。

パウロが石で打たれた翌日、使徒たちはデルベに向かって出かけた。彼らの働きはそこで祝福されて、多くの人々が導かれ、キリストを救い主として受け入れた。しかし「その町で福音を伝えて、大ぜいの人を弟子とした後」、パウロもバルナバも、彼らが最近伝道した町々の改宗者たちの信仰を固めないで、別の場所で働きを始めることには満足しなかった。というのは、彼らは改宗者たちをそのまま放って、余儀なくそれらの町々から出てきていたからで

ある。そこで彼らは、危険にも屈せず、「ルステラ、イコニオム、アンテオケの町々に帰って行き、弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し」た。多くの人々がすでに福音の喜ばしいおとずれを受け入れて、非難や反対に身をさらしていた。使徒たちは、すでに始めた働きが存続するように、この人々の信仰を確立させようとした。 [1426]

新しい改心者の霊的成長をはかる重要な手段として、使徒たちは福音の組織で彼らの身を守らせようと気を配った。信者がいるルカオニヤやピシデヤの町々に、正式に教会が組織された。教会ごとに役員が任命されて、信者の霊的繁栄に関する事柄をすべて管理するために、適当な秩序と組織が定められた。

これは、すべての信者たちをキリストにあって1つの体として結びつける、福音の計画に調和するものであり、この計画こそ、パウロが伝道にあたってつらぬき通そうと心がけたことであった。パウロの働きにより、キリストを救い主として受け入れるまでに導かれた人々は、どこにおいても、適切な時期に教会を形成した。たとえ信者数が少ない場合でも、教会組織が行われた。クリスチャンはこうして、「ふたりまたは3人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」という約束を覚えて、互いに助け合うように教えられた（マタイ18：20）。

パウロは、こうして設立された教会を忘れなかった。これらの教会を案じる気持ちは、いよいよつのる重荷として心に残っていた。たとえ小さな組織であっても、教会はやはり、たえずパウロの気づかいの対象であった。彼は小さい教会の信徒が完全に真理に立つことができるよう、特別に面倒を見る必要のあることを知っていて、教会をやさしく見守り、彼らの周囲にいる人々のために熱心に無我の努力を払うよう教えた。

パウロとバルナバは、伝道活動の初めから終わりまで、キリストが喜んで犠牲を払い、魂のために忠実に熱心に働かれたその模範に従おうと努めた。彼らは油断なく、熱心で、たゆまず、自分たちの好みや身の安楽などを考えずに、祈りながら、熱意とやむことのない活動とによって、真理の種子をまいた。種子をまくとともに、使徒たちは、福音の側に立ったすべての人に、測り知れないほど価値の

ある実際的な教えを与えるよう気を配った。この熱心な精神と神をおそれる思いは、福音使命の重要さについていつまでも消えることのない印象を、新しい弟子たちの心に植えつけた。

有望で有能な人たちが改心したとき、テモテの場合に見られるように、パウロとバルナバは、ぶどう園で働く必要を彼らに熱心に教えようとした。そして使徒たちがまた別の場所へと出て行ったときも、これらの人々の信仰はくじけるどころかかえって増し加わった。彼らは主の道に沿うよう堅く教えられていた。また、利己心を捨てて、熱心に、忍耐強く同胞の救いのために働くよう教えられていた。こうして新しい改心者を慎重に訓練したことは、パウロとバルナバが異教徒の国で福音を宣べ伝えて、目覚ましい成功を遂げるにあたっての重要な要因であった。

最初の伝道旅行は、早くも終わりに近づいていた。新しく組織されたこれらの教会を主にゆだねて、使徒たちはパンフリヤに行き、「ペルガで御言を語った後、アタリヤにくだり、そこから舟でアンテオケに帰った」。

第19章　エルサレム会議

本章は使徒行伝15：135に基づく

パウロとバルナバはシリヤのアンテオケから伝道旅行につかわされていたのであるが、旅から戻ってくると早々に機会をとらえて信者を呼び集め、「神が彼らと共にいてして下さった数々のこと、また信仰の門を異邦人に開いて下さったことなどを」報告した（使徒行伝14：27）。アンテオケの教会は大きく成長している教会であった。宣教活動の中心をなすこの教会は、キリスト教信者の集団の中で最も重要なものの1つだった。教会員はユダヤ人と異邦人の中から来た種々の階級の人々で構成されていた。

使徒たちは教役者や信徒といっしょに熱心に努力し、多くの人々をキリストに導いていたが、一方、ユダヤから来た「パリサイ派」のあるユダヤ人信徒たちは、1つの問題を持ち込んできた。それはまもなく教会内に、広範囲に及ぶ論争を引き起こし、異邦人の信徒たちを驚愕させるものとなった。これらユダヤ主義の教師たちは、救われるためには割礼を受けて、礼典律を完全に守らなければならないと、大きな確信をもって主張した。 [1427]

パウロとバルナバはこの誤った教えを速やかに聞きつけて、異邦人たちにこの問題を持ち出すことに反対した。ところが、アンテオケのユダヤ人信徒の多くは、最近ユダヤから来た兄弟たちの立場に賛成していた。

ユダヤ人の改宗者はたいてい、神の摂理によって道が開かれても、すぐに進んでいこうとしなかった。使徒たちが異邦人のあいだで働いたために、ユダヤ人の改宗者よりも異邦人の改宗者の数のほうがはるかに多かったことは確かである。もしユダヤ人の律法が命じる禁止事項や儀式を、教会員になる条件として異邦人に行わせることをしないでいると、これまでユダヤ人を他の国民と区別してきた国民的特異性が、ついには福音を信じた人々のあいだから失われるのではないかと、ユダヤ人は恐れた。

ユダヤ人は、神から命じられた宗教儀式につねに誇りを持ってきた。キリストの信仰へと改心した人々の多くはなお、神がひとたびヘブライ的な礼拝の大要を明確にされたのであるから、その礼拝儀式のどんな細かい部分でも変えることを神が認可されるようなことは起こり得ない、と思った。彼らはユダヤの律法と儀式が、キリスト教の宗教儀式と結び合わされるべきだと主張した。すべてのいけにえのささげ物は神のみ子の死を予示したもので、予型はキリストの死において本体に合わされるのであり、キリストの死後は、モーセの律法の儀式や礼典はもはや義務づけられないということを、彼らはなかなか認めなかった。

パウロは改宗する前には、自分を「律法の義については落ち度のない者である」と思っていた（ピリピ3：6）。しかし心を変えてから彼は、ユダヤ人ばかりでなく、異邦人も含めた全人類のあがない主としての救い主の使命について、明確な概念をつかみ、生きた信仰と死んだ形式主義との違いを学んでいた。イスラエルにゆだねられた古い慣習や儀式は、福音の光を受けて、より深い意味を持つようになっていた。それらの慣習や儀式に予示されていた事がすでに起こったので、福音の時代に生きている人々は、それらを遵守することから解放されていた。しかしパウロはなおも、神の変わることのない律法である十戒を、文字通りに守るばかりでなく、精神的にも遵守していた。

アンテオケの教会では、割礼の問題について活発な議論や論争が起こった。ついに教会員たちは、これ以上議論を続ければ、彼らのあいだに分派が起こるのではないかと恐れて、教会から数人の責任のある人々をつけて、パウロとバルナバをエルサレムにっかわし、使徒や長老たちの前で事を解決させようとした。彼らはそこで、それぞれの教会からの代表者たちや、まもなくやってくる祭りに参加するために、エルサレムに集まってきていた人々と会うことになった。その間に全体的な会議があって、最終決議が採択され、すべての論争が終わるはずであった。この決議は国中のそれぞれの教会に例外なく受け入れられることになるはずであった。

使徒たちはエルサレムに行く途中、通過する町々に住む信者たちを訪問し、神のみ働きにおいて彼らが経験したことや、異邦人たちの改心を話して信者を励ました。

エルサレムでは、アンテオケからっかわされた者たちは、あちこちの教会から総会に出席するために集まってきていた兄弟たちに会い、異邦人伝道で収めた成功について話した。それから彼らは、改宗したパリサイ派のある者たちがアンテオケにきて、救われるためには改宗した異邦人は割礼を受け、モーセの律法を守らなければならないのだと主張したために起こった混乱のあらましを、はっきり述べた。

この問題は集会において熱心に討議された。割礼の問題と深い関係のあるもので、十分に研究を要する幾つかの問題がほかにもあった。その1つは、偶像にささげられた肉の使用に対してとらなければならない態度に関するものであった。改宗した異邦 人の多くは、無学で迷信的な人々の [1428]
中に住んでいた。そのような人々は、絶えず偶像にいけにえやささげ物をささげていた。この異教の礼拝をする祭司たちは、彼らのもとに携えられてきたささげ物で、手広い商売を行っていた。それでユダヤ人たちは、異邦人の改宗者たちが、偶像にささげられた物を買い、そのために偶像崇拝的な習慣をいくぶんか是認することになり、キリスト教の評判をそこねるのではないかと心配した。

さらに、異邦人たちは絞め殺された動物の肉を食べる習慣があったが、ユダヤ人は、動物が食用として殺されるときには、血液が体内から流れ出るよう特別な処置が取られねばならない、でなければ、その肉は健康によいものとされないことを、神から指示されていた。神はユダヤ人の健康を守るために、これらの命令をお出しになっていた。ユダヤ人は、血を食べものとして用いることは罪だとみなしていた。彼らは血をいのちと考え、罪のゆえに血を流すのだと思っていた。

それとは反対に、異邦人は、犠牲の動物から流れる血を受けて、それを調理に用いていた。ユダヤ人は、神の特別な指示のもとに取り入れていた習慣を、変えねばならないと信じることができなかった。だから、当時、ユダヤ人と異邦人が食事に同席しなければならないようなことになると、ユダヤ人は異邦人の習慣によって衝撃を受け、侮辱されるのであった。

異邦人、特にギリシヤ人は非常に放縦で、ある者は、心の中では改心せず、悪い習慣を捨てずに信仰を告白する

おそれがあった。ユダヤ人のクリスチャンは、異教徒には犯罪とはみなされていないような行為を不道徳と考え、寛大に扱うことができなかった。それゆえに、ユダヤ人は、割礼や礼典律の遵守を異邦人の改宗者たちに実行させて、改宗の真実性と献身の試金石とするのがよいと、強く主張した。こうすれば、心から改宗せずに真理を受け、のちになって不道徳、不節制な行為のために恥辱となるような人々を、教会に加えずにすむと、彼らは信じた。

ここで争われている主要な問題を解決するために、考えなければならないさまざまな問題点は、克服しがたい困難さを会議の前にもたらしたように見えた。しかし、その決定次第では、キリスト教会の繁栄、あるいはその存在そのものすら左右されようというこの問題は、実際にはすでに聖霊によって解決されていた。

「激しい争論があった後、ペテロが立って言った、『兄弟たちよ、ご承知のとおり、異邦人がわたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようにと、神は初めのころに、諸君の中からわたしをお選びになったのである』」。ペテロは、聖霊が割礼を受けていない異教徒にも割礼を受けたユダヤ人にも同じ力をもってくだり、論争中のこの問題をすでに決定したのだと説明した。彼は幻のことを再び取り上げた。その幻の中で彼は、あらゆる種類の四つ足の獣が入っている布を神から与えられて、それをほふって食べるようにと命じられたのである。彼が清くないもの、汚れたものは何1つ食べたことがないと答えてご命令を拒んだとき、「神がきよめたものを、清くないなどと言ってはならない」と言われていたのである（使徒行伝10：15）。

ペテロはこれらの言葉の明瞭な意味を説明した。それは彼が、百卒長のところへ行ってキリストを信じる信仰へ導くようにとの召しを受ける直前に、与えられたものであった。この使命は、神が人をかたより見られず、神をおそれるすべてのものを受け入れ、認めてくださることを示した。ペテロは、自分がコルネリオの家に集まった人々に真理のことばを語っていて、聴衆のユダヤ人も異邦人も聖霊に満たされたのを目撃したときの自分の驚きについて話した。割礼を受けたユダヤ人に反映しているのと同じ光と栄光が割礼を受けていない異邦人の顔にも輝いていた。このことは、ペテロが異邦人をユダヤ人よりも劣ったものと見

てはならないという、神の警告であった。なぜならキリストの血は、一切のけがれをきよめることができるからである。

以前にペテロは、コルネリオとその友人たちの改心のことや、彼らとの交わりのことを兄弟たちに話したことがあった。そのとき、聖霊が異邦人の上にくだったさま [1429]
を彼らに話して、「このように、わたしたちが主イエス・キリストを信じた時に下さったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったとすれば、わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか」とペテロは説明したのである（使徒行伝11：17）。いま彼は同じ熱意と力をこめて言った、「人の心をご存じである神は、聖霊をわれわれに賜わったと同様に彼らにも賜わって、彼らに対してあかしをなし、また、その信仰によって彼らの心をきよめ、われわれと彼らとの間に、なんの分けへだてもなさらなかった。しかるに、諸君はなぜ、今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかったくびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか」。このくびきは、律法の拘束に反対している人々が主張するような、十戒の律法ではない。ペテロはここで礼典律について言及したのである。それはキリストの十字架によって無効とされたものであった。

ペテロの言葉で会衆は、異邦人のために働いた経験を説明するパウロとバルナバに、辛抱強く耳を傾けることができるようになった。「全会衆は黙ってしまった。それから、バルナバとパウロとが、彼らをとおして異邦人の間に神が行われた数々のしるしと奇跡のことを、説明するのを聞いた」。

ヤコブもきっぱりと証言して、神がユダヤ人にお与えになった特権と祝福を、異邦人にも同じようにお与えになることが、神の目的であると語った。

聖霊は、改宗した異邦人に、礼典律の実行を義務づけない方がよいと見られた。この問題に関する使徒たちの考えも、神のみ霊の考えと同じであった。ヤコブは会議において議長をつとめていたが、彼の最終的決定は「そこで、わたしの意見では、異邦人の中から神に帰依している人たちに、わずらいをかけてはいけない」ということであった。

これで話し合いは終わった。この例を見れば、ローマ・カトリック教会が教えるようにペテロが教会の頭ではな

かったことがわかる。法王のように、ペテロの継承者だと主張してきた人々には、その主張に対する聖書的な根拠がない。ペテロの生涯において、彼が神の代理者として兄弟たちの上位にあがめられたという主張を是認するようなものは、何もない。ペテロの継承者だと宣言している人々が彼の模範に従っていたならば、彼らは常に兄弟たちと同等の立場にとどまることで満足していたはずである。

この場合ヤコブは、会議によって到達した決定を発表する者として選ばれていたようである。ヤコブは礼典律、特に割礼の儀式を異邦人に強制したり、勧めたりすべきでないと宣言した。ヤコブは、異邦人が神に献身するにあたって、彼らの生活にはすでに大きな変化があったこと、また彼らがキリストに従うにあたって失望させられないように、あまり重要でない問題で困惑させたり、疑わせたりして彼らを悩ませないよう十分注意を払わねばならないことを、兄弟たちに理解させようとした。

しかし異邦人の改宗者たちは、キリスト教の原則に矛盾する習慣をやめなければならなかった。そこで使徒や長老たちは、偶像にささげた肉や、不品行を避け、絞め殺されたものや血を食べないよう、書面で異邦人たちを指導することに決めた。いましめを守り、きよい生活を送るよう、彼らに勧めねばならなかった。また、割礼が義務づけられたものであると言った人々は、使徒たちによって公認されてそう言ったのではないということも、彼らにはっきり言っておかねばならなかった。

パウロとバルナバが、主のために命をかけて働いている者として、彼らに推薦された。ユダとシラスも選ばれて、この使徒たちと共に異邦人のところに行き、会議の決定を口頭で伝えることになった。

「聖霊とわたしたちとは、次の必要事項のほかは、どんな負担をも、あなたがたに負わせないことに決めた。それは、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを避けるということである。これらのものから遠ざかっておれば、それでよろしい」。あらゆる論争に終止符を打つために、文書と口頭で伝える言葉を携えて、神の4人のしもべがアンテオケにつかわされた。それは地上に与えられた最高の権威の声であった。

[1430] この事件を解決した会議は、ユダヤ人や異邦人のキリス

ト教会を建設するのに功のあった使徒や教師たち、及び各地から派遣された代議員たちで構成されていた。エルサレムからの長老たちと、アンテオケからの代表者が出席し、最も有力な教会からも代表者が来ていた。会議は啓発された判断が命じるところに従って運営され、また、神のみこころによって建てられた教会の権威にふさわしく進められた。審議の結果、彼らはみな、神が異邦人にも聖霊をお与えになって、論争中の問題をご自身で解決されたのを見て、彼らのなすべきことは聖霊の導きに従うことであると悟った。

この問題に関する採決のために、クリスチャン全員が召集されたのではない。影響力と判断力のある「使徒たちや長老たち」が通達を書き、発行した。そして、それはキリスト教会に広く受け入れられたのである。しかし、すべての者がこの決定に満足したわけではない。この決定に反対した野心的で、自信の強い兄弟たちの党派があった。これらの人々は、独断でみわざに携わっているという態度をとり、しきりに激しくつぶやき、あらを探し、新しい計画を持ち出して、福音使命を伝えるよう神から任命されていた人々の働きをくずそうとした。教会は最初からそのような障害にあってきたのであるが、これは、今後も常に、終わりの時まで続くであろう。

エルサレムはユダヤ人の中心地で、最も強い排他性と頑迷さが見られたところであった。神殿の見えるところに住んでいるユダヤ人のクリスチャンたちの心が、ユダヤ国民としての特別な特権に逆戻りするのは自然なことであった。彼らはキリスト教会がユダヤ教の儀式や伝統から離れていくのを見て、ユダヤ人の慣習にさずけられていた特別な聖さが、新しい信仰の光に照らされて、まもなく失われるであろうと気づき、多くの者は、この変化を引き起こしたのは大部分パウロのせいであるとして、憤慨するようになった。弟子たちでさえ、全部が会議の決定を喜んで受け入れる気持ちになったのではない。中には礼典律に熱心な者もいて、彼らはユダヤ人の律法の義務についてパウロの原則が手ぬるいと考え、パウロに頬しておもしろくない気持ちを持っていた。

会議の決定は広く遠大な精神のものであったから、異邦人の信者たちは、確信を与えられて、神の働きは栄えて

いった。アンテオケの教会は、エルサレムの会議から使徒たちと共に帰ってきた特別の使命者、ユダとシラスを迎えて恵まれた。ユダとシラスは「共に預言者であったので、多くの言葉をもって兄弟たちを励まし、また力づけた」。この信仰深い人たちは、しばらくのあいだアンテオケに滞在した。「パウロとバルナバとはアンテオケに滞在をつづけて、ほかの多くの人たちと共に、主の言葉を教えかっ宣べ伝えた」。

のちになってペテロがアンテオケを訪問したとき、彼は異邦人の改宗者たちに対する賢明な振る舞いによって、多くの人々の信頼を得た。しばらくのあいだ、彼は天来の光に従って行動した。彼は異邦人の改宗者と食事の席を共にするほどに、生まれつきの偏見を克服していた。しかし、礼典律に熱心なユダヤ人がエルサレムからやって来たとき、ペテロは異教から改心した人々に対する態度を、無分別に変えた。何人かのユダヤ人たちも「彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのような偽善に引きずり込まれた」（ガラテヤ2：13）。指導者として愛し尊敬されている人々の弱点がこのように現れたために、異邦人の信者たちは、心に大きな痛手を受けた。教会に分裂の恐れがあった。しかしペテロがあいまいな態度をとり、教会を破壊するような悪影響を及ぼしているのを知ったパウロは、彼が本心をごまかしていることを公然と非難した。パウロは教会の人々の前で彼に向かい「あなたは、ユダヤ人であるのに、自分自身はユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活していながら、どうして異邦人にユダヤ人のようになることをしいるのか」と詰問した（ガラテヤ2：14）。

ペテロは自分のあやまちを認め、自分の力でできるかぎり、それまでの弊害を取り除くことに努めた。はじめからその終わりを知っておられる神は、ペテロが性格上の弱さをさらけだすままにさせておかれた。それはペテロが、経
[1431] 験を通して、自分に何も誇るべきものがないことをさとるためであった。どんなに立派な人でも、好きなようにさせておかれると、判断を誤るものである。また、将来、欺かれた人々が、神だけが持っておられる高貴な特権を、ペテロやその後継者と称する人々にも要求するようになることも、神は知っておられた。そして使徒ペテロの弱さを示し

たこの記録は、彼の誤りやすいことや、彼が決して他の使徒たちの上位に立つ者ではないことの証明として、残されたのである。

神の働きに重要な役割を持つ人々が、自ら高潔さを捨てることなく固く原則に立つように、この正しい原則からの離反の歴史は、厳粛な警告を与えている。人に課せられた責任が重ければ重いだけ、また、彼が命令したり、支配する機会が多ければ多いだけ、彼が神の道に慎重に従って、総会で信者たちが到達した決定に一致して働かないかぎり、彼はそれだけ大きな害を及ぼしてしまうのである。

ペテロのすべての失敗ののちに、すなわち、彼がつまずき、立ち直ってのち、また、彼の長い奉仕の期間、キリストと親しく交わり、正しい原則を実行されたキリストから直接に知識を受け、彼がみことばを説いたり、教えたりして賜物や知識や感化力をさずけられたのちに、彼が人を恐れたり、あるいは、人に重んじられようとして福音の原則を偽り、これを避けねばならなかったとは、不思議ではないか。ペテロが動揺して正しいものを固く守れなかったとは、不思議ではないか。神がすべての人に、自己の無力さ、自分の船を安全にまっすぐ港に操縦できない無能さを、悟らせてくださるように。

パウロは伝道の働きにおいて、孤立せざるを得ないことがよくあった。彼は神について特に教えられていたので、あえて原則にかかわる譲歩をすることができなかった。時にはその荷は重かったが、パウロは義のために固く立った。教会が人間の権力による支配下に置かれてはならないということを、彼は知っていた。啓示された真理が、人間の伝説や格言に置きかえられてはならない。教会における地位がいかなるものであろうとも、人々の偏見や好みによって福音使命の進展が妨げられてはならない。

パウロは自分自身と、彼のすべての能力を神への奉仕にささげていた。彼は福音の真理を直接に天からさずけられており、その伝道生涯のあいだ、神の摂理ときわめて重大なつながりを保っていた。彼は異教徒のクリスチャンに課せられている不必要な義務について、神から教えられていた。こうしてユダヤ教の信者が、アンテオケの教会に割礼の問題を持ち込んだとき、パウロはそのような教えに関す

る聖霊の考えを知っていて、ユダヤ人の慣例や儀式から教会を解放する、堅実な断固たる立場をとった。

パウロは個人的に神に教えられたのであるが、自己の責任を乱用するような考えを持っていたのではない。神の直接の導きを求めながらも、パウロは、教会員として一致している信者たち全体にさずけられた権威を、常に重んじる態度を取った。彼は話し合いの必要を感じていた。そして、重要な事が起こると、彼は快くそれを教会にゆだねて、兄弟たちと共に心を合わせて神に知恵を求め、正しい決定を行った。「預言者の霊」でさえ「預言者に服従するものである。神は無秩序の神ではなく、平和の神である」とパウロは言った（コリント14：32、33）。彼はペテロと共に、すべての者は教会員として「みな互に謙遜」にならなければならないと教えた（ペテロ5：5）。

第20章　パウロの第二次伝道旅行

本章は使徒行伝15：3641、16：16に基づく

アンテオケでしばらくのあいだ伝道をしてのちパウロは、また別の伝道旅行に出かけることを仲間に提案した。「さあ、前に主の言葉を伝えたすべての町々にいる兄弟たちを、また訪問して、みんながどうしているかを見てこようではないか」と彼はバルナバに言った。

パウロとバルナバは、自分たちの働きにより少し以前 [1432]
に福音使命を受け入れていた人々への、優しい心づかいを持っていたので、もう1度その人々に会いたいと思っていた。パウロはこの心づかいを忘れなかった。たとえ遠い伝道地にいても、以前に働いた場所からはるかに離れた所にいてもパウロは「神をおそれて全く清くなろうではないか」と改宗者たちを励まして、信仰を守り通させる重荷を持ち続けていた（IIコリント7：1）。彼は絶えず彼らを助けて自信を持たせ、成長するクリスチャンとなり、信仰を強め、熱意を燃やし、誠意をこめて神とみ国の到来を早める働きへと献身させようとした。

バルナバは、パウロと一緒に行くつもりであったが、決心を新たにして伝道に献身したマルコも連れて行きたいと思った。だがパウロはこれに反対だった。彼は、第一次伝道旅行の際いざというときに離れて行ったような者は「連れて行かないがよいと考えた」。彼は、家庭生活の安全と楽しみのために働きを放棄するようなマルコの弱さを、ゆるす気になれなかった。そんなに耐久力のない者は、忍耐、克己、勇気、献身、信仰、心からの犠牲、いや必要ならば生命さえも要求する働きには向かないと、パウロは主張した。こうして激論となり、その結果2人は互いに別れ別れになり、バルナバは自分の主張したとおりにマルコを連れて行った。「バルナバはマルコを連れてクプロに渡って行き、パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて、出発した」。

パウロとシラスは、シリヤ、キリキヤの地方を通って、諸教会を力づけ、それからルカオニヤ地方のデルベとルステラにたどりついた。パウロが石で打たれたのはルステラにおいてであったが、彼は今またこの以前の危険な場所に姿を現している。彼は自分の骨折りによって福音を受け入れた人たちが、試練に耐えているのを見たかったのである。彼は失望しなかった。ルステラの信者たちが、激しい反対にあいながら、信仰を固く持ち続けているのを見たからである。

ここでパウロは、ふたたびテモテに会った。テモテは、パウロが初めてルステラをおとずれた時の終わりごろ、パウロが受けた苦難を目撃し、そのとき心に受けた印象が時がたつにつれてますます深くなり、伝道の働きに全的に献身することが自分の義務であると、確信するようになっていた。彼の心はパウロの心に固く結びつけられ、道が開けるならばパウロを助けて働きを共にしたいと熱望していた。

パウロと共に働いていたシラスは、預言の霊をさずけられており、頼りになる働き人であった。しかし、なすべき仕事があまりにも多かったので、とにかく活発に仕事をしてくれる働き人を、もっと養成する必要があった。パウロはテモテが、牧師の働きの尊さを理解し、前途の苦難や迫害にも動揺せず、喜んで指導を受ける人だと見ていた。それでもなおパウロは、まずテモテの性格や過去の生活が、十分満足すべきものだということがわかるまでは、この未経験な若者に福音伝道の訓練を与える責任を負うことはあえてしなかった。

テモテの父はギリシヤ人で、母はユダヤ人であった。テモテは子供のころから聖書を知っていた。彼が自分の家庭で見た信仰は、健全で良識的であった。聖書に対する彼の母と祖母の信仰は、彼に神のみこころをなすことの祝福を絶えず思い出させた。神のみことばは、これら2人の敬虔な婦人たちがテモテを導いた原則であった。この2人から受けた教訓の霊的な力によって、彼の語ることは純潔で、彼は周囲の悪影響にけがされなかった。このように、家庭の訓育者たちは、神と協力して、彼が重荷を負う準備をしたのであった。

パウロはテモテが誠実で、しっかりしていて、正直だと知って、自分と共に働き、伝道旅行をする相手として彼を選んだ。子供のころのテモテを教育した人々は、自分たちの世話した息子が、偉大な使徒と親しく交わっているのを見て報われた。教師として神から選ばれたとき、テモテはただの若者にすぎなかった。しかし、初期の教育によって彼の信念は確立されており、彼はパウロの助手としての地位を受けるにふさわしかった。彼は若かったが、クリスチヤンの素直な心で責任を引き受けた。

予防手段として、パウロは賢明にもテモテに、割礼を [1433]
受けるようにすすめた。それは神が要求されたからではなく、ユダヤ人の心から、テモテの奉仕に邪魔となるようなものを取り除くためであった。パウロは伝道の仕事で、町から町へと多くの地を旅行し、いろいろな集会所やユダヤ人の会堂でも、キリストを説く機会にしばしば恵まれた。それで、もし彼と共に働く者の1人が、まだ割礼を受けていないことがわかると、彼の働きはユダヤ人の偏見と頑迷さによって邪魔されたことだろう。使徒はいたるところで断固とした反対や厳しい迫害にあったのである。彼はユダヤ人の兄弟にも異邦人の兄弟にも、福音の知識を伝えたいと思ったので、自分の信仰に反しないかぎり、反対の口実をすべて除こうとした。彼はユダヤ人の偏見にそこまで譲歩したが、それでもなお、割礼や無割礼は問題ではなく、キリストの福音こそ最も重要なものであると信じて、そのように教えた。

パウロは「信仰による……真実な子」テモテを愛した（テモテ1：2）。この偉大な使徒はしばしば、聖書の歴史についてこの若い弟子に質問しては話を引き出した。また2人で旅行してまわるときには、働きを成功させる方法を注意深く教えた。パウロもシラスも、テモテと一緒にいるときにはいつでも、すでにテモテが心に受けとめている福音伝道の働きの尊さ、重大さを、より深く彼の心に植えつけようとした。

テモテはその働きにおいて、絶えずパウロに忠告や指示を求めた。彼は衝動的に行動することなく、1歩ごとにこれは主の方法だろうかとたずねながら、慎重に落ち着いて考えた。聖霊はテモテを、神が内住される宮として形づくることのできる者と見られた。

聖書の教訓が日常生活の中に徐々に入って行くとき、それは品性に深く、永続的な感化を及ぼす。このような教訓をテモテは学び、実行した。彼は、特にすぐれた才能を持っていたわけではないが、神からさずけられた能力を主のご用のために用いたので、彼の働きには価値があった。彼の、経験に基づく敬神の知識は、ほかの信者たちの中でも抜群で、影響力があった。

魂のために働く人々は、普通の努力で得られる以上により深く、完全に、明確に、神についての知識を得なければならない。彼らは主の働きに全力を注がなければならない。彼らは高く聖なる召しを受けている。そして、その報酬として魂を得るのであれば、彼らはすべての祝福の源であられる神から、日ごとに恵みと力を受け、神にしっかりつかまっていなければならない。「すべての人を救う神の恵みが現れた。そして、わたしたちを導き、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深くこの世で生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない」（テトス2：1114）。

パウロとその一行は、新しい地方へ向かう前に、ピシデヤとその周辺の地方に設立した教会をたずねた。「彼らは通る町々で、エルサレムの使徒たちや長老たちの取り決めた事項を守るようにと、人々にそれを渡した。こうして、諸教会はその信仰を強められ、日ごとに数を増していった」。

使徒パウロは、自分の働きによって改宗した人々に対して、重い責任を感じていた。何よりも彼らが信仰を持ち続けて、「キリストの日に、わたしは自分の走ったことがむだでなく、労したこともむだではなかったと誇ることができる」ようにと彼は切望した（ピリピ2：16）。パウロは自分の伝道の結果を気づかっていた。彼は、もし自分が、自分の義務を果たさないならば、また、教会が救霊の働きにおいて、自分と協力できないとすれば、自分自身の救いさえも危くなると感じた。信者に命のことばを伝えさせる教

育を施すには、説教だけでは十分でないことを彼は知っていた。キリストのみわざを進展させるためには、規則に規則を、教訓に教訓を、ここにも少し、そこにも少しと教えなければならないことを彼は知っていた。

神から与えられた力を用いることを拒むときはいつでも、これらの力が衰退して、消滅するということは、宇宙の原則である。生かされていない真理、告げられない真理は、そのいのちを与える力やいやしの効力を失う。このゆえに、彼らをキリストにあって全きものとして立たせることができなくなるのではないかと使徒はおそれた。パウロは、教会を神にかたどるどころか、人にかたどってしまう結果になるような自分の側の失敗のことを考えるとき、天国への希望が薄らいでいく思いであった。彼が働きかけていた人々が、神の恵みを受けられずに、彼の働きが失敗に終わったら、彼の知識も、雄弁も、奇跡も、第三の天に引き上げられたときの永遠の光景に関する見解も、すべては無益になるだろう。そこで彼は、キリストを受け入れていた人々が、「責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中にあって、傷のない神の子となるため……いのちの言葉を堅く持って……星のようにこの世に輝いている」ようにと、口で語り、手紙に書いてその人々に訴えた（ピリピ2：15）。 [1434]

真実な牧師はみな、自分にゆだねられている信徒の霊的成長のために重い責任を感じ、彼らが神の共労者となるように切望している。教会の繁栄が、神からゆだねられた働きを忠実に実行することに、大部分かかっていることを牧師は知っている。教会員の増加は、そのまま、あがないの計画の実行者の増加でなければならないことを覚えて、牧師は熱心に、たゆまず、人々をキリストに導くようにと信徒たちを励ますのである。

ピシデヤとその近隣地方を訪問してから、パウロとシラスはテモテを伴って、「フルギヤ・ガラテヤ地方」へ進み、そこで救いの喜ばしいおとずれを力強く宣べ伝えた。ガラテヤ人たちは偶像礼拝をやめるように導かれたが、使徒たちが教えを説いているうちに、罪の束縛からの自由を約束している使命を喜ぶようになった。パウロとその仲間の働き人たちは、キリストのあがないの犠牲を信じる、信仰による義についての教理を宣べ伝えた。彼らは、キリス

トが堕落した人類の救いようのない状態をご覧になり、みずから神の律法に従う生活をなさって、不従順の罰をお受けになることにより、彼らをあがなうために来られた方であると教えた。そして十字架の光により、これまで真の神を知らなかった多くの人々が、み父の愛の偉大さを理解しはじめた。

こうしてガラテヤ人たちは「父なる神」と、「わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられた」「主イエス・キリスト」についての重要な真理を教えられた。彼らは「聞いて信じたから」神のみ霊を受け入れ、「キリスト・イエスにある信仰によって、神の子」となった（ガラテヤ1：3、4、3：2、26）。

ガラテヤ人の中にいたころの自分の生活態度についてパウロは、のちになって「兄弟たちよ。お願いする。どうか、わたしのようになってほしい」と言うことができた（ガラテヤ4：12）。彼のくちびるは祭壇からとった燃えている炭に触れていたので、彼は身体の欠陥を超越し、イエスを罪人の唯一の望みとして示すことができた。彼の言葉を聞いた人々は、彼がイエスと共にいたことを知った。天来の力をさずけられて、彼は霊によって霊のことを解釈し、サタンの拠点を打ちくだくことができた。彼が神のひとり子イエスの犠牲に表されている神の愛を示すと、人々の心はくだかれて、多くの者が「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」という気持ちにまで導かれた。

福音を提示するこの方法は、パウロの異邦人伝道の一貫した働きを特色づけるものであった。彼は常にカルバリーの十字架を彼らに示した。のちになって彼は、自分の体験を「わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える。わたしたち自身は、ただイエスのために働くあなたがたの僕にすぎない。『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照らして下さったのである」と述べた。（Ⅱコリント4：5、6）。

[1435] キリスト教の初期のころ、滅びゆく世に救いのよきおとずれを携えていった献身的な使命者たちは、自己称揚の思

いから、キリストとその十字架を示す働きを台なしにするようなことはなかった。彼らは権威も、自己の卓越をも望まなかった。彼らは救い主の中に自己を隠し、救いの偉大な計画と、この計画の創り主であられ、完成者であられるキリストのご生涯をかかげた。昨日も、今日も、また永遠に変わることのないキリストが、彼らの教えの要旨であった。

もし今日神のみことばを教えている人々が、キリストの十字架をいよいよ高くかかげるならば、その伝道はもっと大きく成功するのである。もし罪人にひとたび十字架を熱心に見させることができるならば、もし彼らが十字架につけられた救い主についての全貌を知り得たら、彼らは神の深い憐れみと自分の罪の深さとを認めるようになるであろう。

キリストの死は、人類に対する神の深い愛を証明している。それはわれわれの救いの保証である。クリスチャンから十字架を取り除くことは、空から太陽をおおい隠すようなものであろう。十字架はわれわれを神に和解させ、われわれを神に近づかせる。父親の愛の優しい憐れみをもって、神は、人類を永遠の死から救うためにみ子が耐えられた苦悩をご覧になり、愛するみ子によってわれわれを受け入れてくださるのである。

十字架がなければ、人は神と和合することができなかった。われわれのすべての望みは十字架にかかっている。そこに救い主の愛の光が輝いている。罪人が十字架のもとで、彼を救うために死なれたお方を見上げるときに、彼は満ちたりた喜びを味わうのである。それは彼の罪が赦されたからである。信仰をもって十字架のもとにひざまずくとき、彼は人が到達できる最高の場所に到達しているのである。

われわれは、天のみ父が無限の愛をもってわれわれを愛してくださっていることを、十字架によって学ぶのである。「わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない」とパウロが叫んだのは、当然である（ガラテヤ6：14）。十字架を誇りとし、われわれのためにご自身をお与えになった主にわれわれを全くささげることは、われわれの特権でもある。その時に、カルバリーの十字架から

流れる光を顔に受けて、この光を暗黒にある者たちへ現すために出かけて行くことができるのである。

第21章　エーゲ海を渡る

本章は使徒行伝16：740に基づく

福音が小アジヤの境界を越えて宣べ伝えられる時期は、すでに到来していた。パウロと彼の共労者たちが、ヨーロッパへ渡って行くための道は準備されていた。地中海沿岸にあるトロアスで「夜、パウロは1つの幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が立って、『マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい』と、彼に懇願するのであった」。

この召しは延期を認めぬ命令であった。「パウロがこの幻を見た時、これは彼らに福音を伝えるために、神がわたしたちをお招きになったのだと確信して、わたしたちは、ただちにマケドニヤに渡って行くことにした。そこで、わたしたちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。そこからピリピへ行った。これはマケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった」と、パウロ、シラス、テモテに同行してヨーロッパへの旅を続けたルカが述べている。

「ある安息日に、わたしたちは町の門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そして、そこにすわり、集まってきた婦人たちに話をした。ところが、テアテラ市の紫布の商人で、神を敬うルデヤという婦人が聞いていた。主は彼女の心を開い」たと、ルカは引き続き述べている。ルデヤは真理を喜んで受け入れた。彼女もその家族も改心してバプテスマを 受け、また、彼女の家に泊まるようにと彼女は使徒たちに懇望した。 [1436]

十字架の使命者たちが教えを説いて回っていたとき、占いの霊につかれた女が彼らについてきて「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」と叫んだ。「そして、そんなことを幾日間もつづけていた」。

この女はサタンの特別な手先で、占いをして彼女の主人たちに多くの利益を得させていた。彼女の感化により偶像礼拝が盛んになっていた。サタンは自分の王国が侵略されていることを知って、神のみわざに反対するのにこうした手段を用い、福音使命を宣べ伝えている人々の教える真理に彼の誰弁を混ぜようと望んだ。この女が語る推薦の言葉は、人々の心を使徒たちの教えからそらし、福音の評判を傷つけるので、真理のみわざにとっては有害であった。その言葉によって多くの者は、み霊と神の力によって語っている人々が、このサタンの使者と同じ霊によって動かされていると信じさせられたのである。

しばらくのあいだは、使徒たちはこの反対に我慢した。それから聖霊の導きのもとに、パウロは悪霊に女から出て行けと命令した。彼女がたちまち黙ってしまったことから、使徒たちが神のしもべであり、悪霊が彼らを神のしもべとして認め、その命令に従ったのだとわかった。

女は悪霊から解放され、正常な心を取り戻すと、キリストに従う者となることを望んだ。すると彼女の主人たちは、自分たちの職業のことが気になってきた。彼らは、彼女の占いや予言から金銭を得る望みが全くなくなったこと、また、もし使徒たちに福音の働きを続けさせるならば、彼らの収入源がまもなく全く断たれてしまうことを知った。

そのほかこの町には、サタンの惑わしによって利益を得ることに関心のある者がたくさんいて、彼らは自分たちの仕事をいやおうなしにやめさせた力の影響を恐れ、神のしもべたちに向かって大声をあげて騒ぎ出した。彼らは使徒たちを長官たちの前に引き出して訴えた。「この人たちはユダヤ人でありまして、わたしたちの町をかき乱し、わたしたちローマ人が、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しているのです」。

熱狂的な興奮をかきたてられ、群衆は、いっせいに弟子たちに反対して立ち上がった。騒ぎがおこる気配がひろがり、官憲はそれを知って、使徒たちの上着をはぎとり、彼らをむち打つように命令した。「それで、ふたりに何度もむちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。獄吏はこの厳命を受けたので、ふたり

を奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかとかけておいた」。

使徒たちは苦しい姿勢のままに置かれていたので、激しい苦痛を味わったが、それでもつぶやかなかった。それどころか、真っ暗闇のみじめな獄屋の中で、彼らは祈りの言葉で互いに励まし合い、自分たちが神のためにはずかしめを受けるにふさわしいものとされたことを知って、神をさんびして歌った。彼らの心は、あがない主のみわざに対する深い、真実な愛によって元気づけられた。パウロは自分が手をかしてキリストの弟子たちを迫害に追いやったことを思い、かつては軽蔑していた輝かしい真理の力を見る目が開かれ、それを感じる心が開かれたことを喜んだ。

ほかの囚人たちは、奥の獄屋から祈りと歌が聞こえてくるのを、驚きながら聞いていた。彼らは、夜のしじまを破って聞こえてくる悲鳴やうめき、のろいや悪口には慣れていたが、陰気な地下室から祈りやさんびの言葉が上ってくるのをこれまで聞いたことがなかった。獄吏も囚人たちも驚き、寒さと飢えと責め苦にあいながら、なお喜ぶことのできるこの人たちはだれだろうかと、互いに語り合った。

やがて長官たちは、迅速果敢な手段で騒ぎを静めたことを喜びながら家へ帰った。しかし途中で彼らは、自分たちがむち打ちと投獄の刑に処した人たちの人となりと働きについて、さらにくわしいことを聞いた。彼らはサタンの影響力から解放された女を見て、彼女の容貌や態度の変化にはっと驚いた。これまで彼女は町に大変な迷惑をかけていたのだが、いまは静かで穏やかな人間になっていた。彼らは、おそらく自分たちは罪のない2人にローマの法律の厳 [1437]
罰を課したのではないかと気がっき、自分で自分に腹を立て、翌朝になったらひそかに彼らを釈放して、群衆による暴力の危険のないところへ、町から送り出すように命令しようと決意した。

しかし、人々が残酷で復讐心に満ちていたあいだも、あるいは彼らにかかっている厳しい責任に対して怠慢の罪を犯していたあいだも、神はそのしもべたちに対して恵み深くあることをお忘れにならなかった。全天は、キリストのために苦しんでいる人々に関心をよせ、獄屋をおとずれるために天使たちがつかわされた。天使たちの足音に地は

ゆれ動いた。重いかんぬきのかかった獄屋の戸が開け放たれ、くさりと足かせは囚人たちの手足から落ち、明るい光が獄中にみなぎった。

獄吏は、獄屋に入れられた使徒たちの祈りと歌を、驚きながら聞いたのであった。使徒たちが獄に入ってきたとき獄吏は、彼らの腫れて血の滲んだ傷を見ていた。また自分も彼らに足かせをつけたのであった。だから、彼らの口からは当然、呻きや呪いが出てくるものと思っていた。しかし、それどころか、喜びとさんびの歌を聞いたのであった。獄吏は、耳にひびくこれらの音を聞きながら眠り込んでいたのだったが、獄屋の壁をゆさぶる地震で目が覚めた。

驚いて立ち上がった獄吏は、獄屋の戸が全部開いているのを見て狼狽し、囚人たちが逃げてしまったという恐怖が心にひらめいた。その前夜、パウロとシラスをしっかり監視しているようにとはっきり言い渡されていたことを思い出し、彼は、まぎれもないこの不覚は死でもって罰せられるであろうと思いこんだ。不名誉な刑罰に服するよりは、みずからの手で死んだほうがましだと、彼は悲痛な気持ちになった。彼が剣を抜いて自殺しようとすると、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」と、元気づける言葉を語るパウロの声が聞こえた。囚人たちは、1人の仲間を通して働きかける神の力に引きとめられて、1人残らずもとの場所にいたのである。

獄吏は使徒たちを苛酷にあしらったが、彼らは怒らなかった。パウロとシラスは、復讐心ではなく、キリストの心を持っていた。救い主の愛に満たされていた心には、迫害者たちに恨みを抱くような余地はなかった。

獄吏は剣を落とし、明かりを呼び求めて、獄屋の中へ急いだ。残酷に取り扱われたにもかかわらず、親切でもって報いるとはなんと立派な人たちだろうと彼は思った。使徒たちのそばまで来て、彼は身を伏してゆるしを求めた。それから、2人を外に連れ出して言った、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」。

獄吏は地震によってあらわされた神の怒りを見て、恐れおののいた。囚人たちが逃げてしまったと思ったとき、自分の手で死ぬつもりでいたのであるが、今やこれらすべての事態は、彼の心をゆり動かす新しい不思議なおそれと、

使徒たちが苦しみと虐待を受けながらも示した、落ち着きと快活さを自分も持ちたいと思う願いに比べれば、全く取るに足りないことのように思えた。彼は2人の顔に天の光がさしているのを見た。そして神が2人の命を救われるために、奇跡的な方法で干渉されたのだと知った。そして不思議な力で、霊にとりつかれた女の言葉が思い出されてきた。「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるかただ」。

獄吏は心からへりくだり、命の道を教えてほしいと使徒たちに頼んだ。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」と言って、2人は「彼とその家族一同とに、神の言を語って聞かせた」。それから獄吏は使徒たちの傷を洗い、2人をもてなした。そしてのち、彼と家族はみな、2人からバプテスマを受けた。心を清める感化力は獄屋の囚人たちにも広まり、すべての者が心を開き、使徒たちの語る真理に聞き入った。2人が仕える神が、2人を奇跡的に束縛から解き放されたことを彼らは認めた。

ピリピの市民たちはその地震にひどくびっくりした。そして翌朝、獄屋の役人たちがその前夜の出来事を長官たちに報告すると、長官たちは驚いて、警吏らをつかわし、 [1438]
使徒たちを釈放させようとした。しかしパウロは、「彼らは、ローマ人であるわれわれを、裁判にかけもせずに、公衆の前でむち打ったあげく、獄に入れてしまった。しかるに今になって、ひそかに、われわれを出そうとするのか。それは、いけない。彼ら自身がここにきて、われわれを連れ出すべきである」と言った。

使徒たちはローマ市民であった。極悪な犯罪人のほかは、ローマ人をむち打ったり、公正な裁判なしにローマ人の自由を奪うことは不法であった。パウロとシラスは公然と投獄されたので、いま彼らは長官たちの側から正当な釈明もなしに、ひそかに釈放されることを拒否した。

この言葉が長官たちに報告されたとき、彼らは使徒たちが皇帝に苦情を申し立てるのではないかと恐れて、あたふたと獄屋に駆けつけ、パウロとシラスに自分たちのした不正で残酷な行為をわびたうえ、みずから2人を獄から連れ出して、町を去るように頼んだ。長官たちは市民に及ぼす使

徒たちの影響力をおそれ、さらに、これら罪のない人々のために干渉された神の力をおそれたのである。

キリストから与えられる指示に従って行動していた彼らは、望まれていない場所に居続けようとは思わなかった。「ふたりは獄を出て、ルデヤの家に行った。そして、兄弟たちに会って勧めをなし、それから出かけた」。

使徒たちはピリピでの働きがむだだったとは思わなかった。彼らは大いに反対と迫害にあったが、獄吏とその家族の改心は、彼らが耐えた恥辱と苦痛をあがなう以上のものであった。2人が不正に投獄されて、奇跡的に救出されたことは、その地方一帯に知らされて、これがなかったら決して接することがなかったほどの多くの人々が、使徒たちの働きを知るようになった。

ピリピにおけるパウロの伝道により、教会が設立されるようになり、教会員が着実に増加していった。パウロの熱意と献身、それに何よりも、キリストのために喜んで苦しむその姿勢は、改宗者に深くゆるぎない感化を及ぼした。使徒たちが多くの犠牲を払っている尊い真理を、彼らは称賛し、あがない主のために彼らも心から献身した。

この教会が迫害を免れなかったことは、ピリピにあてたパウロの手紙に表されている。「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜わっている。あなたがたは、さきにわたしについて見……ているのと同じ苦闘を、続けているのである」とパウロは述べている（ピリピ1：29、30）。しかも、彼らの信仰はゆるぎないものであったので、パウロは、「わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している」と言った（ピリピ1：35）。

真理の使命者たちが働きかけるようにと召されている重要な中心地において、善と悪の力がしのぎをけずって戦うその戦いは、恐るべきものである。「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者……に対する戦いである」と、パウロは述べている（エペソ6：12）。終わりの時まで、神の教会と悪天使の支配下にいる人々との戦いは続くのである。

初期のクリスチャンは、しばしば、暗黒の力と直面するよう召された。敵は誰弁や迫害によって真の信仰から彼らをそらせようとする。地上のすべてのものの終わりが急速に近づいているこの現代においてサタンはこの世界を陥れようと必死の力をふりしぼっている。彼は人々の心を占領して、救いに欠くことのできない真理から注意をそらそうと、いろいろな計画を案出している。どの町でも彼の手下どもは、神の律法に反対する人々に徒党を組ませようと、懸命になっている。大欺瞞者は混乱と謀反の元となるものを持ち込もうと精を出し、知識によらない熱狂を人々にたきつけている。

悪はこれまで達したことのない頂点に達しつつあるが、なお、多くの福音伝道者たちは「平和で無事」だと叫んでいる。しかし神の忠実な使命者たちは、使命を携えて着実に前進しなければならない。彼らは天の武具を身につけて、恐れず、誇らかに前進し、接することのできる魂が、1人残らず現代に与えられた真理の使命を受けるまで、戦い抜くのである。 [1439]

第22章　テサロニケでの働き

本章は使徒行伝17：110に基づく

ピリピを去ってのち、パウロとシラスはテサロニケへと向かった。ここで彼らは、ユダヤの会堂で大勢の会衆に語りかける特権にあずかった。彼らの容貌は見るからに、最近受けたひどい仕打ちを物語るものであったので、事の顛末を説明しなければならなかった。これにあたって彼らは、自分たちを高めるのではなく、彼らを救い出して下さった神をさんびした。

パウロはテサロニケの人々に説くにあたって、メシヤに関する旧約聖書の預言に訴えた。キリストはその公生涯において、弟子たちの心をこれらの預言に向かって開き、「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた」（ルカ24：27）。ペテロはキリストを説くにあたり、自分のあかしの言葉を旧約聖書から引き出した。ステパノも同じ方法をとった。そしてパウロもその伝道において、キリストの誕生、苦難、死、復活、昇天を預言した聖句に訴えた。彼はモーセと預言者たちの霊感のあかしによって、ナザレのイエスがメシヤであることを明白に立証し、アダムの時代から父祖たちや預言者たちを通して語ってこられたのは、キリストのみ声であったことを教えた。

約束の方が現れることについて、わかりやすく明確に預言が与えられていた。アダムにはあがない主の来臨について確証が与えられた。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」とサタンに言われた宣告は、われわれの最初の両親にとって、キリストを通してなされるあがないの約束であった（創世記3：15）。

アブラハムには、彼の家系から世の救い主が生まれるという約束が与えられた。「地のもろもろの国民はあなた

の子孫によって祝福を得るであろう」（創世記22：18）。「それは、多数をさして『子孫たちとに』と言わずに、ひとりをさして『あなたの子孫とに』と言っている。これは、キリストのことである」（ガラテヤ3：16）。

モーセは、イスラエルの指導者また教師としての働きを終えようとしていたとき、メシヤの来臨を明らかに預言した。「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない」とモーセは、集まったイスラエルの人々に言った。また彼は、「わたしは彼らの同胞のうちから、おまえのようなひとりの預言者を彼らのために起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼はわたしが命じることを、ことごとく彼らに告げるであろう」ということをイスラエル人に保証した（申命記18：15、18）。

メシヤは王の家系から生まれるはずであった。ヤコブによって語られた預言の中で、「つえはユダを離れず、立法者のつえはその足の間を離れることなく、シロの来る時までに及ぶであろう。もろもろの民は彼に従う」と主が言われたからである（創世記49：10）。

イザヤの預言はこうであった。「エッサイの株から1つの芽が出、その根から1つの若枝が生えて実を結」ぶ。「耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることができる。わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、ダビデに約束した変らない確かな恵みを与える。見よ、わたしは彼を立てて、もろもろの民への証人とし、また、もろもろの民の君とし、命令する者とした。見よ、あなたは知らない国民を招く、あなたを知らない国民はあなたのもとに走ってくる。これはあなたの神、主、イスラエルの聖者のゆえであり、主があなたに光栄を与えられたからである」（イザヤ11：1、55：35）。 [1440]

エレミヤもまた、ダビデの家の王子としてあがない主が来られることをあかしした。「主は仰せられる、見よ、わたしがダビデのために1つの正しい枝を起す日がくる。彼は王となって世を治め、栄えて、公平と正義を世に行う。その日ユダは救を得、イスラエルは安らかにおる。その名は『主はわれわれの正義』ととなえられる」。そしてさらに「主はこう仰せられる、イスラエルの家の位に座する人

がダビデの子孫のうちに欠けることはない。またわたしの前に燔祭をささげ、素祭を焼き、つねに犠牲をささげる人が、レビびとである祭司のうちに絶えることはない」（エレミヤ23：5、6、33：17、18）。

メシヤの出生地さえも預言された。「ベツレヘムエフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである」（ミカ5：2）。

救い主がこの地上でなさるはずのお働きは、十分にそのあらましが説明されていた。「その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。彼は主を恐れることを楽しみと」する。この油を注がれた方は「貧しい者に福音を宣べ伝え……心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、主の恵みの年とわれわれの神の報復の日とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め、シオンの中の悲しむ者に喜びを与え、灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて喜びの油を与え、憂いの心にかえて、さんびの衣を与えさせるためである。こうして、彼らは義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」（イザヤ11：2、3、61：13）。

「わたしの支持するわがしもべ、わたしの喜ぶわが選び人を見よ。わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道をしめす。彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさせず、また傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす。彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する。海沿いの国々はその教を待ち望む」（イザヤ42：14）。

パウロは、「キリストは必ず苦難を受け、そして死人の中からよみがえるべきこと」を、旧約聖書から力強く論じた。ミカは、敵が「つえをもってイスラエルのつかさのほおを撃つ」と預言しなかっただろうか（ミカ5：1）。また、約束された方は、イザヤを通して、ご自身のことを「わたしを打つ者に、わたしの背をまかせ、わたしのひげを抜く者に、わたしのほおをまかせ、恥とつばきとを避

けるために、顔をかくさなかった」と預言されなかっただろうか（イザヤ50：6）。詩篇記者を通してキリストは、人々から受けるあしらいを預言しておられた。「わたしは……人にそしられ、民に侮られる。すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、『彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ』と」。「わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする」。「わたしはわが兄弟には、知らぬ者となり、わが母の子らには、のけ者となりました。あなたの家を思う熱心がわたしを食いつくし、あなたをそしる者のそしりがわたしに及んだからです」。「そしりがわたしの心を砕いたので、わたしは望みを失いました。わたしは同情する者を求めたけれども、ひとりもなく、慰める者を求めたけれども、ひとりも見ませんでした」（詩篇22：68、17、18、69：8、9、20）。

キリストの苦しみとその死についてのイザヤの預言は、なんと明白で、まぎれもないものであったろうか。「だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか」と預言者は問いかける。「主の腕は、だれにあらわれたか。彼は主の前に若木のように、かわいた土から出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれ [1441]
の慕うべき美しさもない。彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。

われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のよ

うに、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと」（イザヤ53：18）。

キリストの死のありさまさえもほのめかされていた。荒野でへびが上げられたように、やがて来られるあがない主も上げられなければならない。「それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ3：16）。

「もし、人が彼に『あなたの背中の傷は何か』と尋ねるならば、『これはわたしの友だちの家で受けた傷だ』と、彼は言うであろう」（ゼカリヤ13：6）。

「彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあった。しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた」（イザヤ53：9、10）。

しかし、悪人の手で死の苦しみにあわれる方は、罪と死の勝利者としてよみがえられるはずであった。全能なる神の霊感を受けて、イスラエルの麗しい詩人ダビデは、よみがえりの朝の喜びについてあかししていた。「このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。わたしの身もまた安らかである。あなたはわたしを陰府に捨ておかれず、あなたの聖者に墓を見させられないからである」と、ダビデは喜びを宣べ伝えた（詩篇16：9、10）。

パウロは、神が犠牲の儀式と「ほふり場にひかれて行く小羊」となる方に関する預言とを、いかに密接につなげておられたかを説明した。メシヤはそのご生涯を、「とがの供え物」としてささげられるはずであった。何世紀も貫いて、救い主のあがないが行われるときの光景を見つめ、預言者イザヤは、神の小羊が「死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられ……しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした」ことをあかししていた（イザヤ53：7、10、12）。

預言された救い主は、ユダヤ民族を地上における抑圧者から救い出すための、一時的な王としてではなく、人々の中の1人として、貧しく謙遜な生活を送り、ついには卑しめられ、拒まれ、殺されるために来られるはずであった。旧

約聖書に預言されている救い主は、堕落した人類のために犠牲としてご自身をささげられ、それによって、破られた律法のすべての要求を果たされるはずであった。彼によって、犠牲制度のさまざまの予型はその本体に一致した。十字架におけるキリストの死は、ユダヤの制度全体に重要な意味を与えるものであった。

パウロは、以前に自分が礼典律に熱心であったこと、それからダマスコの門のところで受けたすばらしい経験について、テサロニケのユダヤ人たちに話した。改心する以前に彼は、先祖伝来の信心に信頼し、誤った望みを持っていた。彼の信仰はキリストにつながっていなかった。その代わりに形式と儀式を信じていたのである。律法に対する彼の熱意は、キリストへの信仰と切り離されていたもので、全く無益であった。律法のわざを行うことにおいては、自分は非難されるところがないと誇っていたあいだ、彼は、律法を価値あるものとされた方を拒んでいたのである。

しかしパウロが改心したとき、すべてのものが変わった。彼が聖徒たちの名を借りて迫害していたナザレの [1442]
イエスが、約束のメシヤとしてパウロの前に姿を現されたのである。この迫害者は、神のみ子としてのイエスを見た。このイエスは、さまざまの預言を成就するためにこの地上に来られ、しかも、その生涯において、聖書が明細に述べていることに全くかなっておられた。

パウロが聖なる勇気をもって、テサロニケにある会堂で福音を宣べ伝えていたとき、幕屋の奉仕に関する慣例や儀式の本当の意味が豊かに照らし出された。彼は、地上でのキリストのみわざと、天の聖所におけるお働きをこえて、キリストが仲保者の仕事を完成されて、この地上に再び力と大いなる栄光をもって来られ、王国を建設されるというその時に、聞く人々の心を向けさせた。パウロはキリストの再臨を信じる者であった。この事に関して、パウロが真理を明瞭に力強く語ったので、聞いた人たちの多くはその心に、消え去ることのない印象を受けた。

パウロは続けて3回にわたる安息日に、テサロニケの人々に「ほふられた小羊」であられるキリストの生涯、死、復活、天における働き、そして未来の栄光に関して、聖書から説いた（黙示録13：8）。彼はキリストをあがめた。キリストのみわざについての正しい理解は、旧約聖書

の意味を明らかにする鍵であり、その豊かな宝への接近をゆるすものである。

福音の真理がテサロニケでこのように力強く宣べ伝えられて、大会衆の注意を引いた。「ある人たちは納得がいって、パウロとシラスにしたがった。その中には、信心深いギリシャ人が多数あり、貴婦人たちも少なくなかった」。

以前に行った場所では、使徒たちは断固とした反対にあった。「ユダヤ人たちは……ねたんで」いた。そのころこれらのユダヤ人たちは、ローマの権力の好意を得ていなかった。少し前に彼らがローマで暴動を起こしていたからである。彼らは疑いの目で見られていて、自由がある程度制限されていたのである。今こそ彼らは、自分たちの立場を立て直して彼らの好意を得るのに有利な時であり、また同時に、使徒やキリスト教に改宗した人々を非難するよい機会だと思った。

彼らはまず手始めに、「町をぶらついているならず者らを集めて暴動を起し、町を騒がせ」ることに成功した。そして、使徒たちを捜し出そうと「ヤソンの家を襲」ったが、彼らはパウロもシラスも見つけることができなかった。しかし「ふたりが見つからないので」暴徒は失望に狂い、「ヤソンと兄弟たち数人を、市の当局者のところに引きずって行き、叫んで言った、『天下をかき回してきたこの人たちが、ここにもはいり込んでいます。その人たちをヤソンが自分の家に迎え入れました。この連中は、みなカイザルの詔勅にそむいて行動し、イエスという別の王がいるなどと言っています』」。

パウロとシラスが見つからなかったので、市の当局者は告訴された信者たちに平和を保つ契約を結ばせた。さらに暴動の起こることを恐れて、「兄弟たちはただちに、パウロとシラスとを、夜の間にベレヤへ送り出した」。

今日、人々に一般受けしない真理を教える者たちは、時々、パウロやその弟子たちが、働きかけた人々から受け入れられなかったように、クリスチャンだと主張する人々からさえ快く受け入れられないことがあっても失望するにはあたらない。十字架の使命者たちは、たえず目を覚まして祈りで身を固め、常にイエスのみ名によって働き、信仰と勇気をもって前進しなければならない。彼らはキリストを、天の聖所における人類の仲保者として、旧約聖書のす

べての犠牲制度の中心である救い主として、あがめなければならない。その方のあがないの犠牲を通してこそ、神の律法を犯した罪人が平和とゆるしを見いだすことができるのである。

[1443]

第23章　文化の中心アテネにて

本章は使徒行伝17：1134に基づく

ベレヤでパウロは、彼が教えた真理を熱心に調べているユダヤ人を見いだした。彼らについてルカの記録はこう述べている、「ここにいるユダヤ人はテサロニケの者たちよりも素直であって、心から教を受けいれ、果してそのとおりかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べていた。そういうわけで、彼らのうちの多くの者が信者になった。また、ギリシャの貴婦人や男子で信じた者も、少なくなかった」。

ベレヤに住む人々の心には、偏見のための狭量さはなかった。彼らは、使徒の語った教理の真実性を熱心に調べていた。彼らは、好奇心からではなく、約束のメシヤについて書かれていることを知りたいと思って、聖書を研究し、日々、霊感によって書かれた記録を調べた。そして、彼らが聖句と聖句を比べる時に、天のみ使いがそのそばにいて彼らの心を照らし、心に感銘を与えた。

福音の真理が宣べ伝えられるところではどこででも、正しいことをしたいと心から願う人々が、聖書を熱心に調べるよう導かれる。この地上の歴史が閉じられようとする状況にあって、特別の真理を聞かされる人々が、ベレヤの人々の模範に従い、日々聖書を調べて、神のみことばと彼らに伝えられた使命を比べようとするならば、神の律法の教えに忠実なものが、いま比較的少数しかいないところに、今日、もっと多くいるはずである。しかし、人々が好まない聖書の真理が示されるとき、多くの人々はこのように熱心に調べることを拒むのである。聖書の明白な教えに論駁できなくても、彼らはなお、示されている証拠を学ぶことに全く気が進まないのである。ある者たちは、これらの教理が本当に正しいとしても、その新しい光を受け入れるかどうかは大したことではないと考えて、敵が人々をさまよわせるために用いる面白いつくり話に執着している。

こうして彼らの心は誤りにくらまされて、天から離れてしまうのである。

すべての者は、与えられた光に応じて裁かれる。主は、救いの使命を携えて行く使者をつかわされ、聞く者たちに、神のしもべたちの言葉をどのように扱うかについて責任を負わせられるのである。真理を心から探し求めている人々は、彼らに提示された教理を、神のみことばに照らして、注意深く研究するのである。

テサロニケにいる信仰を持たないユダヤ人たちは、使徒たちを嫉妬し、憎んで、町から彼らを追い出しただけでは満足せず、ベレヤへと追って行き、下層階級の激しやすい感情をかき立てて、彼らに逆らわせた。もしパウロがそこにとどまっていれば、彼らがパウロに暴力を振るうことを恐れて、兄弟たちは、新しく信仰を受け入れていたベレヤの人々の何人かを供につけて、パウロをアテネへ送った。

こうして迫害は、町から町へ真理の教師たちを追った。キリストの敵は、福音の進展を阻止することはできなかったが、使徒たちの働きをひどく困難なものにさせることには成功した。しかし反対や衝突に接しながらなお、パウロは着実に前進し、「わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と、エルサレムで幻のうちに見せられたように、神の御目的を果たす決意をしていた（使徒行伝22：21）。

パウロはベレヤから急いで出て行ったため、これまでテサロニケの兄弟たちを訪問しようと計画していた機会を奪われた。

使徒パウロはアテネに着くと、シラスとテモテにすぐ来るようにとの伝言を託して、ベレヤの兄弟たちを送り返した。テモテはパウロの出発に先立ってベレヤに来ていて、すでにここで順調に始められていた働きを継続し、新しい改宗者たちに信仰の原則を教えるために、シラスと一緒にとどまっていた。

アテネという都市は異教の首都であった。ここでパウロが出会ったのは、ルステラの時のような無知で軽々しく信じやすい民衆ではなく、知性と教養で知られている人々であった。ここではいたるところで彼らの神々の像や、歴史や詩に出てくる、神格化された英雄の像が目につき、また壮麗な建築物や絵画が、国家の誇りと、異教の神々への民 [1444]

衆の礼拝を表していた。人々の感覚は、芸術の美と華麗さに魅せられていた。どちらを向いても、費用を惜しまず建てられた寺院や神殿の巨大な姿がそびえたっていた。軍事上の勝利や有名な人の行為が、彫刻や神社や石碑によって記念されていた。これらすべてが、アテネを巨大な画廊にしていた。

パウロは、周囲の美しい、堂々たる光景を見わたし、町全体が偶像崇拝に陥っているのを見て、いたるところで侮辱されている神のために、嫉妬をかき立てられた。そして、知的文化が進んでいながら、真の神を知らないアテネの人々を、あわれむ気持ちになった。

使徒パウロは、この学問の中心地で見た事物によって惑わされはしなかった。彼の霊性は生き生きと天の事柄に向けられていたので、滅びることのない喜びと栄光の富から見れば、周囲の華麗さ、壮麗さは無価値なものと映った。彼はアテネの壮麗さを見たとき、芸術や学問を愛する人々を支配する誘惑的な力を悟り、自分の前にある働きの重要性に深く心を動かされた。

真の神が礼拝されていないこの大都市で、パウロは孤独感におそわれ、共労者の同情と助けを切望した。人間的な友情に関するかぎり、彼は自分が全く1人であると感じた。パウロはテサロニケ人への手紙の中でこの感情を「わたしたちだけがアテネに留まる」という言葉の中に表している（テサロニケ3：1）。打ち勝ち難いと思われる障害が彼の前に立ちはだかっていて、人々の心に到達しようという試みはほとんど望みがないように思えた。

パウロは、シラスとテモテを待っているあいだ、何もせずに時間を過ごしたのではない。彼は「会堂ではユダヤ人や信心深い人たちと論じ、広場では毎日そこで出会う人々を相手に論じた」。しかしアテネでのパウロの主な仕事は、神について、また、堕落した人類のための神の目的について、知的な概念のない人々に、救いのおとずれを携えて行くことであった。使徒パウロはまもなく、最も巧妙で、魅惑的な形態の異教思想に出会うのであった。

アテネの偉大な人々は、まもなく、新しい聞きなれない教理を人々に提示している変わった教師が彼らの町に来ていることを知った。これらの人々のある者たちが、パウロを捜し出して、彼と話を交わすようになった。すぐに彼ら

のまわりに、耳を傾ける人垣ができた。ある者たちは、社会的にも知的にも彼らよりはるかに劣っている者としてパウロをからかうつもりで、仲間同志であざけるように言った、「このおしゃべりは、いったい、何を言おうとしているのか」。また、ほかの者たちは、「パウロが、イエスと復活とを、宣べ伝えていた」ので「あれは、異国の神々を伝えようとしているらしい」と言った。

広場でパウロに会った人々の中には「エピクロス派やストア派の哲学者数人も」いたが、彼らも、また、パウロと接触するようになった人たちもみな、彼が自分たちよりももっと大きな知識の宝庫を持っていることがすぐにわかった。パウロの知的能力は学問のある人たちの尊敬を集め、また彼の熱心で筋道だった議論と雄弁の能力は、すべての聴衆の注意を引いた。聴衆はパウロが未熟者ではなく、自分の教える教理を擁護し、説得力のある議論であらゆる階級の人々を迎えることができることを認めた。こうして使徒パウロは、恐れることなく立って、反対者たちに彼ら自身の土俵で応じ、論理には論理を、哲学には哲学を、雄弁には雄弁をもって対処した。

パウロに反対する異教徒たちは、異国の神々について説明したために死刑の判決を下されたソクフブスの運命に注意を向けさせ、彼も同じ道をたどって生命を危うくせぬようにと、パウロに忠告した。しかしパウロの説教は人々の注意を引き、彼のゆるぎない知識は人々の尊敬と称賛の的となった。パウロは哲学者たちの哲学や、皮肉によって沈黙させられるようなことはなかった。そこで人々は、パウロが自分の使命を彼らの中で果たし、万難を排しても自分の話を語ろうと決意していることに満足し、彼の話をまともに聞くことにした。

そこで彼らはパウロをアレオパゴスに案内した。これは [1445]
アテネ中で一番神聖な場所の1つで、これにまつわる追憶や連想から、ある人々はこの場所に対して、心の中に恐怖に等しい迷信的な尊敬をいだいていた。ここで宗教に関係のある事柄が、重要な民事上の問題や道徳上の問題について最終的な裁判官をつとめる人々によって、注意深く検討されることがよくあった。

騒音やざわめきのある往来の雑踏から離れ、また、雑多な議論の騒ぎから離れたこの場所で、パウロは中断される

ことなく話を聞いてもらうことができた。彼のまわりには詩人、芸術家、哲学者、すなわちアテネの学者や賢人たちが集まり、彼に話しかけた、「君の語っている新しい教がどんなものか、知らせてもらえまいか。君がなんだか珍しいことをわれわれに聞かせているので、それがなんの事なのか知りたいと思うのだ」。

その責任ある厳粛な時に、パウロは冷静、沈着であった。彼は大切な使命に対する重荷を感じた。そして、彼の語る言葉は聞く者たちに、彼がくだらぬおしゃべりをしているのではないことを納得させた。「アテネの人たちよ、あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられると、わたしは見ている。実は、わたしが道を通りながら、あなたがたの拝むいろいろなものを、よく見ているうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇もあるのに気がついた。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知らせてあげよう」とパウロは言った。彼らはあらゆる理解力と常識をもってしても、宇宙を創造された神について知らなかった。しかし中に、より偉大な知識を求めている者たちがいた。彼らは無限の神に向かって手をのばしていた。

偶像のぎっしり並んだ神殿のほうへ、手をのばして指さしながら、パウロは心の重荷を思うままに述べ、アテネ人の宗教の虚偽を暴露した。聴衆の中の最も賢明な人たちは、パウロの議論を聞いて驚いた。パウロは彼らの芸術、文学、宗教によく通じていることを示した。彼は彫刻や偶像を指さして、神は人間が考え出したこんな形に似せられるものではないと断言した。これらの刻まれた像は、どんな意味においても、主なる神の栄光を表すものではなかった。パウロはこれらの像には生命がなく、ただ人間の力にあやつられ、人間の手によって動かされる時だけ動くにすぎないこと、したがってこれらの像を拝している人間の方が、礼拝されている像よりもあらゆる点においてすぐれていることを彼らに気づかせた。

パウロは偶像に心酔している聴衆の心を、彼らが「知られない神」と呼んでいたまことの神に対する、誤った宗教観から抜け出させようとした。今、パウロが彼らに伝えようとしている神は、人間とは独立した存在であり、人間の

手によってその方の権威と栄光に加えるべきものは何もなかった。

人々は真の神の属性、すなわち神の創造力や神の支配的な摂理の存在についての、パウロの熱心で論理的な説明に感心して、われを忘れていた。使徒パウロは熱心に、激しく、雄弁に語った、「この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。また、何か不足でもしておるかのように、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え」ておられる。全天は神を入れるほど十分に大きくはない。ましてや人間の手で造られた宮などは小さすぎるのである。

人間の諸権利が認められないことがしばしばあった、当時の階級制の時代に、パウロは神が「ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ」てくださったことを述べて、人類同胞についての偉大な真理を明らかにした。神の御目には、すべての者は同等であった。また、人はその造り主に絶対に従う義務があるのだった。それから使徒パウロは、神と人とのすべての関係において、神の恵みと憐れみの意図が、1本の金の糸のように貫いていることを示した。神は「それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれ一人一人から遠く離れておいでになるのではない」。 [1446]

パウロは自分の周囲にいる立派な人格者たちを指して、彼らのある詩人の言葉を借りて無限の神をみ父として描き、彼らがその神の子らであると言った。「われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』。このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じと、見なすべきではない。

神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる」。キリストの来臨に先だった暗黒の時代に、支配者であられる神は、異教徒の偶像礼拝を見過ごしておられたが、今、神はみ子を通して

真理の光を人々にお与えになり、貧しくつつましい者ばかりでなく、誇り高い哲学者やこの世の君主たちすべてが、救いを得させる悔い改めに導かれるようにと望んでおられた。「神は、義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである」。パウロが死者の復活について語ると、「ある者たちはあざ笑い、またある者たちは、『この事については、いずれまた聞くことにする』と言った」。

こうして、異教の学問の中心地アテネにおける使徒パウロの働きは終わった。アテネ人は偶像礼拝に堅くしがみついていて、真の宗教の光から離れ去った。国民が彼ら自身の業績に全く満足しているとき、彼らはほとんど見込みがないのである。アテネの人々は、学問があって洗練されていることを誇っていたが、ますます堕落し、偶像崇拝のあいまいな神秘にますます満足していった。

パウロの言葉を聞いた人々の中には、真理がその心に示されて確信を与えられた者たちがいたが、彼らはへりくだって神を認めようとも、救いの計画を信じようともしなかった。どんなに雄弁な言葉も、議論の力も、罪人を改心させることはできない。神の力だけが、心に真理を注ぐことがおできになる。この力からかたくなに身をかわそうとする者は、真理に達することができない。ギリシャ人は知恵を求めていたが、十字架の使命をばかげたことと思っていた。彼らは天来の知恵よりも、自分たち自身の知恵をもっと高く評価していたからである。

福音の使命がアテネ人のあいだで比較的成功しなかった理由は、知性と人間の知恵に対する彼らの誇りの中に見いだされるであろう。この世の賢い人々で、迷える貧しい罪人としてキリストのもとへくる者は、救いにいたる知恵を持つようになるが、著名な者として自分の知恵を称揚しながらやってくる人々は、神だけがお与えになれる光と知識を受けることができないであろう。

こうしてパウロは、当時の異教思想に出会った。アテネにおける彼の働きは、全くむだになったわけではない。最も有名な市民の1人であるデオヌシオや、その他の幾人かが福音使命を信じ、信者たちと全く1つに結ばれた。

霊感は、知識と洗練と芸術を身につけていたにもかかわらず、なお、悪に落ち込んでいたアテネ人たちの生活を、われわれにかいま見させてくれたが、それは神が、ご自分のしもべを通して、どれほど偶像崇拝や、人々の高慢と自己満足の罪を譴責されたかを、示すためであった。霊感の筆によって描かれた使徒パウロの言葉と、彼の態度や境遇についての描写は、きたるべきすべての世代に伝えられ、彼のゆるぎない確信、孤独と逆境の中における勇気、そして異教のただ中で彼がキリスト教のために獲得した勝利について、あかしするのであった。

パウロの言葉は、教会のための知識の宝を含んでいる。彼は、誇り高い聴衆を刺激するような言葉を軽々しく口に出すことによって、困難を招きかねないような立場にあった。もし彼の演説が、彼らの神々や町の有力者に対する直接の攻撃だったら、彼はソクラテスの運命にあう危険に陥ったであろう。しかし天来の愛から生ずる機知をもって、彼は人々の知らない真の神を彼らに示しながら、人々 [1447]
の心を異教の神々から注意深く引き離した。

今日、聖書の真理は、この世の偉大な人々の前に示されなければならない。それは彼らが、神の律法に従うか、悪の王に忠誠を誓うかを、選ぶことができるためである。神は永遠の真理、すなわち救いに至る知恵を与える真理を彼らに与えられるが、それを強制的に受けさせることはなさらない。もし彼らが真理から離れるならば、彼ら自身の行いの実に満たされるままにしておかれるのである。

「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。すなわち、聖書に、『わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしいものにする』と書いてある」。「神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである」（コリント1：18、19、27、28）。最もすぐれた学者や政治家、この世の最も傑出した人々の多くは、終末の時代には天の光から身をかわすであろう。この世は自分の知恵によっては神を認めるに至らないからである。しかし、神のしもべたちは、これらの人々に真理を伝えるために、

あらゆる機会を利用しなければならない。ある人々は、神の事柄に無知であったことを悟り、大教師イエスのみ足のもとに、謙遜な生徒として身を置くであろう。

上層階級の人々を動かすためのあらゆる努力に対して、神の働き人は強い信仰が必要である。見たところとても不可能に思えるかもしれないが、最も暗黒の時にも上のほうには光がある。神を愛し神に仕える者の力は、日に日に新たにされる。彼らが神のご計画を遂行する時に間違いを犯さないように、必要な時にはいつでも無限の神の英知が与えられる。このような働き人は、最初の確信を最後までしっかりと持ち続け、神の真理の光が、この世界をおおっている暗黒のさなかに輝かねばならないことを覚えねばならない。神の奉仕に関して、落胆があってはならない。献身した働き人の信仰は、それを試すためのすべての試みに耐えなければならない。神は、ご自分のしもべたちが必要とするすべての力を、喜んでお与えになることができるし、また、さまざまな必要から彼らの求めている知恵を、お与えになることができるのである。神はご自身に信頼する者の最高の期待以上のことを実現してくださるのである。

第24章　退廃の都コリントにて

本章は使徒行伝18：118に基づく

紀元1世紀のあいだ、コリントは、ギリシャばかりでなく世界の主要都市の1つであった。ギリシャ人、ユダヤ人、ローマ人、各地からの旅行者などが、仕事や楽しみを熱心に求めて、町の通りに群がっていた。ローマ帝国内のどこからでも楽に行ける位置にある、商業の大中心地として、コリントは神と神の真理のために記念碑を打ち立てるべき重要な場所であった。

コリントに住居を定めていたユダヤ人たちの中に、アクラとプリスキラがいた。彼らはのちに、キリストのための熱心な働き人として目立つ存在になった。この2人の人柄を知るようになったパウロは、「その家に住み込ん」だ。

パウロは、この交通の大通りで働きを始めようとした最初から、彼の働きの進展を妨げる深刻な障害を見た。町全体が偶像礼拝にささげられていたのである。ビーナスは気に入りの女神で、ビーナスを拝むことには、さまざまな風紀を乱す慣習や儀式が伴っていた。コリント人は、異教徒たちの中でさえも、みだらな不道徳行為のために目立つ存在であった。彼らは一時的な快楽や歓楽以外、ほとんど何も考えず、気にかけもしないようであった。

コリントで福音を宣べ伝えるにあたって、パウロは、アテネにおける働きを特徴づけたものとは異なった方法を [1448]
取った。アテネにおいてパウロは、聴衆の性格に自分のやり方を適合させようとし、論理には論理で、科学には科学で、哲学には哲学で立ち向かった。彼は、このようにして過ごした時のことを考え、アテネにおける彼の教えがほとんど実を結ばなかったことに気づいて、コリントでは、また別の伝道方法によって、軽率で無関心な人々の心をとらえようと決めた。彼はむずかしい議論や討論をさけて、「イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは」、コリント人のあいだでは「何も知る

まい」と決心した。彼は、「巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によ」ってコリント人を説こうとした（コリント2：2、4）。

パウロがコリントのギリシャ人たちにキリスト〔注・救い主〕として紹介しようとしていたイエスは、悪名の高い町で育てられた、身分の低い生まれのユダヤ人であった。イエスはご自分の民族に拒まれ、ついに、悪人として十字架にかけられた。ギリシャ人は、人類を高めることは必要であると信じていたが、哲学や科学の研究が真に人類を高め名誉を得る唯一の方法だと思っていた。この身分の低いユダヤ人の力を信じることが、人間のあらゆる力を向上させ、高尚なものとすることを、パウロは彼らに信じさせることができるであろうか。

現代に住む人々の心にとって、カルバリーの十字架は神聖な思い出につつまれたものである。キリストの受難の光景は神聖なものを連想させる。しかし、パウロの時代には、十字架は拒絶と恐怖の感情をもって眺められていた。十字架上で死を遂げた者を人類の救い主として支持すれば、当然、嘲笑や反感を呼び起こしたであろう。

パウロは自分の使命が、コリントのユダヤ人やギリシャ人にどのように受けとめられるかをよく知っていた。「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものである」と、彼は認めていた（コリント1：23）。ユダヤ人の聴衆の中には、パウロが宣べ伝えようとしていた使命に腹を立てる人々がたくさんいたであろう。ギリシャ人の見るところでは、パウロの言葉はばかげた愚言であったであろう。十字架が民族を高尚にし、人類を救うことに関係があるということを示そうとしたパウロは、知能の低い者とみなされたであろう。

しかし、パウロにとって、十字架は最高の関心をはらうべき唯一の対象であった。パウロは、十字架にかけられたナザレ人に従う者たちを迫害していたさ中にとらえられて以来、ずっと、十字架をあがめ続けてきた。そのとき、キリストの死に表された、神の無限の愛についての啓示が彼に与えられたのである。そして、彼の人生に驚くべき変化が起こり、彼のすべての計画と目的が天と一致するようになった。そのときからパウロは、キリストにある新しい人

になった。罪人がみ子の犠牲の中に見られる天父の愛をあおぎ見て、神の感化力に従うとき、心に変化が起こり、それ以後、キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられると悟るようになることを、パウロは個人的な経験から知った。

パウロは改心したとき、ナザレのイエスを、人を変え救いを施す力のある生ける神のみ子として、同胞にぜひともあおぎ見させたいという願いをいだいた。それ以来彼は、生活のすべてをささげて、十字架にかけられた方の愛と力を描くことに全力をつくした。彼の大きな同情心は、あらゆる階級の人々を受け入れた。「わたしには、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任がある」と彼は言った（ローマ1：14）。パウロが以前に、聖徒たちの名を借りて冷酷にも迫害していた栄光の主に対する愛は、彼の行動を駆りたてる原理、すなわち原動力であった。もし義務の道において熱情の衰えることがあれば、彼は十字架をひと目見るだけで、そこに驚くべき愛が示されていることを知り、自己否定の道に邁進するのであった。

コリントにある会堂で説教をし、モーセや預言者たちの書き物から説いて、聞く者たちを約束のメシヤの来臨へと導いている使徒パウロを見よ。あがない主 が人類の大 [1449]
祭司として、ご自身の命を犠牲にすることにより、1度だけすべての者のために罪の償いをされて、それから天の聖所においてご自分の務めをなさる、その主のみわざをわかりやすく説くパウロに耳を傾けよ。パウロの言葉を聞いていた者たちは、自分たちの待望していたメシヤがすでに来られたこと、キリストの死がすべての犠牲のささげ物の本体であったこと、また、天の聖所におけるキリストの務めは、背後にその影を持ち、ユダヤの祭司の務めを明らかにする、偉大な実体であるということを理解させられた。

パウロは「イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちに……あかしした」。預言やユダヤ人たちの一般的な期待によれば、メシヤはアブラハムとダビデの家系から出るはずだということを、彼は旧約聖書から説明した。次にパウロは、父祖アブラハムから、王位にある詩篇記者を経て、イエスの家系をたどった。彼は、約束のメシヤのご品性と働きについての、また、この地上でメシヤがどのよう

な扱いを受けるかについての預言者たちのあかしを読み、次に、これらすべての預言が、ナザレのイエスのご生涯とみわざと死において成就したことを説明した。

パウロはキリストが、何よりもまず、国家の存続を達成し、その栄光をあらわすものとしてキリストの来臨を待ち望んでいた民族に、救いを与えるために来られたのだと説明した。しかし、その民族は、彼らにいのちをさずけてくださるはずであったキリストを拒んで、その支配が死と共に終わるような他の指導者を選んだ。パウロは、悔い改めによる以外、差し迫った滅亡からユダヤ民族を救うことができないことを、聞く者たちにはっきりわからせようと努めた。彼らが、十分に理解していることを自分たちの最高の誇りとし、栄光としていたそれらの聖句の意味について、実は無知であったことを、パウロは指摘した。また彼は、ユダヤ人の世俗的なことや、地位や肩書きや自分を誇示することを好むことや、過度に利己主義なことを譴責した。

聖霊の力により、パウロは自分の奇跡的な改心や、旧約聖書に対する確信を語った。旧約聖書こそナザレのイエスにおいて完全に成就されたものである。このことを厳粛に、熱心に語ると、聞く者たちは、彼が、十字架にかけられて、よみがえられた救い主を、心から愛しているのだと認めざるを得なくなった。彼らには、パウロの心がキリストに向けられ、彼の全生涯が主に結びつけられているのだとわかった。彼の言葉は非常に心を動かすものだったので、無感動でいることができたのは、ただキリスト教に対する激しい憎悪に満たされていた者たちだけであった。

しかしコリントのユダヤ人は、使徒パウロによってはっきり示された証拠に目を閉じ、彼の訴えを聞こうとしなかった。キリストを拒むに至ったのと同じ精神から、彼らはキリストのしもべに対して激しい怒りに満たされた。パウロが福音使命を異邦人に伝え続けることができるよう、神が特別にパウロを保護されなかったら、彼らはパウロの息の根をとめてしまったであろう。

「しかし、彼らがこれに反抗してののしり続けたので、パウロは自分の上着を振りはらって、彼らに言った、『あなたがたの血は、あなたがた自身にかえれ。わたしには責任がない。今からわたしは異邦人の方に行く』。こう言っ

て、彼はそこを去り、テテオ・ユストという神を敬う人の家に行った。その家は会堂と隣り合っていた」。

シラスとテモテはパウロを助けるために「マケドニヤから下ってきて」、共に異邦人のために働いた。パウロとその仲間たちは、ユダヤ人ばかりでなく異邦人にも、堕落した人類の救い主としてキリストを宣べ伝えた。複雑な、遠まわしの論法を避けて、十字架の使命者たちはこの世の創造主、宇宙の最高の統治者のご性質を強調した。彼らの心は神とみ子への愛に燃え、彼らは人類のためにささげられた無限の犠牲を見上げるようにと異邦人に訴えた。彼らは、異教の中で暗中模索を続けてきた人々が、カルバリーの十字架から流れてくる光さえ見ることができれば、あがない主のもとへと導かれることを知っていた。「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」と、救い主 は言っておられた [1450]（ヨハネ12：32）。

コリントにおける福音の働き人たちは、彼らが働きかけている魂の上に恐ろしい危険が迫っていることを実感した。そして、自分たちの上に負わされている責任を感じつつイエスのうちにある真理を明らかにした。彼らの使命は明瞭、率直、また決定的で、それはいのちからいのちに至らせる香りか、それとも死から死に至らせる香りであった。そして、彼らの言葉にばかりでなく、また日々の生活の中に福音があらわされた。天使たちは彼らと協力し、神の恵みと力は多くの者の悔い改めの中に示された。「会堂司クリスポは、その家族一同と共に主を信じた。また多くのコリント人も、パウロの話を聞いて信じ、ぞくぞくとバプテスマを受けた」。

これまで常に使徒たちに向けられていたユダヤ人の憎しみは、いよいよ激しくなった。クリスポの悔い改めとバプテスマは、頑迷な反対者たちに自分たちの非を認めさせないで、かえって彼らを怒らせる結果になった。彼らはパウロの説教を議論で反駁することができなかった。そのように証拠不足だったので、彼らは欺瞞と悪意のある攻撃に訴えて、福音とイエスのみ名を冒瀆した。彼らが盲目的な怒りの中で用いるとき、どんな言葉も彼らにとって激しすぎることはなく、どんな計略も低級すぎることはなかった。彼らはキリストが奇跡を行われたことを否定することはで

きなかったが、キリストはサタンの力によって奇跡を行ったのだと言った。そして、パウロが働きかけたすばらしい仕事も、同じ手先によってなされたのだと断言した。

パウロはコリントでいくらかの成功をおさめたが、なおこの堕落した都市の邪悪さを見聞きして、ほとんど落胆しそうになった。異邦人の堕落ぶりを目撃し、ユダヤ人からは軽蔑と侮辱を受けて、彼は激しく苦悶した。そして、そこに見いだされる人材で教会を築こうとすることは知恵のないことではないかと、おぼつかない気持ちになった。

パウロがもっと有望な伝道地を求めてこの町を去ろうと計画し、自分の義務をさとりたいと熱心に求めたとき、主は異象を通して彼に臨み、そして、言われた、「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」。パウロは、このことがコリントにとどまれとの命令であり、またまかれた種を主が増やされるとの保証であるとさとった。力づけられ、勇気づけられて、彼は熱心に、辛抱強くそこで働き続けた。

使徒パウロの努力は公開の説教だけに限られなかった。この方法では動かすことのできない多くの人々がいた。彼は戸毎訪問に多くの時間を費やし、そうすることによって家庭ぐるみの親しい交際を利用した。彼は病気の者や悲しんでいる者を訪れ、苦しんでいる者を慰め、しいたげられている者を助けた。そして、自分の言うこと行うことのすべてに、イエスのみ名を高めた。こうして彼は働き、「弱くかっ恐れ、ひどく不安であった」（コリント2：3）。パウロは自分の教えていることが神を印象づけないで、人間を印象づけているのではないかとおそれた。

パウロは後になって、次のように言った。「わたしたちは、円熟している者の間では、知恵を語る。この知恵は、この世の者の知恵ではなく、この世の滅び行く支配者たちの知恵でもない。むしろ、わたしたちが語るのは、隠された奥義としての神の知恵である。それは神が、わたしたちの受ける栄光のために、世の始まらぬ先から、あらかじめ定めておかれたものである。この世の支配者たちのうちで、この知恵を知っていた者は、ひとりもいなかった。もし知っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかった

であろう。しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである。そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。

ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。この賜物について語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである」（コリント2：613）。 [1451]

パウロは彼の力が、自分自身の中にあるのではなく、聖霊のご臨在の中にあって、その尊い感化力が彼の心を満たし、1つ1つの思いをキリストに服従させてくださることを知った。彼は自分自身について「いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」と言った（IIコリント4：10）。使徒パウロの教えにおいては、キリストが中心人物であった。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」と彼は言った。自己は隠されて、キリストがあらわされ、高められた。

パウロは雄弁家であった。改心する前に、彼はしばしばほとばしる雄弁で聴衆に感銘を与えようとした。しかし今は、彼はこれをすべて放棄した。感覚を楽しませ、想像力を満足させはするが、しかし日常の生活には関係のないような、詩的表現や空想的描写にふけることなく、パウロはきわめて重要な真理を、人の心に刻みつけるために、単純な言葉を用いるよう努めた。真理を空想的に描写するなら、人を感動させることができるかもしれない。しかし、往々にして、このようにして示された真理は、信者を強めて人生の戦いに備えさせるに必要な糧を与えるものではない。即刻の必要や現実の試みに苦闘している人々には、キ

リスト教の基本原則にある健全で実際的な教えを与えなければならない。

コリントにおけるパウロの努力には、成果がなかったわけではない。多くの者が偶像礼拝を離れて生ける神に仕えるようになり、1つの大きな教会がキリストの軍旗の下に編入された。異邦人の最も放縦な者たちの中からも、救われる者たちがいて、神の憐れみと、罪からきよめるキリストの血の効力についての、記念碑となった。

パウロがキリストを示すことにますます成功したことから、不信なユダヤ人は一層強固な妨害へと奮い立った。彼らは一団となって立ち上がり、「一緒になってパウロを襲い、彼を法廷にひっぱって行って訴えた」。当時、ガリオがアカヤの総督であった。彼らは法廷の役人たちが、以前の場合と同じように彼らに味方するだろうと期待して、怒声を張り上げ、使徒パウロに対する苦情を訴えた、「この人は、律法にそむいて神を拝むように、人々をそそのかしています」。

ユダヤの宗教はローマの権力の保護下にあった。だからパウロを訴えた者たちは、もし彼に、彼らの宗教の律法を犯したという罪を負わせることができるなら、彼は裁判にかけられ、判決を受けるために引き出されることになるだろうと思った。こうして彼を死に追い込みたいと彼らは望んだ。しかし、ガリオは誠実な人で、ユダヤ人の嫉妬と陰謀にだまされる者とならず、これをはねつけた。ガリオは彼らの偏狭と独善にあいそをつかし、彼らの訴えを無視していた。パウロが弁明のために口を開こうとすると、ガリオはその必要はないと彼に告げ、それから、怒っている告発者たちに向かって言った、「『ユダヤ人諸君、何か不法行為とか、悪質の犯罪とかのことなら、わたしは当然、諸君の訴えを取り上げもしようが、これは諸君の言葉や名称や律法に関する問題なのだから、諸君みずから始末するがよかろう。わたしはそんな事の裁判人にはなりたくない』。こう言って、彼らを法廷から追いはらった」。

ユダヤ人もギリシャ人もガリオの決定を熱心に待っていた。ガリオがこの事件を、公共の利害になんら関係のないものとしてその場で却下したのを見て、ユダヤ人は計画をくじかれたことを知り、怒って退場した。総督の断固たる態度によって、ユダヤ人のあと押しをしていたうるさい群

衆の目が開かれた。パウロがヨーロッパで働くようになって以来はじめて、群衆は彼に味方した。総督の見ている前で、しかも、彼の干渉も受けずに、彼らは使徒を訴えた有力者たちにはげしく襲いかかった。「みんなの者は、会堂司ソステネを引き捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。ガリオはそれに対して、そ知らぬ顔をしていた」。こうしてキリスト教はめざましい勝利をおさめた。 [1452]

「パウロは、なお幾日ものあいだ滞在した」。もし使徒パウロが、このときコリントを去るよう強いられていたなら、イエスを信ずる信仰へと改宗した人々は、危険な立場に置かれたことであろう。ユダヤ人たちは、その地方からキリスト教が絶滅してしまうまで、彼らが得た有利な状態をいよいよ徹底させる努力をしていたことであろう。

第25章　テサロニケ教会への手紙

本章はテサロニケ人への第1の手紙、テサロニケ人への第2の手紙に基づく

パウロがコリントに滞在しているあいだに、シラスとテモテがマケドニヤから下ってきたことは、パウロを大いに励ました。2人は、福音宣伝者たちがテサロニケをはじめて訪問したとき真理を受け入れていた人々の、「信仰と寛容」の「よきおとずれ」を彼に携えてきた。パウロは、試練と逆境の真っただ中にいて、変わることなく神に忠実につかえている信者たちへ、優しい同情の心を向けた。パウロは自分で彼らを訪問したいと思ったが、その時にはこれが不可能だったので、彼らに手紙を書いた。

テサロニケの教会にあてたこの手紙の中で、使徒パウロは、彼らが信仰を増し加えているという喜ばしい知らせを、神に感謝している。「兄弟たちよ。それによって、わたしたちはあらゆる苦難と患難との中にありながら、あなたがたの信仰によって慰められた。なぜなら、あなたがたが主にあって堅く立ってくれるなら、わたしたちはいま生きることになるからである。ほんとうに、わたしたちの神のみまえで、あなたがたのことで喜ぶ大きな喜びのために、どんな感謝を神にささげたらよいだろうか。わたしたちは、あなたがたの顔を見、あなたがたの信仰の足りないところを補いたいと、日夜しきりに願っているのである」とパウロは書いた。

「わたしたちは祈の時にあなたがたを覚え、あなたがた一同のことを、いつも神に感謝し、あなたがたの信仰の働きと、愛の労苦と、わたしたちの主イエス・キリストに対する望みの忍耐とを、わたしたちの父なる神のみまえに、絶えず思い起している」。

テサロニケにいる信者たちの多くが「偶像を捨てて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようにな」っていた。彼らは「多くの患難の中で、聖霊による喜びをもっ

て御言を受けいれ」ていた。主に忠実に従っている彼らは「マケドニヤとアカヤとにいる信者全体の模範になった」とパウロは述べた。この称賛の言葉は分に過ぎたものではなかった。「すなわち、主の言葉はあなたがたから出て、ただマケドニヤとアカヤとに響きわたっているばかりではなく、至るところで、神に対するあなたがたの信仰のことが言いひろめられたので」ある。

テサロニケの信者たちは本当の伝道者であった。彼らの心は、「きたるべき怒り」に対する恐れから彼らを救い出して下さった救い主への熱意に燃えた。キリストの恵みによって、彼らの生活におどろくべき変化が起こった。そして、主のみことばが彼らの口から語られると、力がそれに伴った。聞く者の心は宣べ伝えられた真理によって納得させられ、多くの魂が信者の群れに加えられた。

この第1の手紙の中で、パウロは、テサロニケ人の中で働いた彼のやり方に言及した。彼は欺きやだましごとで改心者を導こうとしたのではないと言明した。「わたしたちは神の信任を受けて福音を託されたので、人間に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を見分ける神に喜ばれるように、福音を語るのである。わたしたちは、あなたがたが知っているように、決してへつらいの言葉を用いたこともなく、口実を設けて、むさぼったこともない。それは、神があかしして下さる。また、わたしたちは、キリストの使徒として重んじられることができたのであるが、あなたがたからにも せよ、ほかの人々からにもせよ、人間からの [1453]
栄誉を求めることはしなかった。むしろ、あなたがたの間で、ちょうど母がその子供を育てるように、やさしくふるまった。このように、あなたがたを慕わしく思っていたので、ただ神の福音ばかりではなく、自分のいのちまでもあなたがたに与えたいと願ったほどに、あなたがたを愛したのである」。

パウロは続けた。「あなたがたもあかしし、神もあかしして下さるように、わたしたちはあなたがた信者の前で、信心深く、正しく、責められるところがないように、生活をしたのである。そして、あなたがたも知っているとおり、父がその子に対してするように、あなたがたのひとりびとりに対して、御国とその栄光とに召して下さった神の

みこころにかなって歩くようにと、勧め、励まし、また、さとしたのである。

これらのことを考えて、わたしたちがまた絶えず神に感謝しているのは、あなたがたがわたしたちの説いた神の言を聞いた時に、それを人間の言葉としてではなく、神の言として――事実そのとおりであるが――受けいれてくれたことである。そして、この神の言は、信じるあなたがたのうちに働いているのである」。「実際、わたしたちの主イエスの来臨にあたって、わたしたちの望みと喜びと誇の冠となるべき者は、あなたがたを外にして、だれがあるだろうか。あなたがたこそ、実にわたしたちのほまれであり、喜びである」。

パウロは、テサロニケの信者たちにあてた第1の手紙の中で、死の本当の状態を彼らに教えようとした。死んだ人は眠っているのだ、無意識の状態にいるのだと、彼は述べている。「兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。……すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう」。

テサロニケ人たちは、キリストは生きている信仰者を変えて、ご自身のもとに連れていくために来られるという考えを、しっかり持っていた。彼らは友人たちが死んで、主の来られるときに受けようとしている祝福を失うことのないようにと、友人たちの命を注意深く見守っていた。しかし、愛する人々が次々に彼らから取り去られた。そしてテサロニケ人たちは、亡くなった者たちの顔を、これが見納めと苦しみ嘆きながら見つめ、彼らと将来生きて会えるなどという希望は到底持てない気持ちになっていた。

パウロの手紙が開かれて読まれたとき、死の正しい状態を明らかにした言葉によって、大きな喜びと慰めが教

会に与えられた。パウロは、キリストが来られるとき、イエスにあって眠りについている者たちより先に、生きている者たちが主に会いに行くのではないことを教えた。天使のかしらの声と神のラッパの音は、眠っている者たちにとどき、キリストにあって死んでいる者たちが最初によみがえり、それから生き残っている者たちに不死が与えられるのである。「それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい」。

この保証がテサロニケの若い教会にもたらした希望と喜びは、われわれには到底、十分にわかるものではない。彼らは福音の父から送られてきた手紙を信じて、大切にした。そしてパウロを愛するようになった。パウロはこれらの事を以前にも彼らに話していたが、そのときには、彼らの心は新しい、なじみのない教理を理解することに必死であったので、いくつかの点についてその意味が、彼らの頭にはっきりと印象づけられなかったとしても、驚くにはあたらない。しかし彼らは真理に飢えていた。そして、パウロの書簡は彼らに新しい希望と力を与え、死を通していのちと不死とを明らかに示された方に対する、より固い信仰と 深い愛情を与えた。 [1454]

彼らは、信仰を持つ友が墓からよみがえり、神のみ国で永遠に生きることを知って喜んだ。死者の休息所を包んでいたやみが、吹き払われた。クリスチャンの信仰は新しい輝きで飾られ、彼らはキリストのいのちと死と復活とに新しい栄光を認めた。

「同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さる」とパウロは書いた。多くの人がこの聖句を、眠っている人々が天からキリストとともに連れてこられるという意味に解釈しているが、パウロの言う意味は、キリストが死からよみがえられたように、神は眠っている聖徒を墓から呼び出し、キリストと一緒に天に連れて行かれるということであった。これはテサロニケの教会ばかりでなく、どこにいようとも、すべてのクリスチャンに与えられた慰めであり、輝かしい希望である。

テサロニケで働いているあいだに、パウロは時のしるしに関する問題を十分に教えて、人の子が天の雲に乗って

現れる前に起こる出来事を示していたので、もうこの問題について書く必要はないと思った。しかし、彼は以前教えたことに、もういちど注意をひいた。「その時期と場合とについては、書きおくる必要はない。あなたがた自身がよく知っているとおり、主の日は盗人が夜くるように来る。人々が平和だ無事だと言っているその矢先に……突如として滅びが彼らをおそって来る」と彼は言った。

今日、この世界には、主の再臨について人々に警告するためにキリストがお与えになったさまざまの証拠に、目をつぶっている者たちが大勢いる。時の終わりを示すしるしが急速に成就しており、人の子が天の雲に乗って来られるその時に向かって、この世界が急速に進んでいるにもかかわらず、彼らはすべての不安をおさえようとしている。キリストの再臨に先立って起こるしるしに無関心でいることは罪であると、パウロは教えている。この怠慢の罪を犯している人々を、彼は夜の者、やみの者と呼んでいる。彼は次の言葉で、油断なく警戒するようにと励ましている。「しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう。あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない。だから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう」。

この事柄に関する使徒の教えは、特にわれわれの時代の教会にとって重要である。この近づきつつある偉大な完成の時に生きている人々にとって、パウロの言葉は力強い筆致で迫ってくる。「しかし、わたしたちは昼の者なのだから、信仰と愛との胸当を身につけ、救の望みのかぶとをかぶって、慎んでいよう。神は、わたしたちを怒りにあわせるように定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによって救を得るように定められたのである。キリストがわたしたちのために死なれたのは、さめていても眠っていても、わたしたちが主と共に生きるためである」。

油断のないクリスチャンは、活動しているクリスチャンである。彼は、福音進展のために自分の力でできることは、何でも熱心にやろうとしている。あがない主に対する愛が増し加わるに従って、同胞に対する愛も増し加わる。

彼は主が受けられたと同じように厳しい試練にあうが、苦悩のために気むずかしくなることも、心の平和が乱されることもない。彼は、試練によく耐えれば、それが彼を洗練し、清めて、一層深いキリストとの交わりに導くことを知っている。キリストの苦しみにあずかる人々は、キリストの慰めにもあずかる者となり、ついには、キリストの栄光をも分かち与えられるのである。

パウロはテサロニケ人への手紙の中で、さらに語った、「兄弟たちよ。わたしたちはお願いする。どうか、あなたがたの間で労し、主にあってあなたがたを指導し、かつ訓戒している人々を重んじ、彼らの働きを思って、特に愛し敬いなさい。互に平和に過ごしなさい」。

テサロニケの信者たちは、狂信的な考えや教理を持ち込んでくる人々に非常に悩まされた。ある者は「怠惰な生活を送り、働かないで、ただいたずらに動きまわって」いた。教会は正しく組織されており、役員は牧師や執事として奉仕するよう任命されていた。しかし中には身勝手で、衝動的で、教会の権威ある地位にいる人々に従うことを拒む者たちがいた。彼らは個人的に判断する権利ばかりでなく、彼らの見解を公に教会に主張する権利を要求した。このためにパウロは、教会の中で権威ある地位に任命されている人々を尊敬し、彼らの意見に聞き従うよう、テサロニケの人々に注意を与えたのである。 [1455]

テサロニケの信者たちが神を恐れて歩むようにとの切なる願いから、使徒パウロは、日常の生活において神を敬う信仰を実践するようにと、彼らに求めた。「兄弟たちよ。わたしたちは主イエスにあってあなたがたに願いかつ勧める。あなたがたが、どのように歩いて神を喜ばすべきかをわたしたちから学んだように、また、いま歩いているとおりに、ますます歩き続けなさい。わたしたちがどういう教を主イエスによって与えたか、あなたがたはよく知っている。神のみこころは、あなたがたが清くなることである。すなわち、不品行を慎」むことである。「神がわたしたちを召されたのは、汚れたことをするためではなく、清くなるためである」。

使徒は彼の働きによって改宗した人々の霊的な幸福のために、自分には大きな責任があると思った。彼らに対する願いは、彼らが唯一のまことの神と、神がおつかわし

になったイエス・キリストを知る知識を深めることであった。パウロは宣教中にイエスを愛している人々の小さな群れに会い、彼らと共に頭をたれて祈り、神との生きた交わりを保つ方法を彼らに教えていただきたいと、神に求めることがよくあった。彼は、しばしば、福音の真理の光を他の人々に与える最上の方法について、彼らに助言した。また彼が、こうして自分が働きかけた人々から離れているときには、彼らが悪から守られて、熱心で活動的な伝道者になるよう彼らを助けてくださるように、彼はたびたび神に嘆願した。

真の改心を示す最も強力な証拠の1つは、神と人とに対する愛である。あがない主としてイエスを受け入れている人々は、同じ尊い信仰を持っている他の人々に対して、深い、誠実な愛を持っている。テサロニケの信者たちもそうであった。「兄弟愛については、今さら書きおくる必要はない。あなたがたは、互に愛し合うように神に直接教えられており、また、事実マケドニヤ全土にいるすべての兄弟に対して、それを実行しているのだから。しかし、兄弟たちよ。あなたがたに勧める。ますます、そうしてほしい。そして、あなたがたに命じておいたように、つとめて落ち着いた生活をし、自分の仕事に身をいれ、手ずから働きなさい。そうすれば、外部の人々に対して品位を保ち、まただれの世話にもならずに、生活できるであろう」。

「どうか、主が、あなたがた相互の愛とすべての人に対する愛とを、わたしたちがあなたがたを愛する愛と同じように、増し加えて豊かにして下さるように。そして、どうか、わたしたちの主イエスが、そのすべての聖なる者と共にこられる時、神のみまえに、あなたがたの心を強め、清く、責められるところのない者にして下さるように」。

「兄弟たちよ。あなたがたにお勧めする。怠惰な者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。だれも悪をもって悪に報いないように心がけ、お互いに、またみんなに対して、いつも善を追い求めなさい。いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである」。

使徒は続けて、テサロニケの人々に、預言の賜物を軽んじないようにと教えた。「御霊を消してはいけない。預言を軽んじてはならない。すべてのものを識別して、良いものを守」るようにと言って、真正のものから偽りのものを区別する慎重な識別力を持つように勧めた。「あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい」とパウロは彼らに懇願し、「霊と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように」神が彼らを全くきよめて下さるようにという祈りで手紙を結んだ。そして「あなたがたを召されたかたは真実であられるから、このことをして下さるであろ う」と彼はつけ加えた。 [1456]

パウロがテサロニケ人に送った第1の手紙の中で、キリストの再臨について述べた教えは、彼の以前の教えと完全に調和していた。それにもかかわらず、彼の言葉はテサロニケのある兄弟たちに誤解された。彼らは、パウロ自身が生きたまま救い主の来臨を目撃したいという希望を表しているものと理解した。このような信念は、彼らの熱狂と興奮を助長させた。以前に自分たちの責任や義務を怠っていた人々は、今、彼らの誤った考えをますます頑固に主張するようになった。

第2の手紙の中で、パウロは、自分の教えについて人々の誤解を訂正して、自分の正しい立場を示そうとした。彼は再び彼らの誠実さに対する確信を表明し、彼らの信仰が固く、また、互いに、主のみわざのために豊かな愛を持っていることに対する感謝をあらわした。パウロは、彼らを迫害や艱難に勇敢に耐える堅忍不抜の模範として他の教会に紹介したことを告げ、それから、神の民がすべての心配や困難な問題から休息を与えられるキリスト再臨の時へと、彼らの心を向けさせた。

「わたしたち自身は、あなたがたがいま受けているあらゆる迫害と患難とのただ中で示している忍耐と信仰とにつき、神の諸教会に対してあなたがたを誇としている。……悩まされているあなたがたには、わたしたちと共に、休息をもって報いて下さる……それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。その時、主は神を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し、そして、彼

らは主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰を受けるであろう……このためにまた、わたしたちは、わたしたちの神があなたがたを召しにかなう者となし、善に対するあらゆる願いと信仰の働きとを力強く満たして下さるようにと、あなたがたのために絶えず祈っている。それは、わたしたちの神と主イエス・キリストとの恵みによって、わたしたちの主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあって栄光を受けるためである」。

しかしキリスト再臨の前に、預言に予告されているように、宗教界に重要な進展があるはずであった。使徒はこう断言した。「霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたとふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。だれがどんな事をしても、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する」。

パウロの言葉は誤解されてはならなかった。彼が特別の啓示によってテサロニケ人たちへキリストの再臨がすぐに来ることを警告したのだと理解されてはならなかった。そのような見解は信仰の混乱を起こしたであろう。失望は不信仰へとつながるものだからである。そこで、使徒パウロは、そのような使命が彼から来たなどと受け取らないよう兄弟たちに警告し、預言者ダニエルがはっきり書いている法王権が今後起こって、神の民と戦うようになることを強調した。この権力が、目に余る冒瀆的なことをするまでは、教会が主の再臨を期待するのはむなしいと、彼は述べている。「わたしがまだあなたがたの所にいた時、これらの事をくり返して言ったのを思い出さないのか」と、パウロはたずねた。

真の教会を悩ますはずの試練は、恐ろしいものであった。使徒が手紙を書いていた時でさえ、「不法の秘密の力」はすでに働き始めていた。未来に起こる事態の進展は、「サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力

と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うため」であった。

特に、「真理に対する愛」を受け入れない人々についてのパウロの言葉は厳粛である。真理の使命を故意に拒む人々について彼は言った。「そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである。」神が人々にあわれみをもってお与えになった警告を拒む者たちは、とがめられずにはすまない。神は、これらの警告から身をかわし続けている人々からみ霊を引き離し、彼らの好む惑わしを受けるままに放置されるのである。 [1457]

こうしてパウロは、キリストの再臨の前まで幾世紀もの長い暗黒と迫害の期間を通して継続する、あの悪の権力の破壊的な働きについて大要を説明した。テサロニケの信者たちはすぐさま救い出されることを望んでいたが、今は勇敢に、神をおそれながら、彼らの前にある仕事を始めるよう諭された。使徒は彼らに、義務を怠ったり、あきらめて何もしないで待つようなことにならぬようにと命じた。すぐに救い出されるだろうという期待が燃えた後は、日常の仕事や、彼らがあわねばならない反対は、2倍の厳しさがあるように見えるであろう。それだから、信仰に固く立つようにと彼らに熱心に説いた。

「堅く立って、わたしたちの言葉や手紙で教えられた言伝えを、しっかりと守り続けなさい。どうか、わたしたちの主イエス・キリストご自身と、わたしたちを愛し、恵みをもって永遠の慰めと権かな望みとを賜わるわたしたちの父なる神とが、あなたがたの心を励まし、あなたがたを強めて、すべての良いわざを行い、正しい言葉を語る者として下さるように」。「主は真実なかたであるから、あなたがたを強め、悪しき者から守って下さるであろう。わたしたちが命じる事を、あなたがたは現に実行しており、また、実行するであろうと、わたしたちは、主にあって確信している。どうか、主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせて下さるように」。

信徒たちの働きは、神によって彼らにさずけられていた。彼らは、真理を忠実に固守することによって、これまでに受けた光を他の人々に与えなければならなかった。使徒は善行に倦み疲れることのないように彼らに命じ、キ

リストのためにたゆまず良い働きをしながら、日常の仕事にも勤勉であった使徒自身の模範を彼らに示した。彼は、怠惰で目的のない刺激に憂き身をやつしている人々を叱責し、「静かに働いて自分で得たパンを食べるように」勧めた。彼はまた、神のしもべたちによって与えられた教訓を無視し続けている者と交わらぬよう、教会に申しつけた。「しかし、彼を敵のように思わないで、兄弟として訓戒しなさい」と彼はつけ加えた。

この書簡もまた、パウロは、労苦と試練の生活の真っただ中にあって、神の平和と主、イエス・キリストの恵みが、彼らの慰めとなり支えとなるように、との祈りで結んだ。

第26章　植える者と水をそそぐ者

本章は使徒行伝18：1828に基づく

コリントを去ってのち、パウロの次の働き場はエペソであった。彼は、近づいていた祭りに出るために、エルサレムに向かう途中であった。だから、エペソでの逗留は当然短期間であった。彼は会堂に入って、ユダヤ人たちと論じたが、彼らに与えた印象がとても良かったので、彼らはパウロにそこで働きを続けてくれるようにと懇願した。彼にはエルサレムを訪問する目的があったので、そのときはぐずぐずそこに留まっていられなかったが、「神のみこころなら」また戻ってくると約束した。アクラとプリスキラは彼と共にエペソに来ていたが、パウロは2人をそこに残して、彼の始めた仕事を続けさせた。

このとき、「アレキサンデリヤ生れで、聖書に精通し、しかも、雄弁なアポロというユダヤ人が、エペソにきた」。彼はバプテスマのヨハネの説教を聞き、悔い改めのバプテスマを受けていて、預言の働きがむだでなかったことを示す生きた証人であった。アポロについての聖書の記録によると、彼は「主の道に通じており、また、霊に燃えてイエスのことを詳しく語ったり教えたりしていたが、ただヨハネのバプテスマしか知っていなかった」。 [1458]

ところで、彼はエペソで、「会堂で大胆に語り始めた」。聞いていた者たちの中にアクラとプリスキラがいたが、この2人は彼がまだ福音の光を十分に受けていないことに気がつき、「彼を招きいれ、さらに詳しく神の道を解き聞かせた」。この2人から教えられて、アポロは聖書についてのいっそう明らかな理解を得、キリスト教信仰の最も有能な主唱者の1人になった。

アポロがアカヤに行きたいと願っていたので、エペソにいる兄弟たちは、「彼を励まし、先方の弟子たちに」、キリストの教会に完全に調和する教師として、「彼をよく迎えるようにと、手紙を書き送った」。彼はコリントに行

き、そこで、公の伝道や戸ごとの訪問により「イエスがキリストであることを、聖書に基いて示し……ユダヤ人たちを激しい語調で論破した」。パウロがすでに真理の種を植えていたが、今、アポロはそれに水をやったのである。福音の宣教にアポロは成功したが、このためにある信者たちは、アポロの働きをパウロの働きよりもほめそやすようになった。このように人と人を比較することで教会に党派心が生じ、福音の進展が非常に阻まれそうになった。

パウロは、コリントで過ごした1年半のあいだ、つとめて福音を単純に説いてきた。「すぐれた言葉や知恵を」携えてコリント人のところに行ったのではなく、恐れと不安を抱きながら「霊と力との証明に」より、「神のあかし」を宣べ伝えたのであった。「それは……信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」（コリント2：1、4、5）。

パウロは当然のことだが、教会の状態に応じて教える方法を考えた。「兄弟たちよ。わたしはあなたがたには、霊の人に対するように話すことができず、むしろ、肉に属する者、すなわち、キリストにある幼な子に話すように話した。あなたがたに乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。食べる力が、まだあなたがたになかったからである。今になってもその力がない」と、パウロは後になって彼らに説明した（コリント3：1、2）。パウロが彼らに教えようと努力していた教えを学ぶのに、コリントの多くの信者たちは時間がかかった。彼らの霊的知識の発達は、彼らが受けた特権や機会と釣り合っていなかった。彼らがクリスチャン経験をかなり積んで、みことばのより深い真理を理解し、実行していなければならないときに、彼らは、「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない」とキリストが弟子たちに言われたときの弟子たちの場所に立っていた（ヨハネ16：12）。嫉妬や邪悪な憶測や非難が、コリントの多くの信徒たちの心を閉ざしていて、「すべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめる」聖霊の十分な働きを妨げていた（コリント2：10）。彼らはこの世的な知識においてどんなに賢くとも、キリストを知る知識においては幼児にすぎなかった。

コリントの改宗者たちに、キリスト教信仰の基礎的なことを、まさにその初歩を教えるのが、パウロの仕事であった。パウロは彼らを、神の力が人の心に働きかけることを知らない人々として指導せざるを得なかった。そのころ、彼らは救いの奥義を理解することができなかった。「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（コリント2：14）。パウロは種をまくように努めた。そして他の人々がそれに水をまくのである。彼の後に続く者たちは、彼のやり残したその場所から働きを引き継ぎ、教会が耐えられる程度に応じて、時にかなった霊的光と知識を与えねばならない。

使徒パウロは、コリントで働きを始めたとき、彼が教えたいと思っていた偉大な真理を、最も慎重に紹介しなければならないと悟った。聴衆の中には、人間の理論を得意になって信奉する者や、誤った礼拝制度の代弁者もいて、彼らは聖書に示されている霊的な永遠の生命という現実に矛盾するような理論を、自然という書物の中に見つけたいと、見えない眼で模索していることを、パウロは知っていた。また、批評家たちが、啓示されているみことばについてのキリスト教の解釈を論駁しようとしたり、懐疑主義者がキリストの福音を愚弄し、嘲笑するだろうということも、パウロは知っていた。 [1459]

パウロは、人々を十字架のもとに導く努力をするにあたって、放縦な者たちを直接に譴責したり、尊い神の御目に彼らの罪がいかに憎むべきものかを示したりはあえてせず、むしろ、人生の真の目的を彼らに示し、天来の教師の教えを彼らの心に刻みつけようとした。もしその教えを受け入れるなら、彼らは世俗と罪から純潔と義へと高められるのであった。パウロは特に、神の国に住むにふさわしいと見なされる者たちが到達しなければならない、実際的な信仰と聖潔を強調した。彼らの不道徳な行為が、神の御目にいかに不快なものであるかがわかるよう、彼らの心の暗やみをキリストの福音の光が貫くのを見たいと、彼は願った。したがって、彼らのあいだでの彼の教えの重荷はキリスト、しかも十字架につけられたキリストであった。彼らの最も熱心な学びと、最大の喜びが、神に対する悔い改め

と主イエス・キリストに対する信仰を通して得られる、すばらしい救いの真理でなければならないことを、パウロは彼らに示そうと努めた。

哲学者は救いの光から身をかわす。それが彼の誇る理論の面目をつぶすからである。また世俗的な者も救いの光を拒む。それがこの世の偶像から彼を引き離そうとするからである。人々がキリストを愛したり、信仰の目で十字架を見ることができるようになる前に、キリストの品性が理解されねばならないことを、パウロは知っていた。永遠にわたって、あがなわれた者の科学となり歌となる学びは、ここで始まらねばならない。十字架の光によってのみ、人間の魂の真の価値が計られるのである。

人を洗練する神の恵みの感化力は、人の生まれつきの性質を変える。天国は世俗的な心を持つ者には好ましいところではない。彼らの生来の、きよめられていない心は、純潔で神聖な場所になんの魅力も感じないであろう。また、たとえ彼らが天国に入れたとしても、彼らに合ったものは何も見いだせないであろう。堕落した人間が天国に入るにふさわしくなり、純潔で聖なる天使たちとの交わりを楽しむためには、まず、生まれながらの心を支配している性癖が、キリストの恵みによって和らげられねばならない。人が罪に死んで、キリストにある新しい命に生き返るとき、神の愛がその心を満たす。彼の知力はきよめられる。彼は喜びと知識の尽きぬ泉から飲み、永遠の日の光が彼の道を照らす。いのちの光であられる方が、絶えず彼と共におられるからである。

パウロは、彼も彼の共労者たちも、真理を教えることを神からゆだねられた者たちに過ぎずみな同じ働きに携わり、みな同じように仕事の成功を神により頼んでいることを、コリントの兄弟たちにしっかり理解させようと努めた。それぞれの働き人の優劣に関して教会内に起こった論争は、神のご計画に沿ったものではなく、生来の性質を大事にかかえていた結果であった。「ある人は『わたしはパウロに』と言い、ほかの人は『わたしはアポロに』と言っているようでは、あなたがたは普通の人間ではないか。アポロは、いったい、何者か。また、パウロは何者か。あなたがたを信仰に導いた人にすぎない。しかもそれぞれ、主から与えられた分に応じて仕えているのである。わたしは

植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである」（コリント3：47）。

コリントではじめて福音を宣べ伝え、そこに教会を組織したのはパウロであった。これは主が彼に割り当てられた働きであった。のちになって、神の導きのもとに、他の働き人たちがそれぞれの役割と立場を占めるために連れて来られた。まかれた種には水をやらねばならない。これをするのがアポロであった。彼はパウロの働きを引き継いで、さらに教えを与え、まかれた種が成長するのを助けた。彼は人々の心をとらえたが、数を増やして下さったのは神であった。品性を変える働きをするのは、人間ではなく、神の力である。植える者や水をそそぐ者が、種の成長をもたらすのではない。彼らは、神に任命された代理者として、神と協力しながら、神のもとで働くのである。成功に伴う [1460]
名誉と栄光は、主なる働き人、神のものである。

神のしもべたちは、全部が同じ賜物を受けているわけではないが、みな神の働き人である。おのおのが大教師について学び、それから、学んだことを伝えねばならない。神はご自分の使命者たちに各自の仕事をさずけておられる。賜物は種々さまざまであるが、働き人はみな聖霊のきよめの力に支配され、混ぜ合わされて調和を保つのである。彼らが救いの福音を知らせると、多くの者が神の力によって、罪を悟り、改心するであろう。人間の尽力はキリストと共に神のうちに隠され、キリストが、万人の中の最高のお方、最もすばらしいお方として現れる。

「植える者と水をそそぐ者とは1つであって、それぞれその働きに応じて報酬を得るであろう。わたしたちは神の同労者である。あなたがたは神の畑であり、神の建物である」（コリント3：8、9）。この聖句の中で、使徒は教会を農地になぞらえた。その中で農夫たちは、神の植えられたぶどうの世話をして働く。また、教会を建物にもなぞらえているが、それは、主のための聖なる宮へと成長するのである。神は雇い主であり、各人にそれぞれの仕事を定めておられる。すべての者は神の監督下に働き、神も働き人のために、また、働き人を通して働かれる。神は彼らに機

転や技術をお与えになり、もし彼らが神のご指示に従うなら、彼らの努力に成功の栄冠を与えて下さる。

神のしもべたちは、親切で礼儀正しい秩序のうちに混ざり合い、「進んで互に尊敬し合」って共に働くのである（ローマ12：10）。不親切な批評をしたり、他人の仕事をめちゃめちゃにしたり、分派を起こしたりしてはならない。主から使命をゆだねられている者には、めいめい、特別の仕事がある。おのおのには独自の個性があって、それを他人の個性の中に埋没させてはならない。しかし、おのおのは、なお、兄弟たちと一致して働くのである。神の働き人は、彼らの奉仕において本質的には1つでなければならない。自分を1つの標準に仕立てて、仲間の働き人に失礼なことを言ったり、彼らを自分より劣っている者のように扱ったりしてはならない。神のもとでおのおのは、自分に定められた仕事をなし、他の働き人たちから尊敬され、愛され、励まされる。彼らは共にみわざを完成へと進めるのである。

これらの原則は、コリントの教会にあてたパウロの最初の手紙の中に詳細に語られている。使徒は、「キリストに仕える者」を「神の奥義を管理している者」と述べ、彼らの仕事についてこう説明している、「この場合、管理者に要求されているのは、忠実であることである。わたしはあなたがたにさばかれたり、人間の裁判にかけられたりしても、なんら意に介しない。いや、わたしは自分をさばくこともしない。わたしは自ら省みて、なんらやましいことはないが、それで義とされているわけではない。わたしをさばくかたは、主である。だから、主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない。主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう。その時には、神からそれぞれほまれを受けるであろう」（コリント4：15）。

それぞれ違った神のしもべたちの間をさばくことは、人間に許されていない。神だけが人の行為の審判者であって、神はおのおのに正しい報いをお与えになるのである。

使徒パウロは、彼の働きとアポロの働きについてなされた比較に直接言及して続けた、「兄弟たちよ。これらのことをわたし自身とアポロとに当てはめて言って聞かせた

が、それはあなたがたが、わたしたちを例にとって、『しるされている定めを越えない』ことを学び、ひとりの人をあがめ、ほかの人を見さげて高ぶることのないためである。いったい、あなたを偉くしているのは、だれなのか。あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないもののように誇るのか」（コリント4：6、7）。

パウロは、彼と彼の同労者たちが、キリストのための奉仕において辛抱強く耐えてきた危険や困難を、教会に対して率直に示した。「今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、苦労して自分の手で働いている。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉をかけている。わたしたちは今に至るまで、この世のちりのように、人間のくずのようにされている。わたしがこのようなことを書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、むしろ、わたしの愛児としてさとすためである。たといあなたがたに、キリストにある養育掛が1万人あったとしても、父が多くあるのではない。キリスト・イエスにあって、福音によりあなたがたを生んだのは、わたしなのである」（コリント4：1115）。 [1461]

福音の働き人たちをご自分の使者として送り出すお方は、聴衆の中に、だれか気に入りの牧師に対する愛着が非常に強くて、他の教師の働きを受け入れたがらない様子が見られるときに、はずかしめを受けられる。主は神の民に、必ずしも彼らの選ぶとおりにではなく、ただ彼らの必要に応じて、助け手を送られる。人間の見方は近視眼的で、自分たちにとって最上のものを見分けることができないからである。教会を、キリスト教のすべての要求において完全なものとするのに必要な資格を、1人の牧師がすべて備えていることは、めったにない。そこで神は他の牧師たちを送られる。おのおのが、他の人たちには不足している何かの能力を持っているのである。

教会はこれらキリストのしもべを、主ご自身をお受けするように、感謝して受けなければならない。神に仕える者が神のみことばから与えてくれる教えから、できるかぎりの利益を引き出すようにしなければならない。神のしもべたちが紹介する真理は、謙遜に素直に受け入れて理解しな

ければならないが、神に仕える者が偶像化されてはならない。

神の働き人たちは、キリストの恵みによって、光と祝福の使者とされる。彼らが熱心に根気よく祈って聖霊を受け、救霊の重荷を負い、十字架の勝利を遠くまで及ぼしたいという熱意に心が満たされて出て行くとき、彼らは自分たちの働きの実を見る。人間的な知恵を見せびらかしたり、自己を高めたりすることを断固として拒むとき、彼らは、サタンの攻撃に耐える働きをなし遂げる。多くの人々がやみから光へと導かれ、多くの教会が設立される。人々は、人間の器に対してではなく、キリストへと改心する。自己は背後に隠れてしまい、カルバリーのお方、イエスのみが現れる。

今日、キリストのために働いている人々は、使徒の時代に福音を宣伝した人々が表したように、優れた力を表すことができる。神は、パウロやアポロに、シラスやテモテに、また、ペテロやヤコブやヨハネに力をお与えになったように、今日も、神のしもべたちに力を与えようと待ち構えておられる。

使徒の時代には、キリストを信じると主張しながら、なお、キリストの使者たちを尊敬しないという、心得違いの人々がいた。彼らは、自分たちは人間の教師に従うのではなく、福音の働き人の助けを受けずに直接キリストから教えを受けるのだと主張した。彼らは気ままで、教会の声に従おうとはしなかった。そのような人々は、欺瞞に陥るという重大な危険にさらされていた。

神は、多くの人々の知恵が寄せ合わされて、聖霊の意図が果たされるよう、神の任命された助け手として、さまざまの才能を持った人々を教会に置かれた。自分自身の強い個性に従って行動し、神のみわざに長い経験を持つ他の人々とくびきを共にすることを拒む人々は、自信から盲目となり、誤りと真理を見分けることができなくなるであろう。そのような人々が教会の指導者として選ばれるのは安全ではない。彼らは、兄弟たちの判断を顧みず、自分自身の判断や計画に従おうとするからである。自分自身、1歩ごとに助言を必要としていながら、キリストの謙遜さを学ぼうともせず、自分の力で人々の世話を焼こうとする者たちを通して働くことは、サタンにとって容易なことである。

印象だけでは義務に対する安全な手引きにはならない。敵はしばしば人々に、彼らを導いているのは神だと信じさせようとするが、実際には、彼らは人間の衝動に従っているにすぎないのである。しかし、もしわれわれが、よく注意し、そして兄弟たちと相談するなら、われわれは主のみこころが理解できるようになる。「へりくだる者を公義に導き、へりくだる者にその道を教えられる」というみ約束があるからである（詩篇25：9）。 [1462]

初代のキリスト教会には、パウロやアポロを認めようとせず、ペテロを自分たちの指導者として支持した人々がいた。彼らは、主がこの世におられたときペテロはキリストと最も親しく、一方、パウロは信者たちの迫害者だったと主張した。彼らの見解や感情は偏見に縛られていた。彼らは、キリストが心に内住しておられることをあらわす寛大さ、寛容さ、優しさを示さなかった。

この党派心は、キリスト教会に非常に悪い結果をもたらす危険があった。それでパウロは、熱心な訓戒と真剣な抗議を表明するよう、主より指示された。「『わたしはパウロにつく』『わたしはアポロに』『わたしはケパに』『わたしはキリストに』」と言っていた人々について、パウロは、「キリストは、いくつにも分けられたのか。パウロは、あなたがたのために十字架につけられたことがあるのか。それとも、あなたがたは、パウロの名によってバプテスマを受けたのか」と尋ねた。「だから、だれも人間を誇ってはいけない。すべては、あなたがたのものなのである。パウロも、アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、現在のものも、将来のものも、ことごとく、あなたがたのものである。そして、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものである」（コリント1：12、13、3：2123）。

パウロとアポロは完全に一致していた。アポロはコリント教会内の不一致に失望し、悲しんだ。彼は、自分に対して示された特別な好意を利用もしなければ、それを助長するようなこともしないで、急いでこの争いの地を去った。のちになってパウロが、コリントをもう1度訪れるようにすすめたときにも彼はことわり、ずっとのちになって教会の霊的状態がよくなるまでは、2度とそこで働かなかった。

第27章　エペソでのめざましい働き

本章は使徒行伝19：120に基づく

アポロがコリントで教えを説いていたとき、パウロはエペソに戻るという約束を果たした。彼は短期間、エルサレムを訪問し、それから彼の初期の働き場であったアンテオケにしばらく滞在した。そのあと、小アジアの「ガラテヤおよびフルギヤの地方を」歴訪し、彼が建てた教会を訪ねて信者たちの信仰を強めた（使徒行伝18：23）。

使徒たちの時代に、小アジアの西部はローマ帝国のアジア州として知られていた。首都エペソは商業の一大中心地であった。港は船舶で混み合い、通りは各地から来る人々でごった返していた。コリントと同様に、エペソも伝道のためには有望な地であった。

今やすべての文明化された地方へと散らされたユダヤ人は、一般にメシヤの来臨を期待していた。バプテスマのヨハネが説教をしていたとき、年ごとの祭りでエルサレムにやってきていた多くの人々が、ヨルダン川の岸に行って彼の話に耳を傾けた。そこで彼らはイエスが約束のメシヤであると言われるのを聞き、世界各地にこのおとずれを携えていったのである。こうして神のみ摂理により、使徒たちの働きのための道が備えられていた。

エペソへ到着してすぐ、パウロは、アポロのようにバプテスマのヨハネの弟子であった12人の兄弟たちを見つけた。彼らもアポロのように、キリストの使命についてある程度の知識を持っていた。彼らにはアポロのような能力はなかったが、彼と同じ誠実な信仰をもって、彼らが受けていた知識をひろめようとしていた。

この兄弟たちは、聖霊の働きについて何も知らなかった。彼らは、聖霊を受けたかとパウロに聞かれると、「いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありま
[1463] せん」と答えた。「では、だれの名によってバプテスマを

受けたのか」と彼が聞くと、「ヨハネの名によるバプテスマを受けました」という答えであった。

そこでパウロは、クリスチャンの希望の基礎である偉大な真理を彼らに伝えた。彼はこの地上におけるキリストのご生涯のことや、残酷な恥辱の死について彼らに語った。また、いのちの主が死の障壁を打ち破り、死に勝利してよみがえられたことを教えた。彼は救い主が弟子たちにゆだねられたことを繰り返した、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施」せ（マタイ28：18、19）。彼はまた、助け主を送るというキリストのみ約束についても彼らに教えた。その助け主の力により、力強いしるしと不思議が行われるのであった。そして彼は、このみ約束が、ペンテコステの日にいかに輝かしく成就したかを述べた。

深い関心と、感謝と驚きに満ちた喜びをもって、兄弟たちはパウロの言葉に聞き入った。彼らは信仰により、キリストのあがないの犠牲というすばらしい真理を把握し、自分たちのあがない主としてキリストを受け入れた。それから彼らは、イエスの名によるバプテスマを受けた。そして、パウロが「彼らの上に手をおく」と、彼らは聖霊のバプテスマをも受け、それによって、ほかの国のことばを話したり、預言したりすることができるようになった。こうして彼らは、エペソやその近辺、さらに小アジアに福音を宣べ伝えに出て行く宣教師としての資格を与えられた。

これらの人々が、こうした経験を得て働き人として収穫の野に出て行くことができるようになったのは、謙遜で、素直な精神を持っていたからである。彼らの実例は、クリスチャンに非常に価値のある教訓を与えている。あまりにもうぬぼれが強いために学ぶ者となることができず、信仰生活においてほとんど進歩しない人々がたくさんいる。彼らは神のみことばの、上すべりの知識で満足している。彼らは自分たちの信仰や行いを変えたいとは思わず、より大いなる光を受けるための努力もしない。

キリストに従う者たちが、知恵を熱心に追い求めるならば、彼らはそれまで全く知らなかった広大な真理の野へと導かれるであろう。自分自身のすべてを神にささげている

者は、神のみ手によって導かれる。彼は身分は低く、一見何の才能もないように見えるかもしれない。しかし、もし愛と信頼の心で神のみこころの示しに従うならば、彼の能力はきよめられ、高尚にされ、活気づけられる。そして彼の可能性が伸ばされるのである。天来の知恵に関する教えを大事にするとき、神聖な任務が彼にゆだねられる。彼は自分の生涯を、神をあがめ、この世の祝福となるものとすることができる。「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」（詩篇119：130）。

今日も、エペソの信者たちのように、聖霊が心に働きかけることを知らない人々が大勢いるが、神のみことばの中でこれほど明瞭に教えられている真理はない。預言者たちや使徒たちはこのことについてくわしく述べている。キリストご自身が、霊的生命を支える聖霊の働きについての例解として、植物の成長にわれわれの注意を促しておられる。ぶどうの樹液は、根から上って行き、枝に行きわたり、成長を支えて、花や実を結ばせる。それと同じように、聖霊のいのちを支える力は、救い主から生じて、魂に浸透し、動機や感情を新たにし、思いすらも神のみこころに従わせるようにして、清い行為という尊い実を結ばせてくれるのである。

この霊的生命の創造者は目に見えず、その生命が分かち与えられさずけられる正確な方法は、人間の思索力では説明できない。しかし、聖霊の働きは書かれたみことばに常に一致する。霊的世界は、自然界と同様である。肉体の生命は、一瞬一瞬神の力によって保たれている。しかもそれは、直接の奇跡によって支えられるのではなくて、われわれの手の届くところに置かれている祝福を用いることによって、支えられるのである。同様に、霊的な生命も、神のみ摂理によって備えられている方法を用いることによって支えられる。もしキリストに従う者が「全き人となり、
[1464] ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで」（エペソ4：13）成長しようとするならば、彼は命のパンを食べ、救いの水を飲まなければならない。彼はすべての事において、みことばの中に示された神の指示を心に留め、注意し、祈り、働かねばならない。

これらユダヤ人改宗者の経験の中には、われわれにとってさらにもう1つの教訓がある。ヨハネの手でバプテスマ

を受けたとき、彼らは罪を負う方としてのイエスの使命を完全には理解していなかった。彼らは重大な思いちがいをしていた。しかしもっと明るい光がのぞんだとき、彼らは喜んでキリストをあがない主として受け入れた。この進歩とともに、彼らの責任も変わってきた。彼らが一層純粋な信仰を受け入れたとき、彼らの生活はそれに応じて変化した。この変化のしるしとして、またキリストに対する信仰の表明として、彼らはイエスの名によってバプテスマを受けなおしたのであった。

いつものように、パウロはエペソでもユダヤ人の会堂で説教することから働きを始めた。彼はそこで3か月のあいだ働き続け、「大胆に神の国について論じ、また勧めをした」。最初は好意をもって受け入れられたが、しかし他の伝道地の場合と同様に、彼はすぐさま激しい反対にあった。「ある人たちは心をかたくなにして、信じようとせず、会衆の前でこの道をあしざまに言った」。彼らが福音を拒み続けたので、パウロは会堂での説教をやめた。

パウロが同国人のために働いているとき、神のみ霊は彼とともに、彼を通して働いていた。真理を知りたいとまじめに望んでいるすべての人々に、確信を与えるのに十分な証拠が示されていた。しかし多くの人々は、自らを偏見と不信に支配されるがままにまかせて、最も確実な証拠に従うことを拒んだ。真理の反対者たちとこのまま交わりを続けていれば、信徒の信仰が危うくなるのではないかと恐れて、パウロは彼らを離れ、弟子たちを別個の群れとして集め、かなり著名な教師、ツラノの講堂で公開の説教を続けた。

「敵対する者も多」くいたが、自分の前に「有力な働きの門」が開かれているのをパウロは知った（コリント16：9）。エペソはアジアの諸都市の中で、最も壮麗だったばかりでなく、最も堕落していた。迷信や官能的快楽が、人口の多いこの都市を支配していた。神殿のかげに、あらゆる種類の犯罪者がひそみ、最も堕落的な悪徳が栄えていた。

エペソはアルテミス礼拝の有名な中心地であった。「エペソ人のアルテミス」の壮麗な神殿の名声は、アジア全土にまた全世界に行きわたっていた。神殿はその比類のない美しさのために、市ばかりでなくまた国の誇りであった。

神殿の内部の偶像は、天から下ってきたと伝説に言われていた。その像に象徴的な字がきざまれていて、それには偉大な力があると信じられていた。これらの象徴の意味と用法を説明するために、エペソ人はいろいろの本を書いていた。

こうした高価な本を念入りに研究していた人々の中に、多くの魔術師たちがいて、彼らは、神殿の中の像を迷信的に拝んでいる人々の心に、強力な影響を及ぼしていた。

使徒パウロは、エペソでの働きにおいて、神の恵みの特別なしるしを与えられた。彼の伝道には神の力が伴い、多くの者が肉体の病弊からいやされた。「神は、パウロの手によって、異常な力あるわざを次々になされた。たとえば、人々が、彼の身につけている手ぬぐいや前掛けを取って病人にあてると、その病気が除かれ、悪霊が出て行くのであった」。こうした超自然の力のあらわれは、それまでエペソで見られたものよりもずっと強力であって、手品師の技術や魔術師の魔法などではまねのできない性格のものであった。これらの奇跡はナザレのイエスの名によって行われたので、人々は天の神が、アルテミス女神を拝んでいる魔術師たちよりももっと力あるおかたであることを知る機会が与えられた。こうして主は、偶像礼拝者たち自身の目の前で、最も有力で人気ある魔術師たちより測り知れないほど高く、神のしもべを高められた。

悪の霊をすべて従わせ、ご自分のしもべたちに、悪霊に打ち勝つ権威をお与えになった神は、神の聖なるみ名
[1465] を軽蔑し汚す者たちに、さらに大きな恥と敗北をもたらそうとしておられた。魔術はモーセの律法により、死刑をもって禁じられていたが、しかし時々、背信したユダヤ人によりひそかに行われていた。パウロがエペソを訪問したとき、この都市には「ユダヤ人のまじない師で、遍歴している者たちが」おり、パウロが不思議なわざを行うのを見て、試しに「悪霊につかれている者にむかって、主イエスの名をとなえ」た。「ユダヤの祭司長スケワという者の7人のむすこたちも」そんなことをしていた。悪霊につかれている人を見つけて、彼らは「パウロの宣べ伝えているイエスによって命じる」と言った。しかし「悪霊がこれに対して言った、『イエスなら自分は知っている。パウロもわかっている。だが、おまえたちは、いったい何者だ』。そ

して、悪霊につかれている人が、彼らに飛びかかり、みんなを押えつけて負かしたので、彼らは傷を負ったまま裸になって、その家を逃げ出した」。

このようにして、キリストのみ名の神聖さと、救い主の宣教が神よりのものであることを信じないでこの名をとなえる危険について、間違えようのない証拠が与えられた。「みんな恐怖に襲われ、そして、主イエスの名があがめられた」。

これまで隠されていた事実が、いまや明るみに出された。キリスト教を受け入れるにあたって、信者たちの中には迷信を完全に捨てきれない人々がいた。彼らはある程度まだ魔術を続けていた。今、彼らは自分たちの過ちに気がつき、「信者になった者が大ぜいきて、自分の行為を打ちあけて告白した」。魔術師たち自身の中にもよい働きがひろがり、「魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきては、みんなの前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上ることがわかった。このようにして、主の言はますます盛んにひろまり、また力を増し加えていった」。

エペソの改宗者たちは、魔術に関する本を焼くことによって、かつては自分たちが喜んでいたものが、今は嫌悪すべきものになったことを示した。彼らはこれまで、魔術を行うことによって特に神を怒らせ、おのれの魂を危険に陥れていた。そうした魔術に対して、彼らはそのような憤りを示したのであった。こうして彼らは真の回心の証拠を示した。

これらの占いの書物には、悪霊との交わりの規則と方式が書かれていた。それはサタンの礼拝の規則、すなわち、サタンの助けを求め、サタンから知識を得るための手引きであった。こうした本を手元に置いておけば、弟子たちは自分たちを誘惑にさらすことになったであろう。また、それらを売れば、ほかの人たちに誘惑となったであろう。弟子たちはやみの王国を拒絶し、その勢力を滅ぼすためには、どんな犠牲を払うこともためらわなかった。こうして真理は、人間の偏見と金銭欲とに勝利した。

キリストの力がこのようにあらわれたことによって、迷信の本拠地において、キリスト教は大いなる勝利を得た。この事件は、パウロさえ悟らなかったほどの広汎な影響

を及ぼした。エペソからこの事件が広く伝えられて、キリストのための働きは力強く促進された。使徒パウロが、人生の旅路を終えてからずっとのちまでも、これらの光景は人々の記憶に残り、人々を福音へと改心させる手段となった。

異教の迷信は20世紀の文明以前に消えてしまったと、愚かにも考えられている。しかし、神のみことばと、事実の断固とした証拠は、昔の魔術師の時代と全く同じように現代においても、魔術が行われていることを言明している。古代の魔術の方法は、実際は、現代の心霊術として知られているものと同じである。サタンは死別した友人たちを装って現れ、幾千もの人々の心に近づく。「死者は何事をも知らない」と聖書は、はっきり述べている（伝道の書9：5）。死者の思い、愛、憎しみは消えうせている。死者は生きている者たちと交わりを持たない。しかし、初めから狡猾なサタンは、人々の心を支配するために、この策略を用いるのである。

心霊術によって、多くの病人や遺族や好奇心の強い人々が、悪霊と交わっている。これをあえて行う者はみな危険な場所にいる。真理のみことばは、神が彼らをどう見ておられるか述べている。昔、神は、使者をつかわして
[1466] 異教のお告げに相談を求めた王に、厳しい審判をお下しになった。「『あなたがたがエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようとして行くのは、イスラエルに神がないためか』。それゆえ主はこう仰せられる、『あなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』」（列王紀下1：3、4）。

今日の降神術の霊媒、透視者、占い師たちは、異教の時代の魔術師たちに当たる。エンドルやエペソで語った神秘的な声は、今もなお、その偽りの言葉で人の子らを惑わしている。われわれの目からおおいが取り去られるならば、悪天使たちが人類を欺き滅ぼすために、あらゆる手段を用いているのが見えるであろう。人間に神を忘れさせるような力が働いているところではどこでも、サタンがその魔力を働かせているのである。サタンの力に従うとき、知らないうちに、心は迷わされ、魂は汚される。今日の神の民らは、エペソの教会に与えられたパウロの訓戒を、心にとめねばならない。「実を結ばないやみのわざに加

わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい」（エペソ5：11）。

第28章　銀細工人たちの騒動

本章は使徒行伝19：2141、20：1に基づく

エペソは3年以上にわたって、パウロの働きの中心地であった。繁栄した教会がここに立てられ、この都市から福音は、アジヤ州全体に、ユダヤ人にも異邦人にも伝えられた。

使徒パウロはかなり長いあいだ、他の伝道旅行を思案していた。彼は「御霊に感じて、マケドニヤ、アカヤをとおって、エルサレムへ行く決心をした。そして言った、『わたしは、そこに行ったのち、ぜひローマをも見なければならない』」。この計画に合わせて彼は、「自分に仕えている者の中から、テモテとエラストとのふたりを、まずマケドニヤに送り出し」たが、エペソの働きのためにまだ自分の滞在が必要であると感じたので、ペンテコステの後まで自分はとどまることに決めていた。しかしまもなく、1つの事件が起こり、そのために彼の出発が早くなった。

エペソでは、1年に1回、女神アルテミスのために特別な行事が催された。州の各地から大勢の人々が集まってきた。この期間中、お祭りが最も盛大に、はなやかに行われた。

このお祭りの期間は、新しく信仰に入ったばかりの人たちにとって試練の時であった。ツラノの講堂に集まった信者の1団は、お祭り気分にそぐわない異分子のように見られ、嘲笑と非難と侮辱とが容赦なく彼らに浴びせられた。パウロの働きは異教の礼拝に痛烈な打撃を与えており、その結果、異教のお祭りに参加しない者や、参拝に熱のこもらない者が目に見えて多かった。パウロの教えの影響は、信仰へと実際に改宗した人々よりはるかに広く及んでいた。新しい教えを公然とは受け入れていなかった者たちも、多くが、異教の神々に対する信頼をすっかり失ってしまうほどに、光を受けていた。

不満の原因はもう1つあった。エペソでは、アルテミスの宮や像にかたどった小さな神殿や像の製造販売から、手広く利益の多い商売が発達していた。この産業に利害関係のある人々は、自分たちのもうけが少なくなって行くことに気がつき、このおもしろくない変化はパウロの働きのせいだと、みなで言い合っていたのである。

デメテリオという銀細工人が、その職人たちを集めて言った、「諸君、われわれがこの仕事で、金もうけをしていることは、ご承知のとおりだ。しかるに、諸君の見聞きしているように、あのパウロが、手で造られたものは神様ではないなどと言って、エペソばかりか、ほとんどアジヤ全体にわたって、大勢の人々を説きつけて誤らせた。これでは、お互いの仕事に悪評が立つおそれがあるばかりか、大女神アルテミスの宮も軽んじられ、ひいては全アジヤ、いや全世界が拝んでいるこの大女神のご威光さえも、消えてしまいそう である」。これらの言葉が人々の激情をかり [1467]
立てた。「人々は怒りに燃え、大声で、『大いなるかな、エペソ人のアルテミス』と叫びつづけた」。

この演説の噂はたちまち広まり、「町中が大混乱に陥」った。パウロの捜索が行われたが、彼はどこにも見当たらなかった。危険を予知した兄弟たちが、パウロを急いで去らせたのである。使徒を守護するために神の天使たちがつかわされた。殉教者としてパウロが死ぬ時は、まだ来ていなかった。

群衆は怒りをぶつける相手を発見できなかったので、「パウロの道連れであるマケドニヤ人ガイオとアリスタルコとを捕らえて、いっせいに劇場へなだれ込んだ」。

パウロのかくれ場所はそれほど遠いところではなかったので、彼はすぐに愛する兄弟たちの危険を知った。自分自身の安全など忘れて、彼はすぐに劇場へ行って暴徒たちに演説したいと望んだ。しかし、「弟子たちがそれをさせなかった」。ガイオとアリスタルコは、人々が探していた獲物ではなかったので、2人にひどい危害が加えられるおそれはなかった。しかし、もし、使徒パウロの心痛に青ざめた顔を見たら、群衆はすぐさま最悪の興奮状態となり、彼の命を救う可能性は全くないであろう。

パウロは、大衆の前で真理を擁護したいとなおも望んだが、劇場から届いた警告の知らせに、ついに思いとど

まった。「アジヤ州の議員で、パウロの友人であった人たちも、彼に使をよこして、劇場にはいって行かないようにと、しきりに頼んだ」。

劇場の中では騒ぎがますます激しくなり、「ある者はこのことを、ほかの者はあのことを、どなりつづけていたので、大多数の者は、なんのために集まったのかも、わからないでいた」。パウロとその弟子のある者たちがヘブル系であることから、ユダヤ人たちは、自分たちはパウロも彼の活動をも支持していないのだということをはっきり示しておかねばと思った。そこで彼らは、仲間のうちから1人を前に押し出して、人々に説明しようとした。選ばれた演説者は職人たちの1人、銅細工人のアレキサンデルで、のちにパウロを大いに苦しめたものだとパウロが言っている者であった（Ⅱテモテ4：14参照）。アレキサンデルはかなり能力のある男で、彼は全精力を傾けて、人々の怒りをひたすらパウロとその弟子たちに向けさせようとした。しかし群衆は、アレキサンデルがユダヤ人だとわかると、彼を押しのけて、「みんなの者がいっせいに『大いなるかな、エペソ人のアルテミス』と2時間ばかりも叫びつづけた」。

とうとう、人々は、へとへとに疲れ切り、騒ぎをやめた。そして一瞬の沈黙があってのち、市の書記役が群衆の注意を引き、役職の力で発言の機会を得た。彼は人々の立場に立って話し、このような騒ぎを起こす理由はないのだと説明した。彼は人々の理性に訴えた。「『エペソの諸君、エペソ市が大女神アルテミスと、天くだったご神体との守護役であることを知らない者が、ひとりでもいるだろうか。これは否定のできない事実であるから、諸君はよろしく静かにしているべきで、乱暴な行動は、いっさいしてはならない。諸君はこの人たちをここにひっぱってきたが、彼らは宮を荒す者でも、われわれの女神をそしる者でもない。だから、もしデメテリオなりその職人仲間なりが、だれかに対して訴え事があるなら、裁判の日はあるし、総督もいるのだから、それぞれ訴え出るがよい。しかし、何かもっと要求したい事があれば、それは正式の議会で解決してもらうべきだ。きょうの事件については、この騒ぎを弁護できるような理由が全くないのだから、われわれは治安をみだす罪に問われるおそれがある』。こう言って、彼はこの集会を解散させた」。

デメテリオは演説の中で、「これでは、お互いの仕事に悪評が立つおそれがある」と述べたが、こうした言葉は、エペソにおける騒動の本当の原因、また、使徒たちの活動に伴った迫害の主な原因を、明らかにしている。デメテリオや仲間の職人たちは、福音が教え広められることによって、偶像造りの商売が危機に瀕するのを見た。異教の祭司や職人たちの収入は危うくなった。この理由で、彼らはパウロに激しく反対したのである。

市の書記役やその他要職にある人々の裁定で、パウロは [1468]
不法な行為に何の関係もない者であることが人々の前に明らかにされた。これは誤謬と迷信に対するキリスト教の再度の勝利であった。神は、ご自分の使徒を弁護し、騒いでいる暴徒を静めるために、1人の偉大な長官をお立てになったのであった。パウロは自分の生命が保護され、またエペソの騒動でキリスト教に汚名が着せられなかったことで、神への感謝の念に満たされた。

「騒ぎがやんだ後、パウロは弟子たちを呼び集めて激励を与えた上、別れのあいさつを述べ、マケドニヤへ向かって出発した」。この旅では、2人の忠実なエペソの兄弟、テキコとトロピモがパウロの同行者であった。

エペソにおけるパウロの働きは終わった。ここでのパウロの伝道は、絶えまない働きと多くの試練と深い苦悩の連続であった。彼は公衆の面前で、また家ごとに訪問して人々を教え、多くの涙をもって彼らを教育し、また注意を与えた。彼はたえずユダヤ人から反対された。彼らはどんな機会ものがさず、パウロに対する民衆の反対をかきたてたのである。

こうして、反対と戦い、たゆまない熱意をもって福音事業をおし進め、まだ信仰的に若い教会の利益を守りながら、一方、パウロはすべての教会に対する重い責任を心に負っていた。

パウロが建てた教会のうちのあるところで、背信が起きたという知らせは、彼を深く悲しませた。彼らのためにささげた努力がむだになるのではないかと彼はおそれた。彼の働きを妨げるために用いられた方法について知ったとき、彼は幾夜も眠れぬまま祈りと真剣な思いのうちに過ごした。機会があるごとに、また彼らの状況に応じて、彼は叱責、勧告、訓戒、激励の手紙を教会に書き送った。この

ような手紙の中で、使徒は自分自身の試練についてくどくど述べてはいないが、しかしキリストのための彼の骨折りや苦しみについて、時おりかいま見ることができる。むち打ちや投獄、寒さと飢えと渇き、陸路や水路での危険、町や荒野での危険、同国人や、異邦人や、偽兄弟たちから受ける危険など、こうしたことすべてを、彼は福音のために耐えた。彼は「ののしられ」「はずかしめられ」「人間のくずのようにされ」「途方にくれ」「迫害され」「四方から患難を受け」「いつも危険を冒し」「イエスのために絶えず死に渡されてい」た。

絶えまない反対の嵐と、敵の怒号と、友の離反のさ中にあって、さすが剛毅なパウロもくじけそうになることがあった。しかし彼はカルバリーの十字架をふり返り、新たな熱意に燃えて前進し、十字架につけられたイエスについての知識を宣べ伝えた。彼は、自分の前を歩かれたキリストの血だらけの道を、歩いているにすぎなかった。彼はあがない主の足もとに武装を解くまで、戦いから解放されたいと願わなかった。

第29章　共に悩み、共に喜ぶ

本章はコリント人への第1の手紙に基づく

コリント教会への第1の手紙は、使徒パウロが、エペソに滞在中の後期に書いたものである。彼は、他のだれよりも、コリントの信者たちに深い関心を抱き、たゆまず彼らのために努力した。彼は、1年半にわたって、彼らのあいだで働き、十字架にかけられてよみがえられた救い主を、唯一の救いの道として示し、主の恵みの改変力に絶対的に信頼するように勧めた。彼は、キリスト教を信じると告白した人々を教会の交わりに受け入れる前に、キリスト教の信者の特権と義務について、彼らに注意深く訓戒を与え、バプテスマの誓約に忠実であるよう彼らを助けるために、熱心に努力したのである。

パウロは、すべての人が、たえず彼らを欺き陥れようとする悪の勢力と戦わなければならないことを痛感して、信仰に入ってまだ日の浅い人々を強め、信仰を堅くさせるために、たゆまず働いた。パウロは、神に対する全的降伏を彼らに勧めた。なぜならば、この降伏がなければ、罪は捨て去られておらず、食欲と 情欲は、まだ力を振るおうとし、誘惑は、良心を混乱させるからである。 [1469]

降伏は、完全でなければならない。人間は、どんなに力弱く、疑念に閉ざされ、苦闘していても、主に完全に服従する者はみな、彼を勝利者とすることができる力に、直接触れるのである。天は、彼のそば近くにある。そして、すべての試練と必要の時に、恵みの天使の支えと助けを受けるのである。

コリントの教会の信者は、最も魅惑的な形態の偶像礼拝と官能主義に取り囲まれていた。パウロが、彼らと共にいたときは、こうした勢力は、彼らに対してほとんど影響を及ぼさなかった。パウロの堅固な信仰、熱烈な祈り、真剣な教えの言葉、そして、何にも増して、彼の敬虔な生活

が、罪の快楽にふけるよりキリストのために自己を否定するよう、彼らを励ました。

しかし、パウロが去ったあと、情勢が思わしくなくなった。敵のまいた毒麦が、麦の中に出て来た。そして、まもなく、毒麦は悪い実を結び始めた。これはコリントの教会にとって、激しい試練の時であった。彼らの熱意を奮いたたせ、神と一致した生活を送るように彼らを助ける使徒パウロは、もういなかった。そして、多くの者は、徐々に、軽率と無関心におちいり、生来の好みと傾向のままに生活するようになった。純潔と高潔という高い理想に到達するようにと、幾度となく彼らに勧告を与えた者は、もう彼らと共にいなかった。そして、改心した時に悪習慣を捨て去った者の多くが、また、異教の堕落的な罪に逆もどりした。

パウロは、短い手紙を教会に送って、不品行をやめない人々とは「交際してはいけない」と勧告した。しかし、多くの信者は、パウロの真意を曲解し、彼の言葉に対して、勝手な理屈を言って、その教えを無視する口実にした。

教会は、種々の問題について勧告を求める手紙をパウロに送ったが、彼らの中の重大な罪については、旬も言わなかった。しかし使徒パウロは、教会の真の状態が隠されていること、また、手紙の筆者たちが、自分たちの都合のよいように解釈できるような言葉をパウロから引き出そうとしていることを、聖霊によって、力強く知らされた。

そのころ、コリントで評判のよいクリスチャン家族、クロエの家の者たちが、エペソに来た。パウロが彼らに事情を尋ねたところ、彼らは、教会が分裂していることを彼に語った。アポロが訪問したときに起こった紛争が、いよいよ激しさを増していた。にせ教師たちが、パウロの教えを軽蔑するように信者たちを仕向けていた。福音の教理と儀式が曲解されていた。かつては熱心なクリスチャン生活を送っていた人々のあいだに、高慢と偶像礼拝と官能主義が、ますます増えひろがっていた。

パウロは、こうした状態を知らされたときに、彼の恐れていた最悪の事態が起きたことを悟った。しかし、そうだからといって、彼の働きが失敗であったとは考えなかった。彼は、「心の憂い」と「多くの涙」をもって、神の勧告を求めた。すぐにコリントを訪問することが最善の道で

あったなら、彼は喜んでそうしたことであろう。しかし、彼は、信者たちの現状にかんがみて、自分が骨折っても益にならないことを知っていたので、のちに彼が訪問するときの準備として、テトスをつかわした。そして、使徒パウロは、不可解でよこしまな行動をとった人々に対する彼の個人的感情をすべて捨て去って、神に信頼をよせ、彼のすべての手紙の中で最も豊かで、最も教訓に富み、最も力強い手紙の1つを、コリントの教会にあてて書いたのである。

パウロは、驚くべき明確さをもって、教会が提出した問題に解答を与え、一般的原則を定めた。もし、これらに留意するならば、彼らはより高い霊的水準へと導かれるのであった。彼らは、危機におちいっていた。そしてパウロは、この重大な危機に当たって彼らの心を動かすのに失敗するというようなことは、考えただけでも耐えられなかった。誠意をこめて彼は、彼らの危険について警告し、彼らの罪を責めた。彼は、ふたたび、彼らにキリストを指し示し、初めのころの献身の炎をもう1度燃え立たせようとした。

コリントの信者に対する使徒パウロの大きな愛は、教会へあてた優しいあいさつの言葉にあらわされている。 [1470]
パウロは、彼らが偶像礼拝を捨てて、真の神を礼拝し、仕えるようになったことに言及した。彼らが受けた聖霊の賜物を思い起こさせ、クリスチャン生活においてたえず進歩し、ついにはキリストの純潔と神聖さに到達することが、彼らの特権であることを教えた。「あなたがたはキリストにあって、すべてのことに、すなわち、すべての言葉にもすべての知識にも恵まれ、キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいる。主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にして下さるであろう」と彼は書いた。

パウロは、コリントの教会に起きた不和について腹蔵なく語り、争いをやめるよう教会員たちに勧告した。「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを1つにし、お互の

間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい」と彼は書いた。

パウロは、教会の分裂のことを、どのようにして、また、だれに聞いたかを言ってもよいと思った。「わたしの兄弟たちよ。実は、クロエの家の者たちから、あなたがたの間に争いがあると聞かされている」。

パウロは、霊感を受けた使徒であった。彼が、他の人々に教えた真理は、「啓示によっ」て与えられたものであった。しかし、主は、神の民の状態がどのようなものであるかを、彼に、常に直接啓示されたわけではない。この場合においては、コリントの教会が栄えることに関心を持っていた人々、そして害悪が忍び込んでくるのを見た人々が、パウロにそのことを言ったのであって、彼は、以前に受けた神からの霊感によって、こうした事態の発展が何であるかを判断することができた。主は、この特別の時のために新しい啓示をお与えにはならなかったが、真に光を求めていた人々は、パウロの言葉を、キリストのみこころをあらわしたものとして受け入れた。主は、教会に起こってくる困難や危険をすでにパウロに示しておられた。そして、そのような害悪が生じてきたとき、彼は、それらの意味を悟ることができた。彼は、教会を擁護するために立てられていた。パウロは、神に言い開きをすべき者として責任を持って、人々を見守らなければならなかった。したがって、彼らのあいだに無秩序と分裂があるという報告に注意することは、彼にとって、当然かつ正当なことであった。そして、彼が彼らに書き送った譴責は、疑いもなく、彼の他の手紙と同様に、神の霊の感動によって書かれたのである。

パウロは、彼の働きの実を破壊しようとしていた偽教師たちについては、何も言わなかった。教会内の暗黒と分裂のために、彼は、彼らに言及して刺激することを賢明にも差し控えた。それは、ある人々を、真理から全く離反させてしまわないためであった。彼は、彼らのあいだにおける自分の働きは、「熟練した建築師のように」土台をすえることで、他の人々がその上に家を建てるのであると言った。しかし、そうだからといって、自分を高めたのではない。「わたしたちは神の同労者である」と彼は言った。彼は、自分自身の知恵を誇らず、ただ神の力によってのみ、

神に喜ばれるような方法で真理を伝えることができたことを認めた。パウロは、教師中の大教師キリストと結合することによって、神の知恵の教えを伝えることができた。それは、どんな階層の人々の必要をも満たし、どんな時代、どんな場所、どんな状態のもとにおいても当てはまるものであった。

コリントの信者間において生じた、いっそう深刻な害悪の1つは、多くの者が、異教の堕落した習慣に逆もどりしたことであった。かつての一改心者は、異邦人のあいだの低い道徳的標準をさえ犯すほどの、みだらな生活に逆もどりしていた。パウロは、「その悪人を」彼らのあいだから除いてしまうように教会に訴えた。「あなたがたは、少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか。新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたは、事実パン種のない者なのだから」と、パウロは彼らに忠告した。

[1471] 教会に生じたもう1つの大きな害悪は、兄弟たちが互いに訴訟を起こしていたことであった。信者間の諸問題の解決のためには、十分な規定が設けられていた。キリストご自身が、そのような問題を調整する方法を明白にお教えになっていた。「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになる。もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは3人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである。もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい。よく言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つながれ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう」と救い主は勧告された（マタイ18：1518）。

パウロは、この明白な勧告を見失ってしまったコリントの信者たちに、はっきりした忠告と譴責を書き送った。「あなたがたの中のひとりが、仲間の者と何か争いを起した場合、それを聖徒に訴えないで、正しくない者に訴え出るようなことをするのか。それとも、聖徒は世をさばくものであることを、あなたがたは知らないのか。そして、世

があなたがたによってさばかれるべきであるのに、きわめて小さい事件でもさばく力がないのか。あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使をさえさばく者である。ましてこの世の事件などは、いうまでもないではないか。それだのに、この世の事件が起ると、教会で軽んじられている人たちを、裁判の席につかせるのか。わたしがこう言うのは、あなたがたをはずかしめるためである。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することができるほどの知者は、ひとりもいないのか。しかるに、兄弟が兄弟を訴え、しかもそれを不信者の前に持ち出すのか。そもそも、互に訴え合うこと自体が、すでにあなたがたの敗北なのだ。なぜ、むしろ不義を受けないのか。……しかるに、あなたがたは不義を働き、だまし取り、しかも兄弟に対してそうしているのである。それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか」。

サタンは、常に、神の民の中に、不信と離反と悪意を持ち込もうとしている。われわれは、実際は何の原因もないにもかかわらず、自分たちの権利が侵害されているように考えたくなることがよくある。キリストと彼の事業を愛することよりも、もっと強く自分を愛する者は、自分自身の利益をまず第一にし、どんな手段を講じてでもそれを守り、維持しようとする。良心的なクリスチャンと思われる多くの人々でさえも、誇りと自尊心のゆえに、過ちを犯していると思われる人々のところへ個人的に行って、キリストの精神をもって彼らと語り、互いのために共に祈ることをしないのである。ある者は、兄弟たちから害をこうむったと考えたら、救い主の規則に従うかわりに、訴訟をさえ起こすであろう。

クリスチャンは、教会員のあいだに起こる問題を解決するのに、裁判に訴えるべきではない。そのような諸問題は、キリストの教えに従って、彼ら自身のあいだで、または、教会によって、解決されなければならない。たとえ、不正が行われたとしても、柔和で心のへりくだったイエスの、弟子たちは、教会の兄弟たちの罪を世に公表するよりは、むしろ「だまされて」いるのである。

兄弟間の裁判沙汰は、真理の働きに対する恥辱である。訴訟を起こすクリスチャンは、教会を敵の嘲笑にさらし、暗黒の勢力を勝利させる。彼らは、キリストをふたたび傷

つけ、キリストをさらし者にする。彼らは、教会の権威を無視することによって、教会に権威をお与えになった神を軽蔑するのである。

パウロは、このコリント人への手紙の中で、キリストの力が、彼らを悪から守ることを示そうと努めた。もし彼らが、示された条件に従うならば、大いなる神の力によって強くなることを、彼は知っていた。パウロは、彼らが罪の奴隷から解放され、神を恐れて全く清くなるための助けとして、彼らに対する神の所有権を強調した。すなわち、改心のとき彼らは、自分たちの生涯を神にささげたのであった。「あなたがたは、キリストのもの」であると、パウロ [1472]
は断言した。「あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」。

使徒パウロは、純潔と聖潔の生活から、異教の腐敗した習慣に戻ることの結果を、はっきりと述べた。「まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、……盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである」。彼は、下劣な情欲や食欲を抑制するように彼らに訴えた。「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であ」る。

パウロは、豊かな知的資質を持っていたが、生活においても、まれに見る知恵の力をあらわし、機敏な洞察力と心からの同情によって、親しく他の人々と交わり、彼らの善い性質を呼びさまし、より高い生活へと努力するように彼らを奮い立たせた。彼の心は、コリントの信者たちへの心からの愛に満ちていた。彼らが内的敬虔をあらわし、誘惑に対して強く抵抗することを彼は渇望した。彼は、クリスチャンの道のりの1歩1歩において、彼らがサタンの会堂の者たちの反対にあい、日ごとに戦いに従事しなければならないことを知っていた。彼らは、敵のひそかな侵入に対して防備を怠らず、古い習慣と生まれながらの傾向を退けて、常に目をさまして祈らなければならなかった。パウロは、クリスチャンの高い境地には、多くの祈りと、常に目をさましていることによってしか到達できない、ということを知っていた。そして、このことを彼らの心に教えこ

もうと努めた。しかしまた、彼は、彼らが、十字架にかけられたキリストによって、魂を悔い改めさせる十分な力が与えられ、悪に対するすべての誘惑に抵抗できる者とされることも、知っていた。神に対する信仰を武具とし、神の言葉を戦いの武器とするとき、彼らは内的な力を与えられて、敵の攻撃をかわすことができるのであった。

コリントの信者たちは、神の事柄に関して、より深い経験が必要であった。彼らは、神の栄光を見つめて、品性が徐々に変えられていくということが、どんなことなのか十分に知らなかった。彼らは、その栄光のきざしをかいまみたに過ぎなかった。パウロが彼らに願ったことは、彼らが、神に満ちているもののすべてをもって満たされ、あしたの光のように現れる神を知り、ますます神のことを学んで、完全な福音信仰の真昼の輝きに到達することであった。

第30章　競走に勝ち抜くために

本章はコリント人への第1の手紙に基づく

パウロは、コリントの信者たちの心に、堅固な自制心と厳格な節制、そしてキリストに仕えるゆるがぬ熱意の大切さを、はっきり刻みつけたいと願って、彼らにあてた手紙の中で、クリスチャンの戦いと、コリントの近くで、定期的に開催された有名な競走とを、印象的に比較した。競走は、ギリシャ人とローマ人が始めたあらゆる競技のうちで、最も古く、最も重んじられたものであった。王侯、貴族、政治家たちが列席してそれを見守った。富と地位を持った青年たちが競走に参加し、賞を得るために必要などんな努力や訓練をもいとわなかった。

競走は、厳しい規則に従って行われ、それに対して不服の申し立てはできなかった。賞をめざして競走に参加したいと望む者は、まず、厳格な準備訓練を受けねばならなかった。食欲にふけること、あるいはそのほか、精神的肉体的活力を低下させるような楽しみは、すべて堅く禁じられた。強さと速さを競うこうした試合に勝利しようと望む者は、その筋肉が強く、柔軟で、神経は十分な抑制の下になければならなかった。すべての行動が確実で、その1歩1歩は、迅速で確かなものでなければならなかった。肉体の能力は、最高の標準に到達しなければならなかった。

競走の選手たちが、待ちかまえた観衆の前に、姿を現すと、彼らの名が発表され、競走の規則が明示された。それから彼らは、いっせいにスタートした。観衆がじっと見つめていると思うと、彼らは勝利への意欲をかきたてられた。審判たちは、ゴール付近に席を占めて、競走の最初から最後までを見守り、真の勝利者に賞を与えようとした。もし誰かが、不正な手段によって1着になっても、賞は与えられなかった。 [1473]

こうした競走には、大きな危険が伴っていた。肉体的な恐るべき負担から、2度と回復しない者もあった。走っている途中で、口や鼻から血を出して倒れることもまれではなく、時には、選手が、賞をつかもうとした時に倒れて死んでしまうこともあった。しかし、一生残る障害や死の可能性も、勝利者に与えられる栄誉と比較するならば、大きすぎる危険とは考えられなかったのである。

勝利者がゴールに入ると、大観衆の拍手がわき起こって周囲の丘や山に鳴りひびいた。全観衆の注目する中で、審判は彼に、勝利の象徴である月桂樹の冠と、右手に持つしゅろの枝を手渡した。彼は国中でほめそやされた。彼の両親には栄誉が与えられ、彼の住んでいた町でさえ、このように偉大な選手を生み出したことを称賛された。

パウロは、こうした競走を、クリスチャンの戦いの比喩として引用し、選手が競走に勝利するために必要な準備——準備訓練、節食、そして節制の必要——を強調した。「しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする」と彼は断言した。競走する者は、体力を弱める傾向のあるあらゆる楽しみを捨て去り、厳格な不断の訓練によって、筋肉の強さと耐久力をきたえ、いよいよ競技の日が来たならば、できる限りの力をふりしぼるのである。ましてクリスチャンの場合は、自分たちの永遠の利益がかかっているのだから、食欲と情欲を理性と神のみこころに従わせることが、どんなにか重要なことであろう。決して彼は、娯楽やぜいたくや安逸に心を奪われてはならない。彼のすべての習慣と情欲は、最も厳格な訓練の下におかれなければならない。神の言葉の教えに照らされ、聖霊の導きを受けた理性が、支配権を握らなければならない。

クリスチャンは、このようにした後で、勝利を得るために全力をつくさなければならない。コリントの競技において、競走者たちは、その最後の数歩のところで、速度を落とさないように、死に物狂いの努力をしたのである。そのように、クリスチャンも、ゴールに近づくにつれて、競走の最初よりも、さらに大きな熱意と決心をもって前進するのである。

パウロは、競走の勝者が受ける朽ちる花の冠と、クリスチャンの競走に勝利を得る者に与えられる永遠の栄光の冠とを比較している。「彼らは朽ちる冠を得るためにそうす

るが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである」と彼は言う。ギリシアの競走者たちは、朽ちる賞を得るために、どんな苦しみも訓練もいとわなかった。われわれは、永遠の命の冠という無限に価値のある賞を得ようと努力しているのである。それだから、われわれは、もっと注意深く努力し、もっと喜んで犠牲と克己に励むべきではないだろうか。

ヘブル人への手紙の中に、永遠の命を得ようとしているクリスチャンの競走の特徴は、一意専心その目的に向かって進むことだと指摘されている。「こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」（ヘブル12：1、2）。ねたみ、悪意、邪推、悪口、貪欲などは、クリスチャンが永遠の命をめざす競走に勝利するために、捨て去らなければならない重荷である。われわれを罪におとしいれ、キリストのみ栄えを汚すような習慣や行為は、みな、どんな犠牲を払ってでも捨て去らなければならない。天の祝福は、正義の永遠の原則を犯している人に与えられることはない。1つの罪でも心に抱いているならば、品性を堕落させ、他の人々を誤った道におとしいれるのに十分なのである。

「もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、かたわになって命に入る方がよい。……もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい」と救い主は言われた（マルコ9：43、45）。もし、体を死から救うために、足や手を切り捨て、目を抜き出さなければならないとしたら、クリスチャンは、魂を死に至らせる、罪を捨て去るために、どれほど熱心にならなければならないことだろう。 [1474]

古代の競技の選手たちは、克己と厳しい訓練に服したからといって、必ず勝利を得るのではなかった。「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである」とパウロは言った。

競走者たちが、どんなに熱心に真剣に努力しても、賞は、ただ1人にしか与えられなかった。待望の栄冠を手にするのは、ただ1人だけであった。賞を得ようとして全力をつくし、まさにそれを手にしようとした瞬間に、他の者が彼らの前に現れて、熱望する宝物をさらってしまうこともあった。

ところが、クリスチャンの戦いは、そのようなものではない。条件に従った者は、競走の終わりにおいて、だれ1人として失望におちいることはない。真剣に耐え忍ぶ者は、1人として失敗することはない。それは、いちばん速い者のための競走ではなく、いちばん強い者のための競争でもない。最も強い聖徒とともに最も弱い聖徒も、永遠の栄光の冠を受けるのである。すべて、神の恵みの力によって、自分たちの生活をキリストのみこころに一致させる者は、勝利するのである。神の言葉のうちに述べられている原則を、日常の生活において実行するということが、しばしば、重要でなく、注目に値しないささいな事と思われている。しかし、その結果の重要性を考えるとき、それを助けたり、妨害したりするものは、何1つささいなこととは言えない。すべての行動は、人生の勝利か、または、敗北を決定する重みを持っている。そして勝利者に与えられる報賞は、彼らが努力する気力と真剣さに比例している。

使徒パウロは、自分を、賞を得ようとして全力をつくす走者にたとえている。「そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない」と彼は言っている。パウロは、クリスチャンの競走において、目標のはっきりしないような、いいかげんな走り方をしないために、厳しい訓練に自らを従わせた。「自分のからだを打ちたたいて」という言葉は、定義的には、厳しい訓練によって、欲望、衝動、情欲などを抑制するという意味である。

パウロは、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になりはしないかと恐れた。彼は、自分が信じ宣べ伝えた原則を、自分の生活に実行しなければ、他の人々のための彼の働きは、彼には何の役にも立たないことを知っていた。彼はその行状と影響力、自己の欲望の満足を拒否す

ることなどによって、自分の宗教が、単に口先だけのものでなくて、神との日ごとの生きた関係であることを示さなければならなかった。彼は、自分の前に1つの目標を持ち、それに到達するように努力した。それは、「信仰に基く神からの義」であった（ピリピ3：9）。

パウロは、命のある限り、悪との戦いは終わらないことを知っていた。彼は、霊的熱心が世俗の欲望に負けることのないよう、常に自分をしっかりと守っておく必要を感じた。彼は全力をつくして、生来の傾向と戦い続けた。彼は、自分の到達すべき理想を常に目の前に置いた。そして、神の律法に喜んで従うことによってこの理想に到達しようとした。彼の言葉、彼の行為、彼の情熱は、みな、神の霊の支配下にあった。

パウロが、コリントの信者たちの生活に現れるのを見たいと熱望したのは、永遠の生命を勝ち取ろうとするこうした心からの決意であった。彼は、彼らが、キリストが彼らのために持っておられる理想に到達するためには、避けることのできない一生涯にわたる苦闘が、彼らの前にあることを知っていた。パウロは、彼らに、原則に従って努 [1475]
力し、日ごとに、敬虔と道徳的卓越を追求するように勧めた。すべての重荷を捨てて、キリストにある完全という目標に向かって前進するよう、彼らに訴えた。

パウロは、コリントの人々に、古代のイスラエルの経験を指し示し、彼らが服従によって受けた祝福と、罪を犯したためにこうむった刑罰とを示した。彼は、ヘブル人が、昼は雲の柱、夜は火の柱に守られて、奇跡的にエジプトを脱出したことを彼らに思い起こさせた。こうしてヘブル人は、安全に紅海を渡ったが、同じようにして渡ろうとしたエジプト人は、みなおぼれ死んでしまった。このような行為によって、神は、イスラエルをご自分の教会としてお認めになったのである。彼らは、「みな同じ霊の食物を食べ、みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない」。ヘブル人の旅路の全期間にわたる指導者は、キリストであった。打たれた岩は、キリストを代表していた。キリストは、すべての人に救いの水が流れていくよう、人間の罪のために傷つけられるのであった。

神がヘブル人に恵みをほどこされたにもかかわらず、彼らは、エジプトに残してきたぜいたくな生活にあこがれ、その罪と反逆のゆえに、神の刑罰をこうむったのである。パウロは、コリントの信者たちに、イスラエルの経験の中に含まれている教訓に留意するよう命じている。「これらの出来事は、わたしたちに対する警告であって、彼らが悪をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためなのである」と彼は言った。彼は、安楽と快楽を愛する心が、どのようにして、神の著しい報復を招いた罪への道を開いていったかを示した。イスラエルの民が、律法をさずけられたときに感じた神への恐れを捨て去ったのは、彼らが座して飲み食いをし、また立って踊り戯れたときであった。そして、彼らは、神の象徴として金の子牛を造り、それを礼拝した。多くのヘブル人たちが、不品行のゆえに倒れたのは、ペオルのバアル礼拝に伴う放縦な宴会に連なったあとであった。神の怒りが引き起こされた。神の命令の下に、疫病のために倒された者が、「1日に2万3千人もあった」。

使徒パウロは、コリント人に命じて、「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」と言った。もし彼らがおごり高ぶって、自分をたのみ、目をさまして祈ることを怠るならば、重大な罪におちいり、神の怒りを自分たちの身に招くのであった。しかしパウロは、彼らが失望したり落胆したりすることを望まなかった。彼は、彼らに確証を与えて言った。「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試錬に会わせることはないばかりか、試錬と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」。

パウロは兄弟たちに、彼らの言行の影響についての反省を促し、たとえ、どんなにその事自体は誤っていないように思われても、偶像礼拝を是認したり、あるいは、信仰の弱い者の良心を傷つけたりするようなことは、何1つしないようにと勧告した。「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。ユダヤ人にもギリシヤ人にも神の教会にも、つまずきになってはいけない」。

コリント教会への使徒パウロの警告の言葉は、各時代にあてはまるが、特にわれわれの時代に適合している。彼

が、偶像礼拝と言ったのは、ただ偶像を拝むことだけでなくて、自己の利益を追求し、安楽を愛し、食欲と情欲をほしいままにすることをも意味していた。単に、キリストに対する信仰を表明し、真理の知識を誇るだけで、人はクリスチャンとなるのではない。目や耳や嗜好を満足させることのみを求め、放縦を是認する宗教は、キリストの宗教ではない。

パウロは、教会を人間の体と比較することによって、キリストの教会のすべてのメンバーの間における密接で調和した関係を、適切に説明した。彼は、次のように書いた。「わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、1つの御霊によって、1つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆1つの御霊を飲んだからである。実際、からだは1つの肢体だけではなく、多くのものからできている。もし足が、わたしは手ではないから、からだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけ [1476]
ではない。また、もし耳が、わたしは目ではないから、からだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけではない。もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとすれば、どこでかぐのか。そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである。もし、すべてのものが1つの肢体なら、どこにからだがあるのか。ところが実際、肢体は多くあるが、からだは1つなのである。目は手にむかって、『おまえはいらない』とは言えず、また頭は足にむかって、『おまえはいらない』とも言えない。……神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなのである。もし1つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、1つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」。

次に、パウロは、キリストのすべての弟子たちが持つべき愛の重要性について語ったが、この言葉は、その時代から現代に至るまで、あらゆる人々にとって霊感と励ましの源泉となった。「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢と同じである。たといまた、わ

たしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である」。

口先で、どんなに立派なことを言っても、もし心の中に、神と同胞に対する愛が満ちていなければ、キリストの真の弟子ではない。大いなる信仰を持ち、奇跡を行うほどの力があっても、もし愛がなければ、その信仰は価値がない。また、大いなる施しが行われるかもしれない。しかし、それが真の愛以外の動機によって行われたとするならば、自分の全財産を人に施しても、その行為によって神の恵みにあずかることはできない。また、熱心さのあまり、殉教の死をとげることさえするかもしれない。しかし、もしそれが愛の動機によるものでなければ、神は彼を、惑わされた熱狂家、あるいは野心的偽善者とみなされることであろう。

「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない」。最も純粋な喜びは、最も深い謙遜から生じる。最も強く、最も高潔な品性は、忍耐と愛と、神のみこころに対する服従という基礎の上に築かれるのである。

愛は、「不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない」。キリストのような愛は、他人の行為と動機を最も好意的に解釈する。それは、不必要に彼らの欠点を暴露したりしない。それは、好ましくない噂に聞き耳を立てたりせず、むしろ、他の人々の良い特質を思い起こさせようと努めるのである。

愛は、「不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」。この愛は、「いつまでも絶えることがない」。これは、決してその価値を失うことがない。それは、天の特性である。その所有者は、尊い宝としてそれを持って、神の都の門の中に入ることができるのである。

「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この3つである。このうちで最も大いなるものは、愛である」。

コリントの信者たちの道徳的標準の低下に伴って、ある人々は、信仰の基本的な特徴のいくつかを放棄してしまった。ある人々は、復活の教理さえ否定するに至った。パウロは、キリストの復活が、疑う余地のない証拠に基づいていることを明白に証言して、この異端に対処した。彼は、次のように言明した。キリストは、死後、「聖書に書いてあるとおり、3日目によみがえった……ケパに現れ、次に、12人に現れた……そののち、500人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。そののち、ヤコブに現れ、次に すべての使徒たちに現れ、そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである」。 [1477]

使徒パウロは、人を説得せずにはおかぬ力をもって、復活の偉大な真理を説いた。「もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかったであろう。もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい。すると、わたしたちは神にそむく偽証人にさえなるわけだ。なぜなら、万一死人がよみがえらないとしたら、わたしたちは神が実際よみがえらせなかったはずのキリストを、よみがえらせたと言って、神に反するあかしを立てたことになるからである。もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかったであろう。もしキリストがよみがえらなかったとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになろう。そうだとすると、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのである。もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいだいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである」。

使徒パウロは、コリントの兄弟たちの心を、復活の朝の勝利へと向かわせた。その時、すべての眠っていた聖徒はよみがえらされて、永遠に主と共に住むのである。パウロは、次のように言った。「ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変え

られる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。『死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか』。……しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜わったのである」。

忠実な者を待ち受けている勝利は、実に輝かしいものである。パウロは、コリントの信者たちの可能性を認め、利己心と情欲から彼らを引き上げて、永遠の生命の希望に満ちた輝かしい生活へと彼らを導こうと努めた。彼は、彼らに、キリストにあって受けた高い召しに対して忠実であるようにと、熱心に勧めた。「だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはないと、あなたがたは知っているからである」、と彼は勧告した。

こうして、パウロは、最も明確で印象的なやり方で、コリント教会に広まっていた誤った危険な考えと習慣を正そうと努めた。彼は、率直に語ったけれども、彼らの魂に対する愛をもって語ったのである。彼の警告と譴責の中には、彼らの生活を汚していた隠れた罪を示す、神のみ座からの光が輝いていた。彼らは、それをどのように受け入れるだろうか。

パウロは、手紙を送り出したあとで、自分の書いたことが、自分が助けたいと望んでいるその人々に、深い傷を負わせ過ぎたのではないかと恐れた。彼は、人々が彼からさらに離反することを非常に憂慮し、言ったことを取り消したいとさえ思った。パウロと同様、愛する教会や伝道機関に対する責任を感じている人々が、彼の精神的苦悩と自責の念を最もよく理解することができる。この時代に対する神の働きの重荷を負う神のしもべたちは、大いなる使徒が負わなければならなかったのと同様の労苦、葛藤、心労の経験の幾分かを知っている。パウロは、教会の分裂の重

荷をかかえ、また、自分が同情と支持を求めた人々の忘恩と裏切りに心を痛め、罪をはらむ教会の危機に気づいて、率直、厳重な罪の譴責をしなければならなかったが、同時に、自分は事を処するのに、厳し過ぎはしなかっただろうかという危惧の念が、心にのしかかった。彼は、自分の手紙が、どのように受け入れられたかということについての知らせを、心配しながら待ちわびていた。

[1478]

第31章　患難と栄光

本章はコリント人への第2の手紙に基づく

パウロは、以前に働いたことのあるヨーロッパの各地をもう1度訪問しようと思って、また、エペソから伝道旅行に出発した。パウロは、しばらくの間、「キリストの福音のために」トロアスにとどまり、彼の言葉を聞く人々を幾人か見いだした。その場所における働きのことを彼は、後で、「わたしのために主の門が開かれた」と言った。彼は、トロアスの働きが成功したにもかかわらず、長く滞在することができなかった。「諸教会の心配ごと」、特にコリントの教会のことが彼の心に重くのしかかっていた。彼は、トロアスでテトスに会って、自分がコリントの兄弟たちに送った勧告と譴責の言葉を、彼らがどのように受けたかを知りたいと思ったけれども、彼の願いは果たされなかった。彼は、「兄弟テトスに会えなかったので、わたしは気が気でな」かったと、この経験について書いた。そこで、彼は、トロアスを離れて、マケドニヤへ行き、ピリピにおいて、テモテに会ったのである。

パウロは、コリントの教会について、憂慮してはいたが、望みを捨ててはいなかった。しかし、時には、深い悲しみが彼の心を閉ざし、彼は自分の勧告と忠告が誤解されるのではないかと恐れた。彼は、後で次のように書いた。「わたしたちの身に少しの休みもなく、さまざまの患難に会い、外には戦い、内には恐れがあった。しかるに、うちしおれている者を慰める神は、テトスの到来によって、わたしたちを慰めて下さった」。

この忠実な使者テトスは、コリントの信者たちの間に驚くべき変化が起こったという、励ましとなる知らせをもたらした。多くの者はパウロの手紙の中の教えを受けいれて、自分たちの罪を悔い改めた。彼らの生活は、もはや、キリスト教の恥辱ではなくなり、実際的な信仰ということを力強く示すものとなった。

パウロは喜びに満ちあふれて、コリントの信者たちにもう1つの手紙を送り、彼らの中に行われたよい働きのことを聞いての心の喜びを表明した。「そこで、たとい、あの手紙であなたがたを悲しませたとしても、わたしはそれを悔いていない」。彼は、自分の言葉が、軽べつされるのではないかという恐れにさいなまれ、時には、あのように断固として厳しく書いたことを後悔したのであった。しかし、「今は喜んでいる。それは、あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めるに至ったからである。あなたがたがそのように悲しんだのは、神のみこころに添うたことであって、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのである。神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導」く。人の心に神の恵みが働く結果生じる悔い改めは、罪の告白と放棄に至らせる。パウロは、コリントの信者たちの生活にこのような実が実ったと言ったのである。「神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意……に至らせたことか」。

パウロは、しばらくの間、諸教会に対する魂の重荷を負っていた。それは、ほとんど耐えられないような重荷であった。偽教師たちは、信者間における彼の影響力を破壊し、福音真理の代わりに彼らの教理を広めようとした。パウロを取りかこんだ困惑と失望は、次の言葉によく表されている。「わたしたちは極度に、耐えられないほど圧迫されて、生きる望みをさえ失ってしま」った。

しかし、今、心配の種が1つ取り除かれた。パウロは、コリントの人々が彼の手紙を受けいれたという知らせを聞いて、喜びの声をあげた。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。それは、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたした ちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。わたしたちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救とのためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、 [1479]

その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるのである。だから、あなたがたに対していだいているわたしたちの望みは、動くことがない。あなたがたが、わたしたちと共に苦難にあずかっているように、慰めにも共にあずかっていることを知っているからである」。

パウロは、彼らがふたたび改心し、恵みに成長していることに、喜びを表し、この心と生活の変化に対して、すべての讃美を神にささげた。彼は叫んで言った。「神は感謝すべきかな。神はいつもわたしたちをキリストの凱旋に伴い行き、わたしたちをとおしてキリストを知る知識のかおりを、至る所に放って下さるのである。わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストのかおりである」。当時、戦いに勝利した将軍は、その帰還の時に、捕虜たちを引き連れてくる習慣があった。その際、香をたく者が選ばれ、軍隊が故郷に凱旋行進をした時、その芳香は、死に定められた者にとっては、死の香りであり、その処刑の時の切迫を示していた。しかし、彼らを捕らえた者の恵みに浴して、生命を助けられることになっていた者にとって、それは、生命の香りであり、自由が近づいたことを示していた。

パウロは、今や、信仰と希望に満ちていた。彼は、コリントにおける神の働きに対して、サタンが勝ち得ないことを知り、讃美の声をあげて、心からの感謝を注ぎ出した。彼と彼の同労者たちは、キリストと真理の敵に対する勝利を祝い、新たな熱意をもって、救い主についての知識を広めるために出て行くのであった。福音の芳香は、香のように、全世界に広く行きわたらなければならなかった。キリストを受けいれる者にとって、その使信は、いのちからいのちに至らせるかおりであるが、不信を抱き続ける者には、死から死に至らせるかおりなのである。

パウロはこの働きの極めて重大なことを悟って、「いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか」と叫んだ。いったい、だれが、使命者や、彼の伝える使命をそしる口実をキリストの敵に与えることなく、キリストを宣べ伝えることができようか。パウロは、福音宣教の厳粛な責任を、信者たちに深く印象づけたいと望んだ。忠実にみことばを宣べ伝えると共に、純潔と言行の一致が生活に

伴ってこそ、はじめて、伝道者たちの努力が神に受けいれられるものとなり、人々の益となるのである。今日、牧師たちが、働きの重要性に圧倒されて、使徒パウロと共に、「いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか」と叫ぶのも当然である。

パウロが前の手紙を書いた時、それは自分を推賞するためだと、彼を非難した人々があった。そこで彼は、このことに触れ、教会の信者たちに、彼らもそのように彼の動機を批判したかをたずねた。「わたしたちは、またもや、自己推薦をし始めているのだろうか。それとも、ある人々のように、あなたがたにあてた、あるいは、あなたがたからの推薦状が必要なのだろうか」。新しい場所へ移っていく信者たちは、よく、彼らが前に属していた教会からの推薦状を持って行ったものである。しかし、指導者たち、すなわち、これらの教会の創設者たちは、このような推薦状を必要としなかった。偶像の礼拝から福音の信仰に導かれたコリントの信者たち自身が、パウロに必要な推薦状のすべてであった。彼らが信仰を受けいれ、その生活に改革が行われたことは、彼の働きが忠実になされていること、そして彼には、キリストの伝道者として、勧告と譴責と奨励を行う権威があることを、雄弁にあかししていた。

パウロは、コリントの兄弟たちを、彼の推薦状と見なした。彼は、次のように言った。「わたしたちの推薦状は、あなたがたなのである。それは、わたしたちの心にしるされていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。そして、あなたがたは自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている」。 [1480]

罪人が悔い改めて、真理によってきよめられることは、神が、牧師を伝道の仕事に召された最も強力な証拠である。彼の使徒職の証拠は、改心した人々の心に書かれ、彼らの新たな生活によって、立証される。栄光の望みであられるキリストが、心の中に形づくられる。牧師は、彼の働きにこのような証印が押されて、大いに力づけられるのである。

今日、キリストの牧師たちは、パウロの働きに対してコリントの教会があかししたのと同様の証言を持たなけれ

ばならない。しかし、この時代において、牧師の数は多いが、有能で、きよめられた牧師、すなわち、キリストの心に宿った愛に満たされた人々は、実に少ないのである。誇り、自己過信、世を愛する心、あらさがし、辛辣さ、ねたみなどが、キリストの宗教を表明する多くの者の結ぶ実である。その人々の生活は、救い主の生涯とは著しい対照をなしていて、しばしば、彼らが、どのような牧師の働きの下に改心したかという悲しいあかしを立てる。

人間にとって、福音の有能な牧師として神に受けいれられること以上に大きな栄誉はない。しかし、主が、主の働きにおいて力と成功を与えて祝福される人々は、誇ったりしない。彼らは、自分たちが、主に全く依存していることを認め、自分たちの無力を自覚している。彼らはパウロと共に、「もちろん、自分自身で事を定める力が自分にある、と言うのではない。わたしたちのこうした力は、神からきている。神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである」と言うのである。

真の牧師は、主の働きをする。彼は、自分の働きの重要性を感じ、自分の教会と世界とに対して、キリストが持続されたのと同様の関係を持続すべきことを自覚する。彼は、うまずたゆまず、罪人をもっと高尚な生活へと導き、勝利者の報賞を彼らに得させようとする。祭壇からの燃える炭が彼のくちびるに触れ、彼はイエスを、罪人の唯一の希望として掲げる。彼の説教を聞く者は、彼が、熱烈な力ある祈りによって神に近づいたことを知る。聖霊が彼の上にとどまり、彼の心は燃えさかる天からの火を受け、彼は、霊によって霊のことを解釈することができる。彼には、サタンの砦を破壊する力が与えられる。人々は、神の愛についての彼の説教を聞いて、心をくだかれ、多くの者が、「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」とたずねるに至る。

「このようにわたしたちは、あわれみを受けてこの務についているのだから、落胆せずに、恥ずべき隠れたことを捨て去り、悪巧みによって歩かず、神の言を曲げず、真理を明らかにし、神のみまえに、すべての人の良心に自分を推薦するのである。もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとっておおわれているのである。彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませ

て、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである。しかし、わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える。わたしたち自身は、ただイエスのために働くあなたがたの僕にすぎない。『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである」。

このようにパウロは、キリストの使者としての彼に与えられた、神聖な信任の中に示されている、神の恵みと憐れみを、大いに讃美した。彼と彼の仲間たちは、神の豊かなあわれみによって、困難と苦難と危険のなかにも守られたのであった。彼らは、彼らの信仰と教えを、聴衆の願うところに従って作り変えたりせず、教えをもっと魅力あるものにするために救いに不可欠な真理を差し控えたりはしなかった。彼らは簡単明瞭に真理を宣べ伝え、人々が罪を認めて、悔い改めることを祈った。彼らは、自分たちの行為が、教えていることと一致するように努力し、自分たちの伝える真理が、すべての人の良心を感服させるように努めた。

パウロは、続けて言った。「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである」。神は、罪なき天使たちによって神の真理を宣布することもおできになったが、しかしこれは、神の計画ではない。神は、神の計画を実施する器として、弱さを持った人間をお選びになる。この上なく貴重な宝が、土の器に盛られる。神の祝福は、人間によって世界に伝えられるのである。彼らを通して、神の栄光が、罪の暗黒の中に輝き出るのである。彼らは、愛の奉仕によって、罪のうちにある人々や困っている人々に接し、その人々を十字架に導かねばならない。そして、彼らは、そのすべての働きにおいて、栄光と誉れと讃美を、すべてのものの上におられる方に帰すのである。 [1481]

パウロは、彼自身の経験に言及して、彼がキリストに仕えるようになったのは、利己的動機からではないことを説明した。なぜなら彼の道は、試練と誘惑に満ちていたからである。彼は次のように書いた。「わたしたちは、四

方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」。

パウロは、彼と彼の同労者たちが、キリストの使者として、絶えず危険にさらされていることを、兄弟たちに思い起こさせた。彼らの耐える苦難は、徐々に彼らの力を弱らせていた。彼は、次のように書いた。「わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスの命が、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。こうして、死はわたしたちのうちに働き、命はあなたがたのうちに働くのである」。これらのキリストの伝道者たちは、貧困と労苦によって、肉体的苦しみに会い、キリストの死にならっていた。しかし、彼らの中に死をもたらしていたものが、コリント人には霊的生命と健康をもたらしていた。彼らは真理を信じて、永遠の生命を受ける者とされたのである。こうしたことを考えて、イエスの弟子たちは、怠慢や不和によって働き人たちの重荷や試練を増すことのないよう、注意しなければならない。

パウロは続けて言った。「『わたしは信じた。それゆえに語った』としるしてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである」。パウロは、彼にゆだねられた真理が真実のものであることを堅く信じていたので、どんなものも、彼に、神のことばを欺瞞的に扱わせたり、または、彼の心の確信を隠させたりすることはできなかった。彼は、世俗の意見に迎合して、富や栄誉や快楽を得ようとはしなかった。彼はコリント人に宣べ伝えていた信仰のために、絶えず殉教の危機にさらされていながらも、おびえてはいなかった。死んでよみがえられたかたが、彼を墓からよみがえらせて、天の父のみ前に立たせて下さることを知っていたからである。

「すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである」と彼は言った。使徒たちは、自分たちの栄達を求めて、福音を宣べ伝えたのではなかった。彼らがこの働きにその生涯を献身したのは、人々

の救われることを望んだからであった。危険におびやかされ、あるいは、実際に苦難に会ってもなお、彼らが努力することをやめなかったのは、この希望を抱いていたからである。

「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく」とパウロは言った。パウロは、敵の力を知っていた。しかし、彼は肉体の力は衰えても、ひるむことなく忠実に、キリストの福音を宣べ伝えた。この十字架の英雄は、神のすべての武具をまとって、戦いに突進して行った。彼は歓呼の声をあげ、みずから戦いに勝利を収めたと言った。彼は、忠実な者に与えられる報賞に目を向け、勝ち誇って叫んだ。「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」。

[1482] パウロがコリントの兄弟たちに、もう1度彼らのあがない主の無比の愛を熟考するようにと訴えた言葉は、実に真剣で、感動的である。「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」。あなたがたは、キリストがどのように高い所から降りて来られて、どのような屈辱のきわみまで、身を低められたかを知っている。キリストは、ひとたび、自己否定と犠牲の道を歩き始められるや、脇道にそれることなく、ついにその生命をお与えになった。玉座と十字架との間において、主には片時も休むひまがなかった。

パウロは、彼の手紙を読む人々が、彼らのための救い主の驚くべき謙遜を十分理解することができるように、順を追って懇切に説明した。パウロは、キリストが神と等しくあられて、神と共に天使たちの崇敬を受けておられた時から、ついに最も低い屈辱のきわみにまでこられた、その道筋をたどった。パウロは、もし彼らが天の王の驚くべき犠牲を理解することができたならば、彼らの生活からすべての利己心が排除されることを確信していた。パウロは、神の子が、堕落した人類を救い出して、希望と喜びと天国

を得させるために、どのようにその栄光を放棄し、みずから進んで人間の性質をとり、おのれを低くしてしもべとなり、死に至るまで、「しかも十字架の死に至るまで従順であられた」かを示した（ピリピ2：8）。

われわれは、十字架の光に照らして神のご品性を学ぶときに、あわれみと慈愛とゆるしが公平と正義に入り混じっていることを見る。神の玉座の真ん中に、人間を神と和解させるために受けられた苦難のしるしを、その手と足とわきに持っておられるかたを見るのである。無限の父なる神が、近づくことのできない光の中に住んでおられ、それでもなおみ子の功績によって、われわれを受け入れて下さるのを見るのである。悲惨と絶望しかもたらさないように見えた報復の雲は、十字架の光に照らしてみるときに、次のような神の筆のあとをあらわすのである。生きよ、罪人よ、生きよ。あなたがた、悔い改めて信じる人々よ、生きよ。わたしは、あがないの価を払った。

われわれは、キリストのことを瞑想する時に、広大無辺の愛の岸辺をさまようのである。われわれは、この愛について語ろうとするが、ふさわしい言葉がでてこない。キリストの地上の生涯、われわれのための犠牲、われわれの仲保者としての天における働き、そして、主を愛する者のために備えておられる住居のことを考えて、われわれは、ただ、キリストの愛は何と高く、何と深いことだろうと叫ぶことしかできない。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい」（ヨハネ4：10、3：1）。

この愛は、すべての真の弟子の中で、聖なる火のように、心の祭壇の上で燃える。キリストによって神の愛があらわされたのは、この地上においてであった。神の民が、傷のない生活によって、この愛をあらわすのは、この地上においてである。こうして、罪人は、十字架へと導かれて、神の小羊を眺めるのである。

第32章　豊かにまく者は豊かに刈り取る

パウロは、コリント教会にあてた第1の手紙の中で、地上における神の働きを支持するための一般的原則に関する教えを信者たちに与えた。彼は、彼らのための使徒としての自分の働きについて書き、次のように問うた。

「いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者があろうか。ぶどう畑を作っていて、その実を食べない者があろうか。また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があろうか。わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。すなわち、 [1483]
モーセの律法に、『穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない』と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだろうか。それとも、もっぱら、わたしたちのために言っておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、その分け前をもらう望みをもってこなすのである」。

使徒パウロは、さらに次のように問うている。「もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたがたから刈りとるのは、行き過ぎだろうか。もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。あなたがたは、宮仕えをしている人たちは宮から下がる物を食べ、祭壇に奉仕している人たちは祭壇の供え物の分け前にあずかることを、知らないのか。それと同様に、主は、福音を宣べ伝えている者たちが福音によって生活すべきことを、定められたのである」（コリント9：714）。

パウロは、ここで、神殿の務めをする祭司たちを支えるための主の計画に言及している。この聖職のために選ばれた人々は、彼らが霊的祝福を与えたその兄弟たちによっ

て支えられたのである。「さて、レビの子のうちで祭司の務をしている者たちは、兄弟である民から、……10分の1を取るように、律法によって命じられている」（ヘブル7：5）。レビの部族は、神殿と祭司職に関する聖職のために、主に選ばれた。主は、祭司について、次のように言われた。「あなたの神、主が、……彼を選び出して……主の名によって立って仕えさせられるからである」（申命記18：5）。主は、すべての産物の10分の1を主のものとして要求された。そして主は、10分の1をささげないことを、盗みとみなされるのであった。

パウロが「主は、福音を宣べ伝えている者たちが福音によって生活すべきことを、定められたのである」と言ったのは、伝道を支持するためのこの計画を指していたのである。パウロは、後に、テモテに、「働き人がその報酬を受けるのは当然である」と書いた（テモテ5：18）。

10分の1を納めることは、神の務めを支えるための神のご計画の一部にすぎなかった。神は、多くのささげ物や供え物をお定めになった。ユダヤの制度下においては、人々は、神の働きを支えるとともに貧者の欠乏を満たすためにも、物惜しみしない精神を抱くように教えられた。特別な折には、自発的な供え物がささげられた。穀類やぶどうの収穫の時には、畑の初穂、すなわち、穀物、ぶどう、酒、油などを供え物として主にささげた。落ち穂や畑のすみずみは、貧者のために残しておかれた。羊の毛を切った時の羊毛の初穂や、麦を脱穀した時の穀物の初穂も神にささげられた。同様に、すべての動物のういごもささげなければならなかった。そして、人間のういこのためには、あがないの価を払わなければならなかった。初穂は、聖所で主の前にささげられ、それから、祭司たちの用に供されるのであった。

主は、このような慈悲深い制度によって、すべての事において、主を第一にすべきことを、イスラエルに教えようとなさった。こうして彼らは、神が彼らの畑、彼らの牛や羊の持ち主であり、神が日光や雨を送って、穀物を生長させ、実らせて下さったことを思い起こさせられたのである。彼らの持ち物は、すべて神のものであった。彼らは、ただ神の物の管理者にすぎなかった。

ユダヤ民族よりも、はるかに優れた特権にあずかっているクリスチャンたちが、彼らよりも少なくささげることは、神のみこころではない。「多く与えられた者からは多く求められ」ると救い主は言われた（ルカ12：48）。ヘブル人に要求された物惜しみしない心は、主として、彼ら自身の国の利益のためであった。今日、神の働きは、全世界にひろがっている。キリストは、弟子たちの手に福音の宝をゆだね、救いの喜びの知らせを全世界に伝える責任を彼らに負わせられた。確かに、われわれの義務は古代イスラエルの人々よりははるかに大きいのである。 [1484]

神の働きが拡張するにつれて、援助を求める声は、ますます頻繁になる。クリスチャンは、そのような声に答えるために、「わたしの宮に食物のあるように、10分の1全部をわたしの倉に携えてきなさい」という命令に留意しなければならない（マラキ3：10）。もしクリスチャンと称する人々が、忠実に10分の1とささげ物を神にささげるならば、神の宝庫は満ちあふれることであろう。そうすれば、福音の事業を支える資金を得るために、バザー、富くじ、娯楽のパーティーなどを開く必要がなくなる。

人々は、彼らの金銭を放縦な生活、食欲の満足、装身具、あるいは、家の装飾などのために用いたくなる。多くの教会員は、こうしたことのためには、惜しげもなく、ぜいたくにさえ費やすことを躊躇しない。しかし、地上における神の働きを推進するために、主の宝庫にささげることを求められる時、彼らは異議を唱える。彼らは、多分、何も出さないわけにはいかないと感じて、彼らがむだな放縦のためにしばしば費やすものよりは、はるかに少ない額を、しぶしぶと出すのである。彼らは、キリストの奉仕に対する真の愛を表さず、魂の救いに対する熱烈な関心を示さない。このような人々のクリスチャン生活が、委縮して病的な状態であっても、何の驚くこともないのである。

キリストの愛に燃えている人は、人間にゆだねられた最も高尚で最も聖なる働き――恵みとあわれみと真理の富を世界に伝える働き――の進展を援助することは、義務であるばかりでなく、喜びであると思うのである。

当然神に属する財産を自己満足のために保留するのは、貪りの精神である。神は、預言者によって神の民を厳しく譴責された時と同様に、今日においても、この精神を憎ま

れる。主は言われた「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。10分の1と、ささげ物をもってである。あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである」（マラキ3：8、9）。

物惜しみしない精神は、天の精神である。この精神は、十字架上のキリストの犠牲に最もよく現されている。父なる神は、われわれのために、神のひとり子をお与えになった。そして、キリストは、ご自分の持っておられたものをすべて与えた上で、人間の救いのためにご自身をお与えになった。カルバリーの十字架は、救い主に従うすべての者の慈悲心に訴えるところがなければならない。そこで明示されている原則は、与えよ、与えよということである。「『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」（ヨハネ2：6）。

それに反して、自分を愛する精神は、サタンの精神である。世俗の人々の生活にあらわれている主義は、手に入れよ、手に入れよである。こうして、幸福と安楽を得ようと望むのであるが、まいたものの実は、不幸と死である。

神がその民を祝福することをおやめにならない限り、彼らも神が要求されるものを神にお返しする義務がある。彼らは、ただ単に、神に属するものをお返しするだけでなくて、感謝のささげ物として、物惜しみせぬささげ物を神の宝庫にたずさえて来なければならない。彼らは喜びにあふれて、受けた賜物の初穂、すなわち、彼らの持ち物の中の最上の物、彼らの最善で最も清い奉仕を、創造主にささげなければならない。こうして彼らは、豊かな恵みを受けるのである。神ご自身が、彼らの心を水の絶えることのない潤った園のようにして下さる。そして、最後の大いなる収穫が集められる時に、彼らが主に持ってくることができた束は彼らにゆだねられたタラントを無私の心で活用したことの報賞となる。

神に選ばれ、活動的働きに従事している使者たちは、兄弟たちの同情と心からの援助を受けず、自費で戦いに従事するように強いられてはならない。伝道に献身するために世俗の職業を放棄する人々を、厚く待遇することは、教

会員のなすべき務めである。神に仕える伝道者が励ましを受ける時に、神のみわざは大いに進展するのである。しかし、人々の利己心のために、伝道者の当然受けるべき支援が滞るならば、彼らの手は弱くなり、しばしば彼らの有用性は大いに損なわれるのである。 [1485]

神に従っていると言いながら、献身的な働き人が、生活必需品の欠乏に苦しみながらも活発に伝道に従事しているのを放任する人々に対して、神は怒りを発せられる。これらの利己的な人々は、ただ単に主の金銭の誤用のためばかりでなく、主の忠実なしもべたちになめさせた意気消沈と心の痛みのためにも、申し開きをしなければならないのである。伝道の働きに召され、それに答えて神の働きのためにすべてをささげる者は、その自己犠牲的努力に対して、彼らとその家族を支えるのに十分な給与を受けなければならない。

一般の労働においては、知的と肉体的とを問わず、各種の働きの部門で、忠実に働く者はよい給料を得ることができる。真理を伝え、魂をキリストに導く働きは、一般の事業よりさらに重要なのではなかろうか。そして、忠実にこの仕事に従事する者は、十分な報酬を受ける権利があるのではなかろうか。精神的幸福と物質的幸福のための働きの相対的価値をいかに評価するかによって、われわれは、地上のものよりも、天上のものにどれほどの関心を持っているかを示すのである。

牧師職を支えるためと、伝道事業の援助の要求に答えるために、金庫に資金があるようにするために、神の民は喜んで惜しみなくささげる必要がある。牧師たちは、常に神のみわざの必要を教会に知らせ、惜しまずささげるように彼らを教育する厳粛な責任が負わされている。もしこれを怠り、教会が、他の人々の必要のために与えることをしなくなると、主の働きに支障をきたすばかりでなく、信者たちに与えられるべき祝福も受け損じるのである。

どんなに貧しい者でも、神にささげ物を持って来なければならない。彼らも、自分たちよりもっと困っている人々を助けるために犠牲を払って、キリストの恵みにあずからなければならない。貧者のささげ物、すなわち自己否定の実は、神の前に香ばしい香りとして昇っていく。そして、自己犠牲の行為の1つ1つは、ささげた者の思いやりの心を

強める。そしてそれは彼を、富んでおられたのにわれわれのために貧しくなられ、その貧しさによってわれわれが富む者となるようにして下さったお方に、ますます密接に結びつけるのである。

自分の持っているすべてであるレプタ2つをさいせん箱に入れたやもめの行為は、貧しさと戦いながらも、ささげ物によって神の事業を援助したいと望んでいる人々の、励ましのために記録された。キリストは、「その生活費全部」をささげたこの婦人に、弟子たちの注意をお向けになった（マルコ12：44）。彼は、自己否定を必要としなかった人々の多額のささげ物よりも、彼女のささげ物のほうを高く評価された。彼らは、ありあまる物の中から、わずかの物をささげた。このやもめは、ささげ物をするために、生活に必要な物をすら犠牲にし、神が明日の必要を満たして下さることを信じたのである。救い主は、彼女についてこう宣言された、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ」（マルコ12：43）。こうして、彼は、ささげ物の価値は、その量ではなくて、ささげられた物の割合と、ささげた人を動かした動機によって評価されることをお教えになった。

使徒パウロは、諸教会の中で伝道した時、新しい改心者たちの心に、神のみわざのために大きな事をしようという願いを起こさせようとして、たゆまず努力した。彼は、物惜しみせぬ心を働かせるようにと、たびたび勧告した。パウロは、エペソの長老たちに、自分が以前に彼らの間で働いた時の事を語って言った。「わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである」。彼はコリント人に次のように書いた。「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである」（使徒行伝20：35、IIコリント9：6、7）。

[1486]

マケドニヤの信者たちは、ほとんどすべて、この世の財産は乏しかったが、彼らの心は、神と神の真理に対する

愛に燃えていた。そして彼らは、福音を支えるために喜んでささげた。ユダヤの信者たちの救援のために、異邦人教会において広く献金が集められたときに、マケドニヤの改心者たちの物惜しみしない精神が、他の教会の模範として掲げられた。パウロは、コリントの信者たちに手紙を送って、彼らの注意を喚起した。「マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせよう。すなわち、彼らは、患難のために激しい試練をうけたが、その満ちあふれる喜びは、極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て惜しみなく施す富となったのである。……彼らは力に応じて、否、力以上に施しをした。すなわち、自ら進んで、聖徒たちへの奉仕に加わる恵みにあずかりたいと、わたしたちに熱心に願い出」た（Ⅱコリント8：14）。

マケドニヤの信者たちの自発的な犠牲は、彼らが真心から献身していた結果であった。彼らは、神の霊に動かされて、「自分自身をまず……主にささげ」、そして、福音を支えるために彼らの財産を進んで惜しみなくささげた（Ⅱコリント8：5）。彼らには、ささげるように勧める必要はなかった。彼らは、他の人々の窮乏を補うために、自分たちに必要な物さえ犠牲にすることを、特権としてむしろ喜んだ。パウロは彼らを抑制しようとしたが、彼らは強いて彼らの献金を受け取らせた。彼らは、素朴で、誠実で、兄弟たちに対する愛をもち、喜んで自己を犠牲にし、慈悲の実を豊かに結んだのである。

パウロは、信者たちを励ますためにテトスをコリントへ送った時、施しという善いわざにおいても教会を強化するように彼に指示を与え、信者たちへの個人的な手紙の中でも、彼自身の訴えをつけ加えて、次のように言った。「さて、あなたがたがあらゆる事がらについて富んでいるように、すなわち、信仰にも言葉にも知識にも、あらゆる熱情にも、また、あなたがたに対するわたしたちの愛にも富んでいるように、この恵みのわざにも富んでほしい」。「だから今、それをやりとげなさい。あなたがたが心から願っているように、持っているところに応じて、それをやりとげなさい。もし心から願ってそうするなら、持たないところによらず、持っているところによって、神に受けいれられるのである」。「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち

足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。……こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである」（IIコリント8：7、11、12、9：811）。

初代教会は、おのれを忘れて惜しみなく施すことによって、大いなる喜びに満たされた。なぜなら信者たちは、自分たちの努力が、暗黒の中にいる人々に福音の言葉を伝えるのを助けていることを知っていたからである。彼らの物惜しみしない心は、彼らが神の恵みをむだに受けなかったことをあかししている。聖霊のきよめによる以外に、いったい何が、このような寛い心を生じさせることができようか。信者と未信者の目の前において、これは恵みの奇跡であった。

霊的繁栄は、クリスチャンの物惜しみしない心と密接につながっている。キリストの弟子たちは、その生活の中にあがない主の恵み深さをあらわすという特権を喜ばなければならない。彼らは、主にささげる時に、彼らの宝が彼らに先だって天の宮廷に行くという保証が与えられる。人々は、自分たちの財産を確保したいと思っているであろうか。それならば、財産を十字架の傷あとのある手にゆだねるとよい。彼らは、資産を享受したいと思っているであろうか。それならば、貧しい人々や苦しんでいる人々のために用いるとよい。彼らは、財産をふやしたいと思っているだろうか。それならば、「あなたの財産と、すべての産物の初なりをもって主をあがめよ。そうすれば、あなたの倉
[1487] は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒 であふれる」という神の命令に耳を傾けるとよい（箴言3：9、10）。もし彼らが、利己的な目的のために、財産を保留しておこうと思うならば、それは永遠の損失になる。しかし、もし宝を神にささげるならば、その瞬間から、それに神の刻印が押される。それは、神の不変性をもって印される。

神は、「すべての水のほとりに種をま（く）……あなたがたは、さいわいである」と宣言なさる（イザヤ32：20）。どこにおいても神のみわざのため、またはわれわれの援助を要する人類の窮乏のために、神の賜物を絶えず分け与えたとしても、貧しくなることはない。「施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜し

んで、かえって貧しくなる者がある」（箴言11：24）。種をまく者は、種をまき散らして、増加させる。忠実に神の賜物を分け与える者もこれと同じである。彼らは彼らの祝福を分け与えることによって、増加させるのである。「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう」と神は約束しておられるのである（ルカ6：38）。

第33章　労働の祝福

パウロは、神の働きを正しく維持することについての聖書の明白な教えを、彼の改心者たちに注意深く示し、また、彼自身、福音の使者として、生活のために世俗の仕事の「労働をせずにいる権利」を主張しながらも、しばしば文明の大中心地における伝道において、生活を支えるために、手の仕事に従事した（コリント9：6）。

ユダヤ人の間では、肉体的労働は、変わった事でも、卑しい事でもなかった。ヘブル人は、子供たちに勤労の習慣をつけさせるように、モーセを通して教えられていた。そして、青少年に肉体労働をさせずに育てることは、罪とみなされていた。たとえ、聖職のための教育を受ける子供であっても、実際生活の知識は不可欠であると思われていた。親が富んでいようが貧しかろうが、すべての青少年は、何かの職業の訓練を受けた。こうした訓練を子供たちに与えることを怠った親は、主の教えに背いたものとみなされた。パウロは、このような習慣に従って、若い時から天幕作りの職業を学んでいた。

パウロは、キリストの弟子になる前は、高い地位についていたので、生活のために手仕事をしなくてもよかった。しかし、後に、キリストの働きを推進するために財産を全部使い果たしたとき、彼は時々、生活費を得るために手仕事をしたのである。特に、動機が誤解されそうな所においては、そうだったのである。

パウロがみことばを宣べ伝えながら手仕事をして自給したことを、まず最初に読むのは、彼がテサロニケにいた時のことである。彼は、自分が「重んじられることができた」ことを彼らに思い起こさせ、次のようにつけ加えた。「兄弟たちよ。あなたがたはわたしたちの労苦と努力とを記憶していることであろう。すなわち、あなたがたのだれにも負担をかけまいと思って、日夜はたらきながら、あなたがたに神の福音を宣べ伝えた」（テサロニケ2：6、9）。またパウロは、テサロニケ人への第2の手紙の中で、自分

と同労者たちが、彼らの所にいた時には、「人からパンをもらって食べることもしなかった」と言った。「あなたがたのだれにも負担をかけまいと、日夜、労苦し努力して働き続けた。それは、わたしたちにその権利がないからではなく、ただわたしたちにあなたがたが見習うように、身をもって模範を示したのである」と彼は書いた（Ⅱテサロニケ3：8、9）。

パウロは、テサロニケで、労働することを拒む人々に出会った。彼が後で、次のように書いたのは、この人々に対してであった。「あなたがたのうちのある者は怠惰な生活を送り、働かないで、ただいたずらに動きまわっているとのことである。こうした人々に対しては、静かに働いて自分で得たパンを食べるように、主 イエス・キリストによって命じまた勧める」。パウロは、テサロニケで働いていた時に、気を配ってこのような人々に正しい模範を示すようにした。「また、あなたがたの所にいた時に、『働こうとしない者は、食べることもしてはならない』と命じておいた」と彼は書いた（Ⅱテサロニケ3：11、12、10）。 [1488]

サタンは、各時代において、教会に狂信的精神を引き起こして、神のしもべたちの働きを損おうとした。パウロの時代でもそうであった。後の宗教改革の時代でもそうであった。ウィクリフ、ルター、その他、その感化と信仰によって世界に祝福をもたらした多くの人々も、熱心が過ぎてバランスを失い、清められていない者たちを、狂信におとしいれようとする敵の策略に遭遇したのである。欺かれた人々は、真の清めに到達すれば、心はこの世の思いをすべて超越し、全く仕事をしなくなると教えた。他の人々は、聖書の言葉を極端に解釈して、働くことは罪であると教えた。すなわち、クリスチャンは、自分のことや家族のことなどの物質的幸福について考えるべきではなく、その全生涯を霊的な事のためにささげるべきであると言った。使徒パウロの教えと模範は、こうした極端な意見に対する譴責であった。

パウロは、テサロニケにいた時に、全く彼の手仕事だけに依存していたのではなかった。彼はあとで、その町における彼の経験に言及して、彼がそこにいた間にピリピの信者たちから受けた贈り物を感謝して、彼らに次のように書いた。「また、テサロニケでも、一再ならず、物を送って

わたしの欠乏を補ってくれた」（ピリピ4：16）。彼は、この援助を受けたとは言っても、テサロニケの人々の前で勤勉のよい模範を示すことに注意した。それは、彼が貪ったなどといういわれのない非難を、だれからも受けることのないためであり、また、肉体労働について狂信的な意見を持った人々に、実際的譴責を与えるためであった。

パウロは、初めてコリントを訪問した時、自分が、異国人の動機に疑惑を持つ人々の中にいることに気づいた。海岸沿いのギリシヤ人は、腕ききの商人であった。彼らは、長い間抜け目のない商売のやり方に慣れていたので、利益を得ることは敬虔なことであると信じ、また、金をもうけることは、正しい方法であろうと詐欺的方法であろうと、称賛に値することと考えるに至っていた。パウロは、彼らの特性を熟知していたので、自分を富ますために福音を伝えていると言わせる機会を、彼らに与えたくなかった。彼は、コリントの聴衆の援助を当然のこととして受けることができたのであるが、進んでこの権利を放棄した。それは彼が、利益のために福音を伝えているという不当な疑惑を受けて、彼の伝道者としての有用性と成功を傷つけたくなかったからである。彼は、誤解を招くあらゆる口実を取り除いて、彼の言葉の力を失うまいと努めた。

パウロは、コリントに到着して間もなく、「アクラというポント生れのユダヤ人と、その妻プリスキラとに出会った。……彼らは近ごろイタリヤから出てきたのである」。彼らは、彼の「同業であった」。アクラとプリスキラは、クラウデオ帝がすべてのユダヤ人をローマから退去させた時に追放され、コリントに来て、そこで天幕業を営んでいた。パウロは、彼らのことを人にたずねた。そして、彼らが、神を恐れ、彼らの周囲の邪悪な影響を避けようとしていることを知って、「その家に住み込んで、一緒に仕事をした。……パウロは安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシヤ人の説得に努めた」（使徒行伝18：24）。

後で、シラスとテモテが、コリントにいるパウロに加わった。この兄弟たちは、働きを支えるために、マケドニヤの教会がささげた資金を持ってきた。

パウロは、コリントに強力な教会を設立した後で、コリント人への第2の手紙を書いて、彼が彼らの中で、どんな生活をしたかを振りかえって次のように問うた。「それと

も、あなたがたを高めるために自分を低くして、神の福音を価なしにあなたがたに宣べ伝えたことが、罪になるのだろうか。わたしは他の諸教会をかすめたと言われながら得た金で、あなたがたに奉仕し、あなたがたの所にいて貧乏をした時にも、だれにも負担をかけたことはなかった。わたしの欠乏は、マケドニヤからきた兄弟たちが、補ってくれた。こうして、わたしはすべての事につき、あなたがたに重荷を負わせまいと努めてきたし、今後も努めよう。わ [1489]
たしの内にあるキリストの真実にかけて言う、この誇がアカヤ地方で封じられるようなことは、決してない」（IIコリント11：710）。

パウロは、コリントにおけるこのような行動の理由を説明している。それは、「機会をねらっている者ども」にそしる口実を与えないためであった（IIコリント11：12）。彼は、天幕を作りながら、福音の宣教もまた忠実に行った。彼自身、その働きについて言っている。「わたしは、使徒たるの実を、しるしと奇跡と力あるわざとにより、忍耐をつくして、あなたがたの間であらわしてきた」。彼は続けて言っている。「いったい、あなたがたが他の教会よりも劣っている点は何か。ただ、このわたしがあなたがたに負担をかけなかったことだけではないか。この不義は、どうか、ゆるしてもらいたい。さて、わたしは今、3度目にあなたがたの所に行く用意をしている。しかし、負担はかけないつもりである。わたしの求めているのは、あなたがたの持ち物ではなく、あなたがた自身なのだから。……そこでわたしは……大いに喜んで費用を使い、また、わたし自身をも使いつくそう」（IIコリント12：1215）。

パウロは、長期にわたったエペソ伝道において、その地域一帯に積極的な伝道活動を推し進めた3か年間、ふたたび、彼の職業に従事した。コリントにいた時と同様に、エペソにおいても、アクラとプリスキラがパウロと共にいて、彼の心を引き立てた。2人は、パウロの第2伝道旅行が終わって、アジヤに帰った時に、彼に従って行ったのであった。

パウロが手を使って働くことは、福音の伝道者にふさわしくないと言って、反対する人々があった。パウロのような、最高の地位を占める伝道者が、言葉の宣教に、手の仕事を結合させなければならないのだろうか。働き人は給料

を受ける価値があるのではなかろうか。なぜパウロは、明らかによりよい事のために用いることができる時間を、天幕の製造に費やさねばならないのだろうか。

しかし、パウロは、このように費やした時間を損失であるとは考えなかった。彼は、アクラと働いていた時、大教師であられるお方との連絡を保ちつづけ、救い主のためにあかしを立て、援助が必要な人々を助ける、どんな機会をも見失わなかった。彼の心は、常に、霊的知識を追求していた。彼は、霊的事物に関する教えを同労者に与え、また、勤勉さと徹底的に仕事をすることの模範をも示した。彼は仕事の速い、熟練した働き人で、実業に励み、「霊に燃え、主に仕え」た（ローマ12：11）。パウロは、彼の職業に従事したときに、他の方法では接することができない階級の人々に近づくことができた。彼は、仲間たちに、普通の技芸の手腕は、神の賜物であることを示した。神は、賜物とそれを正しく用いる知恵とを共にお与えになるのである。パウロは、日常の労働においてさえ、神に栄誉を帰すべきことを教えた。労働で固くなった彼の手は、キリストの伝道者としての彼の感動的な訴えの迫力を少しも損じなかった。

パウロは、時には、昼も夜も働いた。それは、彼自身を支えるためだけでなくて、同労者たちを助けるためでもあった。彼は、収入をルカと分かち合った。そして彼は、テモテを援助した。パウロは、他の人々の窮乏を助けるために、飢えをしのんだことさえあった。彼の生涯は、無我の生涯であった。彼は、その伝道の終わりごろ、ミレトにおいて、エペソの長老たちに訣別の言葉を語った時、苦労の跡を示す手をあげて、言った。「わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない。あなたがた自身が知っているとおり、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ。わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである」（使徒行伝20：3335）。

もし伝道者たちが、キリストのみわざにおいて、困難と窮乏に苦しんでいると感じるならば、心の中で、パウロが

働いた働き場を想像してみるとよい。この神の選びを受けたパウロが天幕を作っていた時、彼は、使徒としての働きによって当然受けるべきであった報酬のために働いていたのであった。 [1490]

労働は、のろいではなくて、祝福である。怠惰な精神は、敬神の念を失わせ、神の霊を悲しませる。よどんだ池は、不快なものである。しかし、清く流れる小川は、全地に健康と喜びをまき散らす。パウロは、肉体的労働を怠る者は、やがて衰弱することを知っていた。彼は、若い伝道者たちが、彼らの手を動かし、筋骨を活動させることにより、伝道地において彼らを待ち受けている苦労と窮乏に耐える力が与えられることを、彼らに教えようと望んだ。そして彼は、もし自分が自分の体のすべての部分を適当に運動させないならば、彼自身の教えが生気と活力を失うことを自覚していた。

怠惰な者は、人生の普通の義務を忠実に実行することによって得られる貴重な経験を受け損じる。少数の者ではなくて、幾千という人々が、恵みのうちに神が授けられた祝福を、ただ消費するために生存している。彼らは、神が彼らにゆだねられた富に対して、感謝の供え物を主に持ってくることを忘れる。彼らは、主が彼らにゆだねられたタラントを賢明に活用して、ただ消費者であるだけでなくて、生産者でもあるべきことを忘れている。もし彼らが、主の助手として彼らがなすよう主が望んでおられる働きを理解したならば、彼らは責任を回避しないことであろう。

宣教のために神の召命を受けたと感じる青年の有用性は大いに、彼らが仕事に従事する態度いかんにかかっている。伝道の働きのために神に選ばれた人々は、その高い召しの証拠を示し、ありとあらゆる方法を用いて、有能な働き人になろうとする。彼らは、計画と組織と実行に適した者になるための経験を得たいと努力する。彼らは、自分たちの召しの神聖さを自覚し、克己によって、ますます主のようになり、主の慈悲と愛と真理をあらわす。そして、彼らが、ゆだねられたタラントを発達させるために熱心になった時に、教会は、賢明な援助を彼らに与えなければならない。

自分たちは宣教のために召されたと感じる者をみな、その家族とともに、直ちに教会の継続的経済支持に依存す

るように奨励してはならない。経験の浅い者は、おだてられて増長し、分別を欠く奨励を受けて、自分たちでは何のまじめな努力もせず、全的に援助を受けることを期待する危険がある。神の働きを拡張するためにささげられた資金は、援助によって利己的野心を満足させ、安楽な生活を送り、ただ説教することだけを希望する人々のために消費すべきではない。

自分の才能を伝道の働きに活用しようと望む青年たちは、テサロニケ、コリント、エペソ、その他の地におけるパウロの模範から、有益な教訓を学ぶことができる。パウロは、雄弁な説教家であって、特別の働きをするために神に選ばれたのであったが、労働に従事することを恥じず、彼が愛したみわざのために犠牲を払うことをいとわなかった。彼は、コリント人へ書いた。「今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、苦労して自分の手で働いている。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍」んだ（コリント4：11、12）。

この世界の最大の教師の1人であるパウロは、最も崇高な義務と同様に、最も低い義務も快く果たした。パウロは、主のために働いた時、事情が求めるならば、喜んで自分の職業に従事した。しかし彼は、福音の敵の反対に対処するために、または、人々をイエスに導く特別の機会を活用するために、いっでも世俗の仕事を放棄する用意があった。彼の熱心と勤勉は、怠惰と安逸を貪る心に対する譴責である。

パウロは、当時教会の中で勢力を得つつあった意見、すなわち、福音は完全に肉体的労働の必要から解放された者によってのみ有効に宣布されるという意見に反する模範を示した。彼は、福音の真理を知らない人が多くいる場所で、献身した信徒が何をすることができるかということを、実際的方法で説明した。彼の行動は、卑しい労働者たちに励ましを与え、日毎の仕事によって生活を支えると同時に、神の働きを前進させるために彼らのなし得ることをしようという願望を起こさせた。アクラとプリスキラは、その全時間を福音の宣教のためにささげるようには召されなかったが、これら身分の卑しい働き人たちは、アポロに真理をさらに完全に示すために、神に用いられたのである。主は、ご自分の目的を達成なさるために、種々の器を

[1491]

お用いになる。そして、特別の才能をもった人々が、福音を教え、説教する働きにその全精力をささげるように選ばれる一方において、按手礼を受けていない他の多くの人々が、救霊の重要な務めを行うように召されているのである。

自給伝道者の前に広い働きの場が開かれている。多くの者は、時間の幾分かを何かの労働に携わりながら、伝道の尊い経験を得ることができる。そして、このような方法によって、助けを必要としている伝道地の重要な働きのための強力な働き人が養成されるのである。

宣教と教えとのために、たゆまず労している自己犠牲的神のしもべは、心に重い荷を負っている。彼は、その働きを時間ではからない。彼の働きは、給料に影響されることなく、また、不利な状況下にあるからといって、義務を怠らない。彼は、天から任命を受けた。そして、ゆだねられた働きが終わった時に、彼は、その報賞を天から受けることを望むのである。

このような働き人が、不必要な心配から解放されて、「これらの事を実行し、それを励みなさい」とパウロがテモテに言った命令に服従する十分な機会が彼らに与えられることが、神のみこころである。（テモテ4：15）。彼らは、心と体の活力を保つために十分運動するよう注意しなければならないけれども、彼らがその大部分の時間を世俗の職業に費やさなければならないということは、神の計画ではない。

これらの忠実な働き人は、喜んで福音のために費用を使い、また、彼ら自身をも使い尽くそうとするが、誘惑がないわけではない。教会が彼らに適当な経済的支持を与えないために、彼らが悩み苦しみにおちいる時、ある者たちは誘惑者に激しく悩まされる。彼らは、自分たちの働きが軽視されているのを見る時に、意気消沈する。確かに彼らは、審判の時に正しい報賞が与えられることを待望して、これによって望みはつながれる。しかし、そうしている間、彼らの家族は、食物や衣服がなければならない。もし彼らが、神の任命から解放されたと感じることができれば、彼らは、喜んで手を使って働くことであろう。しかし、彼らに十分な資金を支給すべき人々に、先見の明がないにもかかわらず、彼らは、自分たちの時間が神に属する

ことを自覚している。そこで、彼らは、何か事業をすれば速やかに窮乏を脱することができるという誘惑に打ち勝って、努力を続け、自分たちの生命よりも尊んでいるみわざを推進するのである。しかし、彼らがこうするためには、パウロの模範にならって、彼らの伝道の働きを推進しながら、一時、手の仕事に従事しなければならないことであろう。これは、彼ら自身の利益のためではなくて、地上の神のみわざを発展させるためである。

神のしもべは、時折、なすべき働きをすることが不可能だと思う。それは、強力で堅固な働きを続ける資金がないからである。ある者は、彼らの所有する物資では、しなければならないと感じることをすべて行うことは不可能ではないかと思う。しかし、もし彼らが信仰をもって前進すれば、神の救いがあらわされ、彼らの努力は必ず成功するのである。世界のあらゆる場所に行けと弟子たちにお命じになった神は、神の命令に従って神の使命を伝えようとするすべての働き人を、支えてくださるのである。

主は、みわざを推進するにあたって、常に万事を神のしもべたちに明らかにされるとは限らない。神は、時には、神の民を、信仰をもって前進しなければならないような状態におとしいれて、彼らの信仰を試みられる。神は、時折、彼らを厳しい困難な場所に至らせ、彼らの足が、ヨルダン川の水に触れると思われる時に、前進することをお命じになる。このような時に、神のしもべたちは、熱烈な信仰の祈りを神にささげ、神が、彼らの前に道を開いて、彼らを広い場所に導いて下さることを祈るのである。

神の使命者たちが、主のぶどう園の困窮している場所に対する責任を認めて、主イエスの精神をもって、魂の悔い改めのためにたゆまず働くならば、神の天使は、彼らの前
[1492] に道を開き、神の働きを前進させる ために必要な資金は備えられる。光を受けた人々は、自分たちのためになされた働きを支えるために、心からささげるのである。彼らは、援助を求めるすべての呼び声に惜しみなく応答する。そして、神の霊は、ただ国内だけでなく、遠方の地における主のみわざを支えるように、彼らの心を動かされる。こうして、他の所で働いている働き人たちに力が与えられ、主の働きは、神ご自身がお定めになった方法で前進するのである。

第34章　使命を持つ者の働き

キリストは、彼の生涯と教えの中で、神に起源を発する無我の奉仕の、完全な模範を示された。神は、ご自分のために生きておられない。神は、世界を創造し、万物を維持して、常に他のために奉仕しておられる。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである」（マタイ5：45）。天の父は、この奉仕の理想をみ子におゆだねになった。イエスは人類の頭として立ち、奉仕とは何であるかを、彼の模範によって教えることを命じられた。彼の全生涯は、奉仕の律法のもとにあった。彼は、すべてに仕え、すべてに奉仕した。

イエスは幾度となく、この原則を弟子たちの間に確立しようとなさった。ヤコブとヨハネが、最高の地位を要求した時に、彼は言われた。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない。それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」（マタイ20：2628）。

キリストは、昇天後、選ばれた使者たちによってご自分の働きを推進し、彼らを通して、人々に語り、彼らの必要に奉仕される。教会の大いなる頭であられるキリストは、神の代表者として神の命を受けた人間の器を通して、神の働きを監督しておられる。

宣教と教えによって、神の教会を築き上げるために、神に召された者の地位は、実に責任重大である。彼らは、キリストに代わって、人々に訴え、神の和解を受けさせなければならない。そして、彼らは、上からの知恵と能力を受けることによってのみ、彼らの任務を果たすことができるのである。

キリストの伝道者は、彼らにゆだねられた人々の霊的保護者である。彼らの働きは、見張りの者の仕事にたとえられている。昔、町の城壁の上によく番兵が立ち、その有利な位置から、防衛すべき重要な地点を見おろして、敵の攻撃に対して警告を発することができた。城内のすべての者の安全は、彼らの忠実さに依存していた。彼らは、ある一定の時間ごとに互いに呼びかわして、皆が目を覚ましていてだれにも危害が加えられなかったことを確認した。励ましや警告の叫びは、次々と伝えられ、各自がその叫びを繰り返して、城内全体に響き渡るのであった。

主は、すべての伝道者に言われる。「それゆえ、人の子よ、わたしはあなたを立てて、イスラエルの家を見守る者とする。あなたはわたしの口から言葉を聞き、わたしに代って彼らを戒めよ。わたしが悪人に向かって、悪人よ、あなたは必ず死ぬと言う時、あなたが悪人を戒めて、その道から離れさせるように語らなかったら、悪人は自分の罪によって死ぬ。しかしわたしはその血を、あなたの手に求める。しかしあなたが悪人に、その道を離れるように戒め〔るなら〕……あなたの命は救われる」（エゼキエル33：79）。

預言者の言葉は、神の教会の保護者、神の奥義の管理者として任命された者の厳粛な責任を宣言している。彼らは、シオンの城壁の上に見張り人として立ち、敵の接近に対して警報を発しなければならない。人々は、誘惑に負けそうになっている。そして、もし神の伝道者たちが、彼らの任務を忠実に果たさないならば、人々は滅びてしまうのである。もし何かの 理由で、彼らの霊的感覚が麻痺して、危険を認めることができず、警告を発しないために、人々が滅びるならば、神は、失われた人々の血の責任を、彼らの手にお求めになる。 [1493]

シオンの城壁の上で見守る者は、神と親しく交わり、聖霊の印象に敏感になる特権が与えられている。神は、彼らを用いて、人々に危険を告げ、安全な場所に導かれる。彼らは忠実に、罪の確かな結果について人々に警告を与え、忠実に教会の利益を保護しなければならない。彼らは、どんな時にも、警戒をゆるめてはならない。彼らの働きは、人間のすべての能力を活用しなければならない働きである。彼らは、ラッパの音のように彼らの声をあげ、不安定

な震える音は、絶対に出してはならない。彼らは、賃銀のために働くのではなく、そうしなければならないからであり、福音を宣べ伝えなければわざわいであると感じるからである。彼らは、神に選ぼれ、献身の血の証印を受けたのであるから、人々を切迫する滅亡から救い出さなければならない。

キリストと共に働く伝道者は、自分の働きの神聖さと、働きを成功させるために必要な労苦と犠牲を深く感じる。彼は、自分自身の安逸や便宜を求めようとしない。彼は、無我の人である。失われた羊を捜し求める時に、彼は、自分の疲労、寒さ、飢えを感じない。彼は、失われた者を救うというただ1つの目的しか考えていないのである。

インマヌエルの血染めの旗の下で仕える者は、英雄的努力とたゆまぬ忍耐力を要求することをしなければならない。しかし、十字架の兵卒は、恐れることなく、戦いの最前線に立つのである。敵が攻め寄せてくると、彼は、とりでに助けを求める。そして、彼は、みことばの約束を主の前において訴える時に、その時の務めをなす力が与えられる。彼は、上からの力の必要を感じる。彼が得る勝利は、彼を自己高揚に導くのでなくて、力強いおかたにますます依り頼むようにさせるのである。彼は、大いなる方、主に依り頼むことによって、力強く救いの使命を宣べ伝え、他の人々の心をゆり動かすことができるのである。

みことばを教える者は、彼自身が、祈りと神のみことばの研究によって、意識的に絶えず神と交わっていなければならない。なぜならば、ここに力の源があるからである。神との交わりは、伝道者の努力に、彼の説教の影響よりもさらに大きな力を与える。彼は、この力を失ってはならない。彼は、とうてい拒まれることがないような熱意をもって、神に嘆願し、義務と試練に耐える力と堅固さが授けられ、くちびるに燃える火が触れることを求めなければならない。キリストの使者たちの、永遠の現実に対する理解は、時には、あまりにも浅薄である。もし人々が、神と共に歩くならば、神は彼らを岩なるイエスの裂け目に隠してくださる。こうして、彼らは隠されて、モーセが神を見たように、神を見ることができる。彼らは、神がお与えになる能力と光によって、さらに深く理解し、有限な判断力に

よって可能と思われたことよりも、さらに多くのことをなし遂げるのである。

サタンの策略は、意気消沈した者に対して最も効果をあらわす。失望が伝道者を圧倒しそうになる時、彼は、その必要を神の前に差し出さねばならない。パウロが、最も完全に神に信頼したのは、パウロの頭の上の天が青銅のようになった時である〔申命記28：23参照――訳者注〕。彼は、大多数の人々よりはるかに苦難の意味を知っていた。しかし、誘惑と争闘に囲まれながらも天に向かって進んだ時の、彼の勝利の叫びに耳を傾けよう。「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ」（Ⅱコリント4：17、18）。パウロの目は、常に、見えない永遠のものに向けられていた。彼は、自分が超自然的勢力と戦っていることを自覚して、神に頼った。彼の力は、ここにあったのである。目に見えない主を見ることによって、魂に能力と活力が与えられ、心と品性に働きかける地上の勢力がくだかれるのである。

牧師は、彼が責任をもって働いている人々と自由に交わり、彼らをよく知ることによって、彼の教えをどのように [1494] 彼らの必要に適合させるかを知らねばならない。伝道者が説教をしたときに、彼の働きは、始まったばかりである。彼は、個人的働きをしなければならない。彼は、人々の家庭を訪問し、熱誠と謙遜な態度で、彼らと語り祈らなければならない。もし神の恵みの管理者たちが、家庭に入って彼らに天への道を示すのでなければ、神のことばの真理に決して触れることがない家族がある。しかし、この働きに従事する者の心は、キリストの心と1つになって脈打たなければならない。

「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい」という命令には、多くのことが含まれている（ルカ14：23）。伝道者は、家庭において真理を教え、彼らが働いている人々と親しくなり、こうして、彼らが神と協力する時に、神は彼らに霊的能力をお授けになるのである。キリストは、彼らの働きにおいて、彼らを導き、聴衆の心に深い感銘を与える言葉を語らせて下さる。パウロと共

に次のように言い得ることが、すべての伝道者の特権である。「神のみ旨を皆あますところなく、あなたがたに伝えておいたからである」。「また、あなたがたの益になることは、公衆の前でも、また家々でも、すべてあますところなく話して聞かせ、また教え、……神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、強く勧めてきたのである」（使徒行伝20：27、20、21）。

救い主は、家々を訪ねて病人をいやし、悲しんでいる者を慰め、苦しんでいる者を助け、悲嘆に暮れている者に平安をお語りになった。彼は小さい子供たちを抱いて彼らを祝福し、疲れた母親たちに希望と慰めの言葉をお語りになった。彼は、つきることのない優しさと親切をもって、あらゆる人間の悲痛と苦難に立ち向かわれた。彼は、ご自分のためではなくて、他の人々のために働かれた。彼は、すべての人のしもべであった。接するすべての人に希望と力を与えることが、彼の食物であり飲み物であった。そして、人々が、ラビ（教師）たちの教える言い伝えや教理とは非常にかけ離れた、彼の語られる真理に耳を傾けたときに、彼らの心に希望がわいてきた。彼の教えには、熱誠がこもっていて、彼の言葉は、罪を悟らせる力をもって、深く人の心に入っていった。

神の伝道者たちは、彼らが働きかけている人々の霊的必要を満たすものを、神のみことばの倉から取り出せるように、キリストの働きの方法を学ばなければならない。こうしてこそ、初めて彼らは、自分たちにゆだねられた信任を全うすることができる。キリストが、常に受けておられた教えを語られた時に、キリストの中に宿った同じ聖霊が、彼らの知識の源であり、救い主の働きを世界中で推進する能力の秘訣でなければならない。

伝道の働きをした者たちの中には、成功を収めることができなかった者たちがいた。それは、彼らが主の働きに専念しなかったからである。伝道者は、人々を救い主に導くという大きな働きから心を奪うような関心事を持ってはならない。キリストが召された漁夫たちは、直ちに、網を捨てて、主に従った。伝道者は、個人的な大きな事業の重荷を負いながら、十分な神の働きをすることはできない。このように心が2つに分かれていれば、彼らの霊的理解力は曇ってくる。彼らの思いと心は、地の事に捕らわれ、キリ

ストの働きは、第二義的のものとなる。彼らは、神の要求に従って、彼らの事情を改めるのではなくて、自分たちの事情に合わせて、神の働きをしようとしているのである。

伝道者の精力は、彼の高い召しのために全部必要である。彼の最高の能力は神のものである。彼は、投機事業、または、彼の大きな働きから彼を引き離すような事業に携わってはならない。パウロは言った。「兵役に服している者は、日常生活の事に煩わされてはいない。ただ、兵を募った司令官を喜ばせようと努める」（Ⅱテモテ2：4）。このようにして、パウロは、伝道者が主の働きのために何1つ保留することなく、献身する必要のあることを強調した。神に全く献身した伝道者は、彼の聖なる召しに完全に献身することを妨げる事業には従事しないようにする。彼は、地上の栄誉や富を得ようとしているのではない。彼
[1495] の唯一の目的は、人類に永遠の生命の富を与えるために、ご自身を犠牲にされた救い主のことを人々に告げることである。彼の最高の願望は、この世で宝を貯えることではなくて、無関心な者や不忠実な者の心を永遠の現実に向けさせることである。彼は、大きな世俗的利益を約束する事業に携わるように要請されるかもしれないが、このような誘惑に対して、「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか」と彼は答えるのである（マルコ8：36）。

サタンは、キリストをこの点で誘惑した。そして、もしキリストが、それをお受けになれば、世界はあがなわれることができないことを彼は知っていた。そしてサタンは、今日、いろいろ形を変えて、神の伝道者たちに同じ誘惑をもちかけ、それに欺かれる者は、彼らにゆだねられた信頼を裏切る。

伝道者が富を追求することは、神のみこころではない。この点について、パウロはテモテに次のように書いた。「金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした。しかし、神の人よ。あなたはこれらの事を避けなさい。そして、義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい」。キリストの使者は、教えるだけでなく、模範を示さなければならない。「この世で富んでいる者たちに、命じなさい。高慢に

ならず、たよりにならない富に望みをおかず、むしろ、わたしたちにすべての物を豊かに備えて楽しませて下さる神に、のぞみをおくように、また、良い行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び、こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げるように、命じなさい」（テモテ6：10、11、1719）。

伝道者の働きの神聖さについての使徒パウロの経験と教訓は、福音のみわざに従事している者にとって、助けと霊感の源である。パウロの心は、罪人に対する愛に燃えていた。そして彼は、救霊の働きに、全精力を注いだ。彼のように自分を犠牲にして、忍耐強く働いた者はなかった。彼は、自分の受けた神の恵みを、他を祝福するために用いる機会として、尊重した。彼は、救い主について語ったり、また、困っている人を助けたりする機会を見失わなかった。彼は、各地に行って、キリストの福音を宣べ伝え、教会を設立した。彼は、耳を傾ける人がいるところはどこであっても、邪悪を打破し、人々の足を義の道に向けようと努めた。

パウロは、彼が建設した教会を忘れなかった。彼とバルナバは、伝道旅行を終えたあとで、彼らが設立した諸教会をふたたび訪れて、彼らと共に福音を宣べ伝えるために訓練することができる人々を選び出した。

パウロの働きのこの面は、今日の伝道者にとって、重大な教訓を含んでいる。パウロは、伝道の務めのために青年を訓練することを、彼の働きの一部にしていた。パウロは、彼らを、彼の伝道旅行に同伴し、このようにして、彼らは後に責任ある地位を占めることができるようになる経験を得たのである。パウロは、彼らと別れた後もなお、彼らの働きと接触を保った。そして、テモテやテトスに送ったパウロの手紙は、彼が、どれほど切に彼らの成功を願っていたかという証拠である。

今日、経験の豊富な働き人たちは、自分で全部の重荷を負おうとしないで、若い働き人たちを訓練し、重荷を彼らの肩に置く時に、立派な働きをしているのである。

パウロは、キリストの伝道者として負わせられている責任、また、彼の不忠実のゆえに魂が失われるならば、神が彼に責任を問われるということを、忘れたことがな

かった。彼は、福音について次のように言った。「わたしは、神の言を告げひろめる務を、あなたがたのために神から与えられているが、そのために教会に奉仕する者になっているのである。その言の奥義は、代々にわたってこの世から隠されていたが、今や神の聖徒たちに明らかにされたのである。神は彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされ
[1496] たのである。 この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである。わたしたちはこのキリストを宣べ伝え、知恵をつくしてすべての人を訓戒し、また、すべての人を教えている。それは、彼らがキリストにあって全き者として立つようになるためである。わたしはこのために、わたしのうちに力強く働いておられるかたの力により、苦闘しながら努力しているのである」（コロサイ1：2529）。

これらの言葉は、キリストのための働き人たちに、崇高な目標を示している。しかし、大教師の支配の下に自己をおき、キリストの学校で日毎に学ぶ者は、みなこの目標に到達することができる。神が持っておられる能力は、無限である。そして、大きな必要を感じた伝道者が、主と密室において親しく交わるならば、彼の聴衆に対していのちからいのちに至らせるかおりとなるものが与えられるという確証を持つことができる。

パウロの手紙は、福音の伝道者は、自分の教える真理の模範でなければならないことを示している。「この務がそしりを招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与えないようにし」ている。彼は、コリントの信者への手紙の中で、自分の働きのことを、次のように描写している。「かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、真理の言葉と神の力とにより、左右に持っている義の武器により、ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、人に知られていないようであるが、認めら

れ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ」ている（IIコリント6：3、410）。

彼は、テトスにこう書いた。「若い男にも、同じく、万事につけ慎み深くあるように、勧めなさい。あなた自身を良いわざの模範として示し、人を教える場合には、清廉と謹厳とをもってし、非難のない健全な言葉を用いなさい。そうすれば、反対者も、わたしたちについてなんの悪口も言えなくなり、自ら恥じいるであろう」（テトス2：68）。

神の目に、神の伝道者ほど尊いものはない。彼らは、地上の荒廃した所へ出て行って、真理の種をまき、収穫を待ち望むのである。神のしもべたちが、どんな心づかいをもって、迷った魂を求めるかは、キリストのほかにはわからない。キリストは、ご自身のみ霊を彼らにお与えになる。そして、彼らの努力によって、魂は、罪から義へと導かれるのである。

神は、農園や事業、また必要ならば家族を喜んで後に残し、神のための伝道者になる人々を召しておられる。そして、召しに答える人が必ずある。過去において、キリストの愛と失われた者の必要に心をゆり動かされて、家庭の慰めや友人の交わりを捨て、または、妻や子供たちの楽しみさえ捨てて、外国へ行き、偶像教徒や未開の人々のなかで、憐れみの使命を宣べ伝えた人々があった。そういう努力の中で、多くの者は生命を失った。しかし、他の人々が、その働きを継続するために起こされた。こうして、キリストのみわざは、1歩1歩と前進し、悲しみのうちにまかれた種は豊かな実を結んだのである。神の知識は広く宣布され、十字架の旗は、異教の国々に立てられたのである。

伝道者は、1人の罪人の悔い改めのために、持てるすべてをつくさなければならない。神に創造され、キリストにあがなわれた魂は、その前にある可能性、それに授けられた霊的利益、神のことばが与える活力によって持ち得る能力、そして、福音が与える希望によって得られる永遠の命などのゆえに、実に大きな価値がある。そして、もしキリストが、1匹の失われた羊を捜すために、99匹を残して来られたとするならば、われわれの努力はそれ以下であってよかろうか。キリストが働かれたように働き、キリストが

犠牲を払われたように犠牲を払うことを怠ることは、聖な
[1497] る信頼の裏切りであり、神に対する侮辱ではなかろうか。

真の伝道者の心は、救霊の熱望に満ちあふれている。時間と精力を使いつくし、どんな労苦もいとわない。なぜならば、彼自身の心にこのような喜びと平和と歓喜とをもたらした真理を、他の人々に聞かせなければならないからである。キリストの霊が彼の上に宿る。彼は、言い開きをしなければならない者として、魂を見張っている。彼は、カルバリーの十字架に目を注ぎ、高く挙げられた救い主を眺め、救い主の恵みにより頼む。そして、彼は、主が彼の盾、彼の力、彼の能力となって、最後まで共におられることを信じつつ、神のために働くのである。彼は、神の愛の保証を織りまぜた招待と嘆願によって、人々をイエスに導こうとする。そして、彼は、天において、「召された、選ばれた、忠実な者」の中に数えられるのである（黙示録17：14）。

第35章　ユダヤ人への福音

本章はローマ人への手紙に基づく

パウロは、やむを得ぬ遅延を重ねたあとで、ついにコリントに到着した。ここは彼が、過去において、苦労して働いたところであり、また一時は、彼の深い憂慮の対象であった。彼は、初期の信者たちの多くが、なお彼を、まず最初に福音の光を彼らに伝えた者として愛していることを知った。彼は、これらの弟子たちに会って、彼らの忠誠と熱心の証拠を見たとき、コリントにおける彼の働きがむだでなかったことを喜んだ。

かつては、キリストにおける崇高な召しを見失いがちであったコリントの信者たちは、強力なクリスチャン品性を発達させていた。彼らの言葉と行為は、神の恵みの改変力をあらわし、今やあの異教と迷信の中心地において、強固な善のための力となっていた。パウロは、愛する友人たちやこれらの忠実な改心者たちと交わって、彼の労苦と心労に疲れた心に休みが与えられた。

パウロは、コリントに滞在していた時に、さらに広大な、新しい伝道地を展望する機会を得た。彼は、特に、ローマへの旅行を切望していた。当時の世界の大中心地において、クリスチャンの信仰が確立されることは、彼の最も切に願った計画の1つであった。ロ―マには、すでに教会が建設されていた。そしてパウロは、イタリアやその他の国々における働きを達成するために、ローマの信者たちの協力を得たいと願ったのである。彼は、これらの兄弟たちの多くをまだ知らなかったので、彼らの間で行う働きの準備として、彼らに手紙を書き、彼のローマ訪問の目的とスペインに十字架の旗を立てたいという希望とを述べたのである。

パウロは、ローマ人への手紙の中で、福音の大原則を説明した。彼は、当時ユダヤ人や異邦人の教会において議論になっていた問題についての、彼の立場を表明した。そ

して、かってはユダヤ人だけに与えられていた希望と約束が、今や異邦人にも与えられていることを示した。

パウロは、非常に明快に、力をこめて、キリストを信じる信仰による義の教理を説明した。彼は、ローマのクリスチャンたちに送った教えによって、他の諸教会もまた、助けが与えられるようにと願った。しかし彼は、自分の言葉がどんなに遠大な影響を及ぼすに至るかについては、なんとばく然とした予測しかできなかったことであろう。各時代を通じて、信仰による義という大真理は、大きな灯台のように立って、悔い改める罪びとを生命の道へ導いた。ルターの心を閉ざした暗黒を追い払い、罪を清めるキリストの力を彼に示したのは、この光であった。同じ光が、幾千という罪の重荷に悩む魂を、ゆるしと平和の真の源であられるイエスに導いた。すべてのクリスチャンは、ローマの
[1498] 教会への手紙に対して、神に感謝しなければ ならない。

パウロは、この手紙の中で、彼がユダヤ人のために負っている重荷について率直に述べている。彼は、回心以来、ユダヤの兄弟たちが福音の使命をはっきりと理解するよう助けたいと願った。「わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである」と彼は言った。

使徒パウロの願望は、ただ普通の願いではなかった。彼は、ナザレのイエスを約束のメシヤとして認めなかったイスラエルの人々のために働かれるよう、たゆまず神に嘆願していた。彼は、ローマの信者たちにはっきり言った。「わたしはキリストにあって真実を語る。……わたしの良心も聖霊によって、わたしにこうあかしをしている。すなわち、わたしに大きな悲しみがあり、わたしの心に絶えざる痛みがある。実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない。彼らはイスラエル人であって、子たる身分を授けられることも、栄光も、もろもろの契約も、律法を授けられることも、礼拝も、数々の約束も彼らのもの、また父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストもまた彼らから出られたのである。万物の上にいます神は、永遠にほむべきかな」。

ユダヤ人は、神の選民であった。神は、彼らによって、全人類に祝福を与えようとなさった。神は彼らの中に、多

くの預言者を起こされた。これらの預言者たちは、あがない主の来臨を預言したのであったが、主は、最初に彼を約束のあがない主として受けいれるはずの人々によって拒否され、殺されるのであった。

預言者イザヤは、来るべき幾世紀を展望して、預言者たちが次々に拒否され、ついに神のみ子が拒否されるのをまのあたりに見、以前にはイスラエルの民の中には数えられていなかった人々が、あがない主を受けいれるに至ることを、霊感によって記した。パウロはこの預言について言っている。「イザヤも大胆に言っている、『わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、わたしを尋ねない者に、自分を現した』。そして、イスラエルについては、『わたしは服従せずに反抗する民に、終日わたしの手をさし伸べていた』と言っている」。

イスラエルは、神のみ子を拒絶したけれども、神は、彼らを拒絶なさらなかった。さらに続いて、パウロの議論に耳を傾けよう。「そこで、わたしは問う、『神はその民を捨てたのであろうか』。断じてそうではない。わたしもイスラエル人であり、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の者である。神は、あらかじめ知っておられたその民を、捨てることはされなかった。聖書がエリヤについてなんと言っているか、あなたがたは知らないのか。すなわち、彼はイスラエルを神に訴えてこう言った。『主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこぼち、そして、わたしひとりが取り残されたのに、彼らはわたしのいのちをも求めています』。しかし、彼に対する御告げはなんであったか、『バアルにひざをかがめなかった7000人を、わたしのために残しておいた』。それと同じように、今の時にも、恵みの選びによって残された者がいる」。

イスラエルは、つまずき倒れたが、再起不能になったのではなかった。「彼らがつまずいたのは、倒れるためであったのか」という問いに対して、パウロは答える。「断じてそうではない。かえって、彼らの罪過によって、救が異邦人に及び、それによってイスラエルを奮起させるためである。しかし、もし、彼らの罪過が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となったとすれば、まして彼らが全部救われたなら、どんなにかすばらしいことであろう。そこでわたしは、あなたがた異邦人に言う。わたし自身は異邦

人の使徒なのであるから、わたしの務を光栄とし、どうにかしてわたしの骨肉を奮起させ、彼らの幾人かを救おうと願っている。もし彼らの捨てられたことが世の和解となったとすれば、彼らの受けいれられることは、死人の中から生き返ることではないか」。

イスラエルの民の間と同様に異邦人の間にも、神の恵みがあらわされることが、神のみこころであった。この事は、旧約聖書の預言の中に明らかに説明されていた。パ
[1499] ウロは、彼の議論の中で、これらの預 言を用いている。彼は、次のようにたずねる。「陶器を造る者は、同じ土くれから、1つを尊い器に、他を卑しい器に造り上げる権能がないのであろうか。もし、神が怒りをあらわし、かつ、ご自身の力を知らせようと思われっつも、滅びることになっている怒りの器を、大いなる寛容をもって忍ばれたとすれば、かっ、栄光にあずからせるために、あらかじめ用意されたあわれみの器にご自身の栄光の富を知らせようとされたとすれば、どうであろうか。神は、このあわれみの器として、またわたしたちをも、ユダヤ人の中からだけではなく、異邦人の中からも召されたのである。それは、ホセアの書でも言われているとおりである。『わたしは、わたしの民でない者を、わたしの民と呼び、愛されなかった者を、愛される者と呼ぶであろう。あなたがたはわたしの民ではないと、彼らに言ったその場所で、彼らは生ける神の子らであると、呼ばれるであろう』」（ホセア1：10参照）。

イスラエルは、国家として失敗はしたけれども、その中には、救わるべき多くの残りの民が残っていた。救い主が来臨されたとき、バプテスマのヨハネの使命を喜んで受けいれた忠実な男女があった。そして彼らは、こうしてメシヤに関する預言を新たに研究するように導かれたのである。初代教会が設立された時、教会を構成したのは、ナザレのイエスを、長く待望していたかたとして受けいれた、これらの忠実なユダヤ人であった。パウロが、「もし、麦粉の初穂がきよければ、そのかたまりもきよい。もし根がきよければ、その枝もきよい」と書いたのは、この残りの民のことであった。

パウロは、イスラエルの残りの民を、何本かの枝が切り去られた気高いオリブの木にたとえている。彼は、異

邦人たちを、元木につがれた野生のオリブの枝にたとえている。彼は、異邦人の信者たちに次のように書いている。「しかし、もしある枝が切り去られて、野生のオリブであるあなたがそれにつがれ、オリブの根の豊かな養分にあずかっているとすれば、あなたはその枝に対して誇ってはならない。たとえ誇るとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのである。すると、あなたは、『枝が切り去られたのは、わたしがつがれるためであった』と言うであろう。まさに、そのとおりである。彼らは不信仰のゆえに切り去られ、あなたは信仰のゆえに立っているのである。高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。もし神が元木の枝を惜しまなかったとすれば、あなたを惜しむようなことはないであろう。神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。そうでないと、あなたも切り取られるであろう」。

イスラエルは、不信と、イスラエルに対する神のみこころの拒否とによって、国家として神との関係が断たれてしまった。しかし、神は、元木から離れた枝をイスラエルの真の根、すなわち彼らの父祖の神に忠誠をつくした残りの民に、ふたたびつぐことがおできになった。パウロは、これらの切り去られた枝である「彼らも、不信仰を続けなければ、つがれるであろう。神には彼らを再びつぐ力がある」と言っている。彼は異邦人たちに次のように書いている。「なぜなら、もしあなたが自然のままの野生のオリブから切り取られ、自然の性質に反して良いオリブにつがれたとすれば、まして、これら自然のままの良い枝は、もっとたやすく、元のオリブにつがれないであろうか。兄弟たちよ。あなたがたが知者だと自負することのないために、この奥義を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時までのことであ」る。

「こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある。『救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追い払うであろう。そして、これが、彼らの罪を除き去る時に、彼らに対して立てるわたしの契約である』。福音について言えば、彼らは、

あなたがたのゆえに、神の敵とされているが、選びについて言えば、父祖たちのゆえに、神に愛せられる者である。神の賜物と召しとは、変えられることがない。あなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は彼らの不従順によってあわれみを受けた
[1500] ように、彼らも今は不従順になっているが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、彼ら自身も今あわれみを受けるためなのである。すなわち、神はすべての人をあわれむために、すべての人を不従順のなかに閉じ込めたのである」。

「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。『だれが、主の心を知っていたか。だれが、主の計画にあずかったか。また、だれが、まず主に与えて、その報いを受けるであろうか』。万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように」。

こうしてパウロは、神がユダヤ人の心も異邦人の心も同様に変える力を十分に持っておられて、キリストを信じるすべての者に、イスラエルに約束された祝福を授けることがおできになることを教えている。彼は、神の民に関するイザヤの宣言をくり返している。「『たとい、イスラエルの子らの数は、浜の砂のようであっても、救われるのは、残された者だけであろう。主は、御言をきびしくまたすみやかに、地上になしとげられるであろう』。さらに、イザヤは預言した、『もし、万軍の主がわたしたちに子孫を残されなかったなら、わたしたちはソドムのようになり、ゴモラと同じようになったであろう』」。

エルサレムが破壊され、神殿が荒廃した時に、幾千のユダヤ人が、異邦の地に奴隷として売られた。彼らは、荒涼たる岸辺に打ち上げられた破片のように、各国にまき散らされた。ユダヤ人は、1800年間にわたって、世界の国々をさまよい歩き、どこへ行っても、国家としての昔の威光を回復することができなかった。（注。世界のユダヤ人の中のほんの少数の者が建設した現代のイスラエルの国家は、ダビデとソロモンの治世のイスラエルの威光にとうてい匹敵するものでないことを見ても、この言葉の真実なことが十分証明されている）。彼らは、幾世紀にわたって、人から中傷を受け、憎まれ、迫害されて、苦難をなめなければならないのであった。

ユダヤ民族が、ナザレのイエスを拒否した時に、国家としてのユダヤ人に恐るべき運命が宣告されたのであったが、その後の各時代に、多くの気高い、神をおそれるユダヤ人たちが、黙々と苦難に耐えていた。神は、苦難の中にある彼らの心を慰め、彼らの悲惨な境遇をあわれまれた。神は、神のことばを正しく理解するために、一心不乱に探り求める人々の、切なる嘆願の祈りを聞かれた。ある者たちは、彼らの先祖たちが拒否して十字架につけた卑しいナザレ人イエスが、イスラエルの真のメシヤであることを認めるに至った。長い間、伝説と誤った解釈によって認めることができないでいた身近な預言の意味がわかったときに、彼らの心は、言いつくせない賜物のゆえに神に感謝した。この賜物は、神が、キリストを自分の救い主として受けいれるすべての者にお与えになるのである。

イザヤが、彼の預言の中で、「救われるのは、残された者」であると言ったのは、この人々のことである。神は、パウロの時代から現代に至るまで、聖霊によって、異邦人と同様にユダヤ人にも呼びかけてこられた。パウロは、「神は人をかたよりみない」方であると言った。パウロ自身、ユダヤ人に対すると同様に、「ギリシヤ人にも未開の人にも、……果すべき責任がある」と考えていた。しかし彼は、ユダヤ人は、「まず第一に、神の言が彼らにゆだねられた」ゆえに、他の民族にまさって決定的優位に立っていることを、忘れなかった。「それ〔福音〕は、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである」。パウロがローマ人への手紙の中で恥としないと言ったのは、ユダヤ人にも異邦人にも同様に力のあるこのキリストの福音である。

この福音が、十分にユダヤ人に伝えられる時に、多くの者はキリストをメシヤとして受けいれるであろう。牧師たちの中には、ユダヤ人のために働くように召されたと感じる者は、わずかしかいない。しかし、しばしばなおざりにされてきた人々にも、他のすべての人々と同様に、キリストにある憐れみと希望の言葉を伝えなければならない。 [1501]

福音の宣教が終結を迎え、これまでおろそかにされていた階級の人々に特別の働きが行われる時に、神は、神の使

命者たちが、地球の至るところに散在しているユダヤ人に特別の関心を持つことを期待しておられる。旧約聖書が、新約聖書と混ざり合って、神の永遠のみこころを説明していることは、多くのユダヤ人にとって、新しい創造の曙光となり、魂の復活となるであろう。福音時代のキリストが旧約聖書のページに描かれ、新約が旧約を明快に説明しているのを悟る時に、彼らの無気力な感覚が目覚めて、キリストが世界の救い主であることを認めるのである。多くの者が、信仰によってキリストを彼らのあがない主として受けいれる。「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」という言葉が彼らに成就する（ヨハネ1：12）。

ユダヤ人の中には、タルソのサウロのように聖書に詳しい人がいて、驚くべき力をもって、神の律法の不変性を宣言する。イスラエルの神は、われわれの時代にこの事を実現して下さる。彼の腕は短くて、救い得ないのではない。神のしもべたちが、長い間おろそかにされ軽べつされていた人々のために、信仰をもって働くときに、神の救いがあらわれる。

「それゆえ、昔アブラハムをあがなわれた主は、
ヤコブの家についてこう言われる、
『ヤコブは、もはやはずかしめを受けず、
その顔は、もはや色を失うことはない。
彼の子孫が、その中にわが手のわざを見るとき、
彼らはわが名を聖とし、
ヤコブの聖者を聖として、
イスラエルの神を恐れる。
心のあやまれる者も、悟りを得、
つぶやく者も教をうける』」

（イザヤ29：2224）。

第36章　福音から離れた人々

本章はガラテヤ人への手紙に基づく

パウロは、コリントに滞在していた時に、すでに設立されていた教会のいくつかについて、深く憂慮するところがあった。エルサレムの信者たちの中から起こった偽教師の影響によって、分裂、異端、肉欲主義が、急速にガラテヤの信者たちの間に広まっていた。これらの偽教師たちは、福音の真理にユダヤの伝承を混ぜ合わせていた。彼らは、エルサレム会議の決定を無視して、異邦人の改心者たちに礼典律を守るように勧めた。

事態は非常に深刻であった。すでに入り込んで来た害悪は、急速にガラテヤの諸教会を破壊しようとしていた。

パウロは、彼が忠実に福音の原則を教えた人々が、このように公然と背教するのに心を痛め、不安を感じた。彼は、直ちに、惑わされた信者たちに手紙を送って、彼らが受けいれた偽りの教えを暴露し、非常に厳しく、信仰から離れた人々を譴責した。彼は、「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように」と言ってガラテヤ人にあいさつしてから、次のような厳しい譴責の言葉を、彼らに語った。

「あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて、違った福音に落ちていくことが、わたしには不思議でならない。それは福音というべきものではなく、ただ、ある種の人々があなたがたをかき乱し、キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。しかし、たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろわるべきである」。パウロの教えは、聖書と一致していた。そして聖霊が、彼の働きをあかししていた。それだからパウロは、彼が教えた真理に矛盾するどんな事にも耳を傾けないように、兄弟たちに警告した。 [1502]

パウロは、ガラテヤの信者たちに、彼らのクリスチャン生活の最初の経験を慎重に考慮するように命じ、大声で叫んで言った。「ああ、物わかりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか。わたしは、ただこの1つの事を、あなたがたに聞いてみたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか。あなたがたは、そんなに物わかりがわるいのか。御霊で始めたのに、今になって肉で仕上げるというのか。あれほどの大きな経験をしたことは、むだであったのか。まさか、むだではあるまい。すると、あなたがたに御霊を賜い、力あるわざをあなたがたの間でなされたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか」。

こうして、パウロは、ガラテヤの信者たち自身の良心に訴えて、彼らの行動を阻止しようとした。パウロは、神の救いの力に頼って、背信した教師たちの教えを承認することを拒んだ。そして彼は、信者たちは大いに欺かれたけれども、彼らが以前の福音の信仰に立ち帰るならば、なおサタンの計略を挫折させることができることを、彼らに悟らせようと努力した。彼は、真理と義の側に堅く立った。パウロが自分の伝えた使命に対して抱いた絶大な信仰と確信は、信仰を失った多くの者が救い主に立ち帰る助けとなった。

パウロがコリントの教会に書いた方法は、ガラテヤ人に書いた方法となんと異なっていることであろう。彼は、前者を注意深く、優しく譴責したが、後者には、容赦なく譴責の言葉を語った。コリント人は、誘惑に負かされたのであった。彼らは、真理のように見せかけて誤りを教えた教師たちの巧みな詭弁に欺かれ、混乱と当惑におちいっていた。真理と誤りを見分けることを彼らに教えるには、慎重さと忍耐が必要であった。もしパウロが、苛酷さや無分別な焦燥を現せば、彼が助けようと望んでいる多くの人々に対する感化力を失ったであろう。

ガラテヤの諸教会においては、誤りが、公然と、何の仮面もかぶらずに、福音の使命に取って代わりつつあった。信仰の真の土台であるキリストが、事実上捨て去られて、ユダヤ教の古い儀式がこれに代わった。パウロは、ガラテ

ヤの信者たちを襲った危険な影響から彼らを救い出そうとすれば、最も断固たる措置を取り、最も厳しい警告を発しなければならないことを知った。

キリストのすべての伝道者が学ばなければならない重要な教訓は、益を与えようとしている相手の人々の状態に、自分の働きを適合させることである。優しさ、忍耐、決断、堅固さなどはみな必要であるが、これらを正しく識別して用いなければならない。いろいろと異なった環境と状況下における、さまざまの異なった性質の人々を賢明に扱うことは、神の霊によって照らされ清められた知恵と判断力を必要とする働きである。

パウロは、ガラテヤの信者たちへの手紙の中で、彼自身の悔い改めと初期のクリスチャン経験の主要な事件を簡単に述べている。彼は、このような方法によって、彼が福音の大真理を認めて理解したのは、神の力の特別な現れによるものであることを示そうとした。パウロがこのように厳粛で積極的な方法でガラテヤびとに警告と勧告を発したのは、神ご自身から受けた指示によるものであった。彼は、ためらいや疑いではなくて、堅い確信と疑う余地のない知識をもって書いた。彼は、人に教えられることと、キリストから直接教えを受けることとの相違を、はっきりと説明した。

パウロは、ガラテヤ人を誤った道に導いた偽の指導者から離れて、神の是認の確かな証拠を持った信仰に立ち帰るように、彼らに勧告した。彼らを福音の信仰から引き離そうとした人々は、心が不潔で生活が腐敗した偽善者たちであった。彼らの宗教は、儀式の繰り返しであって、彼らは、それを行うことによって、神の恵みを得ようとしていた。彼らは、「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」ということばに服従を要求する福音を [1503]
望まなかった（ヨハネ3：3）。彼らは、そのような教理に基づく宗教は、あまりに大きな犠牲を要求すると感じ、自分たちの誤った道に執着して、自分を欺き、他の人々を欺いた。

宗教の外的形式を心と生活の清めに代用することは、これらのユダヤの教師たちの時代と同様に今でもなお、改心していない人々に歓迎されている。今日も当時と同様に、偽の霊的指導者がいて、多くの人々が、彼らの教えに熱

心に耳を傾けている。サタンは巧妙に働いて、キリストを信じ神の律法を守ることによって与えられる救いの希望から、人々の心をそらそうとしている。大敵サタンは、各時代において、彼が欺こうとする相手の偏見や好みに、彼の誘惑を適合させる。彼は、使徒時代においては、ユダヤ人を、礼典律を尊重してキリストを拒否するように導いた。彼は現代においては、多くの自称クリスチャンたちに、キリストを尊ぶという口実の下に、道徳律を軽視させ、その戒めを犯しても罰はないと教えさせるのである。神のしもべは、信仰を曲解するこれらの人々に、しっかりした断固たる態度で立ち向かい、真理のことばによって、恐れることなく彼らの誤りを暴露しなければならない。

パウロは、ガラテヤの兄弟たちの信任を回復しようとして、キリストの使徒としての自分の身分について、巧みに弁明した。彼は、自分が使徒として立てられたのは、「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって」であると言った。彼は、人からではなくて、天の最高の権威者から任命を受けたのである。そして彼の地位は、エルサレム会議によって認められ、パウロは、異邦人間でのあらゆる働きにおいて、その決定に従ったのである。

パウロがこのようにして、彼の使徒としての地位を疑った人々に、自分が「あの大使徒たちにいささかも劣ってはいない」という証拠を示したのは、自己を高めるためではなくて、神の恵みを賛美するためであった（IIコリント11：5）。彼の召命と彼の働きを軽視しようとした人々は、キリストに反抗していた。キリストの恵みと力が、パウロによってあらわれたのである。パウロは、敵の反対が起こったために、やむを得ず、自分の地位と権威を維持するために、断固とした態度をとらなければならなかった。

パウロは、かつてその生活に神の力を経験した人々に、福音の真理に対する最初の愛に立ち帰るようにと訴えた。彼は、彼らが、キリストにあって自由な男女になれること、またキリストのあがないの恵みによって、完全に献身する者はみな彼の義の衣を着せられることを、反駁することのできない議論によって、彼らに示した。救いを得たいと願う者は、神の事について、真実で個人的な経験が必要であるというのが、彼の立場であった。

パウロの熱心な嘆願の言葉は、効を奏した。聖霊が、大いなる力をもって働き、誤った道に足をふみ入れた多くの者が、以前の福音の信仰に立ち帰った。その後、彼らは、キリストがお与えになった自由に堅く立った。彼らの生活には、「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」などの聖霊の実があらわれた。神のみ名は崇められ、その地方全体の信者の数が大いに増加した。

第37章　パウロの最後のエルサレム旅行

本章は使徒行伝20：421：16に基づく

パウロは、過越の祭に世界の各地から集まってくる人々に会う機会があるので、祭の前にエルサレムに到着したいと切望した。彼は何とかして、不信仰な同胞の偏見を除き、彼らを福音の尊い光に導く器になりたいという希望を常に抱いていた。彼はまた、エルサレムの教会員に会い、異邦人がユダヤの貧しい兄弟たちにおくった贈り物を届けたいと願った。そして、彼は、この訪問によって、ユダヤ
[1504] 人と異邦の信者 との間の結合を一層強固にしようと望んだ。

彼は、コリントにおける働きをなし遂げたので、パレスチナ海岸のどこかの港へ直接、船で行こうと決心した。すべての準備が整い、彼がまさに乗船しようとした時、彼は、ユダヤ人が彼の生命を取ろうと企てていることを聞いた。これまで、これら信仰の反対者たちが、パウロの働きをやめさせようとした努力は、みな挫折していた。

福音の宣教の成功が、新たにユダヤ人の怒りを引き起こした。ユダヤ人はもはや礼典律を守る必要はなくなり、異邦人はユダヤ人と同じように、アブラハムの子孫の特権にあずかるのである、という新しい教理が広まったとの報告が、各地から入って来ていた。パウロは、コリントで伝道したとき、手紙の中で力強く主張したのと同じように論じた。彼が強調した「もはやギリシャ人とユダヤ人、割礼と無割礼.....の差別はない」という言葉を、彼の敵たちは、はなはだしく神を冒瀆するものであるとみなし、彼の声を沈黙させなければならぬと決意した（コロサイ3：11）。

パウロは、陰謀の警告を受けて、マケドニヤを経由して行くことに決めた。過越の祭までにエルサレムに到着する計画は放棄しなければならなかったが、ペンテコステには間に合いたいと彼は望んだ。

パウロとルカに同行したのは、「ベレヤ人ソパテロ、テサロニケ人アリスタルコとセクンド、デルベ人ガイオ、それからテモテ、またアジヤ人テキコとトロピモ」などであった。パウロは、異邦の教会からの多額の金を持っていたので、ユダヤの働きを指導する兄弟たちの手に、それを手渡すつもりであった。そして、このために、献金をした各地の教会の代表者が、エルサレムまで彼に同行するように計画したのである。

パウロはピリピに滞在して、過越祭を過ごした。ただルカだけがパウロととどまり、一行の他の人々はトロアスへ行って、そこで彼を待った。ピリピ人は、パウロの改心者たちの中で、最も愛情深く、また最も真実な人々であった。そして、彼は、祭の8日の間、彼らとの平和で幸福な交わりを楽しんだ。

パウロとルカは、ピリピから出帆し、5日かかってトロアスに到着して、仲間と落ち合い、そこの信者たちと共に7日間滞在した。

パウロが兄弟たちのところにとどまっていた最後の晩に、彼らは「パンをさくために集まった」。愛する教師が去ろうとしているので、平常より多くの人々が集まった。彼らは、三階の「屋上の間」に集まっていた。パウロは、彼らを熱烈に愛し、深く気づかっていたので、真夜中まで説教した。

ユテコという若者が、開いた窓に腰かけていた。彼は、この危ない場所で眠ってしまい、下の庭に落ちた。たちまち人々はあわてふためき、大騒ぎになった。若者をかかえ起こしてみると、もう死んでいた。そして、多くの人々が彼のまわりに集まって、嘆き悲しんだ。しかしパウロは、驚きあわてる人々の間をとおって、若者を抱き、神が彼を生きかえらせて下さるように、熱心な祈りをささげた。彼の祈りは聞かれた。人々の嘆きと悲しみの叫びを越えて、使徒パウロの、「騒ぐことはない。まだ命がある」という言葉が聞こえた。信者たちは喜んで、また屋上の間に集まった。彼らは、聖餐をすませ、それからパウロは、「明けがたまで長いあいだ人々と語り合っ」た。

パウロと同行者たちが旅を続けることになっていたその船が、まさに出帆しようとしていたので、兄弟たちは急いで乗船した。しかし、パウロ自身は、トロアスとアソ

ス間の陸路の近道を行き、アソスで、仲間たちに会うことにした。こうして彼は、しばらくの間、瞑想と祈りの時間を持つことができた。今回のエルサレム訪問に伴う困難と危険、彼および彼の働きに対するエルサレム教会の態度などが、諸教会の状態のことや、他の伝道地における福音の働きの進展の状況などと共に、彼が真剣に憂慮した問題であった。そして彼は、この特別の機会を活用して、神の力と導きを求めた。

旅の一行が、アソスから南下した時に、彼らは、パウロが長い間働いた場所であるエペソの町を過ぎた。パウロは、エペソの教会に重要な教訓と勧告とを与えようと思っていたので、ぜひ訪問したいと願った。しかし、よく考えた上で、「できればペンテコステの日には、エルサレムに着いていたかったので」、先を急ぐことにしたのである。しかし、ミレトに着いてみると、そこはエペソから約30マイルの所で、船が出帆する前に教会と連絡がとれることがわかった。そこで彼は、直ちに長老たちに使いを送って、彼が出帆する前に、彼らがミレトまで彼に会いに来るように頼んだ。

[1505]

長老たちが彼の招きに応じて来た時、彼は、感動的で力強い勧告と告別の言葉を語って言った。「わたしが、アジヤの地に足を踏み入れた最初の日以来、いつもあなたがたとどんなふうに過ごしてきたか、よくご存じである。すなわち、謙遜の限りをつくし、涙を流し、ユダヤ人の陰謀によってわたしの身に及んだ数々の試練の中にあって、主に仕えてきた。また、あなたがたの益になることは、公衆の前でも、また家々でも、すべてあますところなく話して聞かせ、また教え、ユダヤ人にもギリシャ人にも、神に対する悔改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、強く勧めてきたのである」。

パウロは、常に神の律法を高く掲げた。彼は、律法には、不服従の罰から人々を救う力がないことを人々に示した。悪を行った人は、罪を悔い改めて、神の前に心を低くしなければならない。彼らは、神の律法を破ったので、当然、神の怒りをこうむった。また彼らは、ゆるしの唯一の道であるキリストの血に対する信仰を働かせなければならない。神のみ子は、彼らの犠牲として命を捨て、昇天され、彼らの仲保者として父なる神の前に立たれた。彼ら

は、悔い改めと信仰によって罪の罰から逃れることができる。またキリストの恵みによって、今後、神の律法に服従することができるようになるのである。

パウロは、続けて言った。「今や、わたしは御霊に迫られてエルサレムへ行く。あの都で、どんな事がわたしの身にふりかかって来るか、わたしにはわからない。ただ、聖霊が至るところの町々で、わたしにはっきり告げているのは、投獄と患難とが、わたしを待ちうけているということだ。しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない。わたしはいま信じている、あなたがたの間を歩き回って御国を宣べ伝えたこのわたしの顔を、みんなが今後2度と見ることはあるまい」。

パウロは、このような言明をするつもりはなかった。しかし、彼が語っていた時に、聖霊の霊感を感じ、エペソの兄弟たちと会うのはこれが最後かもしれないと考えたことが事実になることを示された。

「だから、きょう、この日にあなたがたに断言しておく。わたしは、すべての人の血について、なんら責任がない。神のみ旨を皆あますところなく、あなたがたに伝えておいたからである」。パウロは、人を怒らせはしないかという懸念や、友情と称賛を得たいという願望のゆえに、神が彼にお与えになった教訓、警告、訓戒のことばを差しひかえるようなことはしなかった。今日、神は、神のしもべたちが、何ものも恐れずにみことばを宣べ伝え、その戒めを実行することを要求しておられる。キリストの伝道者は、人々が最も喜ぶ真理だけを伝えて、彼らの心に苦痛を与える他の真理を差しひかえてはならない。彼は、心からの関心をもって、人々の品性の向上を見守らなければならない。もしも、彼の群れの中に、罪を抱いている者があれば、彼は忠実な牧者として、神のみことばから、彼らの事情に適した教訓を与えなければならない。もし彼らに何の警告も与えず、自負心をもつがままに放任しておけば、彼らの魂の責任を彼が負わなければならない。崇高な任務を達成する牧者は、信徒たちにキリスト教の信仰のすべての点を忠実に教え、神の日に完全に立ち得るためには、どんな人間になり、何をすべきかを示さなければならない。真

理を忠実に教えた教師だけが、その働きの最後において、パウロと共に、「わたしは、すべての人の血について、なんら責任がない」ということができるのである。

パウロは、兄弟たちに勧告して言った。「どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られ
[1506] た神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである」。もし福音の伝道者たちが、自分たちの扱っているのはキリストの血によってあがなわれた人々であることを、常に覚えているならば、彼らは、自分たちの働きの重要性をさらに深く感じることであろう。彼らは、彼ら自身と彼らの群れとに気をくばっていなければならない。彼ら自身の模範が、彼らの教えを説明し、強化するものでなければならない。彼らは、生命の道の教師として、真理がそしられるような口実を与えてはならない。彼らは、キリストの代表者として、キリストのみ名の栄えを維持しなければならない。彼らは、その献身と純潔な生活と敬虔な言行によって、自分たちが崇高な召しに値するものであることを証明しなければならない。

パウロは、エペソの教会を襲う危険を示して言った。「わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう」。パウロは将来を展望して、教会には、外部と内部の両方から敵の攻撃が襲ってくるのを見、震えおののいた。彼は、厳粛で熱誠のこもった口調で、兄弟たちが目を覚まして、彼らの神聖な義務を守るように命じた。その例として、彼は、自分が彼らの間でうまずたゆまず働いたことを指摘した。「だから、目をさましていなさい。そして、わたしが3年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがた一人一人を絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい」。

彼は続けて言った。「今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない」。エペソの兄弟たちのある者は富んでいたが、パ

ウロは、彼らから個人的利益を求めたことは決してなかった。自分の必要に人の注意を引くことは、彼の使命の一部ではなかった。「わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ」と彼は言った。彼は、困難な仕事とキリストの働きのための長い旅のさ中にあっても、ただ自分の必要を満たすだけでなくて、仲間たちを支え、困っている人々を救済するために分け与えることができた。彼は、絶え間ない勤勉と、極度の倹約によって、これを達成したのである。彼が自己の模範を指し示して、次のように言うことができたのも当然である。「わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである」。

「こう言って、パウロは一同と共にひざまずいて祈った。みんなの者は、はげしく泣き悲しみ、パウロの首を抱いて、幾度も接吻し、もう2度と自分の顔を見ることはあるまいと彼が言ったので、特に心を痛めた。それから彼を舟まで見送った」。

一行は、ミレトを出港して、「コスに直航し、次の日はロドスに、そこからパタラに着いた」。パタラは、小アジヤの南西岸にあった。彼らは、「ここでピニケ行きの舟を見つけたので、それに乗り込んで出帆した」。ツロで積荷が陸上げされ、彼らは、幾人かの弟子たちを見つけて、そこに7日間とどまることができた。これらの弟子たちは、エルサレムで危険がパウロを待ちうけているという警告を聖霊によって与えられ、「エルサレムには上って行かないように」しきりにパウロに勧めた。しかし、パウロは、苦難に会おうが、投獄されようが、意図したことを変えるつもりはなかった。

ツロにおける1週間の滞在が終わった時に、兄弟たちはみな、妻や子供を連れて、船までパウロと一緒に来た。そして彼らは、パウロが船に乗る前に、海岸にひざまずいて互いのために祈った。

一行は、ふたたび南に旅をつづけて、カイザリヤに着き、「かの7人のひとりである伝道者ピリポの家に行き、そこに泊まった」。ここで、パウロは、数日間の平和で幸福

な時を過ごした。しかし、長期間にわたって、彼が完全な自由を楽しむのは、これが最後になるのであった。

[1507] ルカは、パウロがカイザリヤに滞在している間に、「アガボという預言者がユダヤから下ってきた」と言っている。「そして、わたしたちのところにきて、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って言った、『聖霊がこうお告げになっている、「この帯の持ち主を、ユダヤ人たちがエルサレムでこのように縛って、異邦人の手に渡すであろう」』」。

ルカは続けて言っている。「わたしたちはこれを聞いて、土地の人たちと一緒になって、エルサレムには上って行かないようにと、パウロに願い続けた」。しかし、パウロは、義務の道からそれようとはしなかった。彼は、必要ならば、獄屋にも、死にも、キリストに従って行くのであった。彼は叫んだ。「あなたがたは、泣いたり、わたしの心をくじいたりして、いったい、どうしようとするのか。わたしは、主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことをも覚悟しているのだ」。兄弟たちは、いたずらに彼の心を苦しめ、彼の決心を変えることができないのを悟って、無理に強いることをやめ、「主のみこころが行われますように」と言っただけで、それ以上何も言わなかった。

やがて、カイザリヤにおける短い滞在の期間が終わる時が来た。そして、パウロと彼の一行は、数人の兄弟たちと共に、エルサレムに向かって出発した。彼らの心は、接近するわざわいの予感に深くおおわれていた。

パウロはこれまで、このような悲しい思いをもってエルサレムに近づいたことはなかった。彼は、友が少なく、敵が多くいることを知っていた。彼は、神のみ子を拒否して殺害した都、そして、今や、神の怒りが臨もうとしている都に近づいているのであった。彼は、自分自身が、いかにキリストの弟子たちに対して苦々しい偏見を抱いていたかを思い起こして、惑わしにおちいっている同胞に、深いあわれみの情を感じた。しかし、彼らを助けることのできる望みは、なんとうすいことであろうか。かって、彼自身の心の中に燃えていたのと同じ盲目的怒りが、今、彼に対して、恐ろしい勢いで、全国民の心の中で燃えているのであった。

またパウロは、同信の兄弟たちの同情と支援にさえ頼ることができなかった。悔い改めないユダヤ人たちは、しつこく彼につきまとって、時を移さず、直接また手紙の両方によって、彼と彼の働きに関する不利な報告を広めた。そして、使徒たちや長老たちのあるものは、この報告が真実であると信じて、何の反駁もしなければ、彼と一致しようとするどんな希望も示さなかった。

しかし、パウロは、失望すべき状況のさ中にありながらも、絶望しなかった。彼は、彼自身の心に語った天からの声が、なお、同胞の心に語りかけることを信じ、同信の弟子たちが愛し仕えている主が、彼らの心と彼の心を一致させ、福音の働きに従事させて下さることを信じたのである。

第38章　投獄されたパウロ

本章は使徒行伝21：1723：35に基づく

「わたしたちがエルサレムに到着すると、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。翌日パウロはわたしたちを連れて、ヤコブを訪問しに行った。そこに長老たちがみな集まっていた」。

パウロの一行は、異邦人の教会が、ユダヤの兄弟たちの中の貧しい人々を援助するためにおくった献金を、エルサレムの働きの指導者たちに正式に手渡した。パウロと同労者たちは多くの時間を費やし、精神的、肉体的労苦をなめながら、これらの献金を集めたのである。その額は、エルサレムの長老たちの期待をはるかに越えたものであったが、これは、異邦の信者たちの多くの犠牲と、彼らの耐えた厳しい窮乏生活をあらわしたものであった。

[1508] こうした任意の献金は、世界中の、神の組織的働きに対する、異邦の信者たちの忠誠をあらわしていた。そして、すべての者は感謝してそれを受け取るべきであった。しかし、パウロと彼の仲間たちは、今、彼ら面会している人々の中にさえ、この贈り物の動機となった兄弟愛の精神を理解することができない人々があるのを、明らかに知った。

異邦人の間の福音の働きの初期において、エルサレムの指導的兄弟たちのある者は、以前の偏見と思想の習慣に執着して、パウロと彼の仲間たちに心から協力しなかった。彼らは、すでに意味を失った2、3の形式と儀式を保持しようとするあまり、各地における主の働きを合同させようと努力し、そのために、彼らと彼らの愛するみわざに与えられる祝福を見失ってしまった。彼らは、キリスト教会の最大の利益を擁護することを望んだが、神の摂理の前進と歩調を合わせることができず、自分たちの人間的知恵によって、働き人に種々の不必要な制限を加えようとした。こうして、遠方の伝道地で働く人々の特殊な必要や状況の変化を個人的に知らない一団の人々があらわれて、これらの伝

道地の兄弟たちを、一定の働き方に従って指揮する権威を主張したのである。彼らは、福音宣教の働きが、彼らの意見に従って推進されるべきものと考えた。

エルサレムの兄弟たちが、他の主要な教会の代表者たちと共に、異邦人のために働いている者たちが行っていた方法について起きた困難な問題を注意深く考慮してから、数年が経過していた。この会議の結果、兄弟たちは一致して、割礼をも含む幾つかの儀式と習慣に関して、諸教会に一定の勧告をすることに決めたのであった。また兄弟たちが、バルナバとパウロを、すべての信者の完全な信任を受けるに値する働き人として、キリスト教会に一致して推薦したのも、この会議においてであった。

この会議に出席した者の中には、異邦の世界に福音を伝える重責を担った使徒たちの働きの方法を厳しく批判した者たちがいた。しかし、この会議の間に、神のみこころに関する彼らの見解が拡大されて、彼らは、兄弟たちと心を1つにして、賢明な決定をなし、信者全体の一致を可能にしたのである。

その後、異邦人の間の信者が急速に増加していることが明らかになった時、エルサレムの指導者たちの中には、以前彼らが、パウロと彼の仲間たちのやりかたに対して抱いていた偏見を再び持ち始めた者たちがいた。こうした偏見は、年月の経過と共に深まり、ついにある指導者たちは、福音の宣教の働きは、今後、彼ら自身の意見に従って行われるべきであると決定するに至った。もしパウロが、彼らの主張する一定の方針に従って働くならば、彼の働きに対する彼らの承認と支持を受けるが、もしそうでなければ、彼らは、もはや、パウロの働きに賛成せず、また支持も与えないのであった。

この人々は、神が、神の民の教師であることを見失っていた。神のみわざに従事しているすべての働き人は、人間から直接指導を受けるのではなくて、天来の指導者に従うという個人的経験を得なければならない。それは、神の働き人が、人間の意見ではなくて、神のかたちにかたどって、形造られ、陶冶されるためである。

使徒パウロは、伝道した時、「巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によっ」て、人々を教えた。彼が宣言した真理は、聖霊によって彼に啓示されたもの

であった。「御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。……わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである」とパウロは言った（コリント2：4、1013）。

パウロは、彼の伝道の期間を通じて、直接、神の指導を仰ぎ求めた。それと共に、彼は、エルサレムの会議の決定に一致して働くように、非常に慎重であった。その結果として、「諸教会はその信仰を強められ、日ごとに数を増していった」（使徒行伝16：5）。そして今、幾人かの者が彼に対して、共感を示さなかったのであるが、彼は、改心
[1509] 者たちの心に忠誠と寛大さと兄弟愛の精神を抱かせることができ、自己の義務を果たしたことを意識して、慰められた。この精神は、今回、彼がユダヤの長老たちの前におくことができた多額の献金にあらわされていた。

パウロは、贈り物を手渡してから、「神が自分の働きをとおして、異邦人の間になさった事どもを一々説明した」。この事実の陳述は、すべての人の心と、疑っていた人々の心にさえ、パウロの働きには天の祝福が伴っていたことを確信させた。「一同はこれを聞いて神をほめたたえ」た。彼らは、パウロが従事している働きの方法には、天の証印が押されているのを感じた。彼らの前におかれた多額の献金も、異教徒の間に建設された新しい教会の忠実さについてのパウロの証言に重みを加えた。エルサレムにおける働きの責任者に数えられていながらも、独断的な統制手段を主張していた人々は、パウロの伝道に対して、新しい認識を抱いた。そして、自分たちの行動が誤っていたことを認め、自分たちが、ユダヤの習慣と言い伝えに捕らわれていたことを認めた。また、キリストの死によって、ユダヤ人と異邦人の間の隔ての中垣がくだかれたことを、彼らが認めなかったために、福音の働きが大いに妨げられてきたことを悟った。

これは、指導的兄弟たちがみな、神はパウロによって働かれたことと、時折彼らは、敵のうわさを聞いて、ねたみと偏見を抱いて誤りに陥ったことを、率直に告白する絶好

の機会であった。しかし、彼らは、名誉を傷つけられた者を正当に扱おうと心を1つにして努力する代わりに、パウロに勧告を与え、パウロに対する偏見の大部分の責任は彼が負うべきであると、いまなお彼らが考えていることを明らかにした。彼らは、堂々と立って彼を擁護し、不満を抱いた人々の誤りを指摘しようとはせずに、誤解の原因をすべて取り除くだろうと彼らが考えた行動をとるよう、彼に勧告して、妥協させようとしたのである。

彼らは、パウロの証言に答えて、次のように言った。「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人の中で信者になった者が、数万にものぼっているが、みんな律法に熱心な人たちである。ところが、彼らが伝え聞いているところによれば、あなたは異邦人の中にいるユダヤ人一同に対して、子供に割礼を施すな、またユダヤの慣例にしたがうなと言って、モーセにそむくことを教えている、ということである。どうしたらよいか。あなたがここにきていることは、彼らもきっと聞き込むに違いない。ついては、今わたしたちが言うとおりのことをしなさい。わたしたちの中に、誓願を立てている者が4人いる。この人たちを連れて行って、彼らと共にきよめを行い、また彼らの頭をそる費用を引き受けてやりなさい。そうすれば、あなたについて、うわさされていることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守って、正しい生活をしていることが、みんなにわかるであろう。異邦人で信者になった人たちには、すでに手紙で、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを、慎むようにとの決議が、わたしたちから知らせてある」。

兄弟たちは、パウロが勧告された行動をとって、彼についての偽りのうわさに対して明確に反論することを望んだ。彼らは、異邦人の信者と礼典律に関する前回の会議の決議が、なお有効であると彼に言明した。しかし、彼らの勧告は、その決議と一致していなかった。この指示は、神の霊によって与えられたものではなかった。それは、臆病の結果であった。エルサレムの指導者たちは、クリスチャンがもし礼典律を守らなければ、ユダヤ人の怒りを招き、自分たちを迫害にさらすことを知っていた。サンヒドリンは、福音の進展を阻止するために全力をつくしていた。サンヒドリンは、手下に、使徒たちの、特にパウロの後をつ

けさせて、あらゆる方法で彼らの働きに反対させた。もしキリストの信者たちが、サンヒドリンの前で、律法の違反者として罪に定められるならば、彼らはユダヤ教の背信者として、直ちに厳しい刑罰に会わなければならなかった。

福音を信じた多くのユダヤ人は、なお礼典律を尊重し、自ら進んで無分別な譲歩をなし、こうすることによって、同胞の信頼を得て、彼らの偏見を取り除き、キリストを世界のあがない主として信じさせようと望んだ。パウロは、
[1510] エルサレム教会の指導者たちが彼に対して偏見を持ちつづけるかぎり、彼らは常に彼の働きに対して反対することを悟った。彼は、ここでなんらかの穏当な譲歩によって、彼らを真理に導くことができれば、他の場所での福音の働きを成功させるための、大きな障害物を取り除くことになると感じた。しかし、パウロは、彼らが要求したほどに譲歩する権利を神から授けられてはいなかった。

兄弟たちと調和したいというパウロの大きな願い、信仰の弱い者に対する彼の思いやり、キリストと共にいた使徒たち、特に主の兄弟ヤコブに対する彼の尊敬、また、できるだけ原則を曲げずにすべての人に対しては、すべての人のようになるという彼の決心などをみな考慮する時に、彼が、これまで歩んできた堅固で明確な道からやむを得ずそれたとしても、大して驚くに当たらない。しかし、彼の和解の努力は、望んだ目的を達成するのではなくて、ただ危機の到来を促進し、彼の予告した苦難を早めるものであった。そして彼は、兄弟たちから引き離され、教会は、最も堅固な柱を失い、全地のクリスチャンを悲しませる結果になったのである。

パウロは、その次の日に、長老たちの勧告を実行し始めた。ナジルびととなる誓願をしていた4人の者のきよめの期間が、ほとんど終わっていたので（民数記6章）、パウロは、彼らを宮に連れていき、「そしてきよめの期間が終って、一人一人のために供え物をささげる時を報告しておいた」。清めのために、一定の高価な犠牲を、まだささげなければならなかったのである。

このような行動をとるようにパウロに勧告した人々は、彼がどのように大きな危機にさらされるかを十分に自覚していなかった。この時、エルサレムには、各地からの礼拝者があふれていた。パウロは、神から与えられた任命

に従って、異邦人に福音を伝え、世界の多くの大都会を訪れていた。そして彼は、祭に参列するために外国からエルサレムに来ていた幾千の人々に、よく知られていた。このような人々の中には、パウロに対して激しい憎しみを抱いていた者があった。彼が、公の祭の時に、神殿に入ることは、生命を危険にさらすことであった。彼は数日の間、礼拝者に混じって神殿に出入りしていたが、人々には気づかれなかったようであった。しかし、定められた期間が終わる前に、彼がささげる犠牲について、祭司と話をしていた時、アジヤから来た幾人かのユダヤ人が彼に気づいた。

彼らは、悪鬼のような憤怒をもってパウロに襲いかかり、「イスラエルの人々よ、加勢にきてくれ。この人は、いたるところで民と律法とこの場所にそむくことを、みんなに教えている」と叫んだ。そして人々が、加勢を求める声に応じた時、「その上に、ギリシャ人を宮の内に連れ込んで、この神聖な場所を汚したのだ」というもう1つの罪がつけ加えられた。

ユダヤの律法によれば、無割礼の者が神殿の奥に入ることは、死刑に値する罪であった。パウロは、エペソ人トロピモと一緒にいるのを町の中で見られていたので、彼を神殿の中に連れていったと憶測されたのである。そのようなことを、パウロはしていなかった。そして、彼自身はユダヤ人であるから、神殿に入ることは、律法に違反していなかった。告発は、全くの虚偽であったにもかかわらず、公衆の偏見を引き起こすことになった。神殿内に叫びが鳴りひびいて、集まっていた群衆は、狂ったように騒ぎ出した。この知らせは、速やかにエルサレム中にひろがり、「市全体が騒ぎ出し、民衆が駆け集まってき」た。

世界の各地から幾千という人々が礼拝に集まってきているこの時において、イスラエルの背教者が神殿を汚そうとしたということは、群衆の最も激烈な怒りを引き起こした。彼らは、「パウロを捕らえ、宮の外に引きずり出した。そして、すぐそのあとに宮の門が閉ざされた」。

「彼らがパウロを殺そうとしていた時に、エルサレム全体が混乱状態に陥っているとの情報が、守備隊の千卒長にとどいた」。クラウデオ・ルシヤは、彼が扱わねばならない不穏な分子をよく知っていたので、「彼はさっそく、兵卒や百卒長たちを率いて、その場に駆けつけた。人々

は千卒長や兵卒たちを見て、パウロを打ちたたくのをやめ
[1511] た」。ローマの千卒長は、騒ぎの原因は知らなかったが、群衆の憤怒がパウロに集中しているのを見て、かねて聞いていた逃亡中のエジプト人の反乱者に違いないと考えた。そこで、千卒長は「パウロを捕らえ、彼を二重の鎖で縛っておくように命じた上、パウロは何者か、また何をしたのか、と尋ねた」。直ちに、多くの人々が、怒り狂って大声で訴えた。「しかし、群衆がそれぞれ違ったことを叫びつづけるため、騒がしくて、確かなことがわからないので、彼はパウロを兵営に連れて行くように命じた。パウロが階段にさしかかった時には、群衆の暴行を避けるため、兵卒たちにかつがれて行くという始末であった。大ぜいの民衆が『あれをやっつけてしまえ』と叫びながら、ついてきたからである」。

パウロは、騒ぎの最中にあっても、冷静で泰然自若としていた。彼は堅く神により頼み、天使たちが自分の回りにいることを知っていた。パウロは、同胞に真理を伝える努力をせずに、神殿を去りたくないと思った。彼は、兵営の中に連れていかれようとした時に、千卒長に、「ひと言あなたにお話してもよろしいですか」と言った。ルシヤは、言った。「おまえはギリシャ語が話せるのか。では、もしかおまえは、先ごろ反乱を起した後、4000人の刺客を引き連れて荒野へ逃げて行ったあのエジプト人ではないのか」。パウロは、それに答えて言った。「わたしはタルソ生れのユダヤ人で、キリキヤのれっきとした都市の市民です。お願いですが、民衆に話をさせて下さい」。

パウロの願いは許され、「パウロは階段の上に立ち、民衆にむかって手を振った」。彼の身振りは彼らの注意を引き、その態度は、彼らの尊敬をかち得た。「すると、一同がすっかり静粛になったので、パウロはヘブル語で話し出した。『兄弟たち、父たちよ、いま申し上げるわたしの弁明を聞いていただきたい』」。聞きなれたヘブル語を聞いて、「人々はますます静粛になった」。そして、一同が静かになったところで、彼は続けて言った。「わたしはキリキヤのタルソで生れたユダヤ人であるが、この都で育てられ、ガマリエルのひざもとで先祖伝来の律法について、きびしい薫陶を受け、今日の皆さんと同じく神に対して熱心な者であった」。パウロが語った事実は、まだエルサレ

ムに住んでいた多くの人々が熟知していたので、だれも彼の言葉に反駁することができなかった。それから彼は、自分がかつて熱心にキリストの弟子たちを迫害して、殺害したことを語った。そして、自分の回心の事情を語り、自分の高慢な心が、十字架につけられたナザレ人イエスにどのようにして屈服するに至ったかを聴衆に告げた。もしも彼が、反対者たちと議論しようとしたならば、彼らは彼の言葉を聞くことを頑強に拒んだことであろう。しかし、彼自身の経験の物語は、説得力があって、しばし彼らの心を和らげ、静めるように思われた。

それから彼は、彼の異邦人の間の働きが、彼の選択によるものでなかったことを示そうと努めた。彼は、彼自身の同胞のために働くことを願っていた。しかし、神の声が、その神殿の中で聖なる幻のうちに彼に語り、「あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と指示したのである。

人々は、ここまでは、注意深く耳を傾けていたが、パウロが、異邦人へのキリストの使者として自分が任命を受けた時のことに言及した時、彼らは、またもや憤激した。彼らは、自分たちだけが、神の恵みを受けた民族であると思い込んでいたので、これまで独占的に自分たちのものであると考えていた特権を、軽蔑している異邦人に分け与えることを好まなかった。彼らは、話しているパウロの声を聞こえなくするような大声をあげて叫んだ。「こんな男は地上から取り除いてしまえ。生かしおくべきではない」。

「人々がこうわめき立てて、空中に上着を投げ、ちりをまき散らす始末であったので、千卒長はパウロを兵営に引き入れるように命じ、どういうわけで、彼に対してこんなにわめき立てているのかを確かめるため、彼をむちの拷問にかけて、取り調べるように言いわたした。彼らがむちを当てるため、彼を縛りつけていた時、パウロはそばに立っている百卒長に言った、『ローマの市民たる者を、裁判にかけもしないで、むち打ってよいのか』。百卒長はこれを聞き、千卒長のところに行って報告し、そして言った、『どうなさい ますか。あの人はローマの市民なのです』。 [1512]
そこで、千卒長がパウロのところにきて言った、『わたしに言ってくれ。あなたはローマの市民なのか』。パウロは『そうです』と言った。これに対して千卒長が言った、『わたしはこの市民権を、多額の金で買い取ったのだ』。

するとパウロは言った、『わたしは生れながらの市民です』。そこで、パウロを取り調べようとしていた人たちは、ただちに彼から身を引いた。千卒長も、パウロがローマの市民であること、また、そういう人を縛っていたことがわかって、恐れた。

翌日、彼は、ユダヤ人がなぜパウロを訴え出たのか、その真相を知ろうと思って彼を解いてやり、同時に祭司長たちと全議会とを召集させ、そこに彼を引き出して、彼らの前に立たせた」。

今やパウロは、悔い改める前は彼自身が一員であったその議会によって裁かれることになった。ユダヤ人の指導者たちの前に立ったとき、彼の態度は落ち着いており、彼の顔にはキリストの平和があらわれていた。「パウロは議会を見つめて言った、『兄弟たちよ、わたしは今日まで、神の前に、ひたすら明らかな良心にしたがって行動してきた』」。この言葉を聞いて、彼らはまたもや憎しみを燃え上がらせた。「すると、大祭司アナニヤが、パウロのそばに立っている者たちに、彼の口を打てと命じた」。パウロは、この無情な命令を聞いて叫んだ。「白く塗られた壁よ、神があなたを打つであろう。あなたは、律法にしたがって、わたしをさばくために座についているのに、律法にそむいて、わたしを打つことを命じるのか」。「すると、そばに立っている者たちが言った、『神の大祭司に対して無礼なことを言うのか』」。パウロは、いつもの礼儀正しい態度で答えた。「兄弟たちよ、彼が大祭司だとは知らなかった。聖書に『民のかしらを悪く言ってはいけない』と、書いてあるのだった」。

「パウロは、議員の一部がサドカイ人であり、一部はパリサイ人であるのを見て、議会の中で声を高めて言った、『兄弟たちよ、わたしはパリサイ人であり、パリサイ人の子である。わたしは、死人の復活の望みをいだいていることで、裁判を受けているのである』。彼がこう言ったところ、パリサイ人とサドカイ人との間に争論が生じ、会衆が相分れた。元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊とかは、いっさい存在しないと言い、パリサイ人は、それらは、みな存在すると主張している」。両派は互いに議論し始め、こうして、パウロに対する反対の勢力が分散された。「パリサイ派のある律法学者たちが立って、強く主張

して言った、『われわれは、この人には何も悪いことがないと思う。あるいは、霊か天使かが、彼に告げたのかも知れない』」。

続いて起きた騒ぎの中で、サドカイ人は、なんとかしてパウロを捕らえて、彼を死刑にしようとしたが、パリサイ人は、力をつくして彼を保護しようとした。「千卒長は、パウロが彼らに引き裂かれるのを気づかって、兵卒どもに、降りて行ってパウロを彼らの中から力づくで引き出し、兵営に連れて来るように、命じた」。

後でパウロは、この日の苦い経験を思い返して、自分の行動は、神に喜ばれるものではなかったのではないかと考え始めた。結局、エルサレムの訪問は、間違いだったのであろうか。彼が、兄弟たちと団結することを熱望したことが、このような不幸な結果を招いたのであろうか。

パウロは、神の民と称するユダヤ人が不信の世界の前に示す態度に、深く心を痛めた。異教の将校たちは、彼らをどのように見ることであろう。彼らは、主の礼拝者であると称し、聖職にあるにもかかわらず、盲目的で不合理な怒りをほしいままにし、信仰において意見の異なる兄弟たちさえ殺そうとした。そして、彼らの最も厳粛な議会を、紛争と混乱の場所にしてしまった。パウロは、神の名が、異教徒の前で屈辱をこうむったことを感じた。

今や、彼は、捕らわれの身となった。そして彼は、敵たちが、悪意の限りをつくして、彼を殺そうとしているのを知っていた。教会のための彼の働きはもうこれで終わり、今、狂暴なおおかみが入り込んでくるのであろうか。パウロにとって、キリストのみわざは、重大な関心事であった。そして彼は、各地の教会の当面する危機について憂慮した。彼らは、パウロがサンヒドリンの議会において当面したのと同じような人々の迫害に会わなければならなかった。彼は、苦悶と失望のあまり、泣いて祈った。 [1513]

主はこの暗黒の時に、ご自分のしもべをお忘れにならなかった。主は神殿の庭で、彼を暴徒の手から守られた。主は、サンヒドリンの議会において、彼と共におられた。主は、兵営において、彼と共におられた。そして、主は、導きを求めるパウロの熱心な祈りに答えて、ご自身を忠実なしもべにあらわされた。「その夜、主がパウロに臨んで言われた、『しっかりせよ。あなたは、エルサレムでわたし

のことをあかししたように、ローマでもあかしをしなくてはならない』」。

パウロは、長い間、ローマを訪問したいと思っていた。彼はローマにおいて、キリストのためにあかしを立てたいと熱望していたが、彼の計画は、ユダヤ人の敵意によって挫折してしまったと感じていた。今ですら彼は、自分が囚人として行くようになるとは、夢想だにしていなかった。

主が、主のしもべを激励しておられる一方において、パウロの敵たちは、さかんに彼を殺害する計画を立てていた。「夜が明けると、ユダヤ人らは申し合わせをして、パウロを殺すまでは飲食をいっさい断つと、誓い合った。この陰謀に加わった者は、40人あまりであった」。これは、主がイザヤによって、「見よ、あなたがたの断食するのは、ただ争いと、いさかいのため、また悪のこぶしをもって人を打つためだ」と譴責された種類の断食であった（イザヤ58：4）。

陰謀を企てた人々は、「祭司長たちや長老たちのところに行って、こう言った。『われわれは、パウロを殺すまでは何も食べないと、堅く誓い合いました。ついては、あなたがたは議会と組んで、彼のことでなお詳しく取調べをするように見せかけ、パウロをあなたがたのところに連れ出すように、千卒長に頼んで下さい。われわれとしては、パウロがそこにこないうちに殺してしまう手はずをしています』」。

祭司とっかさたちは、この残酷な陰謀を譴責するかわりに、熱烈にそれに同意した。パウロがアナニヤを白く塗った墓にたとえたことは、真実を語ったのであった。

しかし、神は、神のしもべの生命を救うために手を下された。パウロの姉妹の子が、暗殺者たちの、「この待伏せ」のことを耳にし、「兵営にはいって行って、パウロにそれを知らせた。そこでパウロは、百卒長のひとりを呼んで言った、『この若者を千卒長のところに連れて行ってください。何か報告することがあるようですから』。この百卒長は若者を連れて行き、千卒長に引きあわせて言った、『囚人のパウロが、この若者があなたに話したいことがあるので、あなたのところに連れて行ってくれるようにと、わたしを呼んで頼みました』」。

クラウデオ・ルシヤは若者を親切に迎え、彼を、人のいないところへ連れて行って尋ねた、「『わたしに話したいこととというのは、何か』。若者が言った、『ユダヤ人たちが、パウロのことをもっと詳しく取調べをすると見せかけて、あす議会に彼を連れ出すように、あなたに頼むことに決めています。どうぞ、彼らの頼みを取り上げないで下さい。40人あまりの者が、パウロを待伏せしているのです。彼らは、パウロを殺すまでは飲食をいっさい断つと、堅く誓い合っています。そして、いま手はずをととのえて、あなたの許可を待っているところなのです』。そこで千卒長は、『このことをわたしに知らせたことは、だれにも口外するな』と命じて、若者を帰した」。

ルシヤは、直ちに、パウロを彼の管轄下から、総督ペリクスの管轄のもとに移すことにした。ユダヤ人は、国民全体が興奮と憤激状態にあって、騒乱が頻繁に起こっていた。パウロをエルサレムにとどめておくことは、都に危険を及ぼし、千卒長自身をさえ危険に陥れるかもしれなかった。そこで、彼は、「百卒長2人を呼んで言った、『歩兵200名、騎兵70名、槍兵200名を、カイザリヤに向け出発できるように、今夜9時までに用意せよ。また、パウロを乗せるために馬を用意して、彼を総督ペリクスのもとへ無事に連れて行け』」。

パウロを送り出すのを、一刻も遅らせてはならなかった。「そこで歩兵たちは、命じられたとおりパウロ を引き [1514]
取って、夜の間にアンテバトリスまで連れて行」った。そこから、騎兵がパウロをカイザリヤに護送し、400人の兵士たちはエルサレムへ帰った。

部隊の隊長は、パウロをペリクスに引き渡し、それと共に、千卒長に託された手紙をも差し出した。

「クラウデオ・ルシヤ、つつしんで総督ペリクス閣下の平安を祈ります。本人のパウロが、ユダヤ人らに捕らえられ、まさに殺されようとしていたのを、彼のローマ市民であることを知ったので、わたしは兵卒たちを率いて行って、彼を救い出しました。それから、彼が訴えられた理由を知ろうと思い、彼を議会に連れて行きました。ところが、彼はユダヤ人の律法の問題で訴えられたものであり、なんら死刑または投獄に当る罪のないことがわかりました。しかし、この人に対して陰謀がめぐらされていると

の報告がありましたので、わたしは取りあえず、彼を閣下のもとにお送りすることにし、訴える者たちには、閣下の前で、彼に対する申立てをするようにと、命じておきました」。

ペリクスは、手紙を読んだあとで、パウロがどの州の者かと尋ね、キリキヤの出だと知って、「『訴え人たちがきた時に、おまえを調べることにする』と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っておくように命じた」。

神のしもべが、主の民と公言する人々の憎しみを逃れて、異邦人の間に避難所を見いだしたことは、パウロの場合が最初ではなかった。ユダヤ人はパウロに対する激怒のあまり、ユダヤ民族の暗黒史に、さらにもう1つの罪を付け加えた。彼らは真理に対して心をいっそう固くし、彼らの破滅の運命を、さらに確実なものにしてしまったのである。

キリストがナザレの会堂において、ご自身を油注がれた者として宣言された時の言葉の意味を、十分に理解している者は少ない。キリストは、ご自身の使命が、悲しんでいる者や罪深い者を、慰め、祝福し、救うことであると宣言された。そして、その次に、聴衆の心が、誇りと不信に支配されているのをごらんになって、彼は、神が過去において、神の選民の不信と反逆のゆえに彼らを離れて、まだ天の光を拒否していない異邦の国の人々にご自身をあらわされたことを、彼らに思い起こさせられたのである。サレプタのやもめとシリヤのナアマンは、彼らの持っていたすべての光に従って生きていた。そのために彼らは、神に背信し、便宜と世俗的栄誉のために原則を犠牲にした神の選民よりは、義しい者とみなされたのである。

キリストは、背信したイスラエルには、神の忠実な使命者のために安全な所がないのであると宣言して、ナザレのユダヤ人に恐るべき真実を語られたのである。彼らは、神の使命者の価値を知ろうともせず、彼の働きを感謝しようともしなかった。ユダヤ人の指導者たちは、神の栄誉とイスラエルの幸福のために非常に熱心であると公言していたが、実のところ、彼らはこの両方の敵であった。彼らは、教えと行為によって、ますます、神への服従から人々を引き離し、悩みの日に、神が彼らの保護となることができないところへと彼らを導いていった。

ナザレ人に対する救い主の譴責の言葉は、パウロの場合、ただ不信のユダヤ人だけでなくて、同信の兄弟たちにも当てはまった。もし教会の指導者たちが、パウロに対する苦い感情をことごとく捨て去って、異邦人に福音を伝えるために神の特別の召しを受けた者として彼を受け入れていたならば、主は、パウロを彼らに残しておかれたことであろう。神は、パウロの働きがこのように速やかに終わるようには定めておられなかった。しかし神は、エルサレム教会の指導者たちがひき起こした一連の事件を挫折させるために奇跡を行われはしなかった。

これと同じ精神が、同様の結果を招いている。神の恵みが備えて下さったものを尊重して活用することを怠るために、教会は多くの祝福を受け損じる。もし忠実な働き人の働きが、教会の人々に尊重されたならば、彼らの働きの期間を延ばそうと主が望まれたことが、幾度あったことであろう。しかし、もし教会が魂の敵によって理解力を混乱させられ、キリストのしもべの言葉と行動を誤り伝えて曲解し、彼の働きを妨害するならば、主は、ご自分がお与えになった祝福を彼らから取り去られるのである。

[1515] サタンは、神が偉大な善い働きを完成するために選ばれた人々を失望させて、滅びに陥れようと、絶えず彼の手下たちを用いて働いている。彼らは、キリストのみわざを推進するためには、その生命を犠牲にすることさえ惜しまないのであるが、大欺瞞者は、彼らに対して疑惑を抱くように兄弟たちに示唆する。もし兄弟たちがそのような考えを持つならば、この人々の品性の誠実さに対する確信はくつがえされて、彼らの働きの有用性は阻害されるのである。サタンは、働き人自身の兄弟たちによって、彼らの心に非常な悲しみを与えることに、しばしば成功する。そこで神は、恵み深い介入によって、迫害されている神のしもべたちに休息をお与えになるのである。脈搏が止まり、胸の上に手が組み合わされ、警告と激励の声が沈黙してしまった時、その時になって、強情な人々は初めて目を覚まし、自分たちが棄て去った祝福に気づいて、それを尊重するようになるのである。神のしもべたちの死は、彼らがその生前になし得なかったことを成就するのである。

第39章　カイザリヤにおける裁判

本章は使徒行伝24章に基づく

パウロがカイザリヤに到着してから5日後に、告訴人たちは、彼らが顧問として頼んだテルトロという弁護人を連れて、エルサレムからやって来た。この件の審問は、直ちに開かれることが許された。そこで、パウロは、裁判廷に呼び出されて、「テルトロは論告を始めた」。狡猾な弁護人は、ローマの総督には、へつらいのほうが、事実と正義についての簡単な陳述よりも効果があると判断し、まずペリクスを賞賛して、彼の弁論を始めた。「ペリクス閣下、わたしたちが、閣下のお陰でじゅうぶんに平和を楽しみ、またこの国が、ご配慮によって、あらゆる方面に、またいたるところで改善されていることは、わたしたちの感謝してやまないところであります」。

テルトロはここで、しらじらしい偽りを平気で言った。というのは、ペリクスの品性は、卑劣で卑しむべきものだったからである。彼について、次のように言われていた。「彼は、あらゆる種類の欲望と残酷な行為において、奴隷の気質をもって王の権力を振るった」（タキトゥス『歴史』第5章第9節）。テルトロの話を聞いた人々は、彼のへつらいの言葉が偽りであることを知っていた。しかし、真理を愛するよりは、パウロを罪に定めようとする願いのほうが強かった。

テルトロは彼の陳述の中で、もし証拠立てられるとすれば、政府に対する反逆罪に値する罪をパウロに負わせた。テルトロは言った。「この男は、疫病のような人間で、世界中のすべてのユダヤ人の中に騒ぎを起している者であり、また、ナザレ人らの異端のかしらであります、この者が宮までも汚そうとしていたので（あります）」。それからテルトロは、ユダヤ人が彼らの律法に従って彼をさばこうとしていた時に、エルサレムの兵営の千卒長ルシヤが、パウロを強奪し去ったので、ペリクスの前にこの件が訴え

られることになったと言った。このような言葉は、ユダヤの裁判廷にパウロを引き渡すことを総督に促すためのものであった。そこにいたユダヤ人は、すべての告発を熱烈に支持し、囚人パウロに対する彼らの憎しみを隠そうとしなかった。

ペリクスは、パウロを告発する人々の性質と品性とを読み取る十分な洞察力を持っていた。ペリクスは、彼らが何の目的で彼にへつらったかを知った。そして彼はまた、彼らがパウロに対する告発の十分な証拠を提出し得ないことをも見た。彼は被告に向かって、自己の弁明をするように合図した。パウロは、儀礼的なむだな言葉を言わないで、簡単に、ペリクスの前で自分を弁護できることを非常にうれしく思うと言った。それは、ペリクスが、長年にわたって総督を勤め、ユダヤ人の律法と習慣をよく理解していたからである。パウロは、彼に対する告発が、1つとして真実のものではないことを明らかに示した。彼は、エルサレムのどの場所においても、騒ぎを起こしたことはなく、[1516] また、神殿を汚してもいなかった。彼は、次のように言った。「そして、宮の内でも、会堂内でも、あるいは市内でも、わたしがだれかと争論したり、群衆を煽動したりするのを見たものはありませんし、今わたしを訴え出ていることについて、閣下の前に、その証拠をあげうるものはありません」。

彼は、「彼らが異端だとしている道にしたがって」、彼の先祖たちの神を礼拝していたことを認めたが、しかし「律法の教えるところ、また預言者の書に書いてあることを」常に信じ、聖書の明白な教えに一致して、死者の復活を信じていることを主張した。さらに彼は、彼の生涯の主要な目的は、「神に対しまた人に対して、良心に責められることのないように」することであると述べた。

彼は率直で誠実な態度で、エルサレムを訪問した目的と、捕らえられて裁きを受けた事情を話した。「さてわたしは、幾年ぶりかに帰ってきて、同胞に施しをし、また、供え物をしていました。そのとき、彼らはわたしが宮できよめを行っているのを見ただけであって、群衆もいず、騒動もなかったのです。ところが、アジヤからきた数人のユダヤ人が――彼らが、わたしに対して、何かとがめ立てをすることがあったなら、よろしく閣下の前にきて、訴え

るべきでした。あるいは、何かわたしに不正なことがあったなら、わたしが議会の前に立っていた時、彼らみずから、それを指摘すべきでした。ただ、わたしは、彼らの中に立って、『わたしは、死人のよみがえりのことで、きょう、あなたがたの前でさばきを受けているのだ』と叫んだだけのことです」。

パウロは、熱誠こめて真心から語ったので、彼の言葉には、人々を感動させる力があった。クラウデオ・ルシヤは、彼のペリクスへの手紙の中で、パウロの行動に関して同様の証言をしている。さらに、ペリクス自身、多くの者が想像する以上に、ユダヤの宗教について深い知識を持っていた。パウロの明白な事実の陳述によって、ペリクスは、ユダヤ人がどのような動機に動かされて、パウロを扇動と反逆の罪に陥れようとしているかを、さらに明らかに理解することができた。ペリクスは、ローマの市民を不当に罰して彼らに満足を与えることも、あるいは、パウロを彼らに引き渡して、正当な裁判をせずに死刑に処することもしたくなかった。とは言え、ペリクスは、私利私欲以上の高尚な動機を知らす、賞賛を愛する心と昇進を欲する心に支配されていた。彼は、ユダヤ人を怒らせることを恐れたので、パウロに罪がないと知りつつも、彼を全面的に釈放することを差しひかえた。そこで、彼は、ルシヤが来るまで裁判を延期することに決め、「千卒長ルシヤが下って来るのを待って、おまえたちの事件を判決することにする」と言った。

パウロは囚人ではあったが、ペリクスは百卒長に、「彼を寛大に取り扱い、友人らが世話をするのを止めないようにと、命じた」。

この後しばらくして、ペリクスと彼の妻ドルシラは個人的にパウロを呼び出して、「キリスト・イエスに対する信仰のことを」彼から聞いた。彼らは、これらの新しい真理を、喜んで、熱心にさえ聞いたのであるが、もし彼らが、ふたたび聞くことのないこれらの真理を拒否するならば、これらの真理は、神の日に彼らを罪に定める速やかなあかしとなるのである。

パウロは、これを神がお与えになった機会だと思い、忠実にそれを活用した。彼は、自分を殺すことも、自由にすることもできる人の前に立っていることを知っていた。そ

れでも彼は、ペリクスやドルシラに賞賛やへつらいの言葉を言わなかった。彼は、自分の言葉が、彼らにとっては、生命のかおりとなるか、あるいは死のかおりとなるかであることを知っていた。だから、彼は利己的な考えを全く忘れ去って、彼らに自分たちの陥っている危険を認めさせようとしたのである。

パウロは、福音が、彼の言葉に耳を傾けるすべての者に対して、要求する権利を持っていることを自覚した。すなわち、やがて彼らは、大いなる白いみ座のまわりの純潔な清い人々の中にいるか、それとも、キリストが、「不法を働く者どもよ、行ってしまえ」と言われる人々の中にいるかのどちらかになるのである（マタイ7：23）。彼は、天の審判廷において、彼の聴衆の一人一人に会い、ただ彼のすべての言行だけでなくて、彼の言葉と行為の動機と精神に [1517]
対しても、言い開きをしなければならないことを知っていた。

ペリクスの行動は、非常に凶暴で残酷であったので、彼の品性と行為に欠陥があることをあえてほのめかした者は、これまでほとんどなかった。しかし、パウロは、人を恐れなかった。彼は、率直に、キリストに対する彼の信仰とその信仰の理由を表明し、特に、クリスチャン品性に不可欠な徳について語ったのであったが、彼の前にいる高慢な夫婦は、はなはだしくこうした徳に欠けていたのである。

彼は、ペリクスとドルシラの前に、神の品性、すなわち、神の義、正義、公正、神の律法の性質などを高く掲げた。彼は、まじめに生活して、節制し、情欲を理性の支配の下におき、神の律法に従い、肉体的、知的能力を健康な状態に保つことが、人間の本分であることを明確に示した。彼は、すべての者が自分の行ったことに応じて報いを受ける審判の日が、必ず来ることを宣言した。そしてその時には、富も地位も、あるいは称号も、人に神の恵みを得させ、または、罪の結果から逃れさせる力がないことが、明らかにされるのである。彼は、現世が、来世のための準備の時であることを示した。もし人が、現在の特権と機会をなおざりにするならば、永遠の損失をこうむるのである。嘶たな恩恵期間は、もはや与えられないのである。

パウロは特に、神の律法の遠大な要求について詳しく語った。パウロは、律法が人間の道徳性の奥深い秘密をさぐり、他の人々が見も知りもしない隠れたことをあらわに示すものであることを示した。手が行い、または口が語ることなど、外的生活があらわすことは、人間の道徳的品性を十分に示していない。律法は彼の思想と動機と目的を探る。人目に触れずにひそんでいる嫉妬、憎しみ、情欲、野心などの隠れた邪念、また、魂の奥深くで思いめぐらされたが、機会がなかったために実行されなかった邪悪な行為など、これらすべてを、神の律法は有罪と宣告するのである。

パウロは、罪のための大いなる犠牲キリストに、聴衆の心を向けようと努力した。彼は、犠牲が、きたるべき良いことの影であることを示し、その次に、これらすべての儀式の実体として、キリストを紹介したのである。実に、彼こそ、これらの儀式が、堕落した人類の生命と希望の唯一の根源として指し示したお方であった。古代の聖人たちは、キリストの血を信じる信仰によって救われた。彼らは、犠牲の動物の死の苦しみを見て、各時代の深淵のかなたに、世の罪を取り除く神の小羊を見たのである。

神が、造られたすべてのものの愛と服従を要求なさるのは、当然のことである。神は、律法の中に、義の完全な標準をお与えになった。しかし、多くの者は、彼らの創造主を忘れ、神のみこころに反して自分勝手な道を選んだ。彼らは、天のように高く、宇宙のように広い愛に、敵意を示すのである。神は邪悪な人々の標準に迎合するために、神の律法の要求を下げることはおできにならない。また、人間は自分の力で、律法の要求に従うこともできないのである。罪人は、ただ、キリストを信じる信仰によって、罪から清められ、創造主の律法に従うことができるようになるのである。

こうして、囚人パウロは、ユダヤ人と異邦人に対する神の律法の要求について力説し、軽べつされたナザレ人、イエスを、神のみ子、世のあがない主として紹介した。

ユダヤの王女ドルシラは、彼女が恥知らずにも違反した律法の、神聖な性質を熟知していたのであるが、カルバリーの救い主に対する偏見のゆえに、心をかたくなにして、いのちのことばを受け入れなかった。しかしペリクス

は、それまで1度も真理を聞いたことがなかった。そして、神の霊が彼の心に罪の自覚を与えた時に、彼は激しく動揺した。今や、良心が目覚め、良心の声が聞こえてきた。そしてペリクスは、パウロの言葉が真実であると感じた。過去の罪の記憶がよみがえった。彼の若い時の放蕩と流血の秘密、また、後年の暗い記録が、恐ろしいばかりに鮮やかに彼の前にあらわれた。彼は、自分が、放蕩で残酷で強欲な人間であることを悟った。真理がこのように彼の心に罪を自覚させたことは、これまでになかった。彼が、このよ [1518]
うに恐怖におののいたこともなかった。彼の生涯の犯罪の秘密がすべて、神の前に明らかであって、彼はその行為に従って審判を受けなければならないという思いが、彼をふるえおののかせた。

しかし、彼は、罪を自覚して悔い改めに至る代わりに、これらの不快な記憶を忘れ去ろうとした。そこで、パウロとの会談は短縮された。「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」と彼は言った。

ペリクスの行動とピリピの獄吏の行動との間には、なんと大きな相違があったことだろう。パウロがペリクスの囚人であったのと同様に、主のしもべたちは獄吏の囚人であった。彼らが神の力に保護されているという証拠、苦難と屈辱のもとにあって喜び、地震によって地がゆれ動く時に恐れず、キリストのようなゆるしの精神を彼らが持っていることなどが、獄吏の心に罪を悟らせるに至り、彼は、ふるえおののいて罪を告白し、ゆるしを与えられた。ペリクスもふるえた。しかし、彼は悔い改めなかった。獄吏は、喜んで神の霊を彼の心と彼の家庭に迎え入れた。ペリクスは、神の使者に去ることを命じた。1人は神の子となって天国の世嗣となることを選び、もう1人は悪をなす者と運命を共にしたのである。

その後、2年の間、パウロに対して何の処置も取られなかったが、しかし彼は、監禁されたままであった。ペリクスは、幾度か彼を訪れ、彼の話に熱心に耳を傾けた。しかし、彼の、一見友好的な態度の真の動機は、利益を得たいからであった。そして彼は、多額の金を支払えば釈放されることができると、ほのめかすのであった。しかし、パウロは、高貴な品性の持ち主であったので、わいろを使って

自由を得ることは、とうていできなかった。彼は、何の犯罪も犯していなかったのであるから、自由を得るためにあえて悪を犯そうと思わなかった。さらに、彼は、身代金を支払いたいと考えたとしても、貧しくて彼自身はとても払えなかった。そして、自分のために、信者たちの同情と寛大さに訴えたくはなかった。また彼は、自分が神の手の中にあるという自覚を持っていた。だから、自分に対する神のみこころに介入したくなかったのである。

ペリクスは、ついに、ユダヤ人に対する重大な罪悪のゆえにローマに召還された。ペリクスは、召還に答えてカイザリヤを去る前に、「ユダヤ人の歓心を買おうと思って」、パウロを監禁したままにしておいた。しかし、ユダヤ人の信任をもう1度得ようとするペリクスの試みは、うまく行かなかった。彼は、恥をこうむって免職された。そして、ポルキオ・フェストが彼の後任として任命を受けて、カイザリヤに司令部を設けた。

パウロが、正義、節制、未来の審判などについて論じた時に、天からの光がペリクスの心に輝いた。それは、彼が自分の罪を認めて、それを捨て去るために、天から与えられた機会であった。しかし、彼は、神の使者にむかって、「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」、と言った。彼は、憐れみの最後の機会を軽視した。その後、彼は、2度と神からの召しを受けなかったのである。

第40章　パウロ、カイザルに上訴する

本章は使徒行伝25：112に基づく

「さて、フェストは、任地に着いてから3日の後、カイザリヤからエルサレムに上ったところ、祭司長たちやユダヤ人の重立った者たちが、パウロを訴え出て、彼をエルサレムに呼び出すよう取り計らっていただきたいと、しきりに願った」。彼らは、このように願い出て、エルサレムへ行く途中で待ち伏せして、彼を殺す考えであった。しかし、フェストは、彼の立場の責任を認めていたので、パウロを呼び出すことを、ていねいに断った。彼は次のように言った。「訴えられた者が、訴えた者の前に立って、告訴に対し弁明する機会を与えられない前に、その人を見放してしまうのは、ローマ人の慣例にはないことである」。カイザリヤに、「自分もすぐ……帰ることになっている……『では、もしあの男に何か不都合なことがあるなら、おまえたちのうちの有力者らが、わたしと一緒に下って行って、訴えるがよかろう』」と彼は言った。 [1519]

これは、ユダヤ人が欲したことではなかった。彼らは、前にカイザリヤで失敗したことを忘れてはいなかった。パウロの沈着な態度と強力な弁論とに比較して、彼ら自身の悪意に満ちた精神と根拠のない告訴は、いかにも見苦しい光景を呈した。彼らは、ふたたび、裁判のためにパウロがエルサレムに送られることを求めたが、フェストは、カイザリヤにおいてパウロを公正に裁判しようと固く決意したのである。神は摂理のうちに、フェストの決心を良い方に導き、パウロの命を延ばされたのであった。

ユダヤ人の指導者たちは、彼らの計略が阻止されたので、直ちに、総督の法廷でパウロを告訴する準備をした。フェストは、数日エルサレムに滞在したあとで、カイザリヤに帰り、「その翌日、裁判の席について、パウロを引き出すように命じた」。「エルサレムから下ってきたユダヤ人たちが、彼を取りかこみ、彼に対してさまざまの重い罪

状を申し立てたが、いずれもその証拠をあげることはできなかった」。ユダヤ人は、今回は弁護人なしで、自分たちで告訴することにした。裁判が進行するにつれて、パウロの沈着さと虚心坦懐とは、彼らの供述が偽りであることを明らかに示した。

フェストは、議論している問題が全くユダヤ人の教義に関するものであって、パウロには何1つ告訴に該当するものはなく、パウロは死刑の宣告、いや投獄の宣告にさえ当たらないことを、正しく理解した。しかし、もしパウロが罪に定められず、あるいは、彼らの手に渡されないとするならば、どんなに彼らが怒り狂うかが、フェストにはよくわかった。そこで、フェストは、「ユダヤ人の歓心を買おうと思って」、パウロに向かい、彼がフェストの保護のもとにエルサレムへ行って、サンヒドリンの裁判を受けたいかどうかと尋ねた。

パウロは、罪のゆえに神の怒りを招いている人々から、正しい裁判を期待することができないのを知っていた。彼は、預言者エリヤのように、天の光を拒否し、福音に対して心をかたくなにした人々よりは、異邦人の間のほうが、安全であることを知っていた。訴訟にうみ疲れ、彼の活動的な精神は、幾度もの遅延と、未決のままの長期にわたる裁判と監禁とに、耐えられなくなった。そこで、彼は、ローマの市民としての特権を活用して、カイザルに上訴することに決めた。

パウロは、総督の問いに答えて言った。「わたしは今、カイザルの法廷に立っています。わたしはこの法廷で裁判されるべきです。よくご承知のとおり、わたしはユダヤ人たちに、何も悪いことをしてはいません。もしわたしが悪いことをし、死に当るようなことをしているのなら、死を免れようとはしません。しかし、もし彼らの訴えることに、なんの根拠もないとすれば、だれもわたしを彼らに引き渡す権利はありません。わたしはカイザルに上訴します」。

フェストは、ユダヤ人がパウロを殺害しようと陰謀をめぐらしていたことを何も知らなかったので、カイザルへのこの上訴を聞いて驚いた。しかし、パウロの言葉は、法廷の審議を終結させた。「そこでフェストは、陪席の者たち

と協議したうえ答えた、『おまえはカイザルに上訴を申し出た。カイザルのところに行くがよい』」。

こうして、神のしもべは、もう1度、偏見と自己を義とする精神から生じた憎しみのために、異邦人の保護を求めなければならなくなった。預言者エリヤはこの同じ憎しみを避けて、ザレパテ（サレプタ）のやもめの助けを求めなければならなかった。そしてまた、この憎しみのゆえに、福音の使者たちはユダヤ人を離れて、異邦人に彼らの使命を伝えなければならなくなった。そして、現代の神の民は、今なお、同じ憎しみに当面しなければならない。キリストの弟子であると自称する多くの人々の中には、ユダヤ人の心の大半を占めていたのと同じ誇りや形式主義や利己主義、同じ圧迫の精神が存在しているのである。将来、キリストの代表者であると主張する人々が、キリストと使徒たちをあしらった祭司やつかさたちと同様の行為をするであろう。やがて、神に忠実なしもべたちが通過しなければ [1520]
ならない大いなる危機において、彼らは、同様の心のかたくなさ、同様の残酷な決意、同様の頑強な憎しみに出会わなければならない。

来るべき悪しき日において、良心の命じるところに従って、恐れることなく神に仕えようとする者はすべて、勇気と堅実さと、神および神のことばに対する知識を持っていなければならない。神に忠実な者は、迫害を受け、その動機は疑われ、その最善の努力は曲解され、その名は悪しき者として除外される。サタンは、あらゆる欺瞞の力を用いて人々の心に働きかけ、理解力をにぶらせ、悪を善と見せかけ、善を悪と見せかけようとする。神の民の信仰が強く純潔であればあるほど、そして、神に従おうとする彼らの決意が固ければ固いほど、サタンは、義人であると主張しながら神の律法をふみにじっている人々の怒りを、彼らに対して燃えたたせようとする。ひとたび聖徒たちに伝えられた信仰を固く保っていくには、最も堅固な信頼と最も英雄的な意志がなければならない。

神は、神の民が、間もなくやってくる危機に対して準備することを望んでおられる。準備があろうとなかろうと、彼らは、みなそれに当面しなければならない。そして、神の標準にその生活を一致させた者だけが、試練と試みの時に固く立つことができるのである。世俗の統治者たちが、

宗教界の指導者たちと連合して、良心の問題について命令を発する時に、真に神を恐れ神に仕える者がだれであるかが、はっきりするのである。暗黒がその極に達する時に、神に似た品性の光が、最も輝かしく照りはえるのである。他のすべてのより頼むものが倒れ去る時、主に固く信頼する者がだれであるかが、わかる。真理の敵があたり一面にいて、主のしもべたちに災いをもたらそうとしているときに、神は彼らを保護して、幸いをもたらされる。神は、彼らにとって、疲れた地にある大きな岩の陰のようになられるのである。

第41章　アグリッパ王大いに感銘す

本章は使徒行伝25：1327、26章に基づく

パウロがカイザルに上訴していたので、フェストは彼をローマに送るよりほかに仕方がなかった。しかし適当な船がみつからないままに、しばらくの時が過ぎた。また他の囚人たちもパウロといっしょに送られることになっていたので、それらの事件の審理のために遅延が生じた。そのためにパウロは、カイザリヤの主立った人たちとヘロデ王家の最後の王であるアグリッパ2世の前で、自分の信仰について申し述べる機会が与えられた。

「数日たった後、アグリッパ王とベルニケとが、フェストに敬意を表するため、カイザリヤにきた。ふたりは、そこに何日間も滞在していたので、フェストは、パウロのことを王に話して言った、『ここに、ペリクスが囚人として残していったひとりの男がいる。わたしがエルサレムに行った時、この男のことを、祭司長たちやユダヤ人の長老たちが、わたしに報告し、彼を罪に定めるようにと要求した』」。フェストは、その囚人パウロがカイザルに訴えたいと言い出したいきさつをかいつまんで話し、パウロがフェストの前で最近受けた裁判の事を告げた。そして、ユダヤ人たちがパウロを告発していたが、それはフェストから見ればなんら告発すべきものではなく、ただ、「彼ら自身の宗教に関し、また、死んでしまったのに生きているとパウロが主張しているイエスなる者に関する問題に過ぎない」と言った。

フェストがそう説明すると、アグリッパは興味がわいてきて、言った、「わたしも、その人の言い分を聞いてみたい」。そこで、彼の希望にそって、その翌日会うことに取りきめられた。「翌日、アグリッパとベルニケとは、大いに威儀をととのえて、千卒長たちや市の重立った人たちと共に、引見所にはいってきた。すると、フェストの命によって、パウロがそこに引き出された」。

来賓たちのために、フェストはこの機会を印象的に見せ
[1521] びらかしたいと思った。総督や彼が招いた人たちの高価な衣服、兵士たちの剣、隊長たちのきらめくよろいが、この場の光景をきらびやかなものにした。

さて、パウロは、まだ手錠をかけられたまま、集まった人々の前に立った。これは何と著しい対照であろう。アグリッパとベルニケは権力と地位を持っていて、そのために世人の支持を受けていた。しかし彼らは神が尊ばれる品性に欠けていた。彼らは神の律法を犯し、心も生活も堕落していた。彼らの行動は天に忌みきらわれていた。

年老いた囚人パウロは、警備の兵士につながれていて、その姿には世人が尊敬を払うようなものは何もなかった。しかし、神のみ子への信仰のゆえに囚人として留置され、友も富も地位もないように見えるこの男に、全天は関心をよせていた。天使たちが彼につきそっていた。もしもこの光り輝く使者たちの中の1人の栄光が輝きわたったら、王者のはなやかさも誇りも色あせたであろう。王も廷臣たちも、キリストの墓にいたローマの番人たちのように、地に打ちのめされたであろう。

フェストはみずから居並ぶ人々にパウロを紹介して言った、「アグリッパ王、ならびにご臨席の諸君。ごらんになっているこの人物は、ユダヤ人たちがこぞって、エルサレムにおいても、また、この地においても、これ以上、生かしておくべきでないと叫んで、わたしに訴え出ている者である。しかし、彼は死に当ることは何もしていないと、わたしは見ているのだが、彼自身が皇帝に上訴すると言い出したので、彼をそちらへ送ることに決めた。ところが、彼について、主君に書きおくる確かなものが何もないので、わたしは、彼を諸君の前に、特に、アグリッパ王よ、あなたの前に引き出して、取調べをしたのち、上書すべき材料を得ようと思う。囚人を送るのに、その告訴の理由を示さないということは、不合理だと思えるからである」。

そこでアグリッパ王はパウロに弁明の自由を与えた。使徒はきらびやかな見せびらかしにも、高位高官の聴衆にもろうばいしなかった。彼は世俗の富や地位になんの価値もないことを知っていたからである。この世の見せびらかしや権力は、一瞬たりとも彼の勇気をくじいたり、自制心を失わせたりすることはできなかった。

「アグリッパ王よ、ユダヤ人たちから訴えられているすべての事に関して、きょう、あなたの前で弁明することになったのは、わたしのしあわせに思うところであります。あなたは、ユダヤ人のあらゆる慣例や問題を、よく知り抜いておられるかたですから、わたしの申すことを、寛大なお心で聞いていただきたいのです」とパウロは言った。

パウロは、以前のかたくなな不信からいかにしてナザレのイエスを世の救い主として信ずる信仰に至ったかの、改宗の物語をした。彼は天来の異象について述べた。その異象は、最初は彼を言いようのない恐怖で満たしたが、のちには、最も大きな慰め、神の栄光のあらわれとなったのである。その栄光のあらわれの中に、彼が軽蔑し、憎んでいたかたが王座にすわっておられた。彼はその時まで、その方の弟子たちを殺そうとしていたのである。その時からパウロは人を生まれ変わらせる恵みの力によって、新しい人、真実で熱烈なイエスの信者となったのである。

パウロは、アグリッパの前で、キリストのこの世のご生涯に関係したおもなでき事のあらましを明瞭に力強く述べた。彼は預言に示されたメシヤは、ナザレのイエスとなってすでに現れたことを証言した。彼は旧約聖書の中にメシヤは庶民の1人として現れるということが明示されていること、また、モーセと預言者たちによって述べられたあらゆる細かいことが、イエスのご生涯に成就されたことを説明した。失われた世を救うために、神の聖なるみ子は、恥をもいとわず十字架に耐え、死と黄泉にうち勝って、天にのぼられたのである。

キリストが死からよみがえられたということが、なぜ信じられないことに思えるのだろうとパウロは論じた。かつては彼もそう思ったことがあるが、しかし今は自分自身が見たり聞いたりしたことを、どうして信じないでいられようか。ダマスコの入口で彼は、十字架につけられてよみがえられたキリストを本当に見たのである。それはエルサレムの町を歩き、カルバリーで死に、死のなわめを断ち切って、天へのぼられた方であった。パウロはケパやヤコブやヨハネやその他の弟子たちと同じように、イエスを見て、イエスと語り合った。そのみ声は、よみがえられた救い主の福音をのべ伝えよと彼にお命じになっていた。どうして従わないでいられようか。ダマスコで、エルサレムで、ユ [1522]

ダヤ全国で、遠い地方で、彼は十字架につけられたイエスについてあかしし、あらゆる階級の人々に「悔い改めて神に立ち帰り、悔改めにふさわしいわざを行うようにと」、説いた。

「そのために、ユダヤ人は、わたしを宮で引き捕らえて殺そうとしたのです。しかし、わたしは今日に至るまで神の加護を受け、このように立って、小さい者にも大きい者にもあかしをなし、預言者たちやモーセが、今後起るべきだと語ったことを、そのまま述べてきました。すなわち、キリストが苦難を受けること、また、死人の中から最初によみがえって、この国民と異邦人とに、光を宣べ伝えるに至ることを、あかししたのです」とパウロは言った。

居並ぶ人々はみな、パウロのすばらしい体験談に魅せられて聞き入っていた。使徒は自分の好きな話題を強調していた。聞いている者たちは、彼の誠実さを疑うことができなかった。しかし、彼の説得力のある雄弁が最高潮に達している時、フェストにさえぎられた。フェストは大声で言った、「パウロよ、おまえは気が狂っている。博学が、おまえを狂わせている」。

パウロが答えた、「フェスト閣下よ、わたしは気が狂ってはいません。わたしは、まじめな真実の言葉を語っているだけです。王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対しても、卒直に申し上げているのです。それは、片すみで行われたのではないのですから、1つとして、王が見のがされたことはないと信じます」。それから彼は、アグリッパに面と向かって話しかけた、「アグリッパ王よ、あなたは預言者を信じますか。信じておられると思います」。

アグリッパは深く感動して、その瞬間、自分の周囲の事情や地位の威厳を忘れた。彼は、ただ、聞いた真理だけを意識し、自分の前に立っている謙虚な囚人をただ、神の使者と見て、思わず知らず「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしている」と答えた。

使徒は熱心に答えた、「説くことが少しであろうと、多くであろうと、わたしが神に祈るのは、ただあなただけでなく、きょう、わたしの言葉を聞いた人もみな、わたしのようになって下さることです。このような鎖は別ですが」と言いながら、鎖につながれた両手を上げた。

公平に評すれば、フェストやアグリッパやベルニケが、使徒を拘束している鎖をつけていてもよかったであろう。みんなは重罪を犯していた。これらの犯罪者たちは、その日、キリストのみ名による救いが与えられていることを聞いていた。少なくとも1人は、提供されているその恵みとゆるしをほとんど受け入れる気持ちになっていた。しかしアグリッパは提供された恵みをしりぞけ、はりつけにされたあがない主の十字架を拒んだのである。

王の好奇心は満たされた。彼は座席から上ちあがり、面会が終わったことを合図した。列席者たちは解散しながら、口々に言った、「あの人は、死や投獄に当るようなことをしてはいない」。

アグリッパはユダヤ人であったが、パリサイ人の偏屈な熱狂や偏見を持たなかった。彼はフェストに言った、「あの人は、カイザルに上訴していなかったら、ゆるされたであろうに」。しかし、この件は、更に高い法廷に委託されていたので、今は、フェストにもアグリッパにも司法権がなかった。

[1523]

第42章　航海と難破

本章は使徒行伝27章、28：110に基づく

ついに、パウロはローマへ向かった。「さて、わたしたちが、舟でイタリヤに行くことが決まった時、パウロとそのほか数人の囚人とは、近衛隊の百卒長ユリアスに託された。そしてわたしたちは、アジヤ沿岸の各所に寄港することになっているアドラミテオの舟に乗り込んで、出帆した。テサロニケのマケドニヤ人アリスタルコも同行した」。

紀元1世紀には、海の旅には特別な困難と危険がつきものだった。船員たちは一般に太陽と星の位置によって航路を定めた。だから太陽や星が出ていないで、あらしの兆候がある時には、船主たちは海へ出ることを恐れた。1年の一時期には、安全な航海はほとんど不可能であった。

使徒パウロはいま、イタリヤへの長い退屈な航海の間、鎖につながれた囚人として、彼の運命にふりかかる苦しい経験を耐え忍ばねばならないことになった。彼の運命の苦難をやわらげた1つの事は、ルカとアリスタルコと親しく交わることを許されたことであった。のちに彼は、コロサイ人への手紙の中に、アリスタルコについて「一緒に捕われの身となっている」と述べているが、彼は苦難の中にあるパウロに仕えるために、自ら進んでパウロと共に捕われの身になったのである（コロサイ4：10）。

航海は順調に始まった。翌日彼らはシドンの港にとどまった。ここで百卒長ユリアスは「パウロを親切に取り扱い」、そこにクリスチャンたちがいると聞かされると、パウロが「友人をおとずれてかんたいを受けることを、許した」。健康の弱っていた使徒パウロは、この許可を非常に感謝した。

シドンを出帆してすぐ、船は逆風に会い、目指す進路から押し流されて、なかなか進めなかった。ルキヤ地方のミラで、百卒長はイタリヤ沿岸へと向かうアレキサンドリ

ヤの大きな船を見つけて、囚人たちをそれに乗りかえさせた。しかしなおも逆風が続いて、船は難航した。「幾日ものあいだ、舟の進みがおそくて、わたしたちは、かろうじてクニドの沖合にきたが、風がわたしたちの行く手をはばむので、サルモネの沖、クレテの島かげを航行し、その岸に沿って進み、かろうじて『良き港』と呼ばれる所に着いた」とルカは書いている。

彼らは、順風になるのを待つためにしばらくのあいだ「良き港」にとどまらざるを得なかった。冬がかけ足で近づいていた。「すでに航海が危険な季節になったので」、船の責任者たちは、航海に適した時季が終わる前に目的地に着くという望みを、あきらめなければならなかった。「良き港」にとどまるか、冬を過ごすにもっと好適な場所に行くかという問題だけを、今決定しなければならなかった。

この問題が熱心に論議されてから、最後に百卒長からパウロに伝えられた。パウロは既に水夫や兵士たちの尊敬を得ていたのである。使徒は、ここにとどまるようにと、ためらわずに忠告した。「わたしの見るところでは、この航海では、積荷や船体ばかりでなく、われわれの生命にも、危害と大きな損失が及ぶであろう」とパウロは言った。しかし「船長や船主」、それに乗客や船員の大多数はこの忠告に同意しなかった。彼らが投錨していた港は「冬を過ごすのに適しないので、大多数の者は、ここから出て、できればなんとかして、南西と北西とに面しているクレテのピニクス港に行って、そこで冬を過ごしたいと主張した」。

百卒長は大多数の意見に従うことに決めた。そこで、「南風が静かに吹いてきたので」、彼らは、すぐに目的の港に着くだろうと期待して、「良き港」から出航した。「すると間もなく……暴風が、島から吹きおろして」きて、「舟が流されて風に逆らうことができな」かった。

嵐に吹き流されて、船はクラウダという小島に近づいた。そして、そこに避難している間に、水夫たちは最悪の事態のために準備した。船が浸水した場合の唯一の脱出手段に用いる救命ボートが引かれていたが、今にもたたきっけられてばらばらになりそうであった。彼らの最初の仕事はこの小舟を甲板に引き上げることであった。それから、船を補強して嵐に耐えるようにするために、できるかぎり [1524]

の予防措置がなされた。小島の陰でほんのわずかの間、守られていたが、それも長くは続かず、すぐさま彼らは再び暴風の猛威にさらされた。

嵐は一晩中吹きすさび、用心したにもかかわらず、船は浸水した。「次の日に、人々は積荷を捨てはじめ」た。夜になっても、風は衰えなかった。嵐に打たれた船は、マストが折れ、帆が裂けて、荒れ狂う疾風の猛威であちこちへ振り回された。嵐に打たれて船がよろめき揺れるたびに、うなるような音を立てている柱やけたなどは、くだけてしまいそうであった。浸水はす早くひろがり、船客や船員たちはポンプにつききりで働いた。船の中の人々はみな一刻の休みすらなかった。「3日目には、船具までも、てずから投げすてた。幾日ものあいだ、太陽も星も見えず、暴風は激しく吹きすさぶので、わたしたちの助かる最後の望みもなくなった」とルカは書いている。

14日間、彼らは太陽も星もない空の下をただよった。使徒パウロは、自分自身肉体的に苦しみながらも、暗黒の時に望みの言葉を語り、危急のたびに助けの手をさしのべた。彼は信仰によって、無限の力であられる神のみ腕にすがり、心は神に支えられた。自分自身のために心配することはなかった。ローマでキリストの真理のあかしをするために、神が生かして下さることを知っていた。しかしパウロは、罪深く、堕落して、死の準備もできていない周囲のあわれな魂を切に思いやる気持ちになった。彼らの生命を助けてくださるように熱心に祈った時、彼の祈りがきかれたことを示された。

嵐が静まったので、パウロは甲板に立ち上がって言った。「『皆さん、あなたがたが、わたしの忠告を聞きいれて、クレテから出なかったら、このような危害や損失を被らなくてすんだはずであった。だが、この際、お勧めする。元気を出しなさい。舟が失われるだけで、あなたがたの中で生命を失うものは、ひとりもいないであろう。昨夜、わたしが仕え、また拝んでいる神からの御使が、わたしのそばに立って言った、「パウロよ、恐れるな。あなたは必ずカイザルの前に立たなければならない。たしかに神は、あなたと同船の者を、ことごとくあなたに賜わっている」。だから、皆さん、元気を出しなさい。万事はわたしに告げられたとおりに成って行くと、わたしは、神かけて

信じている。われわれは、どこかの島に打ちあげられるに相違ない』」。

この言葉に、再び希望がよみがえった。船客も船員も、茫然自失の状態から目がさめた。やるべきことはまだたくさんあった。全滅をまぬがれるためには各人が最善をつくさねばならなかった。

黒々とうねる大波に翻弄され続けて14日目の夜になった時、「真夜中ごろ」、水夫たちは砕ける波の音を聞いて、「どこかの陸地に近づいたように感じた。そこで、水の深さを測ってみたところ、20ひろであることがわかった。それから少し進んで、もう1度測ってみたら、15ひろであった。わたしたちが、万一暗礁に乗り上げては大変だと、人々は気づかって、ともから4つのいかりを投げおろし、夜の明けるのを待ちわびていた」とルカは書いている。

夜明けに、嵐の吹きすさぶ海岸線がぼんやり見えてきた。しかし、見なれた陸地の目じるしは何も見えなかった。前途の見通しは暗かったので、異教の水夫たちは、すっかり勇気を失い、「舟から逃げ出そうと思って、へさきからいかりを投げおろすと見せかけ」、すでに救命ボートをおろしていた。するとパウロは、彼らのさもしい計画を見破って、百卒長と兵士たちに、「あの人たちが、舟に残っていなければ、あなたがたは助からない」と言った。兵士たちはすぐに、「小舟の綱を断ち切って、その流れて行くままに任せた」。

最も危険な時がまだ待ちうけていた。使徒パウロは再び励ましの言葉を語り、水夫も船客も食事をするようにと勧めて言った、「あなたがたが食事もせずに、見張りを続けてから、何も食べないで、きようが14日目に当る。だから、いま食事を取ることをお勧めする。それが、あなたがたを救うことになるのだから。たしかに髪の毛ひとすじでも、あなたがたの頭から失われることはないであろう」。 [1525]

「彼はこう言って、パンを取り、みんなの前で神に感謝し、それをさいて食べはじめた」。すると、疲れはて、失望していた275人の者たちも、パウロがいなかったら自暴自棄になっていたであろうが、使徒パウロと一緒に食物を取りはじめた。「みんなの者は、じゅうぶんに食事をした後、穀物を海に投げすてて舟を軽くした」。

さて、すっかり夜が明けたが、彼らは自分たちがどこにいるのかさっぱりわからなかった。しかし、「砂浜のある入江が見えたので、できれば、それに舟を乗り入れようということになった。そこで、いかりを切り離して海に捨て、同時にかじの綱をゆるめ、風に前の帆をあげて、砂浜にむかって進んだ。ところが、潮流の流れ合う所に突き進んだため、舟を浅瀬に乗りあげてしまって、へさきがめり込んで動かなくなり、ともの方は激浪のためにこわされた」。

パウロと他の囚人たちは、こんどは難破より恐ろしい運命におびやかされた。兵士たちは、陸にあがる努力をしている間は、囚人たちを監視するのが不可能なことを知った。みんな自分の生命を救うことだけが精いっぱいであった。だがもし囚人のだれかが行方不明になれば、その責任を持っていた者たちは、罰として命を取られるのである。だから兵士たちは囚人たちを全部殺してしまいたいと思った。ローマの法律ではこの残虐なやり方が認められていた。この計画は、みんなが一様に恩義を受けていたパウロがいなかったら、即刻実行されていただろう。百卒長のユリアスは、パウロのおかげで船の全部の人たちの生命が助かったことをみとめ、その上、主が彼と共におられることを確信していたので、パウロに害を加えることを恐れた。そこで彼は、「泳げる者はまず海に飛び込んで陸に行き、その他の者は、板や舟の破片に乗って行くように命じた。こうして、全部の者が上陸して救われたのであった」。点呼してみると、欠けている者は1人もいなかった。

難破船に乗っていた者たちは、マルタ島の土地の人々に手厚くもてなされた。「降りしきる雨や寒さをしのぐために、火をたいてわたしたち一同をねぎらってくれた」とルカは書いている。パウロは、他の人々を慰めることに尽力した人々の中にいた。「ひとかかえの柴」をたばねて「火にくべたところ、熱気のためにまむしが出てきて、彼の手にかみついた」。これを見ていた人々は恐怖におそわれた。そして、彼の鎖を見て、パウロが囚人だとわかり、人々は互いに言った、「この人は、きっと人殺しに違いない。海からはのがれたが、ディケーの神様が彼を生かしてはおかないのだ」。ところがパウロはまむしを火の中に振り落として、なんの害も被らなかった。

人々はまむしの有毒性を知っていたので、パウロが今にも倒れて、苦しみだすだろうと見守っていた。「しかし、長い間うかがっていても、彼の身になんの変ったことも起らないのを見て、彼らは考えを変えて、『この人は神様だ』と言い出した」。

3か月のあいだ船の同乗者たちはマルタ島に滞在したが、パウロと彼の共労者たちはその間、幾度も機会を捕らえて福音を説いた。主はすばらしい方法で彼らに働きかけられた。パウロのために、難破船の同乗者たち全員が手厚くもてなされ、彼らの必要なものはみな支給されて、マルタを出発する時には、航海に必要なものがことごとく惜しみなく用意されたのである。この島に滞在中の主なでき事は、ルカによって次のように簡潔に述べられている。

「さて、その場所の近くに、島の首長、ポプリオという人の所有地があった。彼は、そこにわたしたちを招待して、3日のあいだ親切にもてなしてくれた。たまたま、ポプリオの父が赤痢をわずらい、高熱で床についていた。そこでパウロは、その人のところにはいって行って祈り、手を彼の上においていやしてやった。このことがあってから、ほかに病気をしている島の人たちが、ぞくぞくとやってきて、みないやされた。彼らはわたしたちを非常に尊敬し、出帆の時には、必要な品々を持ってきてくれた」。

[1526]

第43章　ローマにて

本章は使徒行伝28：1131、及びピレモンへの手紙に基づく

航海の開始とともに、百卒長と囚人たちはローマに向かって出帆した。西方へ向かう途中、マルタ島に冬ごもりをしていたデオスクリの船飾りのあるアレキサンドリヤの船にこの旅行者たちは乗り込んだ。逆風のために少々遅れたが、無事に航海を終えて、船はイタリヤ沿岸のポテオリという美しい港に停泊した。

ここに数人のクリスチャンがいた。彼らはパウロに7日間滞在するように頼んだ。この願いは親切な百卒長に許された。イタリヤのクリスチャンたちは、ローマ人へ宛てたパウロの手紙を受けていたので、使徒の訪問をしきりに待っていたのである。彼らはパウロが囚人として来るとは思っていなかった。しかし彼はその苦難のゆえに、一層深く彼らから慕われた。ポテオリからローマまでの距離は140マイルあり、この海港は首都ローマとの交通が密であったので、ローマのクリスチャンたちはパウロの到来することを聞かされて、中には彼を出迎えに出た者たちもいた。

上陸して8日目に、百卒長と囚人たちはローマに向かって出発した。百卒長ユリアスは、自分の力で与えられることは何でも使徒に与えたが、囚人としての状態を変えてやることや、番兵と鎖でつながれている彼を解き放すことはできなかった。パウロは重い心で、長い間期待していた世界の首都への訪問に出発したのである。彼が予期していたこととは何と事情が違っていることであろう。鎖につながれ、汚名を着せられている身で福音をのべ伝えるとは何ということであろうか。ローマで多くの魂を真理へ導きたいという彼の希望は、当てはずれに終わる運命にあるように思えた。

ついに旅行者たちは、ローマから40マイルのところにあるアピオ・ポロに着く。彼らが大通りにむらがる群衆をわ

けて進んで行くと、かたくなな顔つきをした犯罪人と一緒に鎖につながれた白髪の老人は、多くの人々の侮蔑的な流し目を受け、多くの無礼な嘲笑のまととなる。

突然歓喜の叫びがきこえたかと思うと、1人の男が通りがかりの群衆の中からとび出してきて、その囚人の首にしがみつき、あたかも息子が長い間留守をしていた父を迎えるかのように、涙と喜びをもって抱きしめる。多くの者が愛情のこもった、しかも待ちかねたようなまなざしで、この囚人こそ、かつてコリントで、ピリピで、エペソで自分たちにいのちのことばを語ってくれた人だと認めるや、そのつど同じ光景が繰り返される。

心の温かい弟子たちが福音の父のまわりに熱心にむらがるたびに、一行は全部立ち止まってしまう。兵士たちは遅れるのでいらいらするが、この楽しい面会を邪魔しようとは思わない。彼らもこの囚人を尊敬し重んじるようになっていたからである。弟子たちは、そのやつれた、苦労の刻まれている顔に、キリストのみかたちが反映されているのを見る。彼らは、パウロを忘れたこともなければ、彼を愛する心にも変わりがないということ、また、彼らの生活を生き生きしたものにし、神に対する平和を与えてくれる喜ばしい望みが持てるのは、彼のおかげであるということを、自信をもってパウロに伝える。彼らは、特別に許されさえすれば、町までの道をずっと、愛の熱情に燃えて、パウロを肩にのせて行くであろう。

パウロが兄弟たちに会って「神に感謝し勇み立った」と述べているルカの意味深長な言葉に気がつく者はほとんどいない。パウロの鎖を恥とせず、かえって同情して泣く信者の群れの真中にあって、使徒は声高らかに神を讃美した。彼の心にたれこめていた悲しみの雲は一掃された。キリスト者としての彼の生涯は試練と苦難と失望との連続であったが、この時彼は豊かに報いられたと思った。彼は一層しっかりと足を踏みしめ、喜びに心をはずませて、彼の道を歩みつづけた。彼は過去について不平を言わず、未来を恐れもしなかった。投獄と患難が待ち受けていることを [1527]
知っていたが、彼はまた、もっと恐ろしい無限のなわめから魂を救うことが彼の仕事だということを知っていて、キリストのために受ける苦しみを喜んだのである。

ローマで百卒長ユリアスは、囚人たちを皇帝の侍衛の長に引き渡した。ユリアスがパウロについてよい報告をしたのと、フェストの手紙のおかげで、パウロは隊長から好意を示され、獄に放り込まれず、自分の借家に住むことを許された。やはり番兵をつけられてはいたが、パウロは自由に友人たちに会い、キリストのみわざの進展のために骨折ることができた。

その数年前にローマから追放されていたユダヤ人が帰ることを許され、今は、数多くのユダヤ人がローマにいた。パウロは、彼の敵が入り込んできて、この人々の心を自分にそむかせる機会を得る前に、まずこの人々に自分と自分の働きのことを話そうと決心した。そこでローマに着いて3日後に、主だった人々を呼んで、自分が囚人としてローマに来た理由を簡単に率直に説明した。

「兄弟たちよ、わたしは、わが国民に対しても、あるいは先祖伝来の慣例に対しても、何1つそむく行為がなかったのに、エルサレムで囚人としてローマ人たちの手に引き渡された。彼らはわたしを取り調べた結果、なんら死に当る罪状もないので、わたしを釈放しようと思ったのであるが、ユダヤ人たちがこれに反対したため、わたしはやむを得ず、カイザルに上訴するに至ったのである。しかしわたしは、わが同胞を訴えようなどとしているのではない。こういうわけで、あなたがたに会って語り合いたいと願っていた。事実、わたしは、イスラエルのいだいている希望のゆえに、この鎖につながれているのである」と彼は言った。

パウロは自分がユダヤ人から受けた辱めや、彼らが繰り返し彼を殺そうとしたことなどは、何も言わなかった。彼は用心深く、思いやりのある言葉で語った。人をひきつけたり、同情を求めたりしているのではなく、真理を弁護し、福音の栄えを保とうとしていたのである。

聞いていた者たちは、これに答えて、パウロの不利になるような文書は公私ともに受け取っていないし、ローマに来たユダヤ人は誰も彼を罪人として訴えた者はいないと言った。そして彼らは、キリストを信じるパウロの信仰の理由を直接に聞きたいと、熱心に頼んで言った、「実は、この宗派については、いたるところで反対のあることが、わたしたちの耳にもはいっている」。

彼らが積極的にそれを望んだので、パウロは彼らに福音の真理を語ることができる日取りを決めさせた。決められた日に多くの者が集まったので、「朝から晩まで、パウロは語り続け、神の国のことをあかしし、またモーセの律法や預言者の書を引いて、イエスについて彼らの説得につとめた」。彼は自分の経験を話し、簡潔に、誠実に、力強く、旧約聖書から論証を与えた。

使徒は、宗教が、慣習や儀式、信条や理論のうちにあるのではないことを教えた。もしそうだとしたら、生まれながらの人は、この世のことを理解するように、調査することによってそれを理解できるはずである。パウロは、宗教とは実際的な救いの力であり、完全に神から来る原則であり、魂に働きかける神の再生力を個人的に経験することであると教えた。

パウロは、モーセがいかに、イスラエルの民が耳を傾けなければならないあの預言者としてキリストを指し示したかということや、すべての預言者たちが、罪に対する神の偉大な救済として罪人の罪を負って下さる罪のない方、キリストについて、いかにあかしをしてきたかということを教えた。パウロは彼らが型や儀式を重んじているのを誤りであるとは言わなかったが、儀式的な礼拝を厳密に保持しようとして、そのすべての制度の本体であられるキリストを拒んでしまうのだと説明した。

パウロは、自分はまだ改心していなかったときにキリストを知っていたが、それはキリストとの個人的な面識によるのではなく、他の人々と同じように、来るべきメシヤのご品性とみわざについて抱いていた単なる概念によるものだったと述べた。ナザレのイエスがこの概念を成就されなかったので、パウロはイエスを 詐欺師として拒んでいた。しかし、今、キリストとその使命についての彼の見解ははるかに霊的であり、高められていた。それは彼が改心させられていたからである。使徒は、自分はキリストを肉によって知らせるのではないと断言した。ヘロデはキリストが人性をとっておられた時にキリストに会っていた。アンナスもキリストに会った。ピラトや祭司たち、役人たちも彼に会った。ローマの兵士たちも彼に会った。しかし彼らは信仰の目でキリストを見たのではない。彼らはあがめられたあがない主としてキリストを見ていなかった。信仰 [1528]

によってキリストを理解すること、キリストについて霊的な知識を持つことは、主が地上におられた時に主と個人的な面識があったこと以上に望ましいことなのである。今、パウロに許されていたキリストとの交わりは、単なる地上の人間同士の交わり以上に親しいものであり、長続きするものであった。

ナザレのイエスがイスラエルの望みであることについて、パウロが知っていることを語り、見たことをあかしした時、ほんとうに真理を求めていた人たちは納得した。彼の言葉は少なくともある人々の心に、決してぬぐい去られることのない印象を与えた。しかし他の者たちは、聖霊の特別な光を受けている人から聖書の明白なあかしを示されても、それを受け入れることを頑固に拒んだ。彼らはパウロの議論に論駁することができなかったが、その結論を受け入れようとしなかった。

パウロがローマに着いてかなりの月日がたってから、エルサレムのユダヤ人たちがこの囚人を直訴しにやってきた。彼らはこれまで何度も自分たちの計画をくじかれてきた。しかも今度はパウロがローマ皇帝の最高法廷によってさばかれることになっていたので、彼らはまたもや敗北を被るような危険は冒したくなかった。ルシヤもペリクスもフェストもアグリッパも、みなパウロの無罪を信ずると宣告した。パウロの敵たちは陰謀によって皇帝を動かす以外に成功の望みはなかった。彼らの計画を練って実行する余裕を見るためには、遅延が彼らの目的を促進することになる。そこで彼らは、使徒を直接告発するのをしばらく見合わせていた。

神の摂理によって、この遅延は福音の促進という結果をもたらした。パウロの責任を持っていた人たちの好意により、彼は便利な家に住むことを許され、この家で友人たちと自由に会い、また福音を聞きにやって来る人たちに福音を示すことができた。こうしてパウロは2年間働きを続けて「はばからず、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えつづけた」。

この期間中も、パウロは多くの土地に建てた諸教会のことを忘れていなかった。使徒は新しく信仰をもった人々を襲う危険を考えて、警告や実際的教訓を手紙に書いて送り、できるだけ彼らの必要を満たそうと努めた。そして彼

は、これらの教会ばかりでなく、彼がまだ訪問していない地方にも、ローマから献身した働き人を送って働かせた。このような働き人は賢い牧者として、パウロが立派に始めた働きを強化した。そしてパウロは彼らと常に連絡を保っていて、教会の状態や危険について知り、すべての教会を賢明に監督することができた。

こうして、一見活動的な働きが絶たれたように見えたが、パウロは、以前のように諸教会を自由に訪問して歩いた年月よりもっと広い、永続性のある感化を及ぼした。主の囚人として、彼は兄弟たちに一層強い愛情をいだいた。キリストのためのつながれの身で書いた言葉は、彼が直接彼らと共にいた時語った言葉より、もっと熱心な注目と尊敬を集めた。信者たちは、パウロが彼らから引き離される時まで、彼が彼らのために負い続けた責任の重さに気づかなかった。これまで彼らは、パウロのような知恵や機転や不屈の精力に欠けているので責任や重荷を負えないと言いのがれをしてきた。しかし彼らは、今、これまでパウロの個人的な働きを重んじないで、教訓を避け、それを学ぶ経験を持たずにいたので、パウロの警告や勧告や忠告をありがたいと思った。そして、パウロの長い投獄中の勇気と信仰について学び、彼らはますますキリストのみわざに対する忠誠心と熱意をかき立てられた。

[1529] ローマにいたパウロの助力者たちの中には、以前の仲間や共労者たちが大勢いた。「愛する医者」ルカは、エルサレムへの旅ではパウロに同行し、カイザリヤでの2年間の監禁中も、またローマへの危険な航海中もパウロと共にいたが、今もなおパウロと共にいた。テモテもパウロに仕えて彼を慰めた。「主にあって共に僕であり、また忠実に仕えている愛する兄弟」テキコは、使徒のそばに雄々しく立っていた。デマスとマルコも彼と共にいた。アリスタルコとエパフラスはパウロと「一緒に捕われの身」となっていた（コロサイ4章714参照）。

マルコのクリスチャン経験は、信仰を告白した当初のころから次第に深まってきていた。彼はキリストの一生と死について綿密に研究するにつれて、救い主の使命、その辛労と戦いをはっきり把握できるようになった。キリストの手足の傷あとの中に、人類のためにささげて下さった奉仕のしるしと、失われて滅びゆく者を救うために示された自

己放棄の深さを認めて、マルコは喜んで主にならって自己犠牲の道を歩むようになっていた。今彼は捕らわれの身となったパウロと運命を共にすることによって、キリストを得ることは無限に益となることであり、世を得て、あがないのためにキリストが血を流された魂を失うことは無限に損となることを、一層よく悟ることができた。彼は激しい試練や逆境に会ってもぐらつかず、最後までパウロの愛する賢い助け手となった。

デマスはしばらくの間しっかりしていたが、後になってキリストのみわざを見捨てた。これについてパウロは、「デマスはこの世を愛し、わたしを捨て」たと書いた（Ⅱテモテ4：10）。この世の利益のためにデマスは高尚で立派な報酬をすべて手放した。なんと先見の明のない交換であろう。この世の富や名誉だけを持って、たとえどんなにそれが豊かだと誇ってみたところで、デマスはほんとうに貧しかった。一方、マルコはキリストのために苦しむことを選び、天において神の相続人、キリストと共同の相続人とみなされて永遠の富を持っていた。

パウロがローマで働いた結果、神に心をささげた者の中にオネシモがいた。オネシモは異教徒で奴隷の身であったが、その主人にあたるコロサイの信者ピレモンに不都合なことをしたためにローマに逃げて来ていた。パウロはあわれな逃亡者が困って苦しんでいるのを親切に助けてやり、それから彼の暗い心に真理の光を照らそうと努めた。オネシモはいのちの言葉に耳を傾け、罪を告白して、キリストを信じる信仰へと改心した。

オネシモは信心深く、誠実であったので、パウロに愛された。パウロを慰めるやさしい心づかいや、福音の働きを進める熱意も、パウロの好むところであった。パウロは、オネシモが伝道の働きに非常に役に立つ性質をもっているのを認めて、すぐピレモンのところへ帰ってゆるしを請い、そして将来の計画をたてるようにすすめた。使徒はピレモンが失った金額についての責任を負うと約束した。小アジアの諸教会にあてた手紙を持たせて、テキコを出発させようとしていたところであったので、オネシモを一緒に連れて行かせた。悪い事をした自分から主人の前に出て行くことは、このしもべにとってつらい試みではあったが、

彼は本当に改心していたので、この義務を回避しなかった。

パウロはピレモンあての手紙をオネシモに持たせた。その手紙の中で、使徒はいつものように上手に、真心をこめて、悔い改めている奴隷のために弁護し、これからも彼の奉仕を受けたいという願いを表明した。その手紙は友人として、また共労者としてピレモンに愛情をこめたあいさつで始まっている。

「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしは、祈の時にあなたをおぼえて、いつもわたしの神に感謝している。それは、主イエスに対し、また、すべての聖徒に対するあなたの愛と信仰とについて、聞いているからである。どうか、あなたの信仰の交わりが強められて、わたしたちの間でキリストのためになされているすべての良いことが、知られて来るようになってほしい」。使徒は、ピレモンが身につけているしっかりした意図や立派な品性は、みなキリストの恵みによるものであることを彼に思い起こさ [1530]
せた。このキリストの恵みだけが、彼を邪悪な者や罪深い者たちとは違うものにしていたのである。同じ恵みが、悪質な犯罪者を神の子とし、役に立つ福音の働き人とすることができた。

パウロはピレモンに、クリスチャンとしての義務を果たすよう勧めることもできたが、そうせずに懇願の言葉を選んだ。「すでに老年になり、今またキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロが、捕われの身で産んだわたしの子供オネシモについて、あなたにお願いする。彼は以前は、あなたにとって無益な者であったが、今は、あなたにも、わたしにも、有益な者になった」。

使徒は、ピレモンがオネシモの改心を認めて、その悔い改めた奴隷を、自分の子供として迎え入れ、「もはや奴隷としてではなく、奴隷以上のもの、愛する兄弟として」、オネシモが自分から以前の主人と共に住みたいと思うようになるほどの愛情を、彼に示してほしいとピレモンに頼んだ。パウロは、ピレモン自身もそうしたであろうと思われるように、捕らわれの身となっている自分に仕えることのできる者として、オネシモを引きとめておきたいと言っ

た。しかし、ピレモンが自発的にこの奴隷を解放しないかぎり、自分に仕えさせようとは思わなかった。

使徒パウロは、主人たちが奴隷たちに厳しい仕打ちをしていることをよく知っていた。また、ピレモンが彼の奴隷の振る舞いにひどく怒っていることも知っていた。パウロは、クリスチャンとしてのピレモンの真情あふれるやさしい気持ちをかき立てるような方法で、彼に手紙を書こうとした。オネシモは改心して信仰にある兄弟となっていたので、この新しい改心者に加えられる罰はパウロ自身に加えられるもののように思われた。

パウロは、この罪を犯した者が罰を受けずにすむように、また、失った特権を再び得ることができるように、オネシモの負債を支払うことを進んで申し出た。「そこで、もしわたしをあなたの信仰の友と思ってくれるなら、わたし同様に彼を受けいれてほしい。もし、彼があなたに何か不都合なことをしたか、あるいは、何か負債があれば、それをわたしの借りにしておいてほしい。このパウロが手ずからしるす、わたしがそれを返済する」とパウロはピレモンに書き送った。

これは悔い改めた罪人に対するキリストの愛をあらわすのになんとふさわしい実例であろう。主人のものを横領した奴隷は、それを償うべき何ものも持たなかった。神に仕えるべき年月を横取りしてきた罪人には、その負債を取り消す方法がない。イエスは、罪人と神の間に入って、わたしが負債を支払います、罪びとを赦してください、彼の代わりにわたしが罰を受けます、と言われる。

パウロは、オネシモの負債を引き受けると申し出てのち、ピレモン自身が使徒に負うところがいかに大きいかを思い起こさせた。神がパウロを、ピレモンの改心に力を貸すものとされたのであるから、ピレモンは自分自身をパウロに負っていることになった。それからパウロは、やさしく熱心に訴えて、ピレモンが惜しみなく聖徒たちを元気づけたように、喜びとなるこの申し出を聞き入れて、パウロをさわやかな気持ちにさせてほしいと懇願した。「わたしはあなたの従順を堅く信じて、この手紙を書く。あなたは、確かにわたしが言う以上のことをしてくれるだろう」とパウロはつけ加えた。

ピレモンへのパウロの手紙は、福音が主人としもべとの関係に及ぼす影響について教えている。奴隷所有は、ローマ帝国内に行きわたった既定の制度で、パウロが働いていた教会のほとんどどこででも主人と奴隷の姿が見られた。奴隷の数が自由市民の人口を大きくしのいでいるような都市では、しばしば、彼らを服従させるために恐ろしく厳格な法律が必要なものとみなされていた。金持ちのローマ人は、あらゆる身分や民族の、またさまざまな技能を持った奴隷を幾百人もかかえていることがしばしばであった。彼はこうした無力な者たちの魂と肉体を完全に支配し、思いのままにどんな苦しみでも加えることができた。もし彼らのうちの1人でも仕返しや自己防衛のために主人に手を振り上げようものなら、その奴隷の 家族全員が残酷に犠牲とされた。どんな小さな間違いや事故や不注意でも、無慈悲に罰せられることがよくあった。 [1531]

他の者たちより人情味のある主人は、しもべたちにもっと寛大であったが、大多数の金持ち貴族は思うがままに情欲、激情、欲望にふけり、彼らの奴隷を気まぐれと暴虐の悲惨な犠牲者にした。この制度全体が絶望的に堕落した状態にあった。

既成の社会制度を独断的に、あるいは急にくつがえすことは使徒パウロの仕事ではなかった。これを試みようとすれば、福音の成功が阻まれるであろう。しかし彼は、奴隷制度の根本にある原則、しかも、それが実行されれば奴隷制度全体を揺るがせること必然であろうと思われる原則を教えた。「主の霊のあるところには、自由がある」と彼は言明した（Ⅱコリント3：17）。奴隷オネシモは改心してキリストのからだの1員となったのであるから、主人と共に神の祝福と福音の特権にあずかる兄弟として、また相続人として愛され、取り扱われなければならなかった。一方、しもべたちは「人にへつらおうとして目先だけの勤めをするのでなく、キリストの僕として心から神の御旨を行い」、自分たちの義務を果たさなければならなかった（エペソ6：6）。

キリスト教は、主人と奴隷、王と臣民、福音を説く牧師とキリストの中に罪からのきよめを見いだしている堕落した罪人との間に、強い一致のきずなをつくる。彼らは同じ

血潮に洗われ、同じみ霊によって生かされた。そして彼らはキリスト・イエスにあって1つとされているのである。

第44章　ネロの宮廷

福音はこれまで常に、低い階級の人々のなかで最も大きな成果をあげてきた。「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない」（コリント1：26）。貧しく、友人もいない捕らわれ人のパウロに、ローマ市民の金持ちや貴族階級の注意を引くことができるとは思われなかった。悪習が彼らにあらゆる華麗な誘惑を与え、彼らをみずから進んでやってくる獲物にした。しかし、彼らの圧制で労苦にやつれ、困窮に打ちのめされた犠牲者たちの中から、貧しい奴隷の中からさえも、多くの者たちがパウロの言葉に喜んで耳を傾け、キリストを信じる信仰のうちに、運命の過酷さの中にあって彼らを励ましてくれる希望と平和を見いだした。

使徒パウロの働きは身分の低い者たちから始まったが、その影響は広がって皇帝の宮廷にまで達した。

ローマはこの当時、世界の首都であった。傲慢な皇帝たちは、地上のほとんどすべての国に法律を与えていた。王も廷臣たちも謙遜なナザレ人については無知か、憎しみや嘲笑の目を向けていた。それにもかかわらず、2年たらずのうちに福音は、捕らわれ人の貧しい家から宮殿へとその道が開かれた。パウロは悪者として鎖につながれているが「神の言はつながれてはいない」（Ⅱテモテ2：9）。

以前には、使徒パウロは人をひきつける力でキリストを信じる信仰を公衆に宣伝した。そしてしるしや奇跡からも、その聖なる性質について誤解の余地のないことを証言していた。彼は堂々と堅実にギリシャの賢人たちの前に立ち、また彼の知識と雄弁によって、誇り高い哲学の論法を沈黙させた。彼は不撓不屈の勇気をもって王や役人たちの前に立ち、正義、節制、未来の審判について論じ、ついに傲慢な支配者たちは、神の日の恐怖をすでに見ているかのようにおそれおののいたのであった。

今、使徒パウロは自分の住居に監禁されている身で、そのような機会を与えられていなかった。そして、彼を尋ね

てくる人々にだけしか真理を宣べ伝えることができなかった。彼はモーセやアロンのように、不品行な王の前に行き、「わたしは有る」という偉大なお方のみ名によって王
[1532] の残虐や圧制を譴責するようには、神のご命令を受けていなかった。しかし、その第一の唱道者が公の働きから断ち切られたように見えたまさにこの時、福音のために1つの大勝利が与えられた。まさしくその宮廷から、幾人もの人々が教会に加えられたからである。

ローマの宮廷の中ほど、キリスト教と合わない雰囲気を持っているところはほかになかった。ネロは自分の魂から霊的な面ばかりか、人間的な面の最後のわずかなものさえも抹殺して、サタンのような感じを身につけたようであった。彼の従者や廷臣たちも、一般に皇帝と同様、凶暴で、卑劣な、堕落した品性を持っていた。どう見ても、キリスト教がネロの宮廷でしっかりした立場を得ることは不可能なことのようであった。

しかしこの場合でも、他の多くの場合と同じように、自分の戦いの武器は「神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである」というパウロの主張の真実さを証明した（Ⅱコリント10：4）。ネロの宮廷の中でさえ、十字架の勝利があった。不道徳な王の堕落した臣下から、神のむすことなる改宗者が出た。これらの人々は、こっそりとではなく公然とクリスチャンであった。彼らは自分たちの信仰を恥としなかった。

中に入ることさえ困難なように見えた場所へ、どんな方法でキリスト教が入り、確かな地歩を占めるようになったのであろうか。パウロはピリピ人への手紙の中で、ネロの宮廷から信仰へと改宗者を導くことができたのは、パウロ自身が捕らわれていたためであると述べた。彼の苦難が福音の進展を妨げていたと思われてはならないと思って、パウロは彼らにこう断言した、「兄弟たちよ。わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい」（ピリピ1：12）。

キリスト教会は、はじめパウロがローマを訪問すると知った時、その町に福音の著しい勝利を期待していた。パウロは多くの地に真理を携えて行き、大都市で真理を宣べ伝えていた。この信仰の闘士は世界の大都市ローマにおいても、立派に魂をキリストに導くのではないだろうか。

しかし、パウロが捕らわれ人としてローマに行ったという知らせによって彼らの希望はくじかれた。彼らはかつてこの大中心地に確立された福音がすべての国々に速やかに伝えられて、この地上における支配的な力となることを確信して、待ち望んでいた。それだけに彼らの失望は大きかった。人間の期待ははずれた。しかし神の目的ははずれなかった。

宮廷は、パウロの説教によってではなく、彼の受けた束縛によって、キリスト教へと注目するようになった。彼は捕らわれの身でありながら、罪の奴隷となっていた多くの魂から束縛を断ち切ったのである。これればかりではなかった。「兄弟たちのうち多くの者は、わたしの入獄によって主にある確信を得、恐れることなく、ますます勇敢に、神の言を語るようになった」と彼は言明した（ピリピ1：14）。

長い間の不正な留置の間中、パウロが示した忍耐と快活と勇気と信仰は、不断の説教となった。パウロの精神は、この世の精神と全く違っていて、地上の力よりももっと偉大な力が彼の中にとどまっていることをあかしした。そして彼の模範によって、クリスチャンたちは、みわざ――その公の活動からはパウロはすでに身をひいていたけれども――の唱道者として、より大きな働きへとかりたてられた。このように使徒のなわめの影響力は大きかった。彼の力と有用さとが断ち切られたように見え、どうみても何もできそうもない時に、パウロは全く自分がしめ出されたようにみえた地からキリストのために、麦束を集めるように魂を集めたのである。

2年間の捕らわれの身が終わる前にパウロは、「わたしが獄に捕われているのはキリストのためであることが、兵営全体にもそのほかのすべての人々にも明らかにな」ったと言うことができた（ピリピ1：13）。そして、ピリピ人へあいさつを送った人々の中に、特に「カイザルの家の者たち」がいることをパウロは述べている（ピリピ4：22）。

忍耐は勇気と同様、勝利するものである。試練の時に忍耐強いことは、事業をなす時の大胆さと同じほど、魂をキリストに導くことができる。死別や苦しみの時に忍耐と [1533]
快活さをあらわし、平安で穏やかなゆるがない信仰をもって、死そのものにさえも向かうクリスチャンは、忠実に働

いて長い一生になし遂げることができる以上のことを、福音のためにすることができる。神のしもべが活動的な働きから後退させられる時、先を見通すことができないわれわれは、その不可解な摂理を歎くが、そうでなければ決してなされないような働きをなし遂げるために、神は摂理を計画されるのである。

キリストに従う者は、もはや神や真理のために、公然と積極的に働くことができなくなっても、もう奉仕することも報いをいただくこともできないなどと考えてはならない。キリストの真の証人は、決してその務めを解かれることはない。彼らが健康な時でも病の時でも、生きていようが死んでいようが、神はなお彼らをお用いになる。サタンの悪意によってキリストのしもべたちが迫害され、彼らの積極的な働きが妨げられたとき、また、彼らが投獄されたり、死刑や火刑に処せられた時、それは真理がより大きな勝利を得るためであった。こうした忠実な者たちが血のあかしを立てる時、これまで疑いを持ち、半信半疑であった者たちが、キリストの信仰を悟ってキリストのために勇敢に証人台に立った。殉教者たちの灰の中から、神のための豊かな収穫が生じていた。

パウロや共労者たちの熱意と忠誠は、険悪な状況のもとでキリスト教へと改宗した人々の信仰と服従と同様、キリストに仕える者の怠惰と信仰の不足を譴責している。使徒と彼の共労者たちは、きびしい誘惑に打ちのめされ、多くの障害に取り巻かれ、激しい反対にさらされているネロの臣下たちを、キリストを信じる信仰へ悔い改めさせることはむだだと論じ合うこともできたかもしれない。たとえ彼らが真理を受け入れたとしても、彼らはどうして信仰に従っていけるであろうか。しかしパウロは、このようなことを理由にしなかった。彼は信仰をもってこれらの魂に福音を紹介した。そして聞いた者たちの中に、なんとしても従おうと決意した者たちがいたのである。障害や危険があるにもかかわらず、彼らは光を受け入れて、その光を他の人々にも輝かすように、神により頼んだのである。

カイザルの宮廷で改宗者が真理に導かれたばかりでなく、それらの人たちは改宗後も宮廷にとどまった。彼らはその環境に適しなくなったからという理由で、責任の地位を勝手に捨ててもよいとは思わなかった。彼らは宮廷で真

理に導かれたので、宮廷にとどまり、自分たちの生活と品性が変えられたことを示し、人を一変させる新しい信仰の力をあかしした。

自分たちの環境はキリストのためにあかしするにふさわしくないと、言いわけしたくなる人がいるならば、カイザルの宮廷で、皇帝の堕落や王室の不品行を見ている弟子たちの立場を考えてみるがよい。宗教的な生活にとってこれほど好ましくない環境を、また、これらの人々の置かれている立場ほど大きな犠牲と反対を伴う環境を、ほかに想像することはできないであろう。さまざまな困難と危険のただ中にあってもなお、彼らは忠誠を保ちつづけていた。うち勝ちがたいようにみえる障害のためにクリスチャンは、キリストのうちにある真理に従うことのできない自分に言いわけをしようとするかもしれない。しかし、取り調べに耐える弁解をすることはできない。もし、これができるとすれば、彼は、神がその子らに、応じることのできないような救いの条件をお作りになったのだから、神は不公平だと証言するであろう。

神に仕えようと心に決めている人は、神のためにあかしする機会を見つけるであろう。まず神の国と神の義を求めようとしている者には、困難などはなんら妨げる力のないものである。彼は祈りとみことばの研究から与えられる力によって徳を求め、悪を捨てる。罪びとたちの反対に耐えたお方、信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、信者は侮辱と嘲笑に勇敢に立ち向かうのである。それぞれの事情に応じて十分な助けと恵みが、真実なことばをお語りになる方によって約束されている。彼は助けを求めてくる魂を、その変わることのないみ腕で抱擁される。この方に任せていれば、われわれは「わたしが恐れるときは、あなたに寄り頼みます」と言って、安心して休むことができる（詩篇56：3）。彼に信頼するすべての者に、神はみ約束を成就して下さるのである。 [1534]

救い主はご自身の模範によって、弟子たちが世にありながら世のものにならないでいられることを、お示しになった。主は世の欺瞞的な快楽を味わったり、世の風習に支配されたり、世の習慣に従ったりするために来られたのではなく、父のみこころを行うために、また失われた者を探して救うためにおいでになった。この目的を目の前におくと

き、クリスチャンはどんな環境にも汚されないでいることができる。身分が高かろうと低かろうと、環境がどうであろうと、彼は義務を忠実に果たすことによって、真の宗教の力をあらわすのである。

試みから逃れるのではなく、試みのただ中にいてクリスチャンの品性は磨かれる。拒絶や反対にさらされると、キリストの弟子はますます用心するようになり、一層熱心に偉大な助け主に祈るようになる。神の恵みによりきびしい試みに耐えると、忍耐強く、用心深く、不屈になり、また、神を信じる信仰が深まり、長続きするようになる。クリスチャン信仰の勝利とは、キリストに従う者が、苦しみを受けるが強められ、服従するが勝利し、たえず死に渡されるが生かされ、十字架を負うが、栄光の冠を受ける、まさに、このことである。

第45章　ローマからの手紙

本章はコロサイ人への手上、及びピリピ人への手紙に基づく

使徒パウロは、彼のクリスチャン経験の初期に、イエスに従う者たちについての神のみこころを学ぶ機会が特別に与えられた。彼は、「第三の天にまで引き上げられ」、「パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いた」。彼は「主のまぼろしと啓示」が豊かに与えられたことを知った。福音の真理の原則に対する彼の理解力は「あの大使徒たち」と同じであった（IIコリント12：2、4、1、11）。パウロは「人知をはるかに越えたキリストの愛」の「広さ、長さ、高さ、深さを」明瞭に、十分理解していた（エペソ3：19、18）。

パウロは幻の中で見たものを、すべて語ることはできなかった。聞いている者たちの中には、彼の言葉を誤用するかもしれない人々がいたからである。しかし彼に示されたことは、彼を指導者、賢明な教師として働くことができるようにさせ、また、彼がのちに教会に送ったメッセージの形を作ってくれた。幻の中で受けた印象は常に彼を離れず、それによって彼はクリスチャン品性の正しい模範を示すことができた。パウロが口頭により、また書簡によって伝えた使命は、それ以来、神の教会を助け、力づけてきた。この使命は今日の信者に、教会をおびやかす危険と、彼らが見分けなければならない誤った教理のことを、明瞭に語っている。

パウロは勧告や訓戒の手紙を人々に書き送ったが、パウロの願いは、彼らが「もはや子供ではないので……様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく」、「神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至る」ようにということであった。

パウロは、異教徒の社会に住むキリストの信徒たちに勧めている、「異邦人がむなしい心で歩いているように歩いてはならない。彼らの知力は暗くなり……心の硬化とにより、神のいのちから遠く離れ」ている。「賢くない者のようにではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい」（エペソ4：14、13、17、18、5：15、16）。彼は、「教会を愛してそのためにご自身をささげられた」キリストが「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎え」て下さる時を待ち望むようにと、信者たちを励ました（エペソ5：25、27）。

[1535] 人の力でなく神の力によって書かれたこれらのメッセージは、すべての者が学ばなければならない教訓を与えるものであり、たびたび繰り返されて益となるものである。これらのメッセージの中に、実際的な信仰が概説され、どの教会でも従わなければならない原則が示され、また永遠のいのちへ至る道が明らかにされている。

「コロサイにいる、キリストにある聖徒たち、忠実な兄弟たちへ」あてたパウロの手紙は、彼が捕らわれの身でローマにいたときに書かれたが、その手紙の中で彼は、コロサイにいる兄弟たちが、信仰を堅実に持ちつづけていることに対する彼の喜びについて述べている。この知らせをもたらしてくれたのはエパフラスで、彼は「あなたがたが御霊によっていだいている愛を、わたしたちに知らせてくれた」と使徒は書いた。更に彼は、「そういうわけで、これらの事を耳にして以来、わたしたちも絶えずあなたがたのために祈り求めているのは、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力とをもって、神の御旨を深く知り、主のみこころにかなった生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行って実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。更にまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがって賜わるすべての力によって強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍」ぶことであると述べた。

こうしてパウロは、コロサイの信者たちに彼の願いを書きあらわした。キリストに従う者の前に示されたこれらの言葉は、実に高い理想をもっている。それらはクリスチャン生活のすばらしい可能性を示し、神の子らが受ける祝福

には限りがないことを明らかにしている。神を知る知識をいよいよ増し加えることにより、彼らは力から力に進み、クリスチャン経験の高みから高みへ進み、ついに「神の栄光の勢い」によって、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて」いただくのである。

使徒は、神はキリストによって万物を創造され、人々のあがないを計画されたのであるとして、キリストを兄弟たちの前であがめた。宇宙にある諸世界を支え、また、森羅万象をことごとく規則的に配列し、たゆまず活動させておられる手は、彼らのために十字架にはりつけにされた手であると彼は言明した。「万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである」とパウロは書いた。「あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していた。しかし今では、御子はその肉のからだにより、その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである」。

神のみ子は、堕落した者たちを救い上げるために身をかがめられた。このために、罪のない天の世界をあとにし、み子を愛する99人をあとに残して、彼は、「われわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれ」るためにこの地上に来られた（イザヤ53：5）。み子はすべての点で兄弟たちと同じようにされた。彼はわれわれと同じように肉体をとられた。飢え、渇き、疲れることがどんなことであるかをご存じであった。食物によって養われ、睡眠によって元気を回復された。み子はこの地上では旅人であり、寄留者であった。この世にあったが、この世のものではなかった。み子は、現代の人々が誘惑され、試みられるのと同じように、誘惑や試みに会われたが、なお罪を犯さない生涯を送られた。優しく、憐れみ深く、同情深く常に他の人々を思いやられて、神のご品性をあらわされた。「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。……（それは）……めぐみとまこととに満ちていた」（ヨハネ1：14）。

異教の習慣に取り巻かれ、その影響下にあってコロサイの信者たちは、福音の単純さから引き離される危険にさらされていた。そしてパウロはこれについて警告を与え、彼らにキリストこそ唯一の安全な導き手であると言った。「わたしが、あなたがたとラオデキヤにいる人たちのため、また、直接にはまだ会ったことのない人々のために、どんなに苦闘しているか、わかってもらいたい。それは彼
[1536] らが、心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知るに至るためである。キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」。

「わたしがこう言うのは、あなたがたが、だれにも巧みな言葉で迷わされることのないためである。……このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受けいれたのだから、彼にあって歩きなさい。また、彼に根ざし、彼にあって建てられ、そして教えられたように、信仰が確立されて、あふれるばかり感謝しなさい。あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの霊力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである。彼はすべての支配と権威とのかしらで」ある。

キリストは人を惑わす者たちが現れることを預言しておられた。彼らの感化を受けて「不法がはびこ」り、「多くの人の愛が冷える」のである（マタイ24：12）。主は教会が敵の迫害からよりも、もっと、この悪からの危険にさらされるであろうと弟子たちに警告しておられた。パウロは繰り返し、こうした誤った教師たちに注意するよう信者たちに警告した。何よりもまず、この危険から彼らは身を守らなければならない。誤った教師たちを受け入れることにより、彼らは誤った道を進み、その過ちにより敵は霊的な知覚を鈍らせ、福音の信仰を新しく受け入れたばかりの人々の確信をぐらつかせるのである。キリストが標準であられ、彼らはそれによって、紹介される教理をテストしなければならなかった。キリストの教えと一致しないものは、すべて拒まなければならなかった。キリストは罪のた

めに十字架におかかりになり、死からよみがえられて、昇天された。これこそ彼らが学び、そして教えなければならない救いの科学であった。

キリスト教会を取り巻くさまざまな危険について神が警告されたことばは、今日われわれも聞かなければならない。弟子たちの時代に、人々は伝統や哲学によって聖書を信じる信仰を破壊させようとしたが、今日は、高等批評、進化論、心霊術、神知学、汎神論など心を楽します意見によって、義の敵は魂を禁じられた道へ導こうとしている。多くの人たちにとって、聖書は油のないランプのようなものである。なぜなら、彼らの心は誤解と混乱しか招かないような、推論的信念に向けられているからである。分析し、推測し、組み立て直す「高等批評」の作業が、神の啓示としての聖書についての信仰を破壊している。高等批評は、神のみことばから、人の生活を支配し、高め、霊感を与える力を奪っている。心霊術によって多くの人々は、欲望が最高の律法であり、放縦が自由であり、人は自分にだけ責任があるのだと信じるよう教え込まれている。

キリストに従う者は、使徒がコロサイの信者たちに警告した「巧みな言葉」に出会うであろう。また、心霊主義的な聖書解釈に出会うであろう。しかし、それらを受け入れてはならない。キリストに従う者の声は、聖書の永遠の真理を明確に語らなければならない。目をキリストに向け、キリストの教えに一致しない考えをことごとく捨てて、定められている道を着実に進んで行かなければならない。神の真理が彼の黙想、瞑想の主題でなければならない。聖書を、直接彼に語りかける神の声と思わなければならない。こうして彼は、聖なる知恵を見出すのである。

キリストの中にあらわされているような神についての知識は、救われる者たちがみな持っていなければならない知識である。これこそ、品性を変える作用をする知識である。生活の中に受け入れられると、それはキリストのみかたちに魂を造りかえるのである。これこそ、神が子らに受けさせようと招いておられる知識であって、これ以外はすべてむなしく、価値のないものである。

どの時代でも、どこででも、品性を築くための真の基礎は同じであって、それは神のみことばに包含されている原則である。唯一の安全で確かな規則は、神が言われるこ

[1537] とを行うことである。「主のさとしは正しくて」、「これらの事を行う者はとこしえに動かされることはない」（詩篇19：8、15：5）。使徒たちは、当時のいろいろの誤った学説に神のみことばで立ち向かい、「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない」と言った（コリント3：11）。

コロサイの信者たちは、改宗してバプテスマを受けた時、これまで彼らの生活の一部となっていたさまざまな信仰や慣習を捨てて、キリストに心から忠誠をつくすことを誓った。パウロは手紙の中でこの事を彼らに思い出させ、その誓いを守るために、彼らを支配しようとしている悪に立ち向かうよう、絶えず努力をしなければならないことを忘れないようにと勧めた。「このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。あなたがたはすでに死んだものであって、あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである」。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」（IIコリント5：17）。人はキリストの力によって、罪深い習慣の鎖を断ち切る。彼らは利己心を捨てる。不敬な者は敬虔になり、飲酒家は謹厳になり、放蕩者は純潔になる。サタンに似ていた人々が神のかたちに変わってくる。この変化はそれ自体が奇跡中の奇跡である。みことばによって起こる変化、それはみことばの最も深い奥義の1つである。われわれはそれを理解することができない。ただ、聖書に述べられているとおり、それが「あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである」と信じることができるだけである。

神のみ霊が思いと心を支配すると、改心した人は新しい歌をうたいだす。それは神のみ約束が彼の経験の中で成就されたからであり、彼の不義は許され、罪がおおわれたからである。彼は、神の律法を犯したことを神に対して悔い改め、人を義とするために死なれたキリストを信じたのである。彼は「信仰によって義とされたのだから、わたした

ちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得」たのである（ローマ5：1）。

しかし、この経験が自分の経験であるからといって、クリスチャンは自分のためになし遂げられたことに満足して、手をこまねいていてはならない。霊の王国に入ることを決意した人は、生まれ変わっていない力と熱情が、やみの王国の勢力に後押しされて、こぞって彼に反対することを知るであろう。彼は毎日、献身を新たにして、悪と戦わねばならない。古い習慣、罪を犯そうとする生来の傾向が、支配力をふるおうとするであろうから、これらに対していつも油断なく見張り、勝利を得るためにキリストの力によって戦わねばならない。

パウロはコロサイの人々にこう書いた、「だから、地上の肢体.....を殺してしまいなさい。.....あなたがたも、以前これらのうちに日を過ごしていた時には、これらのことをして歩いていた。しかし今は、これらいっさいのことを捨て、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を、捨ててしまいなさい。.....だから、あなたがたは、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者であるから、あわれみの心、慈愛、謙そん、柔和、寛容を身に着けなさい。互に忍びあい、もし互に責むべきことがあれば、ゆるし合いなさい。主もあなたがたをゆるして下さったのだから、そのように、あなたがたもゆるし合いなさい。これらいっさいのものの上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。あなたがたが召されて一体となったのは、このためでもある。いつも感謝していなさい」。

コロサイ人への手紙は、キリストの奉仕に携わる者たちにとって最も価値のある教訓に満ちている。その教訓は、救い主を正しくあらわす者の生活に見られる、目的の単純さと目標の高尚さを示している。信者は自分の向上に妨げとなるものや、その狭い道から他の人の足をそらすものをすべて断ち切り、日常の 生活において慈悲、親切、謙遜、 [1538]
柔和、寛容、キリストの愛をあらわすのである。

もっと高く、もっと純潔で、もっと崇高な生活の力が、われわれに大いに必要である。われわれは世俗のことに心

を用いすぎ、天の国について考えることがあまりにも少ない。

クリスチャンは、神が彼のために定められた理想に到達しようとする努力において、どんなことにも絶望してはならない。キリストの恵みと力によって、道徳的、霊的完全さがすべての者に約束されている。イエスは力のみなもと、いのちの泉である。イエスはわれわれをみことばに導き、いのちの木から、罪に悩む魂をいやす葉をわれわれに提供される。また、われわれを神のみ座に導き、われわれの口に祈りを入れられる。それによってわれわれは、神ご自身と親しく接触するのである。イエスはわれわれのために、強力な天の軍勢を動員される。1歩1歩、われわれは主の生きた力に触れるのである。

神は「あらゆる霊的な知恵と理解力とをもって、神の御旨を深く知り」たいと思っている者たちの前進を制限なさることはない。祈り、警戒し、知恵と理解力を発達させることによって、彼らは、「神の栄光の勢いにしたがって賜わるすべての力によって強くされ」るのである。こうして彼らは、他の人々のために働く準備をする。きよめられ、聖別された人々を、主の助け手となさることが救い主の目的である。この大いなる特権にあずかり、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて下さった」神に感謝したいものである。「神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった」。

ピリピ人へのパウロの手紙は、コロサイ人への手紙のように、彼がローマで捕らわれの身であったときに書かれた。ピリピの教会はエパフロデトをつかわし、パウロに贈り物を届けていたが、パウロはエパフロデトを「わたしの同労者で戦友である兄弟、また、あなたがたの使者としてわたしの窮乏を補ってくれた」人と呼んでいる。エパフロデトは、ローマにいる間に「ひん死の病気にかかったが、神は彼をあわれんで下さった。彼ばかりではなく、わたしをもあわれんで下さったので、わたしは悲しみに悲しみを重ねないですんだのである」とパウロは書いた。エパフロデトが病気だと聞いて、ピリピの信者たちは彼の身を案じたので、彼は信者たちのもとへ帰る決心をした。「彼は、あなたがた一同にしきりに会いたがっているから」、また

「その上、自分の病気のことがあなたがたに聞えたので、彼は心苦しく思っている。……そこで、大急ぎで彼を送り返す。これで、あなたがたは彼と再び会って喜び、わたしもまた、心配を和らげることができよう。こういうわけだから、大いに喜んで、主にあって彼を迎えてほしい。また、こうした人々は尊重せねばならない。彼は、わたしに対してあなたがたが奉仕のできなかった分を補おうとして、キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになったのである」とパウロは書いた。

エパフロデトに託してパウロは、ピリピの信者たちに手紙を送ったが、その中で彼らからの贈り物のお礼を述べている。すべての教会の中で、ピリピの教会が一番惜しみなくパウロの必要を満たしてくれていた。「ピリピの人たちよ。あなたがたも知っているとおり、わたしが福音を宣伝し始めたころ、マケドニヤから出かけて行った時、物のやりとりをしてわたしの働きに参加した教会は、あなたがたのほかには全く無かった。またテサロニケでも、一再ならず、物を送ってわたしの欠乏を補ってくれた。わたしは、贈り物を求めているのではない。わたしの求めているのは、あなたがたの勘定をふやしていく果実なのである。わたしは、すべての物を受けてあり余るほどである。エパフロデトから、あなたがたの贈り物をいただいて、飽き足りている。それは、かんばしいかおりであり、神の喜んで受けて下さる供え物である」とパウロは手紙の中で述べた。

「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している。そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。わたしが、あなたがた一同のために、そう考えるのは当然である。それは、わたしが獄に捕われている時にも、福音を弁明し立証する時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者として、わたしの心に深く留めているからである。わたしが……どんなに深くあなたがた一同を思っていることか、それを証明して下さるかたは神である。わたしはこ [1539]

う祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るように」。

神の恵みは、捕らわれの身であったパウロを支えて、試練の中で喜んでいることができるようにした。パウロはこの監禁が福音をひろめる結果になったと、信仰と確信に満ちてピリピの兄弟に書いている。「さて、兄弟たちよ。わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい。すなわち、わたしが獄に捕われているのはキリストのためであることが、兵営全体にもそのほかのすべての人々にも明らかになり、そして兄弟たちのうちの多くの者は、わたしの入獄によって主にある確信を得、恐れることなく、ますます勇敢に、神の言を語るようになった」とパウロは述べた。

パウロのこの経験の中に、われわれのための教訓がある。それは神の働かれる方法を示しているからである。主は、われわれには失敗であり敗北だと思われることから、勝利をもたらすことがおできになる。われわれは、神を忘れ、見えないものを信仰の眼で見上げることをせず、目に見えるものを見つめるという危険がある。不幸や災難に見舞われると、すぐさま神は無視しておられるとか残酷だと言って神をとがめる。神が、ある方面でのわれわれの有用さを断ち切ることが好ましいとお考えになることがあるが、われわれは、こうして神がわれわれの益となるよう働いておられることを考えてみもせずに嘆く。われわれは、こらしめが神の偉大なご計画の一部であり、苦悩のむちを受けてクリスチャンは、時には活発な奉仕に携わっている時よりももっと、主のために多くの事をすることができるということを学ぶ必要がある。

クリスチャン生活の模範として、パウロはピリピ人にキリストを指し示した。「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くし

て、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」。

パウロは続けた、「わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたがいつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい。それは、あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中にあって、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星のようにこの世に輝いている。このようにして、キリストの日に、わたしは自分の走ったことがむだでなく、労したこともむだではなかったと誇ることができる」。

これらの言葉は、努力しているすべての魂に役立つようにと記された。パウロは理想の標準をかかげて、それに到達する方法を教えている。「自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけ……るのは神で」あると彼は言っている。

救いを得る仕事は協同組合のようなもの、すなわち、共同作業である。神と悔い改めた罪人との間に協力がなければならない。これは品性における正しい原則を形成するのに不可欠である。人は完全を目指すにあたって、妨げとなることを克服するよう、ひたすら努力しなければならない。しかし、これを成功させるために全く神により頼むのである。人間の努力だけでは不十分である。神の力に助けられなければ全く効果がない。神が働かれ、また、人も働くのである。誘惑に抵抗するのは人の仕事であり、そのための力を神からいただくのである。一方には無限の知恵と憐れみと力があるが、他方には、弱さ、罪深さ、全くの無力さがある。 [1540]

神はわれわれが自己にうち勝つことをお望みになっている。しかし、神は、われわれの同意と協力がなければ、われわれを助けて下さることができない。聖霊は人に与えられた力と能力を用いて働かれる。われわれは自分では、意志と願望と性向とを神のみ旨に一致させることができ

ない。しかし、もしわれわれが喜んでそうするものになりたいと望むなら、救い主はわれわれのためにこれをなし遂げ、「神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」て下さる（IIコリント10：5）。

健全で均斉のとれた品性を築きたいと思う者、よく釣り合いのとれたクリスチャンになりたいと思う者は、すべてをささげて、キリストのために全力をつくさなければならない。なぜなら、あがない主は、分割された奉仕はお受け入れにならないからである。日毎に服従の意味を学ばなければならない。神のみことばを研究し、その意味を学び、その教えに従わなければならない。こうして、クリスチャンとしての卓越した標準に到達できるのである。神は毎日共に働いて下さり、最後の試みの時に耐えられるような品性を完成させて下さる。こうして信者は、福音が堕落した人間にできることを示し、人々や天使たちの前で、崇高な試みを日毎になし遂げていくのである。

「わたしはすでに捕らえたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」とパウロは書いた。

パウロは多くの事をした。キリストに忠誠をささげて以来、彼の生涯はたゆみない奉仕に満たされていた。町から町へ、国から国へと旅を続け、十字架の物語を語り、福音へと改宗者を導き、教会を設立した。これらの諸教会のことを彼は絶えず心にかけ、指導の手紙を数多く書き送った。時々パウロは自分の手仕事に従事して生活費をかせいだ。しかし、どんなに仕事に忙殺されても、パウロは、上に召して下さる神の賞与を得ようと努めるという、1つの大きな目的を見失わなかった。ダマスコの入口でご自身をあらわして下さったかたに忠誠をつくすという、1つの志を固く守り通した。どんな力も彼をこの目的からそらすことはできなかった。カルバリーの十字架をあがめること、これこそパウロの言葉と行動を起こさせる動因、彼を全く夢中にさせる動機であった。

辛苦と困難に直面しながらパウロを前進させたその偉大な目標こそ、すべてのクリスチャンの働き人を導き、神の

奉仕に自分のすべてをささげさせるものである。働き人の注意を救い主からそらすために、世的な誘惑がふりかかるであろう。しかしクリスチャンの働き人は、ひたすら目標に向かって進み、神のみ顔を見る望みは、その望みを達成するために必要な努力と犠牲のすべてに値するものであることを、この世に、天使たちに、また人々に示さなければならない。

パウロは捕らわれの身であったが、失望しなかった。それどころか、彼がローマから諸教会に書き送った書簡には、勝利の調べが鳴り響いている。「主にあっていつも喜びなさい」と彼はピリピ人に書いた。「繰り返して言うが、喜びなさい。……何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい」。 [1541]

「わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう。……主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように」。

第46章　自由の身になって

ローマにおけるパウロの働きは祝福されて、多くの魂を改心に導き、信者たちを力づけ、励ましたが、その反面、暗雲が次第につのり、パウロの安全ばかりでなく、教会の繁栄をもおびやかすようになった。ローマに着いたときから、パウロは近衛兵の隊長の監督下におかれていた。公正で、高潔な人で、この人の寛容さのおかげでパウロは比較的自由に、福音の働きを続けさせてもらったのである。しかし、2年間の囚われの期間が終わる前に、この隊長は別の役人と交代させられて、使徒はその役人には特別な好意を期待できなかった。

ユダヤ人たちは今や、これまでより一層活発にパウロ反対の運動を続け、ネロが第二の妻にした放とうな女を有力な後援者にすることができた。この女はユダヤ教の改宗者だったので、キリスト教の戦士の殺害計画を手助けするのに、彼女のすべての影響力を貸した。

パウロはカイザル〔皇帝〕に上訴していたが、カイザルの公正を望むことはほとんどできなかった。ネロは前任者の誰よりも不品行で、性質が浅薄で、同時に狂暴な残忍性があった。これ以上専制的な統治者に政権をゆだねようとしてもできなかったであろう。彼の統治の第1年には、正当な帝位継承者である腹違いの弟の毒殺という汚点がつけられた。ネロは、悪徳と罪悪の1つの深みから次の深みへと堕落をつづけ、ついには自分の母親を、ついで自分の妻を殺してしまった。彼はあますところなく非道を行い、悪徳行為に身を落とした。彼は高潔な人々の心に、嫌悪と軽べつ心を起こさせるだけであった。

ネロの宮廷で行われた不正の数々は、あまりにも下劣な、また、あまりにも恐ろしいもので、到底、言葉には言い表せないほどである。彼の破廉恥な邪悪さは、無理やり罪の共犯者にさせられた多くの人々にも、いや気を起こさせ、胸を悪くさせた。彼が次にはどんな極悪非道を持ち出すかと、彼らは絶えず戦々恐々としていた。ネロのこのよ

うな犯罪にもかかわらず、臣下の忠誠はゆるぎなかった。ネロは文明世界全体の絶対的な統治者として認められていた。それればかりか、彼は神の栄誉を受ける者とされ、神としてあがめられた。

人間的な判断からすれば、パウロがこのような裁判官から有罪を宣告されることは確実だった。しかし使徒は、自分が神に忠誠をつくしているかぎり、恐れるものは何もないと思った。過去においてパウロを保護してくださった方は、今もなお、ユダヤ人の悪意と皇帝の権力から彼を守ることがおできになった。

実際、神は、ご自分のしもべを守られた。パウロの審問にあたって、彼に対する告訴は支持されなかった。そして一般の予期に反して、ネロは自分の性格とは全くかけ離れた正義を尊重し、囚人に無罪を宣告した。パウロのなわめは解かれ、彼は再び自由の身となった。

もし彼の裁判がもうしばらく延期されるか、またはなんらかの理由で翌年までローマに引き止められていたなら、彼は多分その時起きた迫害によって殺されていたであろう。パウロが捕らわれている間に、キリスト教への改宗者が非常に多くなったので、官憲の注意をひき、また敵意をひき起こした。特に宮中から改宗者が出たために、皇帝の怒りにふれ、皇帝はすぐさま、キリスト教徒を彼の無情な残虐行為の対象とする口実を見つけた。

ちょうどこのころ、ローマに大火が起こり、市のほとんど半分が焼けた。この大火はネロ自身が火をつけたのだ [1542]
といううわさが流れたが、彼はこの嫌疑を避けるために、家のない者や困っている者たちを助けることによって、非常な寛大さをよそおった。しかし彼は、その罪を犯したとして非難された。人々が興奮し、怒ったので、ネロは身の疑いを晴らすために、また、自分が恐れ憎んでいる階級を町から一掃するために、この非難をキリスト教徒に向けた。彼のたくらみは成功し、キリストに従う幾千の男、女、子供たちが、残酷にも殺された。

パウロはこの恐ろしい迫害から助かった。彼は、釈放されるとすぐローマを去っていたからである。この最後の自由の期間を、彼は勤勉に利用して、諸教会のために働いた。彼は、ギリシヤ人の教会と東方の諸教会とを一層しっかり結びつけようと努め、また、信仰を堕落させようとし

のび寄ってくる誤った教理に対して、信者たちの心を強めることに努めた。

パウロは試練と不安を耐え抜いたが、そのために体力が次第にそこなわれていた。年令から来る種々の疾患がふりかかってきた。彼は今、自分が最後の仕事をしているということを感じた。そして、働く時間が短くなるにつれて、彼の努力はますます熱心なものとなった。彼の熱意には限界がないように見えた。断固たる目的を持ち、敏速に行動し、強い信仰を抱いて、彼は多くの土地を教会から教会へと旅し、信者たちが忠実に働いて魂をイエスに導くように、また、既にその時でさえ彼らが体験しはじめていた試みの時に、彼らがキリストのために忠実なあかしを立てて、福音に固くとどまることができるように、力のかぎりあらゆる手段をつくして、信徒たちの手を強めることに努力した。

第47章　最後の逮捕

ローマで釈放されてのちの、パウロの諸教会における働きは、敵の目に留まらずにはいなかった。ネロのもとに迫害が起きて以来、クリスチャンはどこへ行っても禁止された宗派であった。しばらくすると、信じようとしないユダヤ人たちは、ローマの大火を扇動したという罪を、パウロに負わせようと考えついた。彼らの中のだれ1人、パウロにその罪があるなどとは一瞬たりとも考えたことはなかった。しかし少しでも、もっともらしく見えさえすれば、このような告発によってパウロの運命が定まることを、彼らは知っていた。彼らの活動によって、パウロは再び捕らえられ、最後の投獄へと追いたてられた。

ローマへの2度目の船旅には、パウロは以前の仲間数人を伴っていた。他の者たちも、彼と運命を共にしたいとせつに望んだが、パウロは、彼らの生命を危険にさらさせることを許さなかった。彼の前途の予想は、前回の投獄の時よりずっと不利なものであった。ネロのもとに行われた迫害のために、ローマにいたクリスチャンの数はひどく減ってしまっていた。何千もの人々が信仰のために殉教し、多くの者が町を去っていて、残った人々は非常に意気消沈し、おびえていた。

ローマに着くと、パウロは陰気な地下牢に入れられた。彼は、人生行路が終わるまで、そこにとどまることになった。都市と国家に対する、最も卑劣で最も恐るべき罪悪を扇動したという告発を受けて、パウロは天下ののろいのまとであった。

使徒パウロの重荷を分かち合っていた少数の友人たちは、今、ある者は彼を見捨てて、また他の者は諸教会への任務を帯びて、彼のもとを去りはじめた。最初に去った者はフゲロとヘルモゲネであった。それからデマスが、困難と危険の雲行きが濃くなっていくのにろうばいして、迫害されている使徒を見捨てた。クレスケンスはパウロに遣わされてガラテヤの教会へ行き、テトスはダルマテヤに、

テキコはエペソに行った。パウロはこの経験をテモテに書き送り、「ただルカだけが、わたしのもとにいる」と述べた。（Ⅱテモテ4：11）。使徒パウロは、老齢と辛苦と病気
[1543] とのために弱り、ローマのしめった暗い地下牢に閉じこめられていたこの時ほど、兄弟たちの奉仕を必要とした時はなかった。愛する弟子であり忠実な友であったルカの奉仕は、パウロにとって大きな慰めであり、彼のおかげでパウロは、兄弟たちや外の世界と連絡をとることができた。

この試みの時にパウロの心は、オネシポロがしばしば訪ねてくれたことで励まされた。心の温かいこのエペソ人は、力の限りをつくして、獄中の使徒の重荷を軽くした。オネシホロ自身は自由であったが、彼の愛する師は真理のためにつながれていた。だから彼は、パウロの運命をもっと耐えやすいものにするためには、どんな努力も惜しまなかった。

使徒は、彼の書いた最後の手紙の中で、この忠実な弟子についてこう語っている。「どうか、主が、オネシポロの家にあわれみをたれて下さるように。彼はたびたび、わたしを慰めてくれ、またわたしの鎖を恥とも思わないで、ローマに着いた時には、熱心にわたしを捜しまわった末、尋ね出してくれたのである。どうか、主がかの日に、あわれみを彼に賜わるように」（Ⅱテモテ1：1618）。

愛と同情への欲求は、神ご自身によって人の心に植えつけられる。キリストは、ゲッセマネの園での苦悩の時、弟子たちの同情を切望された。そしてパウロも、困難や苦しみなどは気にかけないように見えたが、同情や交わりをせつに求めていた。オネシポロの訪問は、パウロが孤独で見捨てられていた時にも彼がパウロに誠実だったことをあかしするものであり、他の人々のために奉仕の生涯をささげてきた使徒を、喜ばせ、励ましたのである。

第48章　皇帝ネロの前に立つパウロ

パウロが、裁判を受けるためにネロ皇帝の前に出頭するよう命じられた時、それは確実に死が近づいたことを予期させた。彼に負わされている罪の重大性と、クリスチャンに対する一般の憎悪心とから、好結果を期待できる理由はほとんどなかった。

ギリシヤ人やローマ人の間では、告発された者は、法廷で自分のために嘆願してくれる弁護者を雇う特権が与えられるのが常であった。議論によって、感動させるような雄弁によって、あるいは、嘆願、祈り、涙によって、そのような弁護者はしばしば、囚人に有利な決定を獲得し、あるいはこの事がうまくもかなかった場合でも、判決の厳しさを和らげることに成功したのである。しかしパウロがネロの前に引き出された時、あえて彼に助言したり、彼を弁護したりしようとする者はだれもいなかった。彼に対する告発や、彼が自ら弁明した議論を、記録にとどめてくれるような友達さえそばにはいなかった。ローマのクリスチャンの中には、この試練の時に彼の弁護を申し出る者は1人もなかった。

この事件の唯一の確かな記録は、パウロ自身によって、テモテへの第2の手紙の中に残されている。「わたしの第1回の弁明の際には、わたしに味方をする者はひとりもなく、みなわたしを捨てて行った。どうか、彼らが、そのために責められることがないように。しかし、わたしが御言を余すところなく宣べ伝えて、すべての異邦人に聞かせるように、主はわたしを助け、力づけて下さった。そして、わたしは、ししの口から救い出されたのである」（IIテモテ4：16、17）。

ネロの前に立つパウロ。これはなんと著しい対照であろう。自らの信仰のために答弁しようとしている神の人パウロの前にいる、この傲慢な君主は、地上の権力と権威と富の絶頂に達していたが、同時に、罪と不義の最低の深みへ落ちていた。力と偉大さにおいて、彼に並ぶ者はなかっ

た。彼の権威を疑う者や、彼の意志に逆らう者は、だれもいなかった。王たちは彼の足もとに自分たちの冠を脱いだ。強力な陸軍は彼の命令で行進し、彼の海軍軍旗は勝利を予示するものであった。彼の像が法廷に建てられ、元老院議員の布告や裁判官の判決は、王の意志をただそのまま
[1544] 繰り返したものにすぎなかった。幾百万の人々が彼の命令に服して頭を下げた。ネロの名は世界を震え上がらせた。彼の不快を招くことは、財産、自由、生命を失うことであり、彼の不きげんは疫病よりもっと恐ろしいものであった。

金はなく、友もなく、弁護者もなく、年老いた囚人パウロはネロの前に立った。皇帝の顔つきには、内面の荒れ狂う激情の恥ずべき記録が現れていたが、被告の顔には、神と共にある平和な心が現れていた。パウロの経験は、貧困と克己と苦悩の経験であった。敵は絶えず、偽り、非難、悪口を並べてパウロをおどそうとしたが、それにもかかわらずパウロは、恐れなく十字架の旗を高く掲げてきたのである。パウロは主のように、家のない放浪者であり、主と同様、人類を祝福するために生きてきた。気まぐれで激情的で放縦な暴君ネロが、この神の子の品性と動機をどうして理解し、あるいはその真価を認められようか。

広い法廷には、気のはやる、落ち着きのない群衆が集まっていて、行われることをもれなく見聞きしようと、前方へと押し合いへし合いしていた。そこには身分の高い者も低い者もいた。金持ちも貧しい人も、教養のある者も無学な者も、高慢な者も謙遜な者もいたが、みな同じように、人生と救いについての真の知識に欠けていた。

ユダヤ人はパウロに対して、騒乱扇動や異端など古くからの告発を持ち出し、また、ユダヤ人もローマ人も、ローマ市の火事をそそのかしたのは彼であると訴えた。パウロは、自分に対してこれらの告発がなされている間、少しも取りみださず平静であった。人々や裁判官は、驚いて彼を見つめた。彼らは多くの裁判に出席し、多くの犯罪者を見てきていたが、自分たちの目の前にいる囚人のように神々しい冷静さを帯びた人物は見たことがなかった。裁判官たちの鋭い目は、囚人たちの顔つきを語みとることになれていたが、パウロの顔には何のやましい証拠も読みとれな

かった。パウロが自分のために弁護することを許されたとき、一同は熱心な興味をもって耳を傾けた。

もうひとたびパウロは、不思議そうな群衆の前に十字架の旗を掲げる機会を得る。ユダヤ人、ギリシヤ人、ローマ人、また各地からの他国人などから成る、目の前の群衆を見つめる時、パウロの心は、彼らを救いたいという熱烈な願いにかきたてられる。パウロは、その場の状況、自分をとり巻いている危険、もう間近に思える恐ろしい運命を忘れる。彼は、罪人のために神のみ前で懇願しておられるイエスだけを見る。人間の雄弁と力以上のものをもって、パウロは福音の真理を示す。彼は、堕落した人類のためにささげられた犠牲を、聴衆に指し示す。また、人類のあがないのために無限の値が支払われたことを語る。人が神のみ座にあずかるための準備がなされた。天の使者たちによって、地は天とつなげられ、人々の行為はすべて、良いものも悪いものも、正義であられる神の目には明らかである。

真理の唱道者はこのように訴える。信仰のない者たちに囲まれた信仰者、不忠実な者たちの間の忠実な者として、パウロは神の代理者として立つ。彼の声は天からの声のようである。言葉にも顔の表情にも、恐れや悲しみや失望の色はない。無罪を強く確信し、真理の武具を着て、パウロは自分が神の子であることを喜ぶ。彼の言葉は、戦場の勝ちどきより大きな、勝利の叫びのようである。パウロは、自分が生涯をささげてきた大目的を、決して失敗することのない唯一のものだと言明する。たとえ彼が滅びても、福音は滅びない。神は生きておられる。そして神の真理は勝利するのである。

その日彼を見つめていた多くの人々には「彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた」（使徒行伝6：15）。

一同はそれまでこのような言葉を聞いたことがなかった。これらの言葉は心の琴線にふれて、最もかたくなな者たちの心をもゆり動かした。明瞭で説得力のある真理は、誤りをくつがえした。光は多くの人々の心を照らし、彼らはその後喜んでその光に従った。その日に語られた数々の真理は、国々をゆり動かし、各時代を生き続けて、それらを語った唇が殉教者の墓の中で沈黙してしまっても、人々の心に感化を及ぼすのであった。

ネロは、この機会に聞いたような真理を、それまで聞 [1545]

いたことがなかった。自分自身の生活の途方もない罪が、これほど彼に示されたことは、それまでなかった。天の光が、罪にけがれた彼の魂の部屋にさし込み、彼は、この世の支配者である自分も、最後には罪を責められ、自分の行為にふさわしい報いが与えられるさばきの場に立つことを思って、恐怖にうちふるえた。彼は使徒の神を恐れ、だれも告発を裏づけることのできなかったパウロに、あえて宣告をくだすことを恐れた。畏怖の念によってネロの残忍な精神は一時抑制された。

一瞬間、不義でかたくなネロに天が開かれ、その平安と純潔が望ましいものに思われた。その瞬間に憐れみの招きが、彼にさえも差しのべられた。しかし、神のゆるしを受けることができるという考えが、ネロの心に受け入れられたのは、ほんの一瞬のことであった。それからパウロを牢に連れ戻すようにと命令が出された。そして、神の使者に対して戸が閉ざされた時、ローマの皇帝には、悔い改めのとびらが永久に閉ざされたのであった。天からの光線は、彼を包んでいた暗黒を再び貫き通すことはなかった。彼は、まもなく、報いとしての神のさばきを受けるのであった。

こののち間もなく、ネロはギリシヤへの悪名高い遠征に出帆し、そこで、卑劣で品位を落とす軽薄な行動によって、自分自身と王国とに恥辱をもたらした。彼は非常に華麗なさまでローマに帰り、廷臣に取りまかれて、不快を催させるような放とうにふけった。このばか騒ぎの最中に、通りに騒々しい声が聞こえた。原因を知るために使者がつかわされたが、恐ろしい報告をもって帰ってきた。軍の統率者であるガルバが、急速にローマへと進軍しつつある、市内では既に反乱が起きた、町の通りは怒り狂った群衆でいっぱいになり、彼らは皇帝とその一味を殺してやるとおどしながら、宮殿へと押し寄せてきている、というのだった。

この危機の時にあたって、ネロは、信仰深いパウロのように、より頼むことのできる力強く憐れみ深い神を持っていなかった。群衆の手にかかって耐えなければならない苦しみと、おそらく受ける拷問とを恐れて、この哀れな暴君は、自分の手で自分の命を絶とうと思った。しかし、そのきわどい時に、彼は勇気がくじけた。男らしさを全く失っ

たネロは、不名誉にも町から逃げ出し、数マイル離れた田舎の邸宅に身をひそめようとした。しかしこれもむだであった。ネロの隠れ家はすぐに見つけられた。追跡の騎兵が近づいた時、ネロは奴隷を呼び出し、彼の手を借りて自分自身に致命傷を負わせた。こうして暴君ネロは、32才の若さで死んだのであった。

第49章　パウロの最後の手紙

本章はテモテへの第2の手紙に基づく

ローマ皇帝の法廷から、パウロは自分の独房に帰ってきた。彼は自分がほんの一時的な執行猶予を得たことを悟った。彼は、敵が、彼の死を達成するまでは休まらないことを知っていた。しかし彼はまた、しばらくのあいだ真理が勝利したことも知っていた。彼に聞き入っていた大勢の群衆に、十字架にかけられ、よみがえられた救い主を宣べ伝えたことは、それだけで勝利であった。その日、1つの働きが始まったのである。その働きは、発展し、強くなり、ネロやその他のいかなるキリストの敵がそのじゃまをしたり、破壊しようとしたりしても、できないのであった。

くる日もくる日も、陰うつな独房に座り、ネロの一言で、あるいは1度うなずくだけで、自分の命がささげられることを知って、パウロはテモテのことを思い、彼を呼びにやろうと決めた。テモテにはエペソの教会の世話がゆだねられていた。それでパウロがローマへ最後にやって来たときにも、テモテは後に残されていたのであった。パウロとテモテは並々ならぬ深い、強い愛情で結ばれていた。テモテは改心して以来、パウロとともに骨折りと苦難を分かち合い、このふたりの間の友情はますます強く、深く、きよいものとなり、テモテは、愛し尊敬する父親に対する息子のように、年老い、やつれた使徒に対した。孤独と寂しさの中で、パウロがテモテに会いたいと願ったのも、当然であった。 [1546]

最も好都合な事情のもとでも、テモテが小アジアからローマに着くには数か月かかったにちがいない。パウロは自分の命が不確実なことを知っていたので、テモテの会いに来るのが遅すぎることにならないかと恐れた。彼には、大きな責任がゆだねられているこの青年に与えたい、大切な勧告と教えがあった。そこで、テモテには遅れず来るよう勧める一方、パウロは、言わずに終わることのないよう

に、死に臨んでのあかしを書いた。パウロの魂は、福音による彼の息子と、息子にゆだねられている教会への、愛情に満ちた心づかいでいっぱいで、彼はテモテに、その聖なる任務を忠実に果たすことの重要性をしっかり教えたいと思った。

パウロはあいさつの言葉で手紙を始めた。「父なる神とわたしたちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とが、あなたにあるように。わたしは、日夜、祈の中で、絶えずあなたのことを思い出しては、きよい良心をもって先祖以来つかえている神に感謝している」。

それから使徒はテモテに、堅固な信仰を持つようにと勧めた。「こういうわけで、あなたに注意したい。わたしの按手によって内にいただいた神の賜物を、再び燃えたたせなさい。というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。だから、あなたは、わたしたちの主のあかしをすることや、わたしが主の囚人であることを、決して恥ずかしく思ってはならない。むしろ、神の力にささえられて、福音のために、わたしと苦しみを共にしてほしい」。パウロはテモテに、彼自身が、「福音によっていのちと不死とを明らかに示された」方の力を宣べ伝えるために、「聖なる招きをもって」召されたということを、覚えていてほしいと述べ、「わたしは、この福音のために立てられて、その宣教者、使徒、教師になった。そのためにまた、わたしはこのような苦しみを受けているが、それを恥としない。なぜなら、わたしは自分の信じてきたかたを知っており、またそのかたは、わたしにゆだねられているものを、かの日に至るまで守って下さることができると、確信しているからである」と言明した。

パウロは長い奉仕の期間をとおして、救い主への忠誠がぐらついたことは決してなかった。どこにいようとも――むずかしい顔をしたパリサイ人や、あるいはローマの役人たちの前であろうと、ルステラでの怒り狂う群衆や、マケドニヤの獄屋での囚人たちの前であろうと、難破船の上であわてふためいている水夫たちを説得している時であろうと、ネロの前にただひとり立って弁明している時であろうと――パウロは自分の擁護する主義を決して恥としなかった。パウロのクリスチャン生活の一大目的は、かつては

その名を軽蔑していた方に仕えることであった。どんな反対や迫害も、彼をこの目的から引き離すことはできなかった。努力によって強められ、犠牲によって純粋にされた信仰は、彼を支え、そして強めた。

「そこで、わたしの子よ。あなたはキリスト・イエスにある恵みによって、強くなりなさい。そして、あなたが多くの証人の前でわたしから聞いたことを、さらにほかの者たちにも教えることのできるような忠実な人々に、ゆだねなさい。キリスト・イエスの良い兵卒として、わたしと苦しみを共にしてほしい」。

神の本当の牧師は、困難や責任を回避しない。彼は、神の力を心から求める人々を決して失望させることのない源であられる神から、誘惑に立ち向かってそれに勝利できるように、また、神から与えられた義務を果たすことができるように、力を引き出すのである。彼の受ける恵みの力は、神とみ子を知る彼の力量をひろげる。彼は主に受け入れられる奉仕をしたいと切望して出て行く。そしてクリスチャンの道を進むにつれて、彼は「キリスト・イエスにある恵みによって、強くな」るのである。この恵みによって
[1547] 彼は、聞いた事を忠実にあかしすることができるようになる。彼は神から受けた知識を軽蔑したり、おろそかにしたりしないで、この知識を忠実な人々にゆだね、次には彼らが他の人々へ伝えるのである。

このテモテへのパウロの最後の手紙の中で、パウロはこの若い働き人の前に高い理想をかかげ、キリストに仕える者として彼にゆだねられている義務を指し示した。「あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい」と使徒は書いた。「あなたは若い時の情欲を避けなさい。そして、きよい心をもって主を呼び求める人々と共に、義と信仰と愛と平和とを追い求めなさい。愚かで無知な論議をやめなさい。それは、あなたが知っているとおり、ただ争いに終るだけである。主の僕たる者は争ってはならない。だれに対しても親切であって、よく教え、よく忍び、反対する者を柔和な心で教え導くべきである。おそらく神は、彼らに悔改めの心を与えて、真理を知らせ」て下さるであろう。

使徒は、教会に入りこもうとしている偽教師について、テモテに警告した。「このことは知っておかねばならない。終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者……信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう。こうした人々を避けなさい」。

彼はさらに続けた。「悪人と詐欺師とは人を惑わし人に惑わされて、悪から悪へと落ちていく。しかし、あなたは、自分が学んで確信しているところに、いつもとどまっていなさい。あなたは、それをだれから学んだか知っており、また幼い時から、聖書に親しみ、それが、……救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるのである」。神は、この世にある悪との戦いに勝つための手段を、豊かに与えておいでになる。聖書は、われわれが戦いのために身支度をすることができる兵器庫である。われわれは真理の帯を腰にしめなければならない。正義の胸当をつけなければならない。信仰のたてを手に持ち、救いのかぶとを深くかぶり、み霊の剣、すなわち神のことばでもって、罪の障害やもつれを切り開いて行かなければならない。

パウロは教会の前には厳しい危難の時があることを知っていた。彼は、教会の責任をゆだねられている人々が、忠実に熱心に仕事をしなければならないことを知っていたので、テモテにこう書き送った。「神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい」。

テモテのような熱心で忠実な者に、改めてこのような厳粛な訓告がなされていることは、福音伝道の働きの重要性と責任の重さを、はっきり証明するものである。パウロはテモテを神の法廷に呼び出し、人の言い習わしや習慣では

なくみことばを宣べ伝えるように、大会衆の前でも、個人的な集まりでも、道ばたでも炉辺でも、友人にも敵にも、安全な時も、困難や危険、非難や損害にさらされている時も、機会があるときにはいつでも神のためにあかしをたてるように、と命じる。

テモテの性質が穏やかで従順なために、彼の働きの大事な部分を避けるのではないかと案じて、パウロは彼に、罪は忠実に譴責するように、また、ひどい悪事を行っている者は厳しく譴責するようにと、熱心に説いた。しかもテモテはこれを、「あくまでも寛容な心でよく教え」なければならなかった。彼はキリストの忍耐と愛をあらわし、みことばの真理によって自分の譴責を説明し主張するのであった。

罪を憎んで譴責しながら、同時に罪人をあわれみ、やさしさを示すということは、むずかしいことである。われわれが、心と生活を聖潔の域に到達させようと熱心に努力すればするほど、罪に対するわれわれの知覚は鋭敏になり、正しいものからの逸脱を認めぬ気持ちがいよいよ強まってくる。われわれは、不正な行いをする者に過度に厳しくならぬよう注意しなければならないが、しかしまた、罪のはなはだしい罪深さというものを見落とすことのないよう、気をつけなければならない。過ちを犯している者に、キリストのような忍耐と愛を示すことは必要であるが、過ちに寛大すぎると、譴責を受けるほどでもないと彼に思い込ませてしまい、その譴責を不必要なもの、不当なものとして拒むようにさせてしまう危険がある。 [1548]

福音を伝える牧師たちは時々、誤りに陥った者たちに対して寛容なあまり、罪を黙認し、みずから罪に関係することさえして、大きな害を及ぼすことがある。こうして彼らは、神がとがめておられることをゆるしたり、弁解したりするようになり、しばらくすると、神が譴責するようにと命じておられるその人々をほめるまでに盲目となってしまう。神がとがめておられる人々に、罪深い寛大さを示すことによって、自分の霊的な知覚力を鈍らせている者は、やがて、神が是認される人々に対して厳しい、苛酷な態度をとることによって、さらに大きな罪を犯してしまうであろう。

クリスチャンだと自称し、また他人を教える資格があると自負している多くの者たちが、人間の知恵を誇り、聖霊の感化を軽蔑し、神のみことばの真理をきらうために、神の要求から離れて行くであろう。パウロはテモテに言った。「人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう」。

使徒パウロはここで、公然と不信仰な人たちのことを言っているのではなく、自分の好みを頼りにして、そのために自我の奴隷になっている、口先だけのクリスチャンのことを言っているのである。このような人たちは、自分たちの罪を責めたり、快楽を愛する生活を非難したりすることのない教えだけに、喜んで耳を傾ける。彼らはキリストの忠実なしもべたちのはっきりした言葉に腹をたて、自分たちをほめたりへつらったりする教師たちを好む。また、牧師をもって任じている者たちの中には、神のみことばの代わりに人々の意見を説教する者たちがいる。彼らは義務に不忠実で、彼らに霊的指導を求める人々を惑わしているのである。

神は聖なる律法の教えの中で、完全な生活の現則を与えておられる。そして神は、この律法は世の終わりまで、一点一画も変えられることなく人間に要求されるものであると宣言された。キリストは律法を大いなるものとし、かつ光栄あるものとするために来られた。律法が神への愛と人への愛という広い土台に基づいていること、そして、人間の義務はすべて律法の教えに従うということに尽きることを、キリストはお教えになった。キリストはご自身の生活において、神の律法に従う模範をお与えになった。山上の垂訓の中で主は、神の律法の要求が、いかに外面的な行為を越えて広く及ぶものであり、心の中の思いや意図を含むものであるかをお示しになった。

律法は、これに従えば、人々を導き、「不信言心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深く……生活」するようにさせる（テトス2：12）。しかしすべての正義の敵は、この世を捕虜にし、人々を律法に従わないようにさせてきた。パウロが予見したように、多くの者が神のみことばの明瞭で徹底した真理に背を向けて、自分たちの

好む作り話をしてくれる教師たちを選んできた。牧師や一般信徒を含めて、多くの者たちが神の十戒をふみにじっている。こうして世界の創造主が侮辱され、そしてサタンは自分の策略の成功を勝ち誇って笑うのである。

神の律法に対する軽蔑がひどくなるにつれて、宗教に対する嫌悪が増し、人はますます高慢になり、快楽を愛し、両親にそむき、放縦になる。そして、思慮深い人々はいたるところで、こうした驚くべき悪をどうしたら正すことができるだろうかと、心配してたずねている。答えは、テモテに与えたパウロの勧告の中に見いだされる。「御言を宣べ伝えなさい」。聖書には、唯一の安全な行動原理が示されている。聖書 は神のみこころの写しであり、神の知恵の表現である。聖書は人生の大問題を人間に理解させる。そして聖書は、その教えに耳を傾けるすべての人にとって、誤りのない指導書となり、見当違いの努力を払って人生をむだにすることのないようにさせるのである。 [1549]

神はすでにみこころをお知らせになった。だから、人が、すでに神のみ口から出たことに疑問を持つのは愚かなことである。無限の知恵を持つお方が語られたあとに、人間が解決しなければならないような疑わしい問題や、調整しなければならないあいまいな可能性など、あるはずがない。人間に求められているのは、すでにあらわされている神のみこころに、率直に熱心に協力することだけである。従順は良心のみならず、理性の最高の命令でもある。

パウロはさらに勧めた、「あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい」。パウロは自分の行程を走り終えようとしていた。そこで彼は、テモテが自分に代わってくれて、敵がさまざまな方法で、教会員を単純な福音からそれさせようとして用いる作り話や異説から、教会を守ってくれるようにと願った。彼は、テモテが、神のためになすべき働きに自分のすべてをささげるにあたって妨げとなる、この世的な仕事やかかわりあいから、いっさい身をひくようにと忠告した。そして、信仰のゆえに出会わねばならない反対、非難、迫害に、喜んで耐えるように、また、キリストが犠牲となって亡くなられたその人々の、益となることを行うために、できる範囲であらゆる手段を尽くすことによって、自分の務めを十分に吟味するようにと、パウロは勧めた。

パウロの生涯は、彼の説いた真理を例証するものであった。そしてここに彼の力があった。彼の心は、深い不動の責任感で満ちていた。そして彼は、正義と憐れみと真理の源泉であられる神と密接に交わりながら働いた。彼はキリストの十字架を、成功の唯一の保証として、しっかりつかんでいた。救い主への愛は、キリストへの奉仕においてパウロが、この世の敵意や、敵たちの反対をも押しのけて進んだ時に、自己との戦いや悪との苦闘の中で、彼を絶えず支えた動因であった。

この危難の時代に教会に必要なものは、パウロのように、自分自身を有用なものに教育し、神の事柄に深い体験を持ち、まじめで熱意に満たされている働き人の軍隊である。きよめられた、献身的な人々が必要とされている。それは、試練や責任を避けない人々であり、勇敢で真実な人々であり、「栄光の望み」であられるキリストが心の中に形づくられている人々であり、きよい火に触れたくちびるで「御言を宣べ伝え」る人々である。このような働き人が欠乏しているために神のみわざは衰退し、致命的な誤りが猛毒のように、道徳を腐敗させ、人類の多くの希望を挫折させている。

忠実な、労苦にやつれた指導者たちが、真理のために命をささげている時、だれが進み出て、彼らの代わりをつとめるのであろうか。青年たちは父たちの手から、その聖なる責任を受け取るであろうか。彼らは、信仰者の死によって欠員となる場所を、補充する用意をしているだろうか。若い者たちをそそのかす、利己主義や野心への誘惑のただ中にあって、パウロの教訓はかえりみられ、義務への召しは聞かれるであろうか。

パウロは手紙を、それぞれの人への個人的な伝言で結び、できれば冬になる前に、急いで来てくれるようにと、もう1度テモテに頼んだ。ある友人たちには見捨てられ、またある友人たちは去らざるを得なかった。そのための寂しさを彼は語った。そして、エペソの教会がテモテの働きを必要としていることを気づかって、テモテがためらうことのないように、すでにその補いとしてテキコをつかわしたと、パウロは述べた。

ネロの前での裁判の様子や、兄弟たちが自分を捨てて行ったことや、契約を守られる神の恵みの支えについて

語ってのち、パウロは、羊飼いたちが打ちのめされても、なおご自身の羊の群れの世話をなさる大牧者の保護のもとに、愛するテモテをゆだねることで手紙を終えた。

第50章　義の冠が待つ [1550]

ネロの前で行われたパウロの最後の裁判の時、皇帝は使徒の力強い言葉に強い感銘を受けたので、告発されているこの神のしもべを無罪にすることも有罪にすることもせず、裁判の判決を延ばしていた。しかし、パウロに対する皇帝の敵意はすぐさまよみがえった。ネロは宮廷内においてさえキリスト教の普及を阻止できなかったことに激昂して、もっともらしい口実が見つかりしだい、使徒を死刑にするよう決めた。間もなくネロは、パウロを殉教させる宣告を下した。ローマ市民である彼を拷問にかけるわけにはいかなかったので、斬首の刑が宣告された。

パウロはひそかに処刑の場に連れて行かれた。見物人はほとんどだれもその場に出ることを許されなかった。というのは、迫害者たちは、パウロの感化力が広範囲にわたっていることに驚いていたので、彼の死の光景が人々をキリスト教に改宗させるのではないかと恐れたからである。しかし、彼に付き添っていた冷淡な兵士たちでさえ、彼の言葉に聞き入り、彼が死を目の前にして明るく、喜ばしそうにさえしているのを見て驚いた。彼の殉教を目撃したある者たちにとって、自分の殺害者たちに対するパウロのゆるしの精神と、キリストに対する最後までゆるぎない信頼心とは、いのちからいのちに至るかおりとなった。パウロが説いた救い主を受け入れ、間もなく自分たちの信仰をみずからの血で恐れるところなく証明した者が、1人ならずあった。

パウロの生涯は、その最後の時まで、コリント人への彼の言葉の真実性を証明した。「『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮

しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」（IIコリント4：610）。パウロは、彼自身によって、満ち足りていたのではなく、彼の魂を満たし、すべての思いをキリストのみこころに従わせる、聖霊の存在と働きによって満ち足りていた。「あなたは全き平安をもってこころざしの堅固なものを守られる。彼はあなたに信頼しているからである」と預言者イザヤは言っている（イザヤ26：3）。パウロの顔にあらわれていた天来の平安が、多くの魂を福音に導いたのであった。

パウロは天の雰囲気を持っていた。彼と交わった人々はみな、彼がキリストとつながっていることを感じた。彼自身の生活が彼の宣べ伝える真理を例証していたため、彼の説教には説得力があった。ここに真理の力がある。きよい生活の、気取らない無意識の感化は、キリスト教のために与えることのでさる最も説得力のある説教である。議論は、たとえそれが相手に反論の余地を与えないものであっても、なお反対しか引き起こさないことがある。しかし敬虔な模範は、完全には抵抗できない力を持っている。

使徒パウロは、自分の身に迫っている苦難を忘れて、後に残して行こうとしている人々が偏見や憎しみや迫害に立ち向かわねばならないことを気づかった。彼は、処刑の場に付き添ってきた数人のクリスチャンに、義のために迫害される人々に与えられている約束をくり返して、彼らを力づけ、励まそうと努めた。試練に耐えぬく忠実な子らについて主がお語りになった事で、果たされないものは何もないと、パウロは彼らに保証した。ほんのしばらくの間は、彼らは多くの誘惑に会ってつらい思いをするであろう。また、この世での慰めもないかもしれない。しかし彼らは、神の誠実さを保証することばで心を励まして、こう言うことができる、「わたしは自分の信じてきたかたを知っており、またそのかたは、わたしにゆだねられているものを、
[1551] かの日に至るまで守って下さることができると、確信している」（IIテモテ1：12）。やがて試練と苦しみの夜は終わり、平和で全き日の喜びの朝が明けるであろう。

使徒パウロは、不安と恐れを抱いてではなく、喜ばしい望みとあこがれの期待を持って、大いなるかなたをながめ

た。殉教の場に立っている彼には、執行人の刀も、間もなく自分の血を受けようとしている大地も目に入らない。彼は、夏の日の静かな青い空を見上げ、そのかなたの永遠の神のみ座を仰ぐ。

この信仰の人は、天と地をつなぎ、また有限な人間を無限の神につないで下さったキリストを表わす、ヤコブの幻のはしごを見上げる。自分を支え慰めて下さるおかた、そして、自分がいのちをささげようとしているそのお方を、父祖たちや預言者たちがどんなに深く信頼していたかを思い起こして、彼の信仰は強められる。各時代にわたって信仰のあかしを立ててきたこれらの聖徒たちから、パウロは、神が真実であられるという保証を聞く。パウロの仲間の使徒たちは、キリストの福音を宣べ伝えに出て行き、宗教的偏狭さや異教の迷信、迫害、軽蔑に会ったが、不信心の暗い迷路の真っただ中に、十字架の光を高く掲げることができれば、自分たちの命は惜しいとは思わなかった。これらの人々が、イエスを神のみ子、世の救い主として証ししているのを、パウロは聞く。拷問台や火あぶりの柱、土牢から、地のほら穴から、殉教者の勝利の叫びがパウロの耳に聞こえてくる。彼は、忠実な人々が、たとえ欠乏しても、悩まされ苦しめられても、なお恐れなく厳粛に信仰をあかしし、「わたしは自分の信じてきたかたを知って」いると言うのを聞く。信仰のために自分のいのちをささげる人々は、自分たちの信じてきたお方こそ完全に救うことができるのであると、世に向かって宣言しているのである。

キリストの犠牲によってあがなわれ、その血によって罪からきよめられ、その義を着せられて、パウロは、自分の魂はあがない主の御目に尊いものだというあかしを持っている。彼の生命はキリストと共に神のうちに隠され、彼は、死を征服された方はご自分にゆだねられたものを守ることがおできになると確信している。彼の心は、「わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」という救い主の約束をつかんでいる（ヨハネ6：40）。彼の思いと望みは、主の再臨に集中している。そして、執行人の剣がふり下ろされて、死の影が殉教者のまわりを取り巻くとき、わき上がる最後の思いは、大いなるよみがえりのときの最初の思いと同じく、いのちを与えて下さるお方にお会

いし、その方が、祝福された者の喜びに自分を入れて下さるということである。

年老いたパウロが、神のみことばとイエス・キリストのあかしのための証人として血を流してから、ほとんど20世紀が過ぎた。この聖なる人の一生の最後の場面を、将来の世代のために忠実に記録した人はなかった。しかし天来の霊感は、死に臨んだ彼のあかしを、われわれのために保存してきた。彼の声はラッパのひびきのようにその後の各時代に鳴りわたり、彼の勇気はキリストの幾千の証人を奮い立たせ、悲しみに沈んだ幾千の人々の心に、彼自身の勝利の喜びを反響させている。「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう」（II テモテ4：68）。

第51章　忠実な羊飼い

本章はペテロの第1の手紙に基づく

使徒行伝には使徒ペテロの後期の働きについては、ほとんど証されていない。ペンテコステの聖霊の降下に続く活発な伝道の期間、ペテロは、年毎の祭にエルサレムに参拝しにやってくるユダヤ人たちに接しようと、ほかの者たちに混じってたゆまぬ努力を続けていた。 [1552]

十字架の使命者たちがエルサレムやその他の場所を訪問し、信者の数が増えるにつれて、ペテロの持っていた才能は、初期のキリスト教会にとって測り知れない価値を持つものであることがわかった。ナザレのイエスについての彼のあかしは、広く遠く影響を及ぼした。彼の上には二重の責任が負わされていた。彼は未信者たちの前で積極的にメシヤについてあかしを立て、彼らを改心させるよう熱心に働くとともに、信者たちに特別に働きかけて、キリストに対する彼らの信仰を強めた。

ペテロは、自己放棄へと導かれて、完全に神の力により頼むようになったときはじめて、大牧者のもとで働く羊飼いとしての召しを受けた。キリストは、ペテロがキリストを拒む前に、「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と、ペテロに言っておられた（ルカ22：32）。このみことばは、この使徒がやがて、信仰に導かれるはずの人々のためになさねばならない、広範で効果的な働きのことを意味していた。ペテロ自身の罪と苦しみと悔い改めの経験が、この働きのために、彼を準備させたのであった。彼は自分の弱さを知るまで、キリストにより頼むことの必要を悟ることができなかった。誘惑の嵐のただ中で彼は、人は自己を全く放棄して救い主により頼む時にはじめて、安全に歩むことができるということを理解するようになっていた。

キリストと弟子たちが最後に海辺で会った時、ペテロは、「わたしを愛するか」と3度くり返して問われ、ため

されて、12使徒の座にもどされた（ヨハネ21：1517）。彼の働きは既に定められていた。彼は主の羊たちを養うのであった。悔い改め、受け入れられた今、彼は、囲いの外の人々を救う努力をしなければならないばかりか、羊たちの牧者にならなければならなかった。

キリストはペテロに、奉仕の条件をたった1つだけ言われた、「わたしを愛するか」。これが最も大切な資格である。ペテロに他のものが全部備わっていたとしても、もしキリストを愛する愛がなければ、神の羊たちを牧する忠実な羊飼いになることはできなかった。知識、博愛、雄弁、熱情、これらすべてはよい働きに欠くことのできないものであるが、心にキリストへの愛がなければ、キリスト教の牧師の仕事は失敗である。

キリストへの愛は気まぐれな感情ではなく、生きた原則であり、心の中にある変わることのない力としてあらわれるものである。羊飼いの品性と品行が、彼の主張する真理をよく示しているならば、主はその働きを承認する印を押して下さる。羊飼いと羊の群れは、キリストにある共通の望みによって結ばれ、1つになる。

救い主がペテロを取り扱われた方法は、ペテロと彼の仲間たちにとって1つの教訓を含んでいた。ペテロは主を拒んだが、主が彼に対して抱いておられた愛は、決してゆるがなかった。そしてこの使徒が、みことばを他の人々に伝える働きに携わるようになった時、彼は罪を犯す者に、忍耐と同情とゆるしの愛をもって接しなければならなかった。彼は自分自身の弱さと失敗を思い起こして、キリストが彼を取り扱われたように、優しく心を配って、羊や小羊たちを扱わねばならなかった。

人間は、自分自身が悪に染まってしまっているので、誘惑に陥っている者や過ちを犯している者にいたわりのない扱いをしがちである。人間には人の心が読めず、心のあがきや痛みを知らない。彼らは、愛の譴責について、いやすために傷つける打撃について、また、希望を告げる警告について、学ぶ必要がある。

ペテロは働きの初めから終わりまでずっと、自分の手にゆだねられた羊の群れを忠実に見守り続け、こうして、救い主から与えられた責任にふさわしい者であることを証明した。彼は絶えずナザレのイエスを、イスラエルの望み、

人類の救い主としてあがめた。彼は自分自身の生涯を、大教師の訓練のもとにおいた。また、力のかぎりあらゆる手段を用いて、信者たちを活動的な奉仕のために教育しようとした。ペテロの敬虔な模範とたゆまぬ活動は、有望な多くの若者たちを励まし、彼らを伝道の働きに献身させた。[1553] 時がたつに従い、教育者として、また指導者としての使徒の感化は強まった。そして彼は、ユダヤ人のための特別な働きの手は決してゆるめなかったが、一方では多くの地方にあかしを立て、福音を信じる多くの群れの信仰を強めた。

ペテロは、その働きの晩年において、霊感を受けて「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤおよびビテニヤに離散し」ている信者たちに手紙を書いた。彼の手紙は、試練や苦難に耐えている者たちの勇気を奮い起こさせ、信仰を強め、また、多くの誘惑の中で神とのつながりを失う危険に陥っている者たちを、再び良い働きに励ませる手段となった。これらの手紙は、キリストの苦難と慰めを十分に受けてきた者、また、その全存在が恵みによって変えられ、永遠のいのちという確かでゆるぎない望みを持っている者によって書かれたという印象を与える。

この年老いた神のしもべは、彼の第1の手紙の最初に、主にさんびと感謝をささげている。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのである。あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、信仰により神の御力に守られているのである」と彼は言った。

新しくされた地で確かに資産を受け継ぐというこの望みを抱いて、初期のクリスチャンたちは、厳しい試練や苦難に会っている時でさえも、喜んでいた。「今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変るであ

ろう。あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども……言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである」と、ペテロは書いた。

使徒の言葉は、あらゆる時代の信者たちを教えるために書かれた。そしてこれは、「万物の終りが近づいている」時に生存している者にとって、特別な意味を持っている。彼の励ましと警告、信仰と勇気の言葉は、「最後までしっかりと」信仰を持ち続けようとする、すべての者に必要である（ヘブル3：14）。

使徒ペテロは信者たちに、禁じられた話題へと心がさまよわないように、あるいは、つまらぬことにその力が浪費されないようにすることが、いかに大切かを教えようと努めた。サタンの策略のとりこにならないようにしようと思う者は、魂の通路をよく見張っていなければならない。思いを不純にするようなものを読んだり、見たり、聞いたりしないようにしなければならない。魂の敵がほのめかすような問題に、手当たり次第にとびついたりしないよう、心を引きしめていなければならない。心は忠実に見張られていなければならない。でないと、外部の悪が内部の悪を目覚めさせて、魂を暗黒の中にさまよわせるであろう。「心の腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリストの現れる時に与えられる恵みを、いささかも疑わずに待ち望んでいなさい。……無知であった時代の欲情に従わず、むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』と書いてあるからである」。

「地上に宿っている間を、おそれの心をもって過ごすべきである。あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。キリストは、天地が造られる前から、あらかじめ知られていたのであるが、この終りの時に至って、あなたがたのため[1554]に現れたのである。 あなたがたは、このキリストによっ

て、彼を死人の中からよみがえらせて、栄光をお与えになった神を信じる者となったのであり、したがって、あなたがたの信仰と望みとは、神にかかっているのである」。

もし銀や金で人々の救いを買うことができたとすれば、「銀はわたしのもの、金もわたしのものである」と言われる方は、いともたやすく人々の救いを成就されたであろう（ハガイ2：8）。しかし、罪人は、神のみ子の尊い血によってのみあがなわれることができた。救いの計画は犠牲の中にあった。使徒パウロは「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」と書いている（IIコリント8：9）。キリストはあらゆる罪からわれわれをあがなうために、ご自身をお与えになった。そして救いの最高の祝福として「神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」（ローマ6：23）。

「あなたがたは、真理に従うことによって、たましいをきよめ、偽りのない兄弟愛をいだくに至ったのであるから、互に心から熱く愛し合いなさい」と、ペテロは続けた。神のみことば、すなわち真理は、主がみ霊と力をあらわされる通路である。みことばに従うことによって、要求されている実、すなわち「偽りのない兄弟愛」という実を結ぶ。この愛は天から生まれ、高尚な動機や無我の行動へと至る。

真理が生活の中の不動の原則になる時、魂は「朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変ることのない生ける御言によ」って「新たに生れ」る。この新生は、キリストを神のことばとして受け入れた結果である。聖霊によって神の真理が心に刻まれると、新しい思いが喚起され、これまで眠っていた力が呼びさまされて神と協力する。

ペテロと仲間の弟子たちの場合もそうであった。キリストは、真理をこの世にあらわされる方であった。キリストによって、朽ちない種――神のみことば――が人々の心にまかれた。しかし、この大教師の最も大切な教訓の多くが、語られた当時はその人々に理解されなかった。キリストの昇天後、聖霊がキリストの教えを弟子たちに思い出さ

せた時、彼らの眠っていた意識が目覚めさせられた。これらの真理の意味が新しい啓示として彼らの心にひらめき、純粋で混ぜ物のない真理が定着した。その時キリストのご生涯のすばらしい経験が彼らのものとなった。みことばは、主の任命されたその人々を通してあかしされ、彼らはその力強い真理を宣べ伝えた。「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。……（それは）……めぐみとまことに満ちていた」。「わたしたちすべての音は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた」（ヨハネ1：14、16）。

使徒ペテロは、聖書を学ぶように、そしてそれを正しく理解して、永遠のために確かな働きをするようにと、信者たちを励ました。ペテロは、最後に勝利者となる者はみな、当惑や試みの場を経験することを知っていた。しかし彼はまた、聖書を理解していれば、試みられる者は、心を慰め、偉大なる方への信仰を強める、いくつもの約束を思い出すことができることを知っていた。

「『人はみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ている。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る』。これが、あなたがたに宣べ伝えられた御言葉である。だから、あらゆる悪意、あらゆる偽り、偽善、そねみ、いっさいの悪口を捨てて、今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救に入るようになるためである。あなたがたは、主が恵み深いかたであることを、すでに味わい知ったはずである」。

ペテロが手紙をあてた信者たちの多くは、異教徒たちの中に住んでいた。そして彼らが、その信仰の高い召しに忠実であり続けるかどうかに多くがかかっていた。使徒ペテロは、キリスト・イエスに従う者としての特権を彼らに力説した。「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り 伝えるためである。あなたがたは、以前は神の民でなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたことのない者であったが、いまは、あわれみを受けた者となっている」。

[1555]

「愛する者たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたは、この世の旅人であり寄留者であるから、たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい。異邦人の中にあって、りっぱな行いをしなさい。そうすれば、彼らは、あなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのりっぱなわざを見て、かえって、おとずれの日に神をあがめるようになろう」。

使徒ペテロは、信者たちが公の権威に対してとるべき態度を明瞭簡潔に述べた。「あなたがたは、すべて人の立てた制度に、主のゆえに従いなさい。主権者としての王であろうと、あるいは、悪を行う者を罰し善を行う者を賞するために、王からつかわされた長官であろうと、これに従いなさい。善を行うことによって、愚かな人々の無知な発言を封じるのは、神の御旨なのである。自由人にふさわしく行動しなさい。ただし、自由をば悪を行う口実として用いず、神の僕にふさわしく行動しなさい。すべての人をうやまい、兄弟たちを愛し、神をおそれ、王を尊びなさい」。

しもべたちは主人に仕えるようにと教えられた。「心からのおそれをもって、主人に仕えなさい。善良で寛容な主人だけにでなく、気むずかしい主人にも、そうしなさい。もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を耐え忍ぶなら、それはよみせられることである。悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。あなたがたは、羊のようにさ迷っていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもとに、たち帰ったのである」。

ペテロは信仰を持つ女性たちに、行いは清く、服装と態度は慎み深くあるようにと勧告した。「あなたがたは、髪を編み、金の飾りをつけ、服装をととのえるような外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない飾りを、身につけるべきである。これこそ、神のみまえに、きわめて尊いものである」。

この教訓はどの時代の信徒にもあてはまる。「あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである」（マタイ7：20）。柔和でしとやかな内面の飾りは極めて貴重なものである。真のクリスチャン生活において、外面の飾りは常に内面の平和ときよさとに調和している。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と、キリストは言われた（マタイ16：24）。自己否定と犠牲がクリスチャン生活の特色となる。好みが変わったことの証拠は、主にあがなわれた者たちのために与えられた道を歩むすべての者の服装に見られるようになる。

美を愛し、それを望むのは正しいことである。しかし神は、われわれが、まず最高の美、すなわち朽ちることのない美を、愛し求めるよう望んでおられる。どんな外面の飾りも、価値や美しさにおいて、「柔和で、しとやかな霊」、この世のすべての聖なる者たちが着る「純白で、汚れのない麻布の衣」と比べることのできるものは何もない（黙示録19：14）。この衣装は彼らを、この世においては美しく、愛される者とし、きたるべき世では、彼らが神の宮殿に入るためのしるしとなる。神は約束しておられる、「彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である」（黙示録3：4）。

使徒ペテロは、予言のまぼろしを受けて、キリストの教
[1556] 会が入ろうとしていた危難の時代を見やり、試練や苦しみに直面してもぐらつかないようにと信者たちを励ました。「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試錬を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむこと」がないようにと、彼は書いた。

試練は、神の子らをこの世の不純なものからきよめるために、キリストの学校において与えられる教育の一部であ

る。試みの経験がやってくるのは、神がその子らを導いておられるからである。試練や障害は、神がお選びになった訓練方法であり、神が指定された成功の条件である。人々の心を読み取られる神は、彼ら自身が知る以上に彼らの弱さをよく知っておられる。神は、ある者たちが、正しく指導されればみわざの進展に用いられることのできる資質を持っているのを見られる。み摂理のうちに、神は、これらの人々を違った立場や様々な環境に置き、自分では気づかない、隠れた欠点を発見できるようにさせて下さる。神は彼らに、これらの欠点にうち勝ち、献身するにふさわしい者となるような機会を与えて下さる。しばしば神は苦しみの火を燃えさせて、彼らがきよめられるようにして下さるのである。

神の選民に対する神の思いやりは尽きることがない。神が、神の子らの上にふりかかるのをお許しになる苦しみはみな、彼らの現在の、また永遠の利益のために、欠くことのできないものばかりである。キリストが地上でのご奉仕のあいだ宮をきよめられたように、神は教会をきよめられる。神が民たちをためし、試みるためにもたらされるものはすべて、彼らが、十字架の勝利を進展させるために、より敬虔になり、更に強くなるためである。

ペテロの経験において、キリストのお働きの中に十字架を見たくない時があった。救い主が弟子たちに、ご自身に迫る苦難と死を知らせられた時、ペテロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません」と叫んだ（マタイ16：22）。キリストと苦しみを共にすることを恐れる自己憐憫の気持ちから、ペテロはとっさにいさめようとした。この弟子にとって、この世のキリストの道が苦悩と屈辱の中にあることは、つらい教えであり、なかなか悟ることのできない教訓であった。しかし彼は、炉の火の真っただ中でこの教訓を学ぶのであった。かつての活動的な姿が、長年の重荷と労苦のために腰をかがめている今、彼は、「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試錬を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである」、と書くことができた。

キリストの羊の群れを飼う羊飼いとしての責任について、ペテロは教会長老たちに次のように書き送った。「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。そうすれば、大牧者が現れる時には、しぼむことのない栄光の冠を受けるであろう」。

羊飼いの地位を占める者は、主の群れを注意深く見守らねばならない。それは、独裁的な監視ではなくて、励まし、強め、高めるよう導くものでなければならない。牧師の務めには、説教すること以上の意味がある。それは熱心な、個人的な働きである。地上の教会はまちがいの多い人々から成り立っている。彼らは、忍耐強く、労を惜しまず努力することによって訓練されて、この世において受け入れられる働きをなし、そして来世において光栄と朽ちぬものとを与えられるようにしなければならない。神の民に対してへつらうのでなく、彼らを苛酷に取り扱うのでもなくて、いのちのパンで彼らを養う牧師たち――すなわち忠実な羊飼い――が求められている。こうした羊飼いは、自分たちの生活の中で、聖霊の改心させる万を日ごとに感じ、自分たちが働きかける人々に対して強い無我の愛を抱くのである。

羊飼いは教会の中で、仲たがい、辛辣、ねたみ、嫉妬に対処するよう求められる時、それを上手にさばく仕事が
[1557] 彼に負わされている。彼は、物事をきちん と整えるために、キリストのみ霊によって働かねばならない。牧師は説教壇から働きかけるばかりでなく、個人的に働きかけて、忠実に警告を与え、罪を譴責し、不正を正さなければならない。強情な人は教えに対して異議を申し立てるかもしれない。そして神のしもべは誤解され非難されるかもしれない。その時には次のことばを思い出そう。「上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、憐れみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りがない。義の実は、平和を造り出す人たちによって、平和のうちにまかれるものである」（ヤコブ3：17、18）。

福音を伝える牧師の仕事よ、「神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示す」ことである（エペソ3：9）。もしこの働きに携わる者が、最も自己犠牲の少ないことを選んで、説教に満足し、個人的な伝道の働きをだれか他の人に任せてしまうようなら、彼の働きは神に受け入れられるものとはならない。キリストが身代わりとなられた魂は、正しく導かれた個人的な接触がないために滅びようとしている。牧師職に携わりながら、群れの世話に求められる個人的な働きに尽くそうとしない者は、その召しを誤解しているのである。

真の羊飼いの精神は、自分自身を忘れる精神である。彼は神のみわざに携わるために、自我を見失う。みことばを説教し、人々の家庭で個人的な伝道をすることにより、彼は人々の必要や、悲しみや、試みを学ぶ。そして、重荷を負って下さる偉大な主と協力して、彼らの苦しみを共にし、失望を慰め、魂の飢えを和らげ、彼らの心を神へと導く。この仕事をする牧師には天の使いが伴い、そして彼自身、救いに至る知恵を与える真理を教えられ、啓発されるのである。

教会で責任ある地位を占めている人々への教えに関連して、使徒ペテロは、教会で交わる人々みんなが従わなければならない一般的な原則のあらましを述べた。群れの若い者たちは、長老たちの模範にならって、キリストのような謙遜な態度を身につけるように勧められた。「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。また、みな互に謙遜を身につけなさい。神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜うからである。だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい。身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。この悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい」。

こうしてペテロは、教会にやってきた特別な試練の時に、信者たちに手紙を書き送った。多くの人々は既にキリストの苦難にあずかる者となっていた。そして、まもなく

教会は、きびしい迫害の時代を経験するのであった。わずか数年のうちに、教会の教師や指導者の立場にあった人々の多くが、福音のために命を捨てるのであった。まもなく恐ろしいおおかみたちは侵入してきて、容赦なく群れの命を奪うのであった。しかし、これらのことはいずれも、希望の中心をキリストに置いている人々を失望させることはできなかった。ペテロは、励ましと勇気づけの言葉で、信者たちの心を現在の試練や未来の苦難の光景から、「朽ちず汚れず、しぼむことのない資産」へと向けさせた。彼は熱烈な祈りをささげた。「あなたがたをキリストにある永遠の栄光に招き入れて下さったあふるる恵みの神は、しばらくの苦しみの後、あなたがたをいやし、強め、力づけ、不動のものとして下さるであろう。どうか、力が世々限りなく、神にあるように、アァメン」。

第52章　最後まで忠実に

[1558]

本章はペテロの第2の手紙に基づく

ペテロと「同じ尊い信仰」をさずかった人々へあてたペテロの第2の手紙の中で、使徒はクリスチャンの品性を成長させるための神のご計画を明らかにした。彼はこう訂いている。

「神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。いのちと信心とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによって、わたしたちを召されたかたを知る知識によるのである。また、それらのものによって、尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである」。

「それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。これらのものがあなたがたに備わって、いよいよ豊かになるならば、わたしたちの主イエス・キリストを知る知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ばない者となることはないであろう」。

これらの言葉は教訓に満ちていて、勝利の基調をなす。使徒は、信者にクリスチャンの進歩のはしごを紹介しているが、その1つ1つの階段は神を知る知識の進歩をあらわし、このはしごを登るのに行き詰まりはない。信仰、徳、知識、節制、忍耐、信心、兄弟愛、愛は、はしごの階段である。この階段を1段1段登って、われわれに対するキリストの理想の高さに達する時に、われわれは救われるのである。こうしてキリストはわれわれの知恵となり、義と聖とあがないとになられる。

神はその民を栄光と徳に招いておられる。そしてこれらは神と真実につながっている人々すべての生活にあらわれる。天の賜物にあずかる者となったら、彼らは「信仰により神の御力に守られて」、完全を目指して進まなければならない（ペテロ1：5）。神の徳をその子らにお与えになることは、神の栄光である。神は人々が最高の標準に達するのをご覧になりたいと望んでおられる。そして、信仰によってキリストの力をつかみ、主の確かなみ約束に訴えてそれを自分のものとして求め、拒まれないようしきりに聖霊の力を求めるならば、彼らはキリストにあってそれに満たされるのである。

福音の信仰を受けたら、信者が次にする仕事は品性に徳を加えることである。こうして心をきよめ、神についての知識を受けるにふさわしい心にするのである。この知識は、すべての真の教育と真の奉仕の基礎である。これが、誘惑を防ぐ唯一のたしかな防衛手段である。そして、これだけが、人を品性において神に似たものとすることができる。神とみ子イエス・キリストを知ることによって、信者には、「いのちと信心とにかかわるすべてのこと」が与えられる。神の義をいただきたいと心から願う人には、よい賜物が惜しみなく与えられる。

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります」と、キリストは言われた（ヨハネ17：3）。また預言者エレミヤは言った、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。語る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる」（エレミヤ9：23、24）。この知識を得る者が、霊的にどれほど広く深く高く到達するかは、人間の心ではほとんど悟ることができない。

[1559] だれでも自分の活動範囲内で、クリスチャン品性の完成を目指して、果たせないことはない。いのちと信心とにかかわるすべてのことを信者たちが受けられるように、キリストの犠牲によって準備がなされた。神はわれわれが完全

な標準に到達するように求めておられ、キリストのご品性の模範をわれわれに示しておられる。救い主は、悪に抵抗した生活を貫き通して完全なものとされたご自身の人性によって、人間が神と協力すれば、この世において品性の完成に到達できることをお示しになった。これは、われわれも完全な勝利を得ることができるという神からの保証である。

キリストのようになる、すなわち、律法のあらゆる原則に従うというすばらしい可能性が、信者の前に提供されている。しかし、人は自分でこの状態に到達することは全くできない。人は救われる前にきよくならねばならないと神のみことばは言明しているが、このきよさは、彼が真理のみ霊の訓練や抑制する感化力に身を低くして従う時に、神の恵みが働いて生じるものである。キリストの義のかおりによってはじめて、人は完全に従順になることができる。キリストの義は従順な行為の1つ1つを神の香気で満たす。クリスチャンの役割は、1つ1つの罪に辛抱強くうち勝つことである。彼は罪に悩む自分の魂の乱れをいやしていただくように、救い主に絶えず祈らなければならない。彼にはうち勝つ知恵も力もない。これは主のもので、主は、謙遜に悔いて助けを求めてくる者たちにこれらを授けて下さる。

清くないものから清いものに変える働きは、継続的なものである。毎日、神は人のきよめのために働いて下さる。だから人は、神に協力して、辛抱強く、正しい習慣を養う努力をしなければならない。人は恵みに恵みを加えなければならない。こうして寄せ算で働くとき、神は彼のために掛け算で働いて下さる。われわれの救い主は、悔いる心を持つ者の祈りを聞き、それに答える準備がいつでもできておられる。そして恵みと平安が、忠実な者たちの上に増し加えられるのである。主は、彼らを悩ます悪との戦いに必要な祝福を、喜んで彼らに与えて下さる。

クリスチャンの進歩のはしごを登ろうとしている人々がいる。しかし、彼らは、上に進んで行くにしたがって、人間の力に頼りはじめ、やがて、信仰の創始者であり完成者であられるイエスを見失ってしまう。結果は失敗である。つまり、これまでに得たものをすべて失ってしまうのである。途中で疲れてしまって、これまで彼らが心と生活の中

で育ててきたクリスチャンの恵みを、魂の敵に盗ませている人々の状態は、まことに歎かわしい。「これらのものを備えていない者は、盲人であり、近視の者であり、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れている者である」とペテロは説明している。

使徒ペテロは神のことに長い経験を積んできた。神の救いの力を信じる信仰は年とともに強まった。そして彼は、信仰によって前進し、はしごを1段ずつ登って、天の入口にまで達している最上段を目指して上へと絶えず前進する者の前には、失敗の可能性がないのだということを、疑いなく証明するまでになっていた。

長年にわたってペテロは、絶えず恵みと真理の知識に成長する必要のあることを信者たちに力説してきた。そして今、信仰のためにまもなく殉教の苦しみを受けることを知って、彼は再び、信じる者はだれでも到達することのできるこの尊い特権に注意を引いた。信仰を十分に確信している年老いた使徒は、クリスチャン生活における確固とした目的を兄弟たちに説いた。「それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである」と、彼は説いた。なんというすばらしい保証であろう。信仰によってクリスチャン完成の高みへ進んでいる時、信者の前途にある希望は、なんと輝かしいものであろう。

使徒は続けて言った、「それだから、あなたがたは既にこれらのことを知っており、また、いま持っている真理に
[1560] 堅く立ってはいるが、わたしは、これらのことをいつも、あなたがたに思い起させたいのである。わたしがこの幕屋にいる間、あなたがたに思い起させて、奮い立たせることが適当と思う。それは、わたしたちの主イエス・キリストもわたしに示して下さったように、わたしのこの幕屋を脱ぎ去る時が間近であることを知っているからである。わたしが世を去った後にも、これらのことを、あなたがたにいつも思い出させるように努めよう」。

使徒には、人類に関する神の目的について語る資格が十分にあった。なぜなら、キリストがこの世で働いてお

られた時、ペテロは神の国に関することをいろいろと見聞きしていたからである。「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』。わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである」と、彼は信者たちに言った。

この証拠は、信者たちの望みの確かさを確信させるものであったが、さらにいっそう説得力のある証拠が、預言のあかしの中にあった。これによってすべての人々の信仰が強められ、堅固で不動のものとされるのであった。「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」と、ペテロは言った。

悩みの時の安全な指針として「預言の言葉」の「確実」さを強調する一方、使徒は厳粛に、誤った預言の光について教会に警告した。そのにせの預言は、「にせの教師」たちによって掲げられるもので、彼らは「異端をひそかに持ち込み、……主を否定し」た。こうしたにせ教師たちが教会に起こり、信仰のある兄弟たちの多くから正しいと思われるが、使徒は彼らをたとえて、「水のない井戸、突風に吹きはらわれる霧であって、彼らには暗やみが用意されている」と言った。「彼らの後の状態は初めよりも、もっと悪くなる。義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒めにそむくよりは、むしろ義の道を知らなかった方がよい」と、ペテロは言った。

ペテロは、霊感を受けて、世の終わりに至るまで各時代を見通し、キリスト再臨の直前に、世の中に現れる状態を書きしるした。「終りの時にあざける者たちが、あ

ざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、『主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない』と言うであろう」と、彼は書いた。しかし、「人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、……突如として滅びが彼らをおそって来る」（テサロニケ5：3）。しかし、だれもがみな敵のわなにかかるわけではない。世のすべてのものの終わりが近づく時に、時のしるしを見分けることのできる忠実な者たちがいるであろう。信仰を告白している多くの者たちが、その行いによって信仰を否定している一方では、最後まで耐え忍ぶ残りの民がいるのである。

ペテロはキリストご再臨の望みを、心に生き生きと持ち続けていた。そして彼は、「行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」との救い主のみ約束が確かに成就することを教会に保証した（ヨハネ14：3）。試練を受けている忠実な者たちにはご再臨が遅れているように思えるかもしれないが、使徒は彼らにはっきり述べた。「ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである。しかし、主の日は盗人のように襲って
[1561] 来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天 体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう」。

「このように、これらはみなくずれ落ちていくものであるから、神の日の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがたは、極力、きよく信心深い行いをしていなければならない。その日には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう。しかし、わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる」。

「愛する者たちよ。それだから、この日を待っているあなたがたは、しみもなくきずもなく、安らかな心で、神のみまえに出られるように励みなさい。また、わたしたちの主の寛容は救のためであると思いなさい。このことは、わたしたちの愛する兄弟パウロが、彼に与えられた知恵によって、あなたがたに書きおくったとおりである。……愛

する者たちよ。それだから、あなたがたはかねてから心がけているように、非道の者の惑わしに誘い込まれて、あなたがた自身の確信を失うことのないように心がけなさい。そして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい」。

神のみ摂理に導かれて、ペテロは彼の働きをローマで終えることになった。このローマで、ちょうどパウロが最後に逮捕されたころ、ペテロ投獄の命令が、ネロ皇帝から出された。こうして2人の老練な使徒たちは、長い間、遠く離れて働いていたが、この世界の中心都市において、キリストのために最後のあかしをたてることになった。そして、この地に、聖徒や殉教者たちの大きな収穫を生む種として、彼らの血を流すことになった。

ペテロは、キリストを拒んで後、また元の地位につけられて以来、ひるまず、危険をものともせずに、気高い勇気を示して、十字架にかけられ、よみがえられて、昇天された救い主を宣べ伝えてきた。彼は独房に横になっている時、キリストが彼に語りかけられたみことばを思い出した。「よくよくあなたに言っておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」（ヨハネ21：18）。このようにキリストは、ペテロの死に方をこの弟子にお教えになっていた。また、十字架の上に両手をひろげることさえも予言しておられたのである。

ペテロはユダヤ人であり外国人として、むちで打たれて十字架につけられる刑が宣告された。この恐ろしい死を目前にして、使徒は、イエスの裁判の時にイエスを拒んだ自分の大きな罪を思い出した。かつては十字架を認める準備のできていなかった彼は、今、福音のために命をささげることを喜び、ただ、主を拒んだことのある自分は、主と同じ死に方をするという大きな栄誉には値しないということしか思わなかった。ペテロはその罪を心から悔いて、キリストにより既にゆるされていた。羊と群れの小羊を養う高い使命が彼に与えられていたことがそれを示している。しかし彼は自分を決してゆるすことができなかった。最後の恐ろしい場面の苦しみを考えてさえも、彼のはげしい悲し

みと後悔の念は軽くならなかった。最後の願いとして、彼は頭を下に向けて十字架に釘づけされるようにと執行人に頼んだ。この願いは聞き入れられて、この方法で偉大な使徒ペテロは死んだ。

第53章　愛された弟子

ヨハネは、ほかの使徒たちより、イエスがとりわけ「愛しておられた弟子」である（ヨハネ21：20）。ヨハネはキリストとの友情を、最高にたのしく味わったように見える。たしかに彼は、救い主の信頼と愛のしるしを豊かに受けたのである。彼は、変貌の山でのキリストの栄光と、ゲッセマネでのキリストの苦悩を目撃することを許された3人のうちの1人であった。また、キリストが十字架にかけられた最後の苦しみの時に、キリストが母の世話をお託しになったのも、ほかならぬヨハネにであった。 [1562]

愛弟子に対する救い主の愛情は、力いっぱいの、燃えるような献身で報いられた。ヨハネは、ぶどうのつるが堂々とした柱にからむように、キリストにぴったりとついて離れなかった。主のために彼は法廷の危険を物ともしなかったし、十字架を離れずにいた。またキリストがよみがえられたという知らせに、すぐさま墓へ急き、その熱意においては性急なペテロにさえもまさっていた。

ヨハネの生活と品性にあらわれていたキリストへのひたむきな愛と無我の献身は、キリスト教会に口で言いあらわせない価値のある教訓を与えている。

ヨハネは、のちの経験にあらわれているような美しい品性を生まれつき持っていたのではなかった。彼には生まれつきのひどい欠点があった。高慢で、身勝手で、名誉欲が強かったばかりでなく、激しい性質で、侮辱されると憤慨した。彼とその兄弟たちは「雷の子」と呼ばれていた。短気、復讐心、批判的精神といったようなものがすべてこの愛された弟子の中にあった。しかしこうしたすべてのものの下に、天来の教師イエスは、熱心で、誠実で、愛すべき心を認められた。イエスは彼の身勝手を譴責され、彼の野心をくじいて、信仰を試された。しかしイエスは、ヨハネの魂が求めていたもの、すなわち、聖潔の美、愛の改変力を彼にお示しになった。

ヨハネの性格の中にある欠点が、救い主と個人的に交わるうちに数回、強く前面にあらわれた。ある時キリストは、サマリヤ人の村に行くに先立って使者たちをおつかわしになり、キリストと弟子たちのために飲み物を用意してほしいと村人にお求めになった。しかし救い主は町に近づかれた時、そこに立ち寄らずエルサレムへ向かうほうがよいかもしれないというようなご様子であった。このためにサマリヤ人たちは憤慨して、しばらく彼らと共に過ごされるよう勧めずに、彼らがいつも一般の旅行者たちにしていたもてなしを差し控えた。イエスは人の前に無理に出ることはなさらなかったので、サマリヤ人たちは、もし彼らがイエスを客人として招いていたら彼らに与えられていたはずの祝福を失った。

弟子たちは、キリストがお立ち寄りになってサマリヤ人を祝福なさろうとしていたことを知っていた。そして、村人が主に示した冷淡さと、嫉妬と、不遜さに弟子たちは驚き、憤慨した。ヤコブとヨハネは特に気を荒立てた。彼らが深く尊敬している方がこのようなあしらいを受けたことは、直ちに罰せず見過ごしにすることが到底できないほど不当であるように彼らには思えた。「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」と、彼らは、預言者エリヤのところにつかわされたサマリヤの長とその部下たちが焼き尽くされたことを引用して、熱心に言った。2人はイエスが、彼らの言葉に胸をいためられたのを見て驚いた。そして、イエスの譴責が耳もとに落ちてきた時に彼らはもっと驚いた、「あなたがたは自分たちがどのような霊的状態にあるのかを知らないのです。人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすためではなくそれを救うためです」（ルカ9：5456・新改訳聖書、註参照（異本））。

強制的にキリストを受け入れさせることは、キリストの使命にはない。それはサタンであり、良心を強制しようとするのはサタンの霊に踊らされている人々である。悪天使と同盟する人々が時々、正義に対する熱意をよそおい、自分たちの宗教的な考えに改心させようと仲間を苦しめている。しかしキリストは常に憐れみを示され、愛をお示しになって導こうとしておられる。キリストは人の心に競争相手を認めることも、生半可な奉仕を受け入れることもおで

きにならない。ただ、主は自発的な奉仕、愛に強いられて気持ちよく服従する心を望まれる。

また別の時にヤコブとヨハネは、キリストの王国で名誉ある最高の地位が与えられるようにと、母親から懇願してもらった。キリストが神の国の本質について繰り返し指導しておられたにもかかわらず、この若い弟子たちは、人々の願いに従って王座と王の力を獲得される方として、いまだにメシヤに希望を抱いていた。母親は、息子たちのためにこの王国で名誉 ある地位を切望していたので、「わたし [1563]
のこのふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはあなたの右に、ひとりは左にすわれるように、お言葉をください」と、頼んだ。

しかしイエスは答えられた、「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかっていない。わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか」。彼らは主の神秘的なみ言葉が試練と苦しみを指していることを思い出したが、なお、自信をもって「できます」と答えた。彼らは、主にふりかかろうとしていることをすべて共に受けることによって彼らの忠誠を証明すれば、最高の名誉だと思った。

「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになろう」。イエスは、左右に2人の悪人を仲間とし、王座の代わりに十字架を前にして、こう言われたのである。ヤコブとヨハネは主の苦しみを共にすることになっていた。1人は剣による死がつかの間にやって来る運命にあった。またほかの1人は、弟子たちのだれよりも長く主に従って働き、非難され、迫害された。「しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、わたしの父によって備えられている人々だけに許されることである」と、イエスは続けられた（マタイ20：2123）。

イエスはこの2人の弟子たちの願いを思いつかせた動機を理解されて、彼らの高慢と野心をおしかりになった。「異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない。それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、

自分の命を与えるためであるのと、ちょうと同じである」（マタイ20：2528）。

神の国ではえこひいきで地位は得られない。それは働いて得るものではなく、気まぐれにさずけられて受けるものでもない。それは品性の実である。王冠と王座は、達成された1つの状態のしるし、すなわち主イエス・キリストの恵みによって、自我を征服したしるしである。

ずっと後になって、ヨハネがキリストの苦難を親しく知るようになり、キリストに共感するようになった時、主イエスはヨハネに、神の国に近い状態のことをお示しになった。「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である」と、キリストは言われた（黙示黙3：21）。キリストの1番近くに立つ者は、キリストの自己犠牲的な愛の精神を最も深く感受した者である。それは、「高ぶらない、誇らない.....自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない」愛である（コリント13：4、5）。すなわち主イエスを動かしたように、この弟子を動かして、人類の救いのためにすべてを与え、死にいたるまで生き、働き、犠牲を払う愛である。

また別の時にヤコブとヨハネが、伝道の仕事を始めたばかりのころ、ある人に会った。その人は、キリストに従う者として認められていないのに、キリストのみ名によって悪魔を追い出していた。弟子たちはその男に仕事を禁じた。そしてこうすることが正しいと思った。しかしこの問題をキリストの前に出したとき、キリストは彼らをしかって、言われた、「やめさせないがよい。だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしることはできない」（マルコ9：39）。どんな方法ででもキリストに親しみを示した者を拒絶すべきではなかった。弟子たちは狭い、排他的な精神にふけることなく、彼らが主の中に見てきたような広大な同情を示さなければならない。ヤコブとヨハネはこの男をしかることで、主の名誉を心にかけていると思っていた。しかし彼らは、自分たちのために嫉妬しているのだということがわかりはじめた。ヤコブとヨハネは自分たちの誤りを認めて、主の叱責を受け入れた。

キリストの教えは、恵みに成長し、みわざにふさわしいものとなるために欠くことのできない柔和と謙遜と愛を説くもので、ヨハネに最も貴重なものとなった。彼は1つ1つの教えを大事にして、絶えず自分の生活を聖なる模範に一致させる努力をした。ヨハネはキリストの栄光を見分けはじめていた。彼がこれまで追い求めるよう教えられてきた世的なはなやかさや権威ではなく、「父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちて」いるものであった（ヨハネ1：14）。 [1564]

キリストに対するヨハネの愛情の深さと熱烈さは、ヨハネに対するキリストの愛を引き起こしたのではなく、かえってヨハネに対するキリストの愛の結果生じたものである。ヨハネはイエスのようになりたいと望んだ。そして、キリストの愛の人間を変える感化力のもとに、彼は柔和で謙遜になった。自己はイエスの中に隠された。ヨハネは仲間たちのだれよりも、その不思議ないのちの力に服従した。「このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見」たと、彼は言っている。「わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた」（ヨハネ1：2、ヨハネ1：16）。ヨハネは体験的な知識によって救い主を知った。主の教えが彼の魂に刻みつけられた。彼が救い主の恵みをあかしした時、彼の単純な言葉は、全身に満ちた愛により雄弁になった。

ヨハネは、キリストに抱いていた深い愛により、いつもキリストのそば近くにいたいと願った。救い主は12人の弟子たちみんなを愛されたが、ヨハネの気持ちは最も受容性に富んでいた。彼は他のだれよりも若かった。そして、だれよりも、子供のような打ち解けた信頼からイエスに心を開いた。こうして彼はキリストと更に共鳴するようになり、彼を通して救い主の最も深い霊的教えが人々に伝えられた。

イエスは天の父を代表する人々を愛される。そしてヨハネはほかの弟子たちにできなかった天の父の愛について語ることができた。彼は神の特質を自分の品性にあらわし、自分の魂の中で感じていた事を仲間に示した。主の栄光が彼の顔にあらわされた。彼を変えた神聖な美しさが、キリストのような輝きをもって彼の顔から輝き出た。ヨハネは

敬慕と愛を抱いて救い主を見つめているうちに、キリストに似た者となった。そしてキリストと交わることが彼の1つの望みとなり、ついには彼の性格のうちに主のご品性が反映するようになった。

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。……愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」（ヨハネ3：1、2）。

第54章　忠実な証人

本章はヨハネの手紙に基づく

キリストの昇天後、ヨハネは主のための忠実で熱心な働き人として目立った存在となった。ほかの弟子たちと共に、彼はペンテコステの日に聖霊の降下を受け、新しい熱意と力とで人々にいのちのことばを語り続け、彼らの思いを見えない神に向けさせようとした。彼は非常にまじめで熱心な、力に満ちた説教者であった。彼は美しい言葉で、また、音楽的な声でキリストのことばと働きを語り、聞く人々に感銘を与えた。彼は、簡潔な言葉と、語る真理の崇高な力と、彼の説教を個性的にしている熱情とにより、すべての階級の人々に近づくことができた。

使徒ヨハネの生活は、彼の教えと調和していた。彼は心の中で育ったキリストへの愛に導かれて、同胞のために、また特にキリスト教会の兄弟たちのために、熱心な、たゆまない働きを進めた。

キリストは最初の弟子たちに、キリストが彼らを愛されたように、互いに愛し合いなさいと命じておられた。こうして彼らは、うちにキリストの形ができたこと を、すなわち、栄光の望みを世にあかししなければならなかった。[1565]「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と、キリストは言われた（ヨハネ13：34）。これらのことばが語られた時、弟子たちはそれを理解できなかった。しかし彼らは、キリストの苦しみを目撃してのち、キリストの十字架の死と復活と昇天を目撃してのち、そして聖霊がペンテコステの日に彼らの上に注がれてのち、神の愛と、お互いに持たねばならないその愛の性質についての概念を一層はっきり持つようになった。それからヨハネは仲間の弟子たちに次のように言うことができた。

「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」。

聖霊の降下ののち、弟子たちが生ける救い主を宣べ伝えに出て行った時、彼らの1つの願いは人々の魂の救いであった。彼らは聖徒たちの交わりのすばらしさに恵まれた。弟子たちはやさしく、思いやりがあり、自制し、真理のためには喜んで犠牲を払った。毎日、互いに交わるうちに、キリストが彼らに申しつけられた愛をあらわすようになった。私心のない言葉と行為によって、彼らは他の人々の心にこの愛をともすよう努めた。

このような愛を信者たちは常に抱いていなければならなかった。また更に、新しい戒めに心から従うよう前進しなければならなかった。こうして彼らは、キリストと一致すれば、主のすべての要求を満たすことができるようになるのである。彼らの生活は、ご自身の義によって彼らを義として下さる救い主の力を表現しなければならなかった。

しかし、少しずつ変化が起こった。信者たちは他人の欠点を探し始めた。失敗をいつまでも責めて、思いやりのない批判しか念頭におかず、救い主とその愛を見失った。彼らは外面的な儀式についてますます厳格になり、信仰の実践より理論についてやかましくなった。他人をさばくことに躍起になって、自分たちの誤りを見のがした。キリストが要求されていた兄弟愛を失い、何よりもみじめなことに、彼らは自分たちの損失に気づかなかった。幸福と喜びが彼らの生活から出て行こうとしていることに気づかず、また、神の愛を心から閉め出していて、やがて暗黒の中を歩き出すことに気づかなかった。

ヨハネは教会内に兄弟愛が欠けてきていることを悟り、この愛が絶えず必要なことを信者たちに説き勧めた。教会へ宛てた彼の手紙にはこの思いが満ちている。「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされ

たのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである」と、ヨハネは書いている。

この愛が信者たちによってあらわされなければならない特別の意味について、使徒ヨハネは書いている、「新しい戒めを、あなたがたに書きおくるのである。そして、それは、彼にとってもあなたがたにとっても、真理なのである。なぜなら、やみは過ぎ去り、まことの光がすでに輝いているからである。『光の中にいる』と言いながら、その兄弟を憎む者は、今なお、やみの中にいるのである。兄弟を愛する者は、光におるのであって、つまずくことはない。兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩くのであって、自分ではどこへ行くのかわからない。やみが彼の目を見えなくしたからである」。「わたしたちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである」。「愛さない者は、死のうちにとどまっている。あなたがたが知っているとおり、すべて兄 弟を憎む者は人殺しであり、人殺しはすべて、そのうち [1566]
に永遠のいのちをとどめてはいない。主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」。

キリストの教会を最も危うくするものは、この世の反対ではない。教会を最も深刻な不幸に陥れるものは、信者たちの心に隠された悪であり、それは最も確実に神のみわざの進展を遅らせる。ねたみ、疑い、あらさがし、悪意ほど霊性を弱めるものはない。一方、神の教会を構成しているいろいろな性質の人たちの間における調和と一致は、神がみ子をこの世におつかわしになったことを最も確かにあかしするものである。このようなあかしをたてることが、キリストに従う者たちの特権である。しかしこれを行うためには、彼らはみずからキリストの戒めに服さなければならない。品性がキリストの品性に、また、意志がキリストの意志に調和しなければならない。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と、キリストは言われた（ヨハネ13：34）。何とすばらしいことばであろう。しかし、何と実行されていないことばであろう。今日神の教会には兄弟愛がはなはだ不足している。救い主を愛していると公言する者たちの多くが、互いに愛し合っていない。未信者たちは、クリスチャンと自称する人たちの信仰が、彼らの生活にきよめの力を及ぼしているかどうかを見守っている。だが、彼らはすぐに品性の欠点や行為の矛盾をみつける。ごらんなさい、この人たちはキリストのみ旗のもとに立ちながら、互いに憎み合っていると、クリスチャンは敵に言わせないようにしよう。クリスチャンはみな1つの家族で、みな同じ天父の子供たちであり、同じように祝福された不死の望みを抱いているのである。互いを結び合わせている絆は固く愛情のこもったものである。

神の愛は、キリストがお示しになった同じやさしい同情を示すようわれわれに求める時、人の心に最も感動的な訴えをする。兄弟に対して無我の愛を持つ人だけが、神のために真実の愛を持っている。ほんとうのクリスチャンは、危険や欠乏の中にいる魂に、警告や保護を与えもせずにその人を去らせたいと思わない。彼は、魂が更に不幸や失望に陥っているのに、あるいはサタンの戦場に倒れているのに、身を誤ったその人たちから超然としていることはできない。

キリストのやさしい、心をとらえる愛を経験したことのない人たちは、ほかの人々をいのちの泉に導くことはできない。心のうちにあるキリストの愛は、強く迫る力であり、それは会話をとおし、やさしい同情に満ちた精神をとおし、彼らが交わっている人々の生活の向上をとおしてキリストをあらわすよう彼らを導く。クリスチャンの働き人が仕事の成果をあげるには、キリストを知らなければならない。そして、キリストを知るには、キリストの愛を知らなければならない。天では、働き人としてふさわしいかどうかは、キリストが愛されたように愛し、キリストが働かれたように働く彼らの能力によって量られる。

「わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか」と使徒ヨハネ

は書いている。人を助け、人を恵みたいという衝動が絶えず心からわき出るときに、クリスチヤン品性は完成する。信者の魂をとりまくこの愛の雰囲気が、彼をいのちからいのちに至らせるかおりとし、その働きを神に祝福されるものとするのである。

神に対する最高の愛、互いの無我の愛、これこそ、天父がさずけて下さる最上の贈物である。この愛は衝動ではなく、きよい原則、永遠の力である。献身していない心は愛を起こすことも、生じることもできない。イエスに支配されている心にだけ愛は見いだされる。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである」。神の恵みによって新たにされた心にとって、愛は行動の主原則である。愛は性質を修正し、衝動を支配し、感情を制御し、愛情を高める。心に抱かれたこの愛は、人生を麗しくし、清澄にする感化を周囲に与える。

ヨハネは、愛の精神を実行する時にやってくる高尚な [1567]
特権を信者に理解させようとした。このあがないの力は、心を満たして、他のすべての動機を支配し、その人を世の堕落した感化の及ばないところに高める。そしてこの愛が十分に力を発揮できるようになり、また、人生における原動力になった時、神と、彼らに対する神の取り扱いとに対する信頼と確信は完全になる。そうして彼らは、現在と永遠の幸福のために必要なものをすべて神から受けることができることを知って、信仰の確信に満ちて神のもとに来ることができた。「わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、さばきの日に確信を持って立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである。愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く」と、ヨハネは書いた。「わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。そして……なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである」。

「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる。彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物である。だだ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである」。「もし、わたしたちが

自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」。神から憐れみをいただく条件は単純で理にかなっている。主はゆるしをお与えになるために、何か苛酷なことをするようにとはお求めにならない。われわれは天の神にわれわれの魂をゆだね、あるいは罪を償うために長い退屈な巡礼をしたり、苦行をする必要はない。罪を「言い表してこれを離れる者は、あわれみをうける」（箴言28：13）。

天の法廷で、キリストは教会のために弁護しておられる。すなわち、キリストが血のあがないの値を支払われた人々のために弁護しておられるのである。どんなに世紀や時代を重ねても、キリストのあがないの犠牲は効力を減じない。生も死も、高いものも深いものも、キリスト・イエスにおける神の愛からわれわれを引き離すことはできない。それはわれわれがしっかりとキリストをつかんでいるからではなく、キリストがわれわれをしっかりつかんでいるからである。もし救いがわれわれ自身の努力にかかっているとすれば、われわれは救われることができない。しかし救いは、すべての約束を支持しておられる方にかかっているのである。キリストをとらえるわれわれの力は弱いように見えるかもしれないが、キリストの愛は兄の愛のようで、主と結ばれているかぎり、誰も主のみ手からわれわれを引き離すことはできない。

歳月が流れて、信者の数が増えるにしたがい、ヨハネはますます誠実に、熱心に兄弟たちのために働いた。時代は教会にとって非常に危険なときであった。サタンの欺瞞は至るところにあった。サタンの使者たちは中傷や偽りによって、キリストの教えに反対しようとした。その結果、教会は不和と異端におびやかされていた。キリストに信仰を告白した者たちの中には、神の愛が神の律法に対する服従から彼らを解放したと主張する者もいた。一方、多くの者たちは、ユダヤの習慣や儀式を守る必要がある、また、救いには、キリストの血を信じることなく、ただ律法を遵守するだけで十分であると教えた。ある者たちは、キリストを立派な人だとしていたが、キリストの神性を否定した。神のみわざに忠実なふりをしていた者たちは欺瞞者であって、実際にはキリストとその福音を否定した。罪を犯

す生活をしながら彼らは教会に異端を持ち込んだ。こうして多くの者たちが懐疑と欺瞞の迷路に連れ込まれた。

ヨハネはこうした悪意ある誤りが教会に忍びこんで来るのを見て、悲しみでいっぱいになった。彼は教会が危険にさらされていることを悟って、すぐさまこの急場に果断な処置をとった。ヨハネの手紙は愛の精神を漂わせている。それは、まるで彼が愛の中にペンをどっぷり浸して書いたように思える。しかしヨハネは、神の律法を犯しながら、なお罪のない生活をしていると主張する人々と接触するにあたって、その人たちの恐ろしい欺瞞を、ためらうことなく忠告した。 [1568]

福音事業の協力者で、評判がよく、広く感化を与えている1人の婦人に、ヨハネは次ように書き送った、「イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白しないで人を惑わす者が、多く世にはいってきた……そういう者は、惑わす者であり、反キリストである。よく注意して、わたしたちの働いて得た成果を失うことがなく、豊かな報いを受けられるようにしなさい。すべてキリストの教をとおり過ごして、それにとどまらない者は、神を持っていないのである。その教にとどまっている者は、父を持ち、また御子をも持つ。この教を持たずにあなたがたのところに来る者があれば、その人を家に入れることも、あいさつすることもしてはいけない。そのような人にあいさつする者は、その悪い行いにあずかることになるからである」。

われわれは、キリストのうちにとどまっていると主張しながら、神の律法を犯す生活をしている人々に対して、愛されたヨハネと同じ判断をする権威を認められている。初代の教会の繁栄をおびやかしたような悪が、この終わりの時代にも存在する。ゆえに、こうした点についての使徒ヨハネの教えを、慎重に心にとめていなければならない。「愛がなければならない」は、どこででも聞かれる叫びである。特に、きよめられたと言っている人たちから聞かれる。しかし、真の愛は純粋であって、告白されていない罪をおおい隠すことはできない。キリストが身代わりとなられた魂を愛しているかぎり、悪と妥協しないようにしなければならない。われわれは反逆者と手を結んで、これを愛と呼ぶべきではない。神は現代の世界にいる神の民たち

に、ヨハネが魂を破壊する過ちに反対して立ったように、正義のために断固として立つよう要求されている。

われわれはクリスチャンの親切を示さなければならないが、罰や罪人をそれとはっきり言う権威も与えられている、そして、これは真の愛と矛盾しないと、使徒ヨハネは教えている。「すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である」と、ヨハネは述べている。

キリストの証人として、ヨハネは論争やうんざりさせる口論をしなかった。彼は自分の知っていること、自分が見たり、聞いたりしたことを話した。彼はキリストと親しい交わりをし、キリストの教えを聞いて、キリストの立派な奇跡を目撃してきた。ヨハネほどにキリストのご品性の美しさを見ることができた人はほとんどいない。彼にとって暗黒は過ぎ去っていた。彼の上にまことの光が輝いていた。救い主のご生涯と死に関する彼のあかしは、明瞭で力のこもったものであった。救い主に対する愛が豊かにあふれる心から彼は話したので、だれも彼の言葉をとめることはできなかった。

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について……すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである」と、ヨハネは言った。

それゆえに、まことのクリスチャンはみな、自分自身の経験を通して、「神がまことであることを、たしかに認め」ることができる（ヨハネ3：33）。クリスチャンは、キリストのみ力について、見たり聞いたり感じたことを証しすることができるのである。

第55章　恵みによって変えられた人 [1569]

弟子ヨハネの生涯に、真のきよめとは何かということが例示されている。キリストと親密に交わった数年間に、ヨハネはしばしば救い主から戒めと注意を受けた。そして彼はこうした叱責を受け入れた。聖なる方のご品性が現された時、彼は自分の欠点を認め、啓示によって謙遜にされた。毎日彼は自分の激しい気性とくらべて、イエスの柔和と寛容を見、謙遜と忍耐の教訓を聞いた。毎日彼の心はキリストに引きつけられ、ついには主に対する愛によって自己がかき消されていった。ヨハネが神のみ子の日常生活の中に力とやさしさ、威厳と柔和、強さと忍耐を見た時、彼の心はただ、感嘆するばかりであった。彼は自分の憤慨しやすい、野心的な性質をキリストの形成する力にゆだねたので、天来の愛が彼のうちに働いて、品性を一変させたのである。

ヨハネの生涯において達成されたきよめと著しい対照を示して、仲間の弟子ユダの経験がある。同僚と同じく、ユダもキリストの弟子であると告白していたが、彼の敬神はほんの形だけのものだった。ユダはキリストのご品性の美しさを感じなかったわけではない。事実、救い主のことばを聞いている時、しばしば彼に改心の気持ちがあらわれた。しかし、彼は謙遜な心になり、罪を告白しようとしなかった。ユダは聖なる感化を拒んで、彼が愛を告白したはずの主の名を汚した。ヨハネは自分の欠点と真剣に戦ったが、ユダは良心を汚し、誘惑に負けて、悪の習慣を更にしっかりと身につけてしまった。キリストが教えた真理を実行することは、彼の願望と目的に一致しなかった。そして、彼は天来の知恵を受けるために、自分の考えを捨てるように自分を動かすことができなかった。ユダは光の中を歩くことをせず、闇の中を歩くことを選んだ。悪い願い、強欲、復讐心、暗く陰気な思いが彼の心をとらえ、ついにサタンに全く支配されるまでになった。

ヨハネとユダは、キリストの弟子だと告白した人たちを代表している。この2人の弟子は、同じようにキリストの模範を学び、それに従う機会を持っていた。2人ともイエスと密接に交わり、主の教えを聞く特権を与えられていた。2人はそれぞれ性格に大きな欠点があったがまた、2人とも、性格を変える聖なる恵みに接することができた。しかし、1人が謙遜にイエスのことを学んでいる間に、もう1人はみことばを実行せずただ聞くだけであった。1人が日ごとに自己に死に、罪に勝利して、真理によってきよめられていたのに、他方は、恵みの変える力を拒み、利己的な願いにふけり、サタンのとりこにされた。

ヨハネの生涯に見られるような性格の変化は、常にキリストと交わっていたために与えられたものである。人にはそれぞれ性格に目立つ欠点があるかもしれない。しかしその人が、キリストの真の弟子になると、神の恵みの力により変えられ、きよめられるのである。彼は主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、崇拝する主と同じ姿に変えられていく。

ヨハネは聖潔の教師であった。そして教会へ宛てた手紙の中で、クリスチャンの行いについてまちがうことのない原則を書き記した。「彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」と、彼は書いた。「『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」（ヨハネ3：3、2：6）。クリスチャンは心と生活がきよくなければならないと、ヨハネは教えた。口先だけのむなしい言葉に満足してはならない。神が天において神聖であられるように、堕落した人間はキリストに対する信仰によって、そのいるところできよくなければならない。

「神のみこころは、あなたがたが清くなることである」と使徒パウロは書いた（テサロニケ4：3）。教会のきよめは、神の民に対して神がなされるすべてのわざの目的である。神は彼らがきよくなるように、永遠の昔から彼らを選んでおられた。神は彼らのためにみ子のいのちを犠牲にされた。それは彼らが真理に従順に従うことによってきよめ
[1570] られ、自己の偏狭さ をすべて脱ぎ捨てるためである。神は彼らに個人的な働き、個人的屈服を要求される。彼らが神のかたちに似たものとされ、み霊によって支配される時は

じめて、神は信仰を告白する者たちによってあがめられることができる。そして後、救い主の証人として彼らは、彼らのためになされた神の恵みを知らせることができる。

真のきよめは愛の原則から出た働きによってあらわれる。「神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます」（ヨハネ4：16）。キリストが心に住む人の生活は、敬神の心を行いにあらわすであろう。品性はきよめられ、高められ、気高くされ、あがめられるであろう。純粋な教えは正義の働きとよく混じり合い、天来の教えは聖なる実践と調和するのである。

きよめの祝福を受けようとする人たちは、まず自己犠牲の意味を学ばなければならない。キリストの十字架は、「永遠の重い栄光」のかかる主柱である。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と、キリストは言われる（Ⅱコリント4：17、マタイ16：24）。神に対するわれわれの愛を示すものは、同胞に対するわれわれの愛のかおりである。魂に休息をもたらすのは、奉仕における忍耐である。謙遜に、勤勉に、忠実に働いてこそ、イスラエルの幸福は増し加えられる。神はキリストの道に自発的に従いたいと思う者を支え、強めて下さるのである。

きよめは、一瞬、1時間、1日だけの働きではなく、一生の働きである。それは感情の幸福な高揚によって得られるのではなく、絶えず罪に死に、絶えずキリストのために生きることの結果である。弱々しい、時たまの努力では、間違いを直すことも、品性を改善することもできない。長い、忍耐強い努力と、苦しい訓練と、断固たる戦いによってのみ、われわれは勝利することができる。われわれは次の日の戦いがどんなにきびしいものになるかを知らない。サタンが支配しているかぎり、われわれは自我を静めて、絶えずつきまとう罪にうち勝たねばならない。生きているかぎり、留まる場所もなければ、完全にやり遂げたと言えるところもない。きよめは生涯の服従から生じるものである。

使徒や預言者たちの中には、だれも罪がないと主張した者はいない。神に最も近く生きた人々、知っていて悪い行いをするよりはいのちを犠牲にしようとする人々、神が聖なる光と権能をもって賞賛した人々は、自分たちの性質の

罪深さを告白してきた。彼らは自分自身に信頼せず、自分の義を主張せず、キリストの義を深く信頼した。

キリストを見る者たちはみな、このようになる。イエスに近づけば近づくほど、そして、キリストのご品性の純潔さが更にはっきり認められるようになるほど、ますます罪のひどい罪深さを明らかに見るようになり、われわれ自身を高める気持ちはますます消えていく。魂は神を求めて絶えず手を伸ばし、罪の悲痛な告白を絶えず、まじめにささげて、神のみ前に心を謙虚にする。クリスチャン経験において1歩進むごとに、われわれの悔い改めは深まる。われわれはキリストによる以外に満足はないことを知り、使徒パウロの名白をわれわれもするのである。「わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている」。「わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである」（ローマ7：18、ガラテヤ6：14）。

記録天使に神の民の聖なる苦闘と戦いの歴史を書いてもらおう。神の民らの祈りと涙を綴ってもらおう。そして、「わたしに罪はない、わたしはきよい」と、人の口から断言して神のみ名を汚さないようにしよう。きよめられたくちびるは、そのように傲慢な言葉を決して発することはしない。

使徒パウロは第三の天にあげられて、言葉にあらわせなかったことを見たり、聞かされていたが、なお、彼はたかぶらずに言った、「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕らえ
[1571] ようとして追い求めているのである」（ピリピ3：12）。天使たちには、信仰のよき戦いを戦いぬいたパウロの勝利について書いてもらおう。天に向けられたパウロの着実な歩みと、賞を目指して、ほかのことをすべて無価値なものと見なしている彼を天の住民たちに喜んでもらおう。天使たちはパウロの勝利を喜んで語るが、パウロは自分の成果を誇らない。パウロの態度は、キリストに従う者がみな、不死の冠を得るために戦いながらひたすら前進する時にとらねばならない態度である。

きよらかさを声高く公言したい気持ちになる人たちには、神の律法の鏡の中を見させよう。遠大な律法の要求と、心の中の思いや意図を見分ける律法の働きを知ったなら、彼らは罪のないことを誇ることはないであろう。ヨハネは自分自身を兄弟たちから離れたものとしないで、こう言っている、「もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない」。「もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない」。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（ヨハネ1：8、10、9）。

きよいと自称する者、彼らのすべてを主のものだと断言する者、神のみ約束を受ける権利があると主張する者、そう言いながら神の律法に従うことを拒んでいる者たちがいる。こうした律法の違反者たちは、神の子らに約束されている事を何でも要求するが、これは彼らの側の推量に過ぎない。なぜならヨハネは、神に対する真の愛は十戒のすべてを守ることにあらわされる、と述べているからである。真理の理論を信じ、キリストに信仰の告白をし、イエスが詐欺師ではないことや、聖書の宗教は巧妙に考案された作り話ではないことを信じるだけでは十分でない。「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである。それによって、わたしたちが彼にあることを知るのである」と、ヨハネは書いた。「神の戒めを守る人は、神におり、神もまたその人にいます」（ヨハネ2：4、5、3：24）。

ヨハネは、従順によって救いを得るべきだと教えているのではなく、従順が信仰と愛の実であると教えた。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である」と、彼は言った（ヨハネ3：5、6）。もしわれわれがキリストにおり、神の愛が心に宿っているならば、われわれの感情、思想、行動は神の

みこころに一致し、きよめられた心は、神の律法の教えに調和する。

神の戒めに従おうと努めながら、喜びや平安のない人が多い。彼らの経験に喜びや平安が欠けているのは、信仰を働かさないからである。彼らはあたかも、塩の土地や焼けつく荒野を歩いているかのようである。彼らは多くのことを求めることができるのに、ほとんど求めない。神の約束には制限がないのである。このような人たちは、真理に従うことによって与えられるきよめを正しく示していない。主はご自分のむすこ、娘たちのすべてを幸福で、平和にみち、従順なものにさせて下さる。信者は信仰を働かせることによって、これらの祝福を受けるようになる。信仰によって、品性の欠陥がすべて補われるのであり、すべての不潔なものがきよめられ、欠点がなおされ、長所がのばされるのである。

祈りは、罪との戦いとクリスチャン品性の発達における成功の手段として、天が定めたものである。信仰の祈りにこたえて与えられる神の力は、願い求めるすべてのことを嘆願者の心の中に成就する。われわれは、罪のゆるしを、聖霊を、キリストのような性質を、主の働きをなすための知恵と力を、また主が約束された賜物を、求めることができる。そして、それらは「与えられる」と約束されているのである。

モーセが神の栄光の住居となるはずのすばらしい建物の型を見たのは、神と共に山の中にいた時であった。われわれが人類に対する神の輝かしい理想を黙想するのは、神の
[1572] おられる山、ひそかな神との交わりの場所である。各時代にわたり、天との交わりを通して、神はその子らの心に恵みの教理を少しずつ明らかにされ、子らのための目的を実行されてきた。真理をおさずけになる神の方法は、「主はあしたの光のように必ず現れいで」ということばに説明されている（ホセア6：3）。神が光をそそぐことのできるところに身を置く者は、いわば夜明けの薄暗さから真昼の豊かな光の中に進むのである。

真のきよめは完全な愛、完全な従順、神のみこころへの完全な一致を意味する。われわれは真理に従うことによって神へときよめられる。われわれの良心は、死んだ働きから生きた神に仕えるためにきよめられなければならない。

われわれはまだ完全ではない。しかし利己心と罪のもつれから切り離されて、完全へと進むことはわれわれの特権である。大きな可能性、高くきよらかな完成がすべての者の手の届くところに置かれている。

この現代の世において、多くの者たちがきよい生活にもっと大きな進歩を見せない理由は、彼らがしようと思う程度にしか神のみこころを解釈していないからである。自分たちの望み通りにしていながら、彼らは神のみこころに従っているとうぬぼれている。このような人々は自己との戦いがない。また、その他、快楽や安楽を求める利己的な願いとの戦いに一時の間、うまく成功している者たちもいる。彼らは誠実で熱心であるが、長びく努力、日ごとの死、絶え間ない不安に疲れてくる。怠惰が心を奪い、自己に死ぬことが拒絶されているようである。そして、彼らはものうい目を閉じ、誘惑の力に抵抗せずに、それに屈してしまう。

神のみことばに示されている命令には、悪と妥協するための余地がない。神のみ子は、すべての人たちをご自身のもとに引き寄せることがおできになることを証明された。主はこの世を寝かしつけるために来られたのではなく、神の都の門にたどり着こうとする者がみな通らねばならない狭い道を示すために来られた。主の子らは主が導かれる道をたどらなければならない。どんなに気楽さや自己放縦を犠牲にしても、どんなに労働や苦難をかけても、彼らは自己との絶えまない戦いを続けなければならない。

人が神にささげることのできる最高の讃美は、神がお用いになることのできる聖別された水路となることである。時は永遠に向かって急速に進んでいる。神のものを自分でとっておいてはならない。祝福がなければさずけられないが、拒めば必ず損失をこうむるものを神から拒んではならない。神は全心を求めておられる。それを神にささげなさい。それは、神に創造されて、あがなわれたものだから、神のちのである。神はあなたの知性を求めておられる。それを神にささげなさい。それは神のものである。神はあなたの金銭を求めておられる。それを神にささげなさい。それは神のものである。「あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ」（コリント6：19、20）。神はきよめられた

心に忠誠の誓いを求めておられる。その心は、愛によって働く信仰を実践することにより、神に奉仕するために準備されていろものである。神はわれわれの前に最高の理想、完全さえも掲げてくださる。神はご臨在によって絶対に、また完全にわれわれのものとなって下さると同様に、われわれにもこの世において完全に神のものとなるよう求めておられる。

あなたがたに関する「神のみこころは、あなたがたが清くなることである」（テサロニケ4：3）。あなたがたもそう願っているだろうか。あなたがたの罪は山のようになっているかもしれないが、十字架につけられ、よみがえられた救い主のいさおしにすがって、へりくだり、罪を告白するならば、神はあなたがたをゆるし、あらゆる不義からきよめて下さる。神は神のおきてに全く一致するよう要求なさっている。このおきては、もっときよくなれ、もっときよくなれと語りかける神のみ声のこだまである。キリストの恵みに満たされるよう望みなさい。キリストの義を求める切なる願いで心を満たそう。神のみことばが宣べる義は平和をつくり出し、とこしえの平穏と信頼をもたらすのである。

[1573] あなたは神を慕うにつれて、その恵みの無尽蔵の 富をますます知るようになる。この富について瞑想すると、この富があなたの手にはいり、キリストの犠牲の功績と、その義の擁護と、その知恵の豊かさと、そしてあなたを天父の前に「しみもなくきずもな」い者として差し出して下さるみ力とが明らかになる（II ペテロ3：14）。

第56章　パトモス島に流される

キリスト教会が組織されて以来、半世紀以上たった。その間、福音の使命は絶えず反対されてきた。敵はその努力をゆるめず、ついにローマ皇帝の権力を得てキリスト教徒に反対することに成功していた。　引き続いて起こった恐ろしい迫害の時、使徒ヨハネは、信者たちの信仰を固め、強めることに力をつくした。彼は相手が論駁できないあかしを持っていた。そしてそれは、兄弟たちが彼らにふりかかる試練に勇気をもって忠実に立ち向かう助けになった。クリスチャンたちが、いやおうなしに直面した激しい反対のもとで、信仰をぐらつかせているような時、年老いた、信頼できるイエスのしもべヨハネは、十字架にかけられて、よみがえられた救い主の話を、力強く雄弁に繰り返した。彼はゆるぎない信仰を持ち、そのくちびるからはいつも同じ喜びの使命が語られた。「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について.....すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる」（ヨハネ1：13）。

ヨハネは非常に長生きした。彼はエルサレムの滅亡と、堂々とした神殿の荒廃を目撃した。救い主と親しくつながっていた弟子たちの最後の生き残りとしての彼の言葉には、イエスがメシヤであり、世のあがない主であるという事を説くにあたって大きな影響力があった。だれも彼の誠実さを疑うことはできなかった。そして、彼の教えによって多くの者が不信心から真理へ導かれた。

ユダヤ人の役人たちは、キリストのみわざにゆるぎない忠誠をつくしているヨハネに、はげしい憎しみをいだいていた。ヨハネのあかしが人々の耳に鳴り続けているかぎり、クリスチャンに反対する自分たちの努力は何の役にも立たないと、彼らは言った。イエスの奇跡や教えが忘れられるためには、その勇敢な証人の声を黙らせなければならない。

そのためにヨハネは、信仰を試みられるためにローマに呼び出された。その当局者たちの前で、使徒の教理は誤って述べられた。偽りの証人たちは、扇動的な異端を教えているとして彼を告訴した。こうした告訴によって敵はこの弟子を死刑にさせたいと願った。

ヨハネは明瞭に、説得力を持って弁明した。しかも非常に単純、率直であったので、彼の言葉には力強い効果があった。聞く者たちは彼の知恵と雄弁に驚いた。しかし彼のあかしに説得力があればあるほど、反対者たちの憎しみは深まった。ドミティアヌス皇帝は激怒した。彼はキリストの忠実な支持者ヨハネの論法を論駁することも、ヨハネが真理を語るときに伴った力に対抗することもできなかった。それでも彼は、必ずヨハネの声を沈黙させようと決意した。

ヨハネは煮えたぎる油の大がまの中に投げ込まれた。しかし主は、燃えさかる炉の中の3人のヘブル人を守られたように、この忠実なしもべのいのちを守られた。こうして欺瞞者ナザレのイエス・キリストを信じる者たちはみな滅びると、言葉が語られた時、ヨハネは、わたしの主は、サタンとその天使たちが主を辱め苦しめようと計るすべてのことを、辛抱強く受けられるのであると、言明した。キリストは世を救うために命をささげられた。わたしは主のみわざのために苦しむことを許され、光栄である。わたしは弱く、罪深い者であるが、キリストはきよく、罪のない、純潔な方であった。主は罪を犯さず、語られることばにも悪意は見られなかった。

[1574] これらの言葉には影響力があった。ヨハネは、彼を大釜に投げ込んだ同じ男たちによって、大釜から出された。

再び迫害の手が使徒ヨハネの上に重くのしかかった。皇帝の命令によりヨハネは「神の言とイエスのあかしとのゆえに」有罪を宣告されて、パトモス島に追放された（黙示録1：9）。ここではもはやヨハネの影響力は及ばず、やがて彼は困難と失望のうちに死ぬにちがいないと、彼の敵たちは思った。

パトモスはエーゲ海にある不毛の、岩の多い島であり、ローマの政府により犯罪者の流刑の場所として選ばれていた。しかし神のしもべにとって、この陰気な住居は天にいたる道となった。ここで、生活の忙しい場面から、また、

これまでの活発な働きから遮断されて、ヨハネは神とキリストと天使たちとの交わりを持ち、彼らから今後の教会のための指示を受けたのである。この世界歴史の終末の場面に起こる諸事件のあらましが、彼の前に示された。そしてヨハネは、そこで神から受けた幻を書きしるしたのである。彼の声が、彼の愛し仕えた方をもはやあかしできなくなった時、その不毛の島の岸辺で彼に与えられたメッセージは、この地上の国々に関する主の確かな目的を伝える輝かしい明かりとして輝き出るのであった。

パトモス島の崖や岩間で、ヨハネは創造主と交わった。彼は過去の生活を振り返って、これまで受けてきた祝福を思い、平和な気持ちでいっぱいになった。彼はクリスチャン生涯を送ってきて、「死からいのちへ移ってきたことを、知っている」と、心から言うことができた（ヨハネ3：14）。ヨハネを追放した皇帝はそのようではなかった。彼はただ戦争と大虐殺の野に、みじめな家庭に、嘆き悲しむやもめや孤児に、優越を望む彼の野心の実を見るにすぎなかった。

ヨハネは彼の孤立した家の中で、これまて以上に深く、自然の書や霊感のページに記されている神の力の啓示を学ぶことができた。彼にとって創造のわざを瞑想し、造物主をあがめることは喜びであった。以前には彼の目に飛び込んできたものは、森でおおわれた山々や緑の谷、実り豊かな平原であった。そして、自然の美しさの中に、創造主の知恵と巧みをたどることが彼の喜びであった。今、ヨハネは、多くの人たちにとっては陰気でおもしろくもなさそうな風景に取り巻かれていたが、彼にとって、それはまた別であった。彼の周囲のものは荒れ果てて、味気ないものであったかもしれないが、彼の頭上にひろがる青い大空は、彼の愛したエルサレムの上の大空のように輝かしく美しかった。荒れて、ごつごつした岩に、海原の神秘に、大空の輝きに、彼は大切な教訓を読みとった。これらすべてに神の力と栄光を語るメッセージがあった。

使徒は、地に住む人たちが神の律法をあえて犯したために地に氾濫した洪水のあとを、周囲に見た。水がどっと出て、海の深みから、また地から投げ上げられた岩は、神の怒りの激しくほとばしる恐ろしさを、鮮明に思い出させた。淵々呼びこたえる多くの水の音の中に、預言者は創

造主の声を聞いた。無情な風にたけり狂う海は、彼にとって、立腹された神の怒りをあらわした。激しく立ち騒ぐ大波は、目に見えない手により定められた限度に抑えられ、無限の力を持つ神の支配を語っていた。そして対照的に、彼は、地の虫けらに過ぎない人間が、持っていると思い込んでいる知恵と力に得意になって、まるで神も彼らと似たようなものであるかのように、宇宙の支配者であられる神にそむいている、その人間の弱さと愚かしさを知った。岩は彼に、彼の力の岩であられるキリストを思い起こさせた。この岩かげに彼は恐れなく身を隠すことができた。岩の多いパトモス島に追放された使徒から、神を求める最も熱烈な魂の切望と、最も熱情的な祈りがささげられた。

ヨハネの経歴は、神が年老いた働き人をお用いになる方法の顕著な実例を示すものである。ヨハネがパトモス島に追放された時、多くの人々は彼の奉仕が終わった、折れた古い葦は今にも倒れるであろうと思っていた。しかし主は彼をまだ用いることが適当であるとご覧になった。以前の働き場から追放されたが、彼は真理のあかしを立てることをやめなかった。パトモスにいてさえも彼は友人や改心者をつくった。彼のメッセージは喜びのメッセージであり、
[1575] よみがえられた救い主が、天において彼らのためにとりなしをしておられ、ついにはその民を迎えにもどって来られることを宣べ伝えるものであった。そして主のために奉仕を続けて年をとった後、彼は生涯のこれまでのどんな時よりも豊かに天来の交わりを受けたのである。

生涯の力を傾けて神のみわざと取り組んできた人々に対しては、最も心のこもった敬意を表さなければならない。こうした老齢の働き人は、嵐や試練の真っただ中に忠実に立ってきた。彼らは病弱になっているかもしれない。しかし彼らはなお、神のために彼らの本分を全うする才能も資格も持っている。たとえ衰えて、若い名たちが負うことのできる、また、負わなければならないような重い責任を、負うことができなくとも、彼らが与えることのできる勧告は最も価値のあるものである。

彼らは間違いをしたこともあったであろう。しかし、失敗から彼らは、誤りや危険を避けることを学んできた。だからこそ賢明な勧告を与える資格があるのではないだろうか。彼らは試みや試練に耐えてきた。そして彼らの活力の

一部は失われたかもしれないが、主は彼らを除かれない。主は彼らに特別の恵みと知恵を与えておられる。

みわざが困難な時に主に奉仕をしてきた人々、真理のために立つ者がほとんどいなかった時に信仰を持ち続けた人々は、尊ばれ、尊敬されなければならない。主は若い働き人たちに、こうした信仰の深い人々と交わることによって、知恵と力と円熟とを身につけるよう望んでおられる。そのような老練な働き人が共にいるために、大変恵まれているのだということを、若い者たちは認識しよう。若い者たちは会議の場で彼らを礼遇しよう。

キリストのみわざに一生をささげてきた人たちが、地上での奉仕を終える時期に近づくと、聖霊による感銘を受けて、これまで神のみわざに携わっていた時の経験を詳しく話すようになる。神がその民を導かれたすばらしい配慮や、試練から彼らを救い出された神の大きな恵みの記録は、新しく信仰に導かれてきた者たちに繰り返し語られなければならない。神はこの年老いた経験豊かな働き人たちが、彼らの持ち場に立って、人々を悪の大波に押し流されないよう救うために彼らの分をなすようにと望んでおられる。神は、武具を脱ぐよう彼らに命じるまでは、武具をつけているようにと望んでおられる。

迫害のもとに受けた使徒ヨハネの経験には、クリスチャンにとってすばらしい力と慰めの教訓がある。神は悪い人々の計画を阻止なさるのではなくて、彼らの策略を、試みや戦いの中にいながら信仰と忠誠を守り通す人々の利益となるように導かれる。福音の働き人は、しばしば迫害の嵐、激しい反対、不当な恥辱の真っただ中で働きを進めることがある。そのような時、試練や苦悩の炉の中で得られる経験は、そのために受ける痛みのすべてに値するものだということを思い出そう。こうして神はその子らをご自身のもとに引き寄せられて、彼らの弱さと神の力をお示しになるのである。神は、神により頼むことを彼らにお教えになる。こうして彼らに危急に立ち向かう準備をさせ、責任のある地位につき、与えられている力を尽くして大切な目的を果たすようにさせて下さる。

各時代にわたって、神に任命されたあかしびとは真理のために恥辱や迫害に身をさらしてきた。ヨセフは徳と高潔を守りつづけたためにそしられ、迫害された。神に選ばれ

た使命者ダビデは敵から猛獣のように追われた。ダニエルはあくまでも天に忠誠であったために、ししの穴に投げ入れられた。ヨブはこの世の財産を奪われ、肉体的に非常に苦しめられ、親せきや友人にきらわれた。それでも彼は高潔を保ちとおした。エレミヤは神から語るようにと与えられた言葉を語らないではいられなかった。彼のあかしは王やつかさたちを非常に怒らせ、そのため彼は胸の悪くなるような土牢に入れられた。ステパノはキリストと十字架につけられた主のことを宣べ伝えたために、石で打たれた。パウロは異邦人に対する神の忠実な使命者であったために、むちで打たれ、石で打たれ、ついに死刑にされた。ヨハネは「神の言とイエスのあかしとのゆえに」、パトモス島に流された。

[1576] こうした人間の不動の信念をあらわす模範は、神の約束――神の内住と支えて下さる恵み――の確かなことをあかししている。彼らはこの世の権力によく耐える信仰の力を、りっぱにあかししている。どんなに暗い時にも神に頼り、どんなにきびしい試練にあい、嵐にもまれても、天父が船のかじを握っておられることを感じることができるのは、信仰の働きである。信仰の目だけが、現在の事柄のかなたをながめ、永遠の富の価値を正しく評価することができる。

イエスはこの世の栄光や富をめざしたり、試練のない生活ができるような希望を、主に従う者たちにお与えになったのではない。それどころか、イエスは彼らに、ご自分に従って克己と非難の道を歩むよう求めておられる。世をあがなうために来られたイエスは、悪の連合軍に反対された。悪人と悪天使は、無情な同盟をつくり、平和の君にこぞって反対した。イエスのことばと行動の1つ1つが神の憐れみをあらわし、彼は世と異なっていたために、激しい敵意を引き起こした。

キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者たちはみな、このようになるであろう。キリストの霊に満たされている者たちすべてに、迫害と非難が待っている。迫害の性質は時代によって変わるが、その本質、すなわち、その根底にある精神は、アベルの時代以来主の選ばれた者たちを殺害してきたのと同じものである。

各時代にわたり、サタンは神の民を迫害してきた。彼は神の民を苦しめ、殺害してきたが、神の民は死ぬことで勝利者となった。彼らはサタンよりも偉大な方の力をあかしした。悪人は肉体を苦しめ、殺すかもしれないが、キリストと共に神のうちに隠されているいのちに触れることはできない。悪人は人々を獄屋に監禁することができても、彼らの心を縛ることはできない。

試練と迫害を通して神の栄光――神のご品性――が、その選民の中にあらわされる。世人に憎まれ迫害されるキリストの信者たちは、キリストの学校で教育され訓練される。地上にあっては、狭い道を歩き、苦難の炉で精錬される。彼らはきびしい戦いを通ってキリストに従い、克己に耐え、苦い失望を経験する。しかし、このようにして彼らは罪の罪深さと苦悩を知り、嫌悪の思いをもって罪を見るようになる。キリストの苦難に共にあずかるとき、彼らは暗黒のかなたに栄光を仰ぎ、「わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」と、言うことができるのである（ローマ8：18）。

第57章　ヨハネ、黙示録を書く

使徒の時代にキリスト教の信者たちは、真剣さと熱意に満たされていた。彼らは主のためにたゆまず働いたので、激しい反対があったにもかかわらず、比較的短い間にみ国の福音は地上の人の住む所へもれなく伝えられた。この時イエスに従った者たちがあらわした熱意は、後世の信者たちの励ましのために、霊感による筆によって記録された。主イエスが使徒の時代におけるキリスト教会全体の象徴としてお用いになったエペソの教会について、忠実なまことの証人であられるかたが次のように宣言された。

「わたしは、あなたのわざと労苦と忍耐とを知っている。また、あなたが、悪い者たちをゆるしておくことができず、使徒と自称してはいるが、その実、使徒でない者たちをためしてみて、にせ者であると見抜いたことも、知っている。あなたは忍耐をし続け、わたしの名のために忍びとおして、弱り果てることがなかった」（黙示録2：2、3）。

最初は、エペソの教会の経験は子供のような単純さと熱情が特徴だった。信者たちは神のみことばにことごとく従おうと熱心に努めた。そして彼らの生活は、キリストに対する熱烈で誠実な愛をあらわした。彼らは心にキリスト
[1577] が内住しておられたので、神のみこころを行うことを喜んだ。あがない主に対する愛に満たされ、彼らの最高の目標は、魂を主に導くことであった。彼らはキリストの恵みの尊い宝を死蔵しようとは思わなかった。彼らは自分たちの召しの重要さを自覚し、「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」という使命を担って、地の果てにまで救いのよいおとずれを運んで行きたいという願いに燃えた。そして世は、彼らがイエスと共にいたことを知るようになった。悔い改め、ゆるされ、きよめられ、聖なるものとされた罪深い人々が、み子を通して神との共労者になった。

教会員は心も行動も一致していた。キリストに対する愛が、彼らを共に結び合わせる金の鎖であった。彼らは主を更にもっと完全に知ろうとした。そして彼らの生活にキリストの喜びと平安があらわされた。彼らは困っている孤児ややもめを見舞い、みずからは世の汚れに染まずに身をきよく保った。そして、この事がうまくできなければ、自分たちの信仰の表明に矛盾し、あがない主を拒むことになると悟っていた。

どの町でもみわざが進められていた。魂が改心し、こんどは彼らがこれまでに受けた計り知れない宝を他人に教えなければならないと感じた。彼らは、自分たちの心を照らしてくれた光が、他の人々の上にも輝かないうちは心が安まらなかった。不信仰な人々の多くはクリスチャンの希望の理由を知らされた。誤っている者、見棄てられている者、また、真理を知っていると言いながら、神よりも快楽を愛する者たちに、個人的に、霊感による温かい訴えがなされた。

しかし、しばらくして信者たちの熱意が衰えはじめて、神に対する愛も、お互いに対する愛も薄らいできた。冷淡さが教会にしのび込んだ。真理を受けた時のすばらしい方法を忘れる者もいた。以前の標準を保持していた者が1人ずつその持ち場で失格した。このような開拓者たちの重荷を分担し、こうして賢い指導の準備ができていたはずの若い働き人の中には、しばしば繰り返される真理にあきてしまった者たちがいた。彼らは新奇でびっくりさせるようなものを望み、教理の新しい面を紹介して、多くの人々を喜ばせようとしたが、それは福音の根本的な原則に一致していなかった。彼らは自信と霊的盲目から、このようなこじつけが多くの人々に過去の経験を疑わせて、やがて混乱と不信へ導くということを見きわめることができなかった。

このような誤った教理がしきりに説かれた時、意見の相違が出てきて、多くの人々の目がそれ、彼らの信仰の創始者また完成者としてのイエスを見なくなった。教理の重要でない部分を討論したり、人の作ったおもしろい話にふけり、福音を宣伝することに費やされなければならない時間が浪費された。真理が忠実に伝えられれば、罪が自覚されて、改心したはずの多くの人々が、警告を与えられずに放

置された。敬虔さが急速に薄らいで、サタンがキリストに従う者たちだと主張する人々をまさに支配するかのように見えた。

ヨハネが流刑を言い渡されたのは、教会歴史の中の、この危機の時であった。教会にとって今ほど彼の声を必要とする時はなかった。ヨハネが以前に共に伝道の働きをしていた仲間たちはほとんど全部殉教の死を遂げていた。残った信者たちは激しい反対に直面していた。外見はどう見ても、キリストの教会の敵たちが勝利する日が、それほど遠くないようであった。

しかし主は暗やみの中で見えないみ手を動かしておられた。神のみ摂理のうちにヨハネは、キリストがご自身について、また、諸教会を啓発するための神の真理についての、驚くべき黙示をお与えになることができるところへ導かれたのであった。

ヨハネを追放することで真理の敵たちは、神の忠実な証人の声を永久に沈黙させたいと思っていた。しかし、パトモス島においてこの弟子は1つの使命を受けたのである。この使命の感化は終わりの時まで教会を絶えず力づけるのであった。ヨハネを追放した人々は、彼らの誤った行為の責任を解かれたのではないが、天の計画を進めるために神の手中にある道具となった。そして光を消そうとしたその努力そのものが真理をくっきり浮き立たせた。

[1578] 栄光の主がこの追放された使徒に現れたのは、安息日のことであった。ヨハネは、ユダヤの町や都市で人々に説教していた時と同じように、パトモス島においても安息日を聖く守っていた。彼はその日に関して与えられていた尊いみ約束を自分のものとして求めた。「わたしは、主の日に御霊に感じた。そして、わたしのうしろの方で、ラッパのような大きな声がするのを聞いた。その声はこう言った、『あなたが見ていることを書きものにして……教会に送りなさい』。そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、7つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に……人の子のような者がいた」と、ヨハネは書いている（黙示録1：1013）。

愛されたこの弟子は豊かな恵みにあずかっていた。彼は、ゲッセマネで主を見ていた。主のみ顔は苦悩の血のしたたりを残していた。主の「顔だちは、そこなわれ

て人と異なり、その姿は人の子と異なっていた」（イザヤ52：14）。ヨハネは、ローマの兵士たちに捕らえられ、古い紫の衣を着て、いばらの冠をかぶったキリストを見ていた。カルバリーの十字架にかけられ、残酷な嘲笑と悪口を浴びせられたキリストを見ていた。今、ヨハネは、もう1度主を見ることを許された。しかしキリストの姿は、なんと違っていたことだろう。キリストはもはや、人々に軽蔑され、侮辱されている悲しみの人ではない。キリストは神々しく輝いた衣を着ておられる。「そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようで……その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであ」る（黙示録1：14、15）。その声は大水の響きのようであり、その顔は太陽のように輝いている。その手には7つの星を持ち、口からはみことばの力の象徴である鋭いもろ刃のつるぎがつき出ている。パトモスはよみがえられた主の栄光でまばゆく輝いている。

「わたしは彼を見たとき、その足もとに倒れて死人のようになった。すると、彼は右手をわたしの上において言った、『恐れるな』」とヨハネは書いている（黙示録1：17）。

ヨハネはあがめられた主のみ前で生きることができるように力づけられた。それから驚いているヨハネの目の前に、天の栄光が開かれた。彼は神のみ座を見ることを許され、この世の闘争のかなたを見上げて、白い衣を着たあがなわれた者たちの群れを見た。ヨハネは天使たちの音楽と、小羊の血によって勝利した人々の勝利の歌と、彼らのあかしの言葉を聞いた。彼に与えられた黙示には、神の民が経験する胸をおどらせるような興味深い場面が次々に展開され、教会の歴史が終わりの時まで予告された。数や象徴で、非常に重要な事がヨハネに示された。そしてヨハネは、彼の時代や未来の各時代に生きる神の民が、やってくる危難や闘争を賢明に理解することができるように、それを記録しなければならなかった。

この黙示は、紀元後の全時代にわたって教会を導き慰めるために与えられたのであるが、それでも宗教家たちは、それが封じられた書物であって、その秘密は説明できないと主張してきたのである。そのために多くの者たちは、その預言的記録から身をそらし、時間をかけてその奥義

を研究することを拒んだ。しかし神は、その民がこの書をそのようにみなすようには望んでおられない。それは「イエス・キリストの黙示」であり、「この黙示は、神が、すぐにも起るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え……たものである」。「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである」と、主は言われる（黙示録1：1、3）。「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。これらのことをあかしするかたが仰せになる、『しかり、わたしはすぐに来る』」（黙示録22：1820）。

[1579] 黙示録には神の奥義が描かれている。その霊感による書に与えられている名、まさしく「黙示録」は、これが封じられた書であるという供述とは矛盾している。黙示とは、何か表されたもののことである。主ご自身がこの書に含まれている奥義を、そのしもべに表された。そして主は、その奥義がすべての人々に公開されて研究されるようにと意図されている。その真理は、ヨハネの時代に生きていた人々と同様に、この地上歴史の最後の時代に住む人々にもあてられている。この預言に描かれている場面のあるものは過去に起こったものであり、あるものは今起こりつつある。またあるものはやみの権力と天の君との大争闘の終結を見させ、またあるものは新しくされた地に住むあがなわれた者たちの勝利と喜びを表している。

黙示録に書かれているすべての象徴の意味を説明できないからといって、そこに含まれている真理の意味を知るために、この書を探る努力をしても無益だと思ってはならない。ヨハネにこれらの奥義を表された方は、真理の熱心な探求者に天の事柄を前もって知らせて下さるのである。真理を受けるために心を開いている人たちは、その教えを理解できるようになり、「この預言の言葉を……聞いて、その中に書かれていることを守る者たち」に約束されている祝福を与えられるのである。

黙示録において聖書のすべての書が出会い、そして終わる。これはダニエル書を補って完成させるものである。一方は預言で他方は啓示である。封じられていた書は黙示録ではなく、ダニエルの預言の中で終わりの時代について述べている部分であった。天使は命じた、「ダニエルよ、あなたは終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい」（ダニエル12：4）。

使徒ヨハネに、彼の前に開かれるはずのことを記録するようにお命じになったのは、キリストであった。「あなたが見ていることを書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤにある7つの教会に送りなさい」と、キリストは命じられた。「わたしは……生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。……あなたの見たこと、現在のこと、今後起ろうとすることを、書きとめなさい。あなたがわたしの右手に見た7つの星と、7つの金の燭台との奥義は、こうである。すなわち、7つの星は7つの教会の御使であり、7つの燭台は7つの教会である」（黙示録1：11、1820）。

7つの教会の名は、西暦紀元の異なる時代における教会を象徴している。7の数字は完全を表し、これらのメッセージが時の終わりまで及んでいることを象徴している。また、用いられている象徴は、この世界歴史におけるそれぞれ異なる時代の教会の状態を表している。

キリストは金の燭台の間を歩いているように述べられている。これはキリストと教会の関係を象徴したものである。キリストは絶えずその民と交わっておられる。主は彼らの真の姿を知っておられる。彼らの状態、敬虔さ、献身を見ておられる。主は天の聖所の大祭司であり、仲保者であるが、地上にあるご自分の教会の間を歩く方として表されている。キリストはたゆまず目をさまし、絶えず気を配りながら、見張り番の灯が暗くなったり消えたりしないように見守っておられる。もし燭台が単に人間にゆだねられるなら、ゆらめく炎は衰えて消えてしまうであろう。しかしキリストは主の家の真の見張りであり、宮廷の真の番人である。キリストの絶えざる守りと恵みによる支えは、いのちと光の源である。

キリストは右手に7つの星を持つ方として表されている。これは、ゆだねられたことに忠実な教会は、失敗に終わることをおそれる必要がないことをわれわれに確証している。なぜなら、全能の神に守られている星は、1つでもキリストの手から奪われることはないからである。

「右の手に7つの星を持つ者……が、次のように言われる」（黙示録2：1）。この言葉は教会の教師たち、すなわち、神から重い責任を負わされている人々に語られている。教会に豊かになければならないすばらしい祝福は、キリストの愛を表すはずの神の牧師と切り離せない関係にある。天の星はキリストの支配下にある。キリストは星を光で満たされる。また、その運行を導き、指示される。もしキリストがこれをなさらなければ、それらは落星になるであろう。牧師たちもそれと同様である。彼らは主のみ手の中にある道具にすぎない。そして、彼らがなし遂げるすべてのよいことは、キリストの力を通してなされる。彼らを通してキリストの光が輝き出なければならない。救い主が彼らの能力とならなければならない。キリストがみ父をご覧になるように彼らがキリストを見るならば、彼らはキリストの働きをすることができるようになる。彼らが神を頼みの綱とするならば、神はこの世にあらわす輝きを彼らにお与えになるのである。 [1580]

教会歴史の初期に、使徒パウロが預言した不法の秘密の力がその有害な働きを始めていた。そして、すでにペテロが信者たちに警告していたにせ教師たちが異説を勧めると、多くの者たちは誤った教理に誘惑された。ある者は試練にあってよろめき、誘惑されて信仰を捨てた。ヨハネがこの黙示を与えられた時、多くの人たちは福音の真理に対する最初の愛をすでに失っていた。しかし神は憐れみによって、教会を堕落の状態に放置されなかった。無限のやさしさを持ったメッセージの中で、神は彼らに対する愛と、永遠をめざして確実な働きをするようにという神の願いをお示しになった。「そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい」と、主は戒められた（黙示録2：5）。

教会は不完全で、きびしい譴責やこらしめが必要であった。そこでヨハネは、福音の根本的な原則を見失って救いの望みを危くしている者たちに、警告し、譴責し、懇願す

る使命を、霊感を受けて書いたのである。しかし、神が、必要と考えて送られる譴責のことばはいつでも、やさしい愛により、後悔している信者一人一人に平安の約束を与えて語られる。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」と、主は述べておられる（黙示録3：20）。

戦いのさなかにいて神への信仰を持ちつづけなければならない人たちのために、この預言者は賞賛と約束のことばを与えられた。「わたしは、あなたのわざを知っている。見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。……忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試錬の時に、あなたを防ぎ守ろう」。信者たちは次のように訓戒された、「目をさましていて、死にかけている残りの者たちを力づけなさい」。「わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい」（黙示録3：8、10、2、11）。

「兄弟であり、共に……苦難……にあずかっている」とみずから名のる者を通して、キリストは、ご自身のために彼らが苦しまなければならないことを教会にお示しになった（黙示録1：9）。幾世紀もの暗黒と迷信の時代を見通して、この年老いた流刑者は、真理を愛するがゆえに殉教の死を遂げる多くの人たちを見た。しかし彼は、また、初期の証人たちを支えて下さった方は、忠実に従ってくる者たちを、世の終末の前に通過しなければならない迫害の時代にもお見捨てにならないということも見ていた。「あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あなたがたは……苦難にあうであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう」と、主は言われる（黙示録2：10）。

ヨハネは、悪と戦う忠実な者たちみんなに与えられた約束を聞いた、「勝利を得る者には、神のパラダイスにあ

るいのちの木の実を食べることをゆるそう」。「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。また、わたしの父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう」。「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得て
[1581] わたしの父と共にその御座についたのと同様である」（黙示録2：7、3：5、21）。

ヨハネは神の憐れみとやさしさと愛が、神の神聖と正義と力とにとけ合っているのを見た。彼は罪人がその罪のために神をおそれていたが、神の中に父を発見しているのを見た。また、大争闘が頂点に達したそのかなたを見たとき、「ガラスの海のそばに……うち勝った人々が、神の立琴を手にして立」ち、「モーセの歌」と小羊の歌とを歌っているのを、シオンの上に見た（黙示録15：2、3）。

救い主は「ユダ族のしし」また、「ほふられたとみえる小羊」の象徴でヨハネに提示されている（黙示録5：5、6）。これらの象徴は全能の力と自己犠牲の愛の結合を表している。ユダのししは、神の恵みを拒む者には恐ろしいものであるが、従順で忠実な者には神の小羊となる。神の律法を犯した者にとっては恐怖と怒りを表している火の柱は、神の十戒を守る人々にとっては光と憐れみと救出のしるしである。反逆者を打つ強い腕は、忠実な者を救い出す強い腕になる。忠実な者は誰でも救われる。「彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」（マタイ24：31）。

世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れの場となって下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。神は常に多数を占めておられる。最後のラッパが死人の獄屋に響きわたり、義人が勝利して、「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか」と叫びながら出て来て、神とキリストと天使たちと、そしてすべての時代の忠実で真実であった者たちと共に立つ時、神の子らははるかに大多数になるのである（コリント15：55）。

キリストの真の弟子たちは、克己をつらぬき通し、苦い失望を経験し、苦しい戦いをやり通して、キリストに従う。しかしこれは彼らに罪の深さと苦悩を教え、彼らは罪を憎悪するようになる。キリストの苦しみを共に受ける者たちは、キリストの栄光をも共に受けることになっている。預言者ヨハネは、聖なる幻の中に神の残りの教会の究極的な勝利を見た。彼はこう記している。

「わたしは、火のまじったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに……うち勝った人々が、神の立琴を手にして立っているのを見た。彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とを歌って言った、『全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります』」（黙示録15：2、3）。

「なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、14万4千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた」（黙示録14：1）。この世において彼らの心は神にささげられていた。彼らは知性と心で神に仕えた。そして今、神は「その額に」神の名を記すことがおできになる。「そして、彼らは世々限りなく支配する」（黙示録22：5）。彼らは場所を請い求める者たちのように出たり入ったりしない。彼らは、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」と、キリストが言われる人たちの仲間である。神は彼らを神の子らとして迎え、「主人と一緒に喜んでくれ」と言って下さる（マタイ25：34、21）。

「彼らは……小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である」（黙示録14：4）。この預言者の幻は、彼らがシオンの山の上に立っているように描いている。聖なる儀式に備え、白い麻布を着ているが、それは聖徒たちの正しい行いである。しかし天において小羊に従う者たちはみな、まずこの地上で、いらだったり気まぐれにではなく、羊の群れが羊飼いに従うように、信頼し、慕い、喜んで服従しながら主についてきていなければならない。

「わたしの聞いたその声は、琴をひく人が立琴をひく
[1582] 音のようでもあった。彼らは、御座の前……で、新しい歌を歌った。この歌は、地からあがなわれた14万4千人のほかは、だれも学ぶことができなかった。……彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった」（黙示録14：25）。

「わたしはまた……聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た」。「その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。それには大きな、高い城壁があって、12の門があり、それらの門には、12の御使がおり、イスラエルの子らの12部族の名が、それに書いてあった」。「12の門は12の真珠であり、門はそれぞれ1つの真珠で造られ、都の大通りは、すきとおったガラスのような純金であった。わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである」（黙示録21：2、11、12、21、22）。

「のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照」す（黙示録22：35）。

「御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、12種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす」。「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである」（黙示録22：1、2、14）。

「また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、

『見よ、神の幕屋が人と共にあり、
神が人と共に住み、
人は神の民となり、
神自ら人と共にいま』す」（黙示録21：3）。

第58章　真理は勝利する

使徒たちがその働きの手を休めてから、18世紀以上の年月が過ぎた。だが、彼らがキリストのために働き、犠牲を払ったその歴史は、いまだに尊い宝として教会に残っている。聖霊の導きによって書かれたこの歴史は、各時代のクリスチャンが一層強い熱情にかられて真剣に救い主のみわざに携わることができるように記録された。

弟子たちは、キリストから与えられた任務を果たした。十字架の使命者たちが出かけて行って福音を宣べ伝えた時、かつて人間が見たことのないほど神の栄光があらわされた。聖霊の協力によって、使徒たちの働きは世界を動かした。わずか一世代のうちに福音はすべての国々に行き渡った。

キリストに選ばれた使徒たちの働きは、輝かしい成果を伴った。彼らが働きを始めた時、ある者は無学であったが、主のみわざに全的に献身し、キリストの指導を受けて、ゆだねられた大きな働きのために準備したのである。恵みと真理は彼らの心を満たし、動機を与え、彼らの行動を支配した。彼らのいのちはキリストと共に神のうちに隠され、自己が姿を消し、無限の愛の深みに沈んだ。

弟子たちは、誠実に語り祈る方法を知っている人たちであり、「イスラエルの栄光」の力をつかむことができる人たちであった。彼らは神のそば近くに立ち、彼らの栄誉をみ座に結びつけた。エホバは彼らの神であった。神の栄誉は彼らの栄誉であった。神の真理は彼らの真理であった。福音に向けられる攻撃は、彼らの心に深く切り込むようなものであった。そして彼らは全力をつくしてキリストのみわざのために戦った。彼らはいのちのみことばを提示することができた。なぜなら彼らは、神から聖別されていたからである。彼らは多くを期待して、それゆえに多くを試みた。キリストはご自身を彼らに現された。そして彼らはキリストから導きを求めた。真理への理解と、反対によく耐える能力とは、神のみこころへの一致と比例していた。 [1583]

神の知恵であり力であられるイエス・キリストが、あらゆる話の主題であった。キリストのみ名――天下に与えられた、人々を救いうる唯一の名――は、彼らによってあがめられた。彼らがよみがえられた救い主、キリストの完全さを宣べ伝えると、彼らの言葉が人々の心を動かし、人々を福音へと導いた。救い主のみ名をののしり、その力を軽蔑していた多くの人々が今、十字架にかけられた方の弟子であると告白した。

使徒たちが、ゆだねられた使命を成し遂げたのは、生ける神のみ力によるものであって、彼ら自身の力ではなかった。彼らの働きはたやすいものではなかった。キリスト教会の初期の働きには困難と深い悲しみが伴った。弟子たちは働きにおいて絶えず窮乏と中傷と迫害に遭遇したが、自分たちのいのちを大事とは思わず、召されてキリストのために苦しむことを喜んだ。彼らの働きに優柔不断、不決断、目的のあいまいさなどはなかった。彼らは喜んで自己をささげ、また、神に用いられることをも喜んだ。自分たちの上に置かれている責任の意識が、彼らの経験をきよめ、豊かにした。そして彼らがキリストのために達成する勝利の中に、天の恵みがあらわされた。神はその全能の力をあらわし、福音を勝利させるために彼らを通して働かれた。

キリストご自身が築かれた土台の上に、使徒たちは神の教会を建てた。聖書の中で、神殿建設の姿は、しばしば教会の建設の例として用いられている。ゼカリヤはキリストを、主の宮を建てる「枝」にたとえている。彼はまた、異邦人がこの仕事を助けることについて述べている、「遠い所の者どもが来て、主の宮を建てることを助ける」。またイザヤは、「異邦人はあなたの城壁を築」くと、述べている（ゼカリヤ6：12、15、イザヤ60：10）。

ペテロはこの宮の建設について書き、「主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストにより、神によろこばれる霊のいけにえを、ささげなさい」と言っている（ペテロ2：4、5）。

使徒たちは、ユダヤ人の世界と異邦人の世界という石切り場で、土台を築くための採石の仕事をしていた。パ

ウロは、エペソの信者たちに宛てた手紙の中で述べている、「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあって共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである」（エペソ2：1922）。

更に、パウロはコリント人に書いた、「神から賜わった恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういうふうに建てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火は、それぞれの仕事がどんなものであるかを、ためすであろう」（コリント3：1013）。

使徒たちは確かな土台、すなわちとこしえの岩の上に築いた。彼らはこの土台に、世界から切り出された石を運んできた。建設者たちの働きに障害がないわけではなかった。キリストの敵たちの反対により、彼らの働きは非常に困難になった。彼らはにせの土台の上に築こうとしている者たちの偏狭、偏見、憎悪と闘わなければならなかった。教会の建設者として働いた多くの人たちは、ネヘミヤの時代に城壁を築いた者たちにたとえられる。彼らについては次のように記されている、「荷を負い運ぶ者はおのおの片手 で工事をなし、片手に武器を執った」（ネヘミヤ4：17）。 [1584]

王も為政者も、祭司もつかさたちも、神の宮を破壊しようとした。しかし忠実な人々は、投獄され、拷問にかけられ、死刑にされても働きを進展させた。建物は次第に美しくなり均衡がとれてきた。時には周囲の迷信という霧のために、働き人たちはほとんど目が見えなくなった。また、時には、敵の暴虐に会って敗北しそうになった。しかし彼

らはゆるぎない信仰と屈しない勇気をもって、あくまでも働きを推し進めた。

最初の建設者らは、次々に敵の手にかかって倒れた。ステパノは石で打たれ、ヤコブは剣で殺され、パウロは首をきられた。ペテロは十字架につけられ、ヨハネは島流しにされた。しかし教会は成長していった。倒れた人たちのあとを新しい働き人たちが受けついで、1つずつ石が加えられていき、こうして神の教会の宮が徐々にでき上がっていった。

キリスト教教会の設立のあとに、幾世紀にもわたる激しい迫害の時代が続いたが、神の宮の建設の仕事を生命そのものよりも大事だと思っている人たちに欠けることはなかった。そうしたことについてこう書かれている、「なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しぼり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、（この世は彼らの住む所ではなかった）、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた」（ヘブル11：3638）。

義の敵は、神の建設者たちにゆだねられた仕事をやめさせるための努力に骨身を惜しまなかった。しかし神は、「ご自分のことをあかししないでおられたわけではない」（使徒行伝14：17）。ひとたび聖徒に伝えられた信仰をりっぱに守る働き人たちが起こされた。歴史はこれらの人々の不屈の精神と英雄的な行為を記録にとどめている。使徒たちと同じように、彼らの中にもその持ち場にあって倒れた者が大勢いたが、宮の建設は着々と進んだ。働き人は殺されたが、働きは進展した。ワルド派（ワルデンセス）、ジョン・ウィクリフ、フス、ヒエロニムス、マルチン・ルター、ツウィングリ、クランマー、ラチマー、ノックス、ユグノー〔フランスの新教徒たち〕、ジョン・ウェスレーとチャールズ・ウェスレー、そのほか多くの人たちが、永遠に持ちこたえる材料を土台のもとにもってきた。後年、聖書配布運動に雄々しく活躍した人々、異教の地にあって大いなる最終使命宣伝のために道を備えた人々もみな、この建設工事を助けてきたのである。

使徒の時代以来、各時代にわたって神の宮の建設はやんだことがない。幾世紀にわたる過去を振り返ってみる時、われわれはそこに、神の宮を作り上げている生きた石が、誤謬と迷信と暗黒をつらぬいて光り輝いているのを見る。これらの尊い宝石は、永遠にわたって、ますます光彩を増して輝き、神の真理の力をあかしするであろう。これらの磨かれた石のきらめく光は、光と闇、真理の金と誤謬の鉄くずとの著しい対照をはっきり示している。

パウロもほかの使徒たちも、その時以来生存してきたすべての義人たちも、みな宮の建設に各々の役割を果たしてきた。だが、建築はまだ完成していない。今日生存するわれわれにも、なすべきわざ、果たすべき役割がある。火の試練に耐えられるような土台の材料――金、銀、宝石など「宮の建物のために刻まれた」ものを集めてこなければならない（詩篇144：12）。パウロは、こうして神のために建設をすすめる人たちに、励ましと警告の言葉を述べている。「もしある人の建てた仕事がそのまま残れば、その人は報酬を受けるが、その仕事が焼けてしまえば、損失を被るであろう。しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、救われるであろう」（コリント3：14、15）。命のことばを忠実に伝え、人々を聖潔と平安の道に導くクリスチャンは、耐久力のある材料を土台に加えているのであって、神の国において賢明な建築者として誉れを受けるであろう。

使徒たちについてはこう書かれている、「弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった」（マルコ16：20）。キリストが弟子たちをつかわされたように、今日も、主はご自分の教会の信者たちをつかわされる。使徒たちに与えられていたのと同じ力が彼らのために与えられる。神を自分たちの力とする時、神は彼らと共に働いて下さり、彼らの努力はむなしくなることはない。彼らが携わっている働きは、神が印を押されているものだということを、彼らに認識させよう。神はエレミヤに言われた、「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることをみな語らなければならない。彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あな [1585]

たを救うからである」。それから主はみ手を伸べて、しもべの口につけ、言われた、「見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた」（エレミヤ1：79）。そして神は、われわれが、神の聖なるみ手がくちびるに触れたことを感じながら、与えられたみことばを語るために出て行くようにと命じておられる。

キリストは教会に神聖な責任をお与えになった。教会員はそれぞれ、神がその恵みの富と、計り知れないキリストの富とを世にお伝えになる器とならねばならない。世の人々に、キリストのみたまと品性をあらわす器ほど、キリストが望んでおられるものはない。人間を通して救い主の愛があらわされることほど、世が必要としているものはない。全天は、神がキリスト教の力をあらわすことがおできになる男女を待っている。

教会は、真理を宣べ伝えるための神の機関であって、特別の働きをする力を神から与えられている。もし教会が神に忠実であり、神のすべての戒めに従うなら、教会には神の計り知れない恩恵が内住するであろう。教会が真実に神への忠誠をつくし、イスラエルの神、主をあがめる時、どんな勢力もこれに対抗することはできない。

神とそのみわざに対する熱意が弟子たちを動かし、偉大な力を発揮して福音をあかしさせた。われわれも同じ情熱を心に燃やし、あがないの愛の物語を、キリスト、しかも十字架につけられたキリストの物語を語る決意をすべきではないだろうか。救い主の来臨を待ち望むばかりでなく、これを早めることがすべてのクリスチャンの特権である。

教会が世に従うことをやめて、キリストの義の衣を着る時に、教会の前には、輝かしい栄光の日の夜明けがある。教会への神の約束は、永遠に堅く立つであろう。神は教会をとこしえの誇り、代々の喜びとなさる。真理は、それをさげすみ拒む人たちを通り過ぎて、勝利する。ときには一見妨害されたように見えても、真理の前進は決して阻止されたことがない。神の使命が反対に会うと、神はその使命が一層大きな感化を及ぼすように、それに力をお加えになる。こうして聖なる力を備えた真理は、どんな堅固なとりでもつきぬけ、どんな障害にも勝利するのである。

骨折りと犠牲のご生涯の間、神のみ子を支えたものは何であったか。キリストはご自分の魂の労苦の結果をご覧

になって、満足された。キリストは、永遠をご覧になり、ご自身の屈辱を通してゆるしと永遠のいのちを受けた人々の幸福をご覧になった。キリストの耳は、あがなわれた者たちの歓喜の叫びを聞きとられた。主はあがなわれた人々が、モーセと小羊の歌をうたっているのをお聞きになった。

われわれは、未来の、祝福された天の幻を持つことができる。聖書には未来の栄光の幻、神のみ手によって描かれた光景が示されている。そしてこれらは、神の教会にとって大事なものである。信仰によってわれわれは、永遠の都の入口に立ち、この世の生活においてキリストと協力し、キリストのために苦しむことを名誉とみなしてきた人々に与えられる、恵み深い歓迎のことばを聞くのである。「わたしの父に祝福された人たちよ」ということばを聞く時、彼らはあがない主の足もとに冠を脱ぎ捨てて、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい。……御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」と叫ぶ（マタイ25：34、黙示録5：12、13）。 [1586]

あがなわれた者たちは、自分たちを救い主に導いてくれた人たちにそこであいさつをし、全員が1つとなって、人間に神のような永遠のいのちを与えるために、ご自分の命を犠牲にされた方を讃美する。闘争は終わる。艱難も争いも終わる。あがなわれた者たちが、ほふられて、勝利の征服者として再び生き返られた小羊こそすばらしい、という喜びの歌をうたいだすと、勝利の歌が全天に満ちる。

「わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、『救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる』」（黙示録7：9、10）。

「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。彼らは、もはや飢

えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さるであろう」。「もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」（黙示録7：1417、21：4）。